

石見空港建設予定地内遺跡

# 埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年3月

育委員会

# 「石見空港建設予定地内遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書」正誤表

誤

## ●例言 2ページ目・5行目

渡辺一男

## ●16ページ・5行目

灰釉陶器壺（1）

## ●18ページ・表の図版番号

図16-21

-22

-23

-24

## ●33ページ・30行目

および建物跡Ⅲは

## ●51ページ・5行目

土師器甕（35）

## ●52ページ・本文13, 14行目

坏（66）低い高台をもち，

坏（67～69）

## ●53ページ・図44キャプション

大溢遺跡I区建物跡IV出土土器実測図

## ●55ページ・図46の93と95の間

番号抜け

## ●71ページ・本文8行目

壺の蓋（29, 30）

## ●73ページ・本文1～4行目

甕（22）

高坏（32）

壺（33）頸部を欠く。L字状に肩が張り，

壺（34）頸部を欠く。肩部は球形を呈し，

## ●80ページ・（注）13, 14

13. 注2に同じ。

14. 注8に同じ。

## ●83ページ・図60のスケール

10cm

## ●図版・相生遺跡39 118-5

左：凸面，右：凹面

正

渡辺一雄

灰釉陶器壺（15）

図16-1

-2

-3

-4

および建物跡Ⅳは

土師器甕（39）

坏（74）低い高台をもち，

坏（66～68）

大溢遺跡I区建物跡V出土土器実測図

94

壺の蓋（29, 32）

甕（30）

高坏（31）

壺（34）頸部を欠く。L字状に肩が張り，

壺（33）頸部を欠く。肩部は球形を呈し，

13. 注5に同じ。

14. 注11に同じ。

10m

左：凸面，右：凹面

石見空港建設予定地内遺跡

# 埋蔵文化財発掘調査報告書

1992年3月

島根県教育委員会



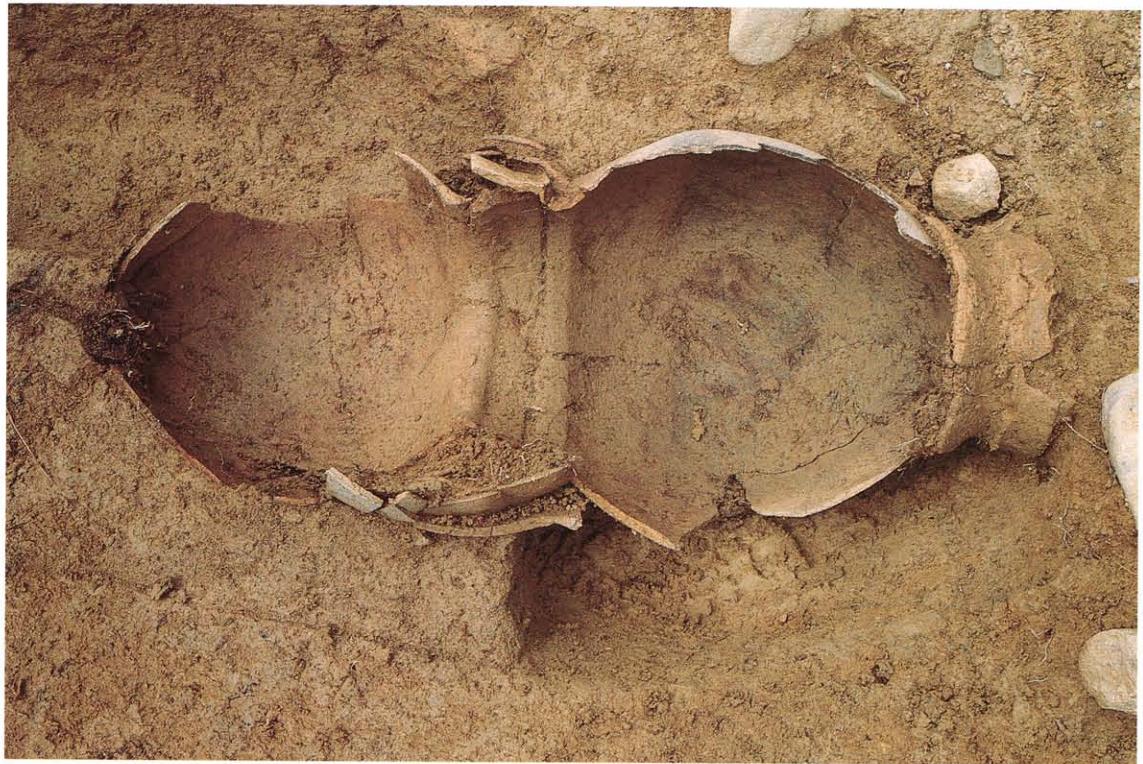
遺跡周辺を西から望む(1985年4月撮影)



根ノ木田遺跡D区出土遺物(須恵器)



根ノ木田遺跡D区出土遺物(灰釉陶器、左 外面、右 内面)



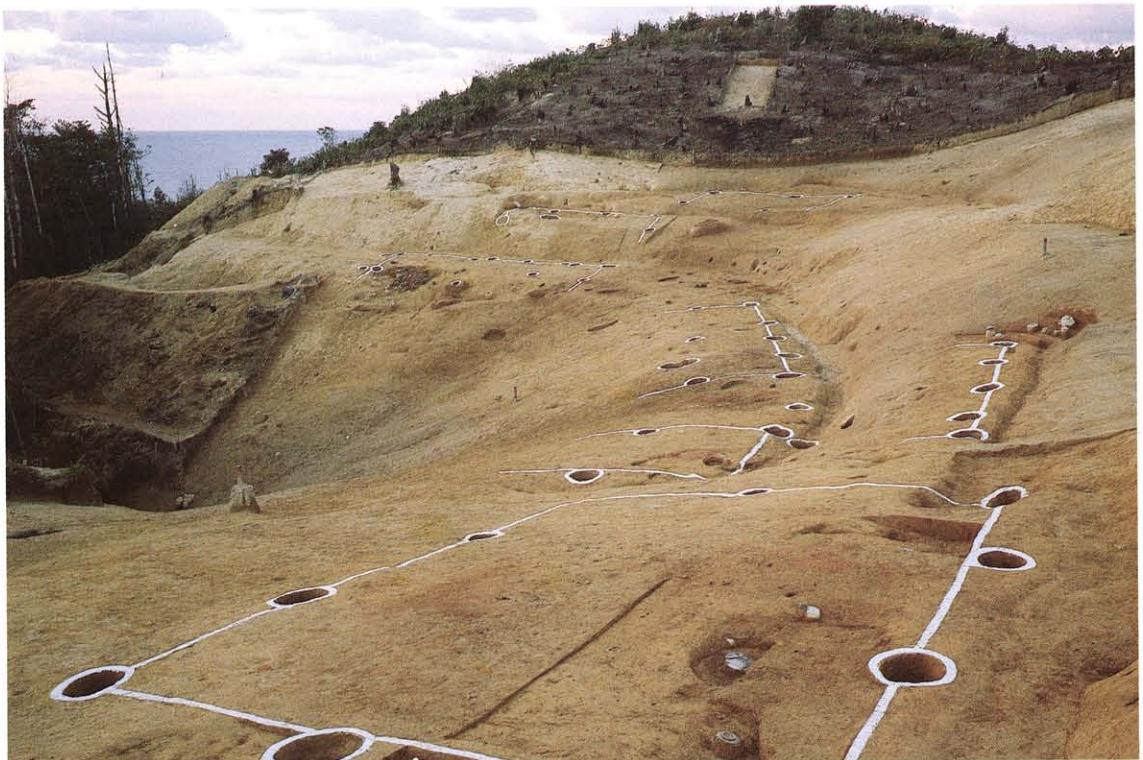
根ノ木田遺跡H区の甕棺墓



フケ田平遺跡D区集石遺構(西から)



大溢遺跡と日本海を南から望む



大溢遺跡Ⅰ区全景(南から)



大溢遺跡Ⅰ区建物跡I・II・V(南から)



相生遺跡全景



相生遺跡連房式登り窓



相生遺跡連房式登り窯第4房断面



相生遺跡第4房内白地遺存状況

PL-8



相生遺跡物原



北ヶ迫遺跡物原



北ヶ迫遺跡連房式登り窯(修築後)



北ヶ迫遺跡連房式登り窯(修築前)



仁右工門山遺跡出土 陶器



仁右工門山遺跡出土 磁器



同 上 (内面)



仁右門山遺跡出土 磁器



同上(内面)



仁右門山遺跡出土 獅子

PL-12



仁右工門山遺跡出土 軒棧瓦



仁右工門山遺跡出土 軒棧瓦



仁右工門山遺跡出土 掛棧瓦



仁右門山遺跡出土  
棟止瓦、軒丸瓦



仁右門山遺跡出土 雁振瓦



相生遺跡出土 陶器



相生遺跡出土 磁器



同 上 (底部)



相生遺跡出土 軒棧瓦



北ヶ迫遺跡出土 陶器



北ヶ迫遺跡出土 陶器



北ヶ迫遺跡出土  
軒棧瓦、軒丸瓦

# 序

石見空港は石見西部に位置する益田市郊外の低丘陵地帯に計画され、平成5年の開港にむけて工事が進められています。この事業に先立ち、島根県教育委員会は島根県土木部の委託を受けて、昭和63年度から3ヶ年で埋蔵文化財の発掘調査を実施致しました。

その結果、古代の集落跡や江戸時代の瓦窯など、この地域における人々のくらしを知る貴重な資料を得ることができました。本書はその報告書ですが、石見地域の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

最後に、今回の調査にあたり、御協力を賜りました地元の皆様をはじめ関係各位に、衷心より御礼申し上げます。

平成4年3月

島根県教育委員会

教育長 坂本和男



## 例　　言

1. 本書は、島根県土木部の委託を受けて、島根県教育委員会が昭和63年から平成3年度に実施した石見空港建設予定地内に所在する遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　　島根県教育委員会

事務局　　文化課長　内藤仁男（昭和63年度），泉　恒雄（平成元，2年度），  
　　目次理雄（平成3年度）

　　課長補佐　井原　譲，藤原義光，勝部　昭

　　主幹　宮沢明久，文化係長　野村純一，高橋　研，

　　主事　吾郷朋之，伊藤　宏

調査員　　文化財第2係長　卜部吉博，文化財保護主事　西尾克己

　　主事　熱田貴保，原田昭一，臨時職員　佐藤雄史，大庭俊次

調査指導　須田　勉（文化庁調査官），井上和人（文化庁調査官），

　　上原真人（奈良国立文化財研究所主任研究官），

　　田中義昭（島根大学法文学部教授），村上　勇（広島県立美術館主任学芸員），

　　久保智康（福井県立博物館学芸員），喜村浩司（陶芸家）

調査補助員　磯村賢治，近重克幸，原田敏照，檜山健一，松山智弘，

　　水口晶朗，守岡正司（以上，島根大学学生），宮本徳昭

3. 自然科学分野からの分析，鑑定を次の方々にお願いした。

石材鑑定　　三浦　清（島根大学教育学部教授，島根県文化財保護審議会委員）

熱残留地磁気測定　伊藤晴明（島根大学理学部教授），時枝克安（同助教授）

須恵器の胎土分析　三辻利一（奈良教育大学教授）

4. 発掘調査に際しては，益田市教育委員会，島根県土木部から多大な協力をいただいた。記して感謝したい。

5. 挿図中の方位は，国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方向である。

6. 遺物の実測は，熱田，佐藤，西尾，野田があたり，遺物写真は西尾と熱田が撮影した。

7. 本書の執筆編集は，西尾と熱田が行った。

8. 調査にあたり協力および従事していただいた方々は、次のとおりである。

#### 調査協力

仲野泰裕（愛知陶磁資料館）、藤澤良祐（瀬戸市歴史民俗博物館）、服部文孝（同）、田中照久（福井陶芸館）、伊藤義次、伊野近富（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）、松井忠春（同）、小森俊寛（財団法人京都市埋蔵文化財研究所）、渡辺一男（山口県埋蔵文化財センター）、乗安和二三（同）、家田淳一（佐賀県教育委員会）、大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館）、村上伸之（有田町教育委員会）、木原 光（益田市教育委員会）、佐々木二良

#### 発掘調査作業

浅井亮治、井沢洋一、石川治男、石川隆男、石橋光子、伊藤フサノ、岩本末子、岩本哲夫、大賀キミエ、大賀ヒサノ、大久保 敬、大島 操、大谷剛史、大庭 忠、大畑真二、岡崎秋広、岡崎美人、岡崎礼一、岡元スエ子、岡本寅雄、加藤玉代、加藤康友、木瀬高広、桐山チヨエ、桐山マサ子、久保田久子、桑原 伝、桑原一二子、桑原喜雄、河野公雄、児玉 繁、斎川敏子、榊原博英、篠原益夫、城市定人、杉内恵美子、宅野 来、宅野千義、宅野マシ子、宅野好雄、竹内勝芳、竹下浩征、田中タケ子、田中七五郎、田原淳雄、田原 清、田原澄子、都野森米子、豊田俊晴、中尾 正、中島 清、中島昭二、中島春子、中島隆輔、中島保胤、中島由夫、中村 敦、永安ユキエ、林 モモ子、藤井玄太郎、藤井 穎、藤本 真、藤本 豊、増野隆一、松田ミサヨ、間庭二三枝、松本清隆、松本 誠、三浦三夫、宮内 準、宮内フミ子、宮内正美、椋木義幸、柳田タズ子、横田貞代、吉田勝美

#### 遺物整理、報告書作成作業

#### 調査事務所

大久保真紀、原 宏子、山地裕子、和崎幸子

#### 文化課分室

阿部博史、飯塚由美、池田純子、池渕高史、大坂理恵、大沢明美、奥田美穂子、尾嶋久美子、角 千賀子、木村寛子、木村保夫、釣宮和子、黒田久仁子、桑谷美代恵、坂口くみ、佐々木恵美子、染森智子、立脇由美、永田智子、西山智子、野田直子、野中圭子、野中洋子、長谷川弘子、長谷川博子、平末てるみ、正井るみ子、森脇 彩、矢野美奈子、山口和美、山田和代、横山知子、吉田真由三

# 目 次

第1章 調査の経緯	(西尾)	1
第1節 調査に至る経過		1
第2節 調査の経過		2
第3節 報告書の作成		2
第2章 遺跡の位置と環境	(西尾)	7
第1節 歴史的環境		7
第2節 地理的環境		9
第3章 根ノ木田遺跡	(西尾)	10
第1節 遺跡の位置と調査の概要		10
第2節 遺構・遺物		11
第4章 フケ田平遺跡	(西尾)	23
第1節 遺跡の位置と調査の概要		23
第2節 遺構・遺物		23
第5章 大溢遺跡	(西尾)	31
第1節 遺跡の位置と調査の概要		31
第2節 遺構		32
第3節 遺物		47
第4節 小結		74
第6章 仁右エ門山遺跡	(熱田)	81
第1節 遺跡の位置と調査の概要		81
第2節 遺構		81
第3節 遺物		87
第4節 小結		119

第7章 相生遺跡	(熱田)	121
第1節 遺跡の位置と調査の概要		121
第2節 遺構		122
第3節 遺物		144
第4節 小結		168
第8章 理化学的分析		169
第1節 石見空港建設予定地内遺跡の地磁気年代		169
(島根大学理学部 時枝克安、伊藤晴明)		
第2節 大溢遺跡出土須恵器の蛍光X線分析		177
(奈良教育大学 三辻利一)		
第3節 島根県中、西部地域にある窯群出土須恵器の化学特性		186
(奈良教育大学 三辻利一)		
第4節 石見空港建設予定地内遺跡出土陶片類の釉薬成分分析		193
(財団法人 東海技術センター)		

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経過

島根県西部地域および山口県東北部地域は、空港や新幹線への連絡が悪く、高速交通網の利便を受けることが困難な地域であった。このため、この地方は土地条件や産業さらに観光等の面において開発が可能な地域でありながら、産業の停滞を招き、人口の流出が避けられなかった。これに対処するために、島根県では高速交通網整備の一環として益田市市原町に石見空港を開港し、地域の経済・文化の活性化を図ることとした。

この事業に先立ち、島根県土木部では島根県教育委員会へ空港予定地内の遺跡所在の有無照会およびその地内の分布調査の依頼がなされた。

これを受け、島根県教育委員会は、昭和62年度に益田市教育委員会の協力を得て、空港建設予定地内とその周辺地域約150haの遺跡分布調査を実施し、中世古墓と近世末の瓦窯跡を各1基をはじめ、10カ所で遺跡と遺跡推定地を確認した。これに基づき、島根県教育委員会は島根県土木部と協議を重ね、昭和63年度より現地の発掘調査に入ることとなった。

第1表 石見空港予定地内に分布する遺跡および推定地一覧

No	遺跡名	所在地	概要
1	峠山遺跡	益田市高津町	
2	大溢遺跡	〃 〃	本調査、集落跡
3	仁右エ門山遺跡	〃 〃	本調査、瓦窯跡
4	相生遺跡	〃 市原町	〃 , 〃
5	檜ヶ谷遺跡	〃 高津町	
6	ゴセゴウ遺跡	〃 市原町	
7	市原遺跡	〃 〃	
8	北ヶ迫遺跡	〃 内田町	本調査、瓦窯跡
9	根ノ木田遺跡	〃 〃	〃 , 甕棺墓他
10	フケ田平遺跡	〃 〃	〃 , 集石遺構

## 第2節 調査の経過

初年度の昭和63年度は空港予定地の東側に当たる益田市内田町から市原町の山林にある第7～10地点を対象に、今年7月より12月間までの半年間にわたって発掘調査を行った。その結果、古墳時代前期の甕棺墓と中世の集石遺構および江戸時代末から明治時代の瓦窯跡を検出した。

二年次の平成元年度は7月より12月までの期間で、昨年度に引き続き空港予定の東側と新たに西側にある遺跡（3, 5地点）の調査を行った。調査により、集石遺跡等は古代より中世にかかる祭祀遺跡と分かり、さらに江戸時代の瓦窯は作業小屋や窯本体を確認した。

平成3年度は予定地の西端にある益田市市原町、高津町の1地点～4地点との範囲確認調査と大溢遺跡（2地点）、仁右エ門山遺跡（3地点）および相生遺跡（第4地点）の本調査を、5月から平成3年1月まで行った。その結果、古代集落跡と近世の瓦窯跡をそれぞれ検出し、現地調査を終了した。

## 第3節 報告書の作成

四年次の平成3年度は、一次から三次までの発掘調査により出土した遺物と図面の整理および出土品の分析や撮影を行い、併せて報告書の作成に携わった。本書はその成果品である。

なお、各年次別に下記の概報を刊行している。

『石見空港建設予定地内遺跡発掘調査概報』I 1989年3月

—根ノ木田 フケ田平 北ヶ迫—

『石見空港建設予定地内遺跡発掘調査概報』II 1990年3月

—根ノ木田 フケ田平 北ヶ迫—

『石見空港建設予定地内遺跡発掘調査概報』III 1991年3月

—大溢 仁右エ門山 相生—

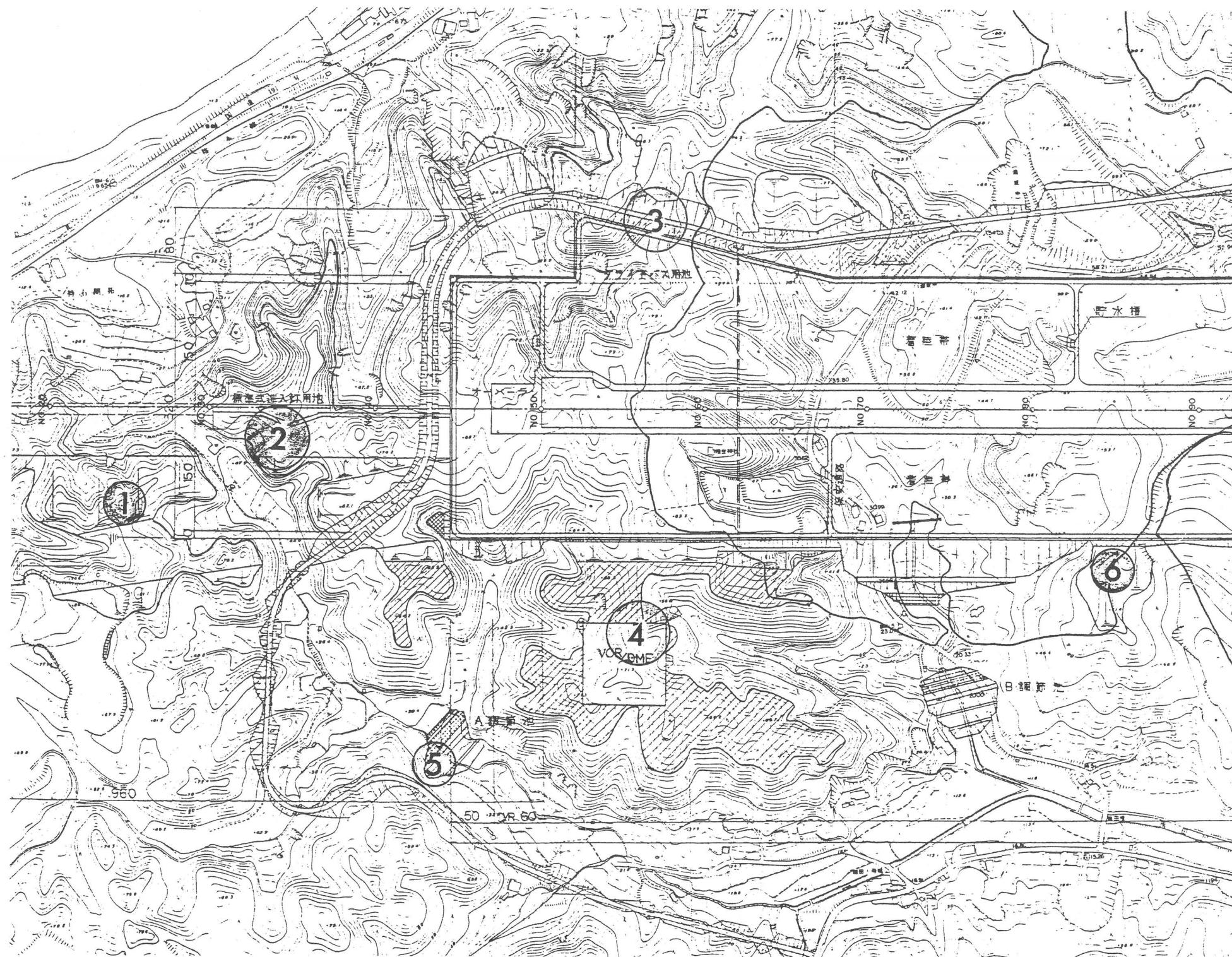


図1 石見空港予定地内遺跡位置図(1) 1:5,000

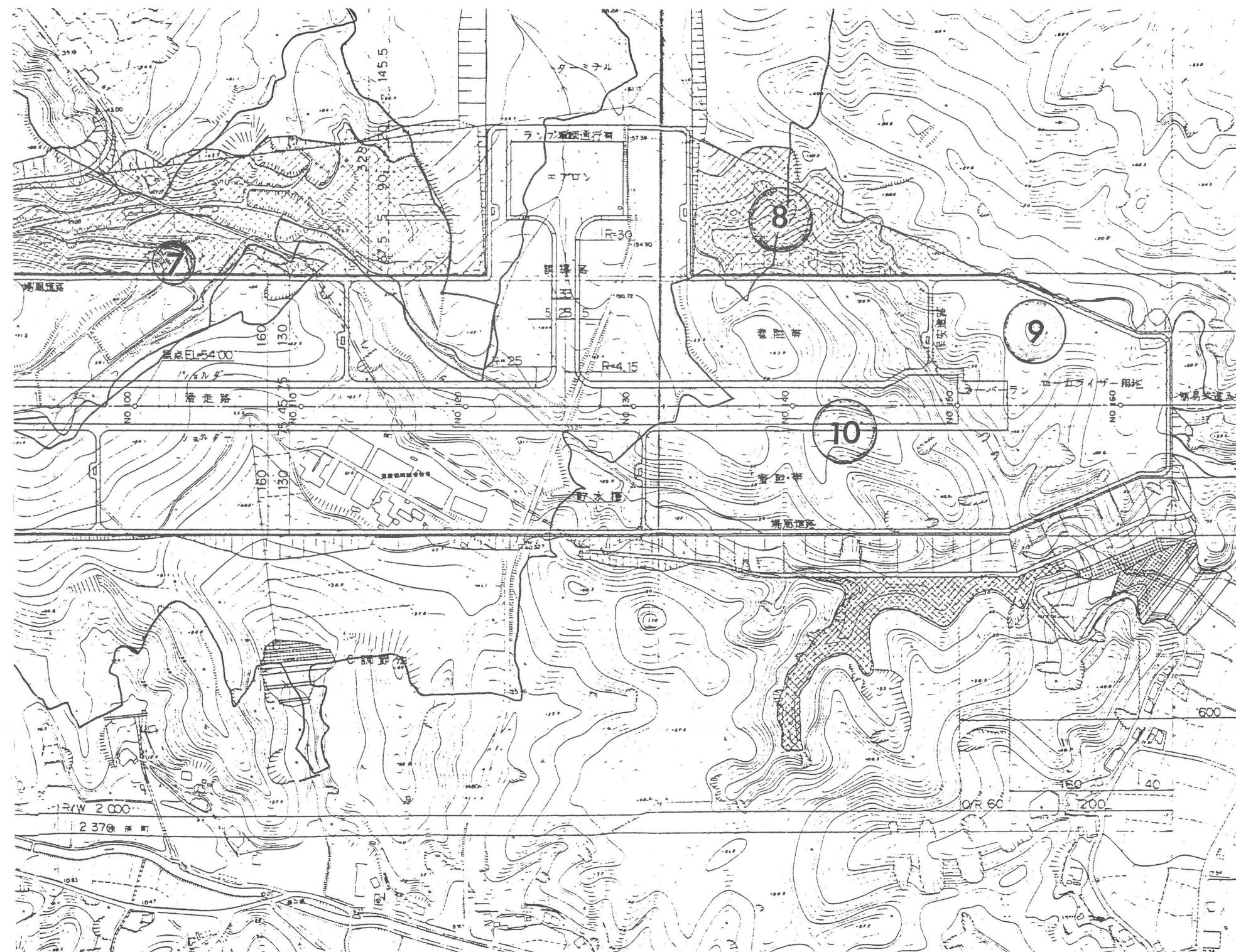


図2 石見空港予定地内遺跡位置図(2) 1:5,000

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 歴史的環境

益田平野周辺の丘陵や段丘上には古墳をはじめ多くの遺跡が知られ、古くから拓けた地域であることを物語っている。中でも、益田川下流域には多くの遺跡が分布している。

縄文時代の遺跡は現在のところ数箇所でしか確認されていない。調査が行われているものとしては、高津川沿いの微高地に立地する安富王子台遺跡や益田川流域の三宅御土居跡があり、多くの遺物が出土している。

弥生時代に入ると遺跡の数も多くなる。前述の2遺跡に加えて、日赤敷地遺跡や松ヶ丘遺跡からも土器が発見されており、また、稻作を裏付けるものとして須子遺跡からは石包丁が出土している。

古墳時代になると遺跡数が増大する。平野の周辺部の丘陵や山腹に古墳や横穴墓が造られ、石見地方における古墳文化の中心地域の一つとなっている。主要なものとしては、三角縁神獣鏡を出土させた四塚山古墳群、全長89mの前方後円墳である大元1号墳、全長50mの前方後円墳である小丸山古墳、国の史跡であるスクモ塚古墳、50基以上からなる鶴ノ鼻古墳群などが知られ、一方、横穴墓では片山横穴墓群や北長迫横穴墓群が点在する。さらに、西平原窯跡や本片子窯跡などの須恵器の窯業跡も調査されている。

奈良時代から平安時代にかけての遺跡、遺物はほとんど分かっていない。安富町の羽場遺跡や中国製褐袖四耳壺などを含む5個の経筒が出た石塔寺権現經塚が僅かにあるのみである。

中世以降になると地方豪族の益田氏に関わる遺跡が良好に残っている。拠城である七尾城跡やその居館であった三宅御土居跡、さらに医光寺、万福寺、妙義寺、染羽天石勝神社など、益田氏との関係の深い神社仏閣もあり、歴代の当主の墓も知られている。しかし、関ヶ原の戦い（1600年）の後、益田氏は長門の須佐に移封され、それ以降は高津川を境いに市域の東部が浜田藩に、西部が津和野藩に分かれて支配され、商業都市として近代に至った。

また、白上川沿いや持石海岸付近には長門地方に通ずる旧街道が走っており、陶土に恵まれた地域であることから近世末より瓦や日常雑品が盛んに生産された。

なお、益田市では万葉の時代に歌聖と謳われた柿本人麻呂は少年時代をこの地で過ごし、高津の鴨山で生涯を閉じたと伝えられ、さらに、室町時代には画聖雪舟が造ったといわれる万福寺や医光寺の庭園も史跡名勝として今日に残る。

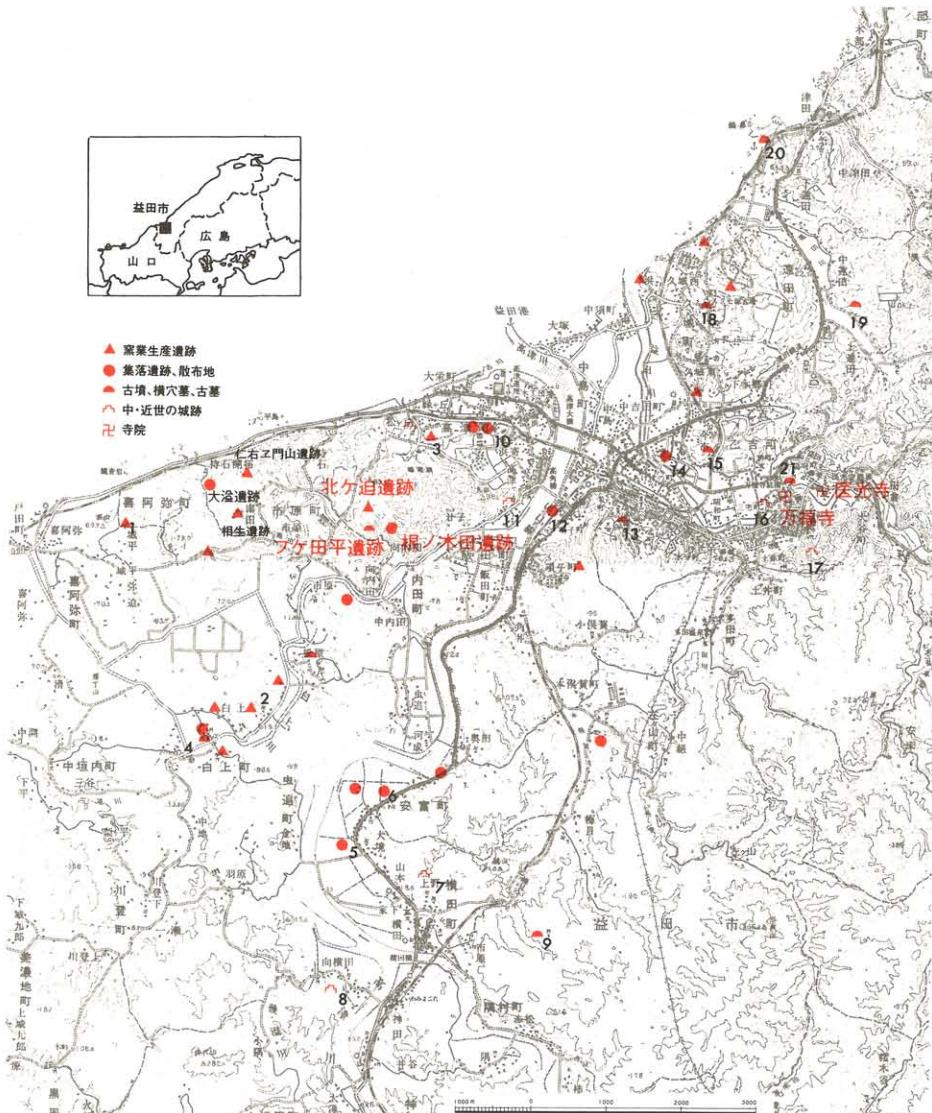


図3 調査対象遺跡と周辺の主要遺跡

- 1.喜阿弥燒窯跡 2.白上燒窯跡 3.新田窯跡 4.白上古墳 5.安富遺跡 6.羽場遺跡  
 7.豊田城跡 8.向横田城跡 9.石塔寺権現経塚 10.松ヶ丘遺跡 11.高津城跡  
 12.須子遺跡 13.北長迫横穴墓群 14.日赤敷地遺跡 15.小丸山古墳 16.三宅御土居跡  
 17.七尾城跡 18.スケモ塚古墳 19.大元古墳群 20.鶴ノ鼻古墳群 21.片山横穴墓群

## 第2節 地理的環境

石見空港が建設される益田市は、島根県の西端に位置する人口約5万人の石見地方西部における中核都市である。市域は広く、東には那賀郡三隅町や美濃郡美都町、南には匹見町、鹿足郡日原町、津和野町、西は山口県阿武郡田万川町と接する。

市の中央には高津川と益田川の二大河川が北流し、石見地方では最大の沖積平野を形成している。一方、北側には日本海が広がり、砂浜海岸や小規模な砂丘が認められる。

気候は比較的温暖で、県下では積雪日数が最も少なく、日照時間も比較的長い。

交通の面では、山口市へ向かう国道9号とJR山口線および下関市に向かう国道191号と山陰本線の分岐点にあたり、古くから山陰西部と山陽あるいは北九州地方を結ぶ一大拠点である。経済的には農業を基盤としているが、商業活動も盛んで、美濃郡、鹿足郡そして一部、山口県を含めた商圏を形成し、物質の集散地として現在に及んでいる。

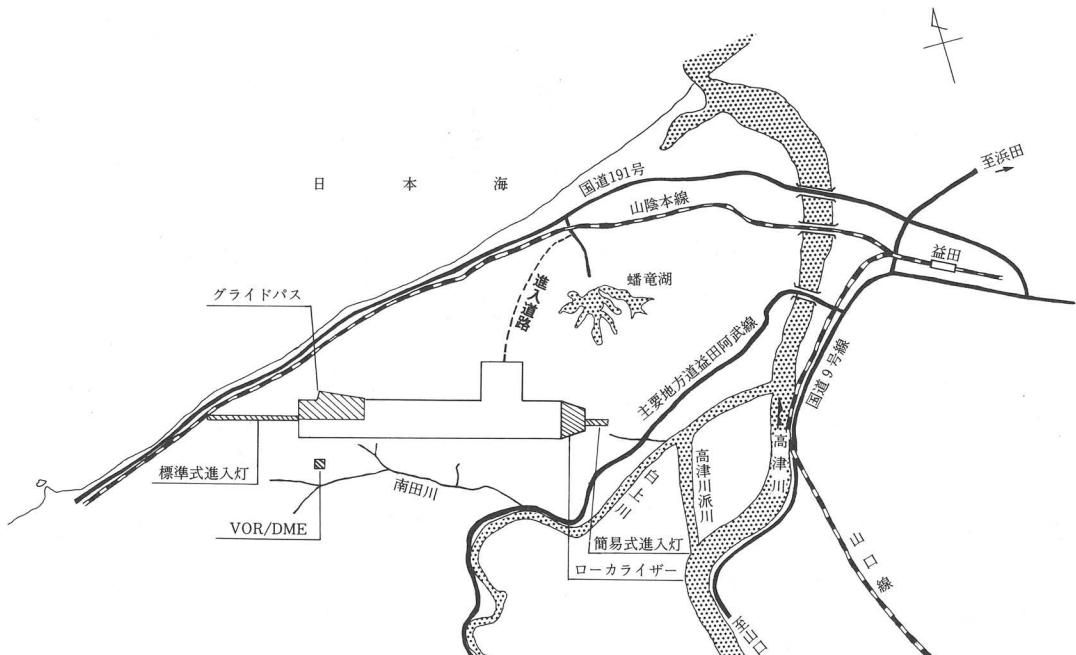


図4 石見空港の位置図

## 第3章 根ノ木田遺跡

### 第1節 遺跡の位置と調査の概要

この遺跡は空港予定地の東端の第9地点にあたり、高津川と白上川が合流する益田市内田町とそ  
の北に隣接する飯田町の境界に位置する。標高60cmの低丘陵上にあり、北側には蟠竜湖や松ヶ丘の  
砂丘が横たわり、昭和のはじめまでこの丘陵を通り高津へ抜ける山道が利用されていた。

範囲確認調査は9カ所を対象としたが、本調査は以下に記述する5箇所（C区、D区、H区、I  
区、K区）についてのみ行った。

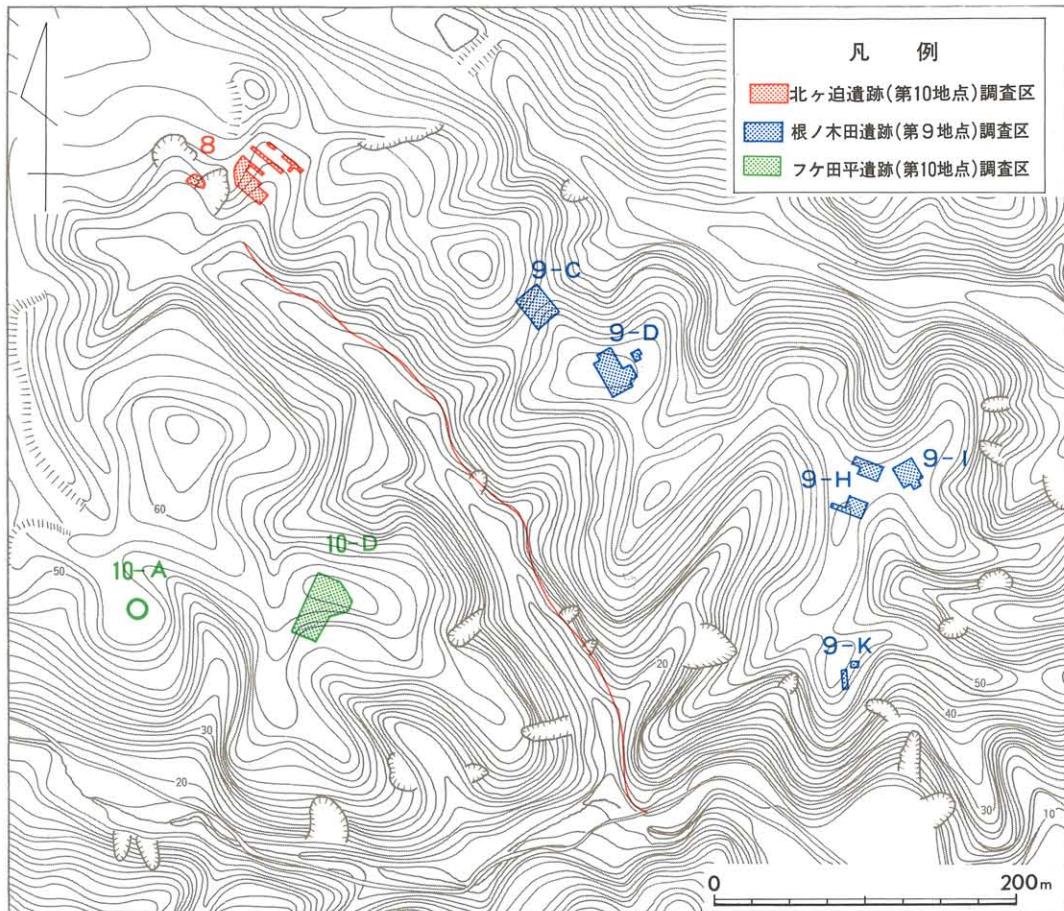


図5 根ノ木田遺跡・フケ田平遺跡発掘調査地点位置図

## 第2節 遺構・遺物

### 1. C 区

C区は遺跡の奥部にあり、大きな鞍部に位置する。遺構は山道の一部で、長さ5.5m、上幅6.0m、高さ80cmの堤防状の土盛（土橋）が残る。黄褐色土層（表土）や灰褐色砂質土層など10層が15~30cmの厚さで堆積しているが、遺物は発見されていない。同様な形状の土盛は200m北側にある小さい鞍部（北ヶ迫遺跡の東側の尾根）でも確認されている。

また、この山道は図のように北から南にかけて尾根を縫うように縦走している。基本的には尾根を歩くようになっているが、大きく迂回するような所では頂部を避け、斜面に道（凹地となる）を通し、なるべく遠回りをしないように配慮がなされている。現在では山に入る人も少なく、山道は草木に埋もれるままである。

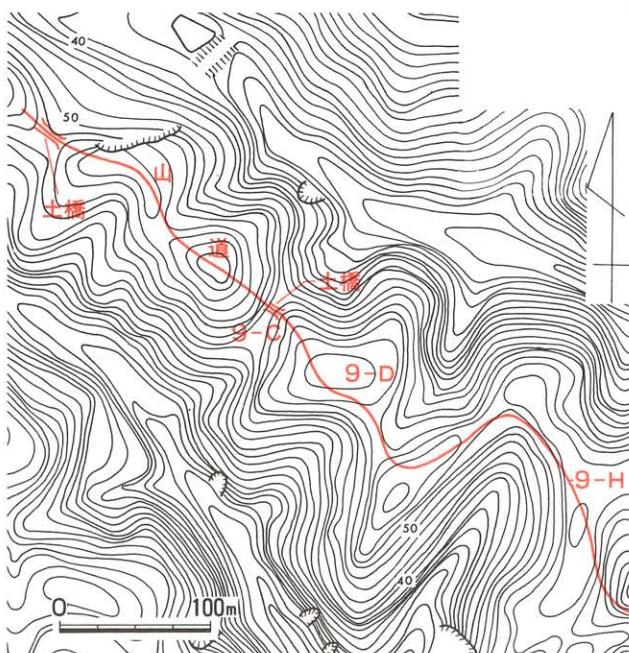


図6 根ノ木田遺跡山道位置図

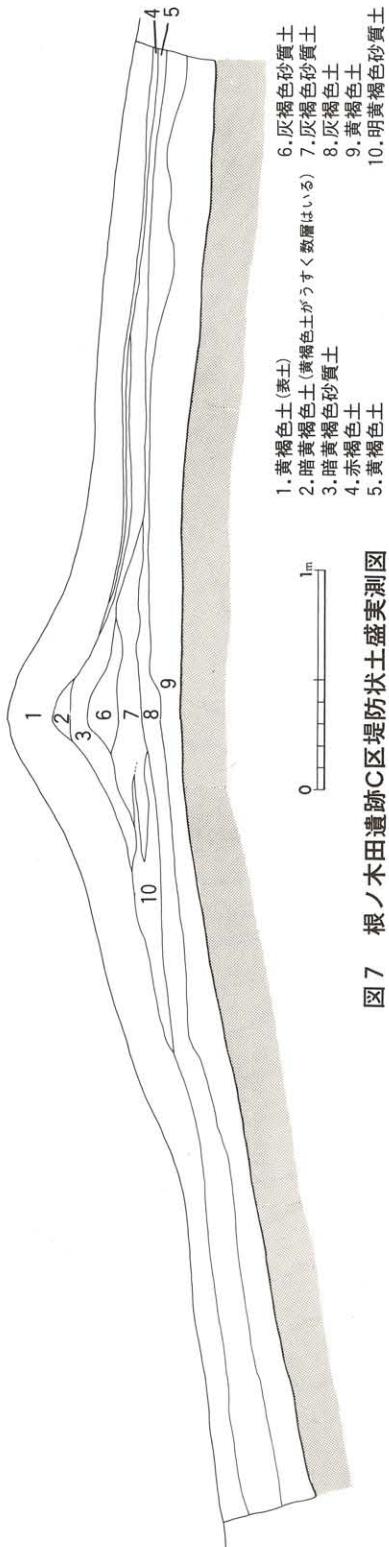


図7 根ノ木田遺跡C区堤防状土盛実測図

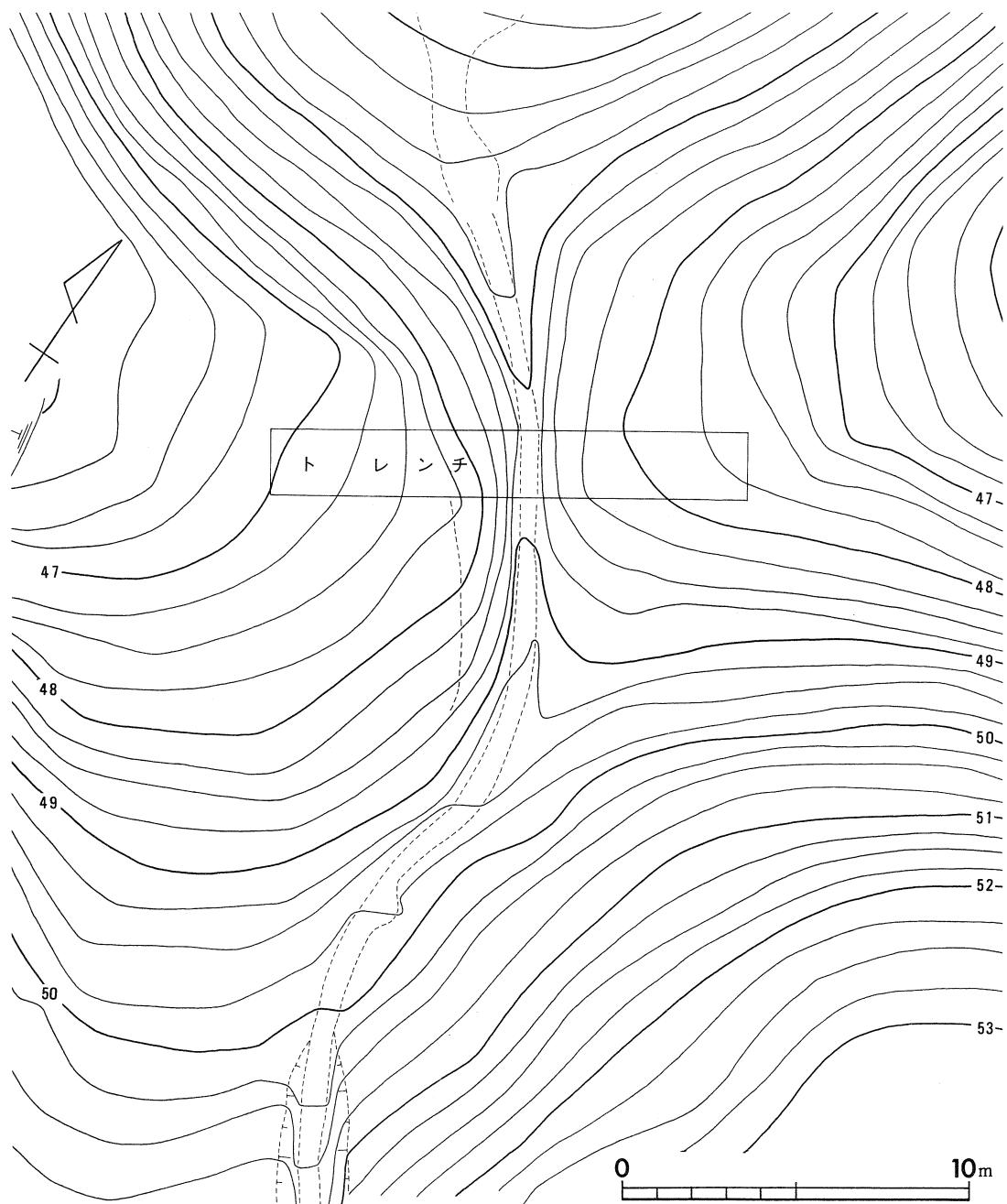


図8 根ノ木田遺跡C区測量図(破線は山道)

## 2. D 区

D区はC区から山道を南に登り詰めた丘陵頂部に位置し、 $10 \times 20\text{m}$ の広さの平坦面が調査地である。C区との比高は約10m、標高は57mを測る。この区では、長さ14m、幅8m、深さ80cmの浅い落ち込みと長径1.3m、短径1.1mの楕円形で、深さ30cmの土坑を各1を検出したが、明確な遺構は発見できなかった。遺物としては、落ち込みの埋土中およびその周辺部から、細片となった須恵器

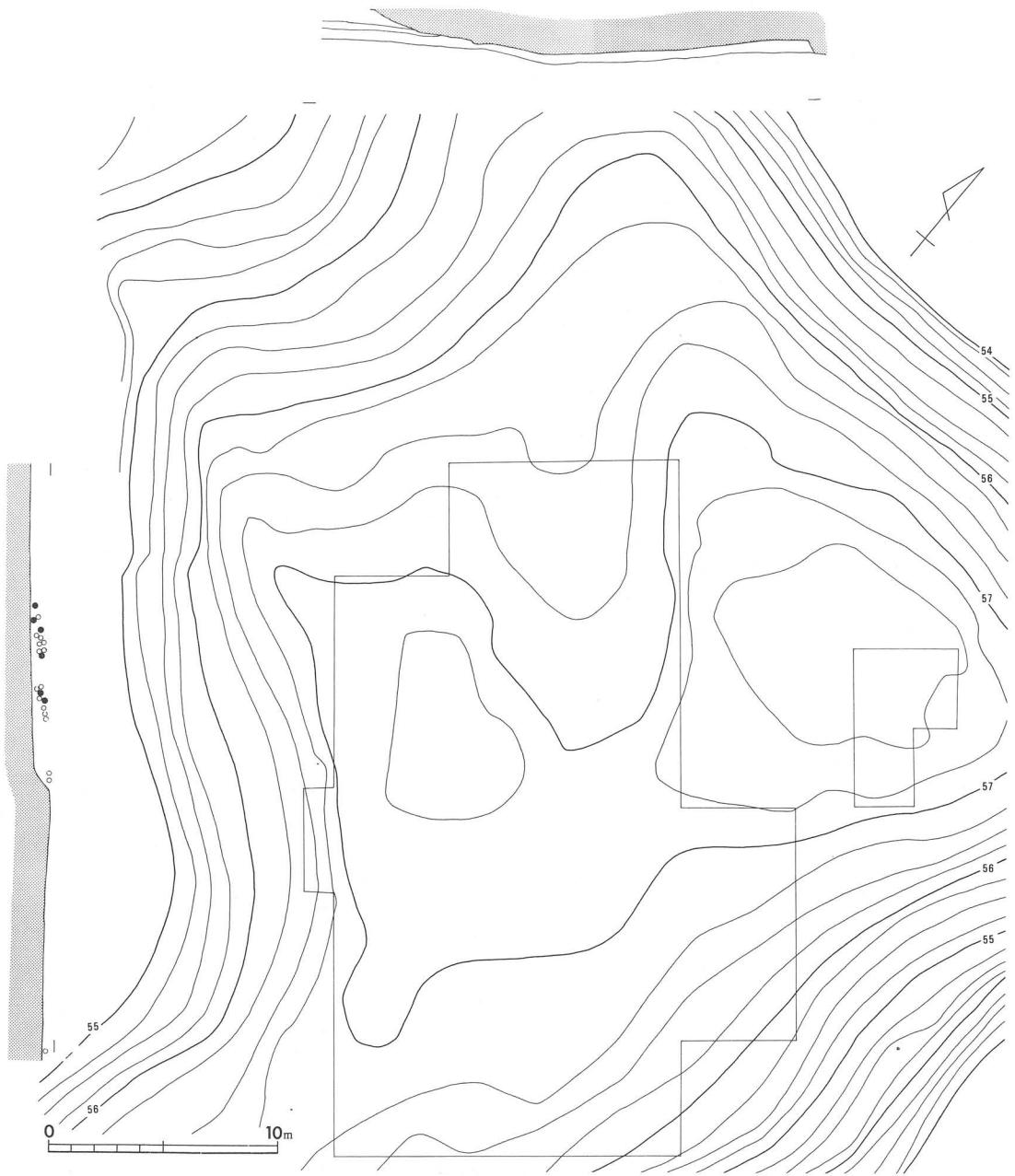


図9 根ノ木田遺跡D区測量図

や土師器などの土器が多く出土した。なお、土坑については、遺物が出土しておらず、時期や性格は不明である。

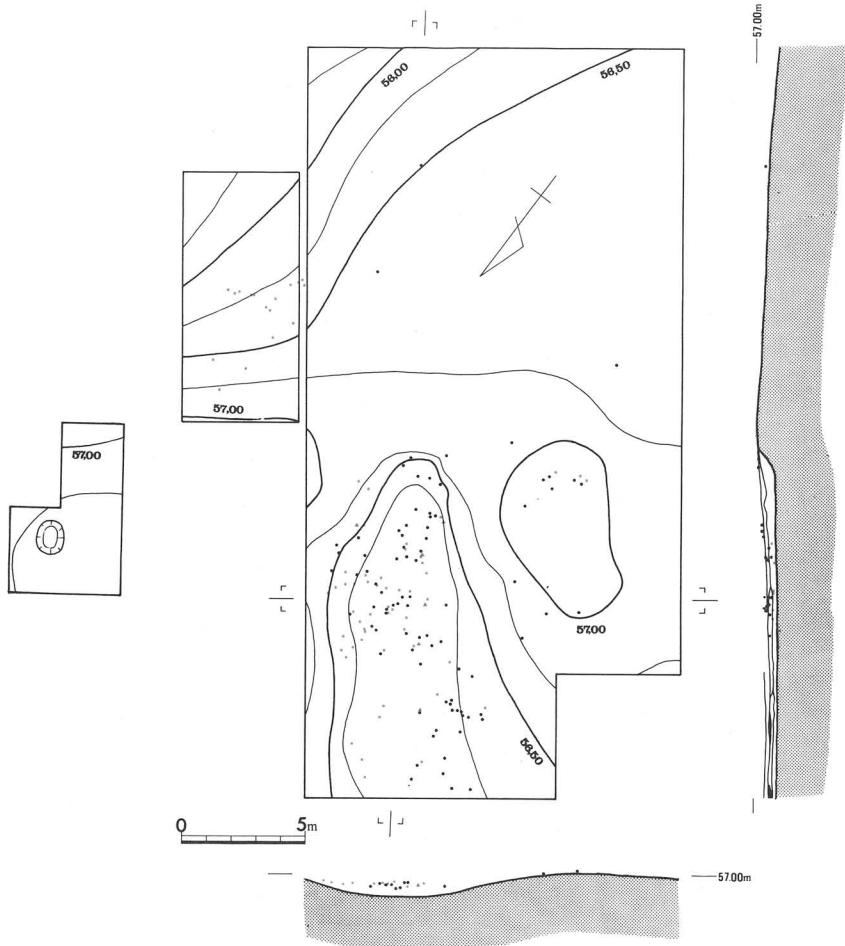


図10 根ノ木田遺跡D区遺物分布図  
(黒—須恵器、赤—土師器、緑—灰釉陶器)

遺物としては土器のみが出土している。須恵器の蓋 6, 壺 4, 鉄鉢形土器 3, 瓶 1, 灰釉陶器壺 1, 土師器の壺 1, 甕 1, 土師質土器少量があり、すべて細片である。

須恵器蓋（1～6）（1～3）はボタン状のつまみをもち、口縁部の端は下垂する。（4～6）は輪状のつまみをもち、肩部は張る。（5, 6）の口縁部は屈曲し、端は下垂する。壺（7～10）は低い高台をもつ。（7, 8）は底部の端に、（9, 10）はやや内側に付く。また、高台をもたない壺も1個ある。

鉄鉢形土器（11～13） 大、中、小の3個体がある。（11）は小形品で、口縁部はほぼ直立し、底部は丸い。（12）はやや大形で、口縁部は内弯する。底部は丸く、深い。体部外面の三ヵ所に二条の

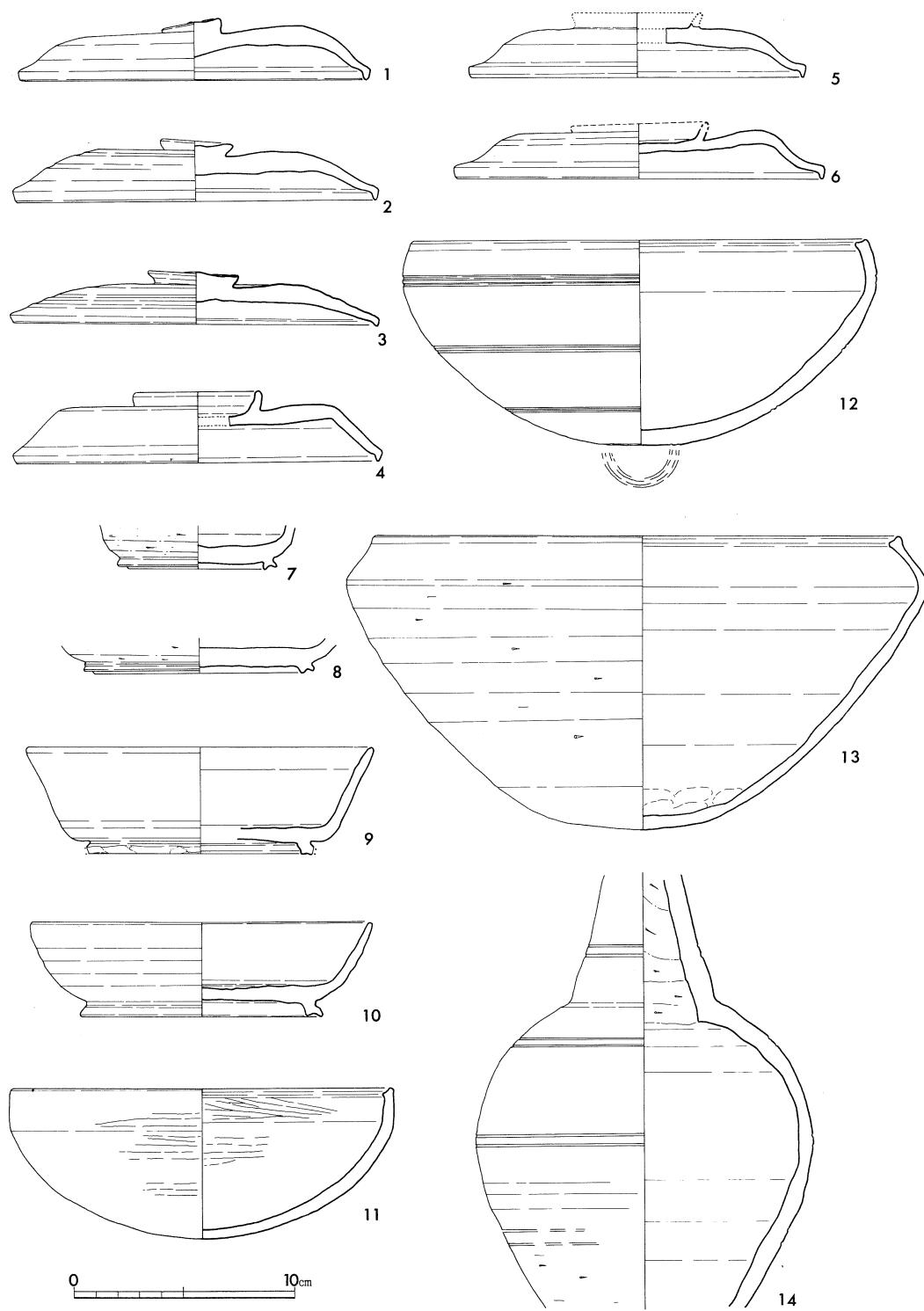


図11 根ノ木田遺跡D区出土土器実測図(1)

平行沈線を、底部には径2.7~3.6cmの円形を描く。(13)は大形品で、口縁部はくの字状に内弯し、底部は深く、尖り気味に丸くなる。なお、大小3個の鉢は入れ子となっていた可能性もある。瓶(14)は口縁部と底部を欠く。頸部は下方にゆくほど太くなり、体部はやや丸味をもつ。外面の頸部と体部の4カ所に、二条の平行沈線が施されている。淨瓶の写しと考えられる。

**灰釉陶器壺(1)** 肩部から体部の破片で、球形をなす。表面には緑灰色の釉がかかり、愛知県の猿投山周辺で焼かれたものと推定される。

遺構を伴なわなく、奈良時代から平安時代にかけての各時代の土器が散布する特異な遺跡である。この遺跡の性格を知る手掛かりは鉄鉢形土器と瓶および灰釉陶器である。これらは仏具等として使

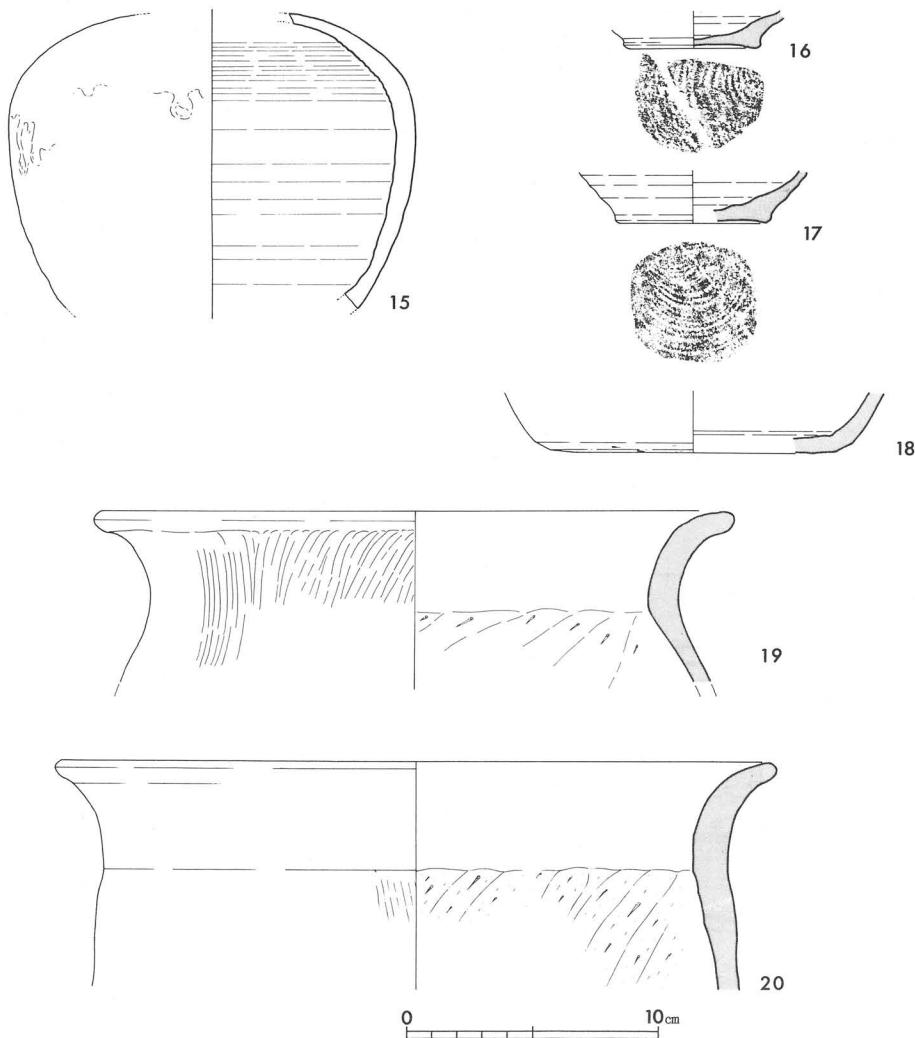


図12 根ノ木田遺跡D区出土土器実測図(2)

第2表 根ノ木田遺跡D区出土土器観察表

器種	図版番号	法量 (cm)	調整	焼成・胎土・色調	備考
須恵器 环蓋	図11-1	口径 15.9 つまみ径 2.7 高さ 2.2	外面：自然釉のため不明 内面：回転ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：青灰色	
	-2	口径 16.5 つまみ径 3.3 高さ 2.65~2.90	外面：ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデのみ	焼成：良 胎土：密 色調：灰白色	
	-3	口径 16.6 つまみ径 4.1 高さ 2.4	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：青灰白色~灰白色	
	-4	口径 16.1 つまみ径 6.1 高さ 3.6	外面：体部回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：青灰白色 外面自然釉	
	-5	口径 15.2 つまみ径 5.9 高さ 2.9	外面：不明 内面：体部回転ナデ	焼成：不良 胎土：密 色調：暗青灰色	
	-6	口径 16.7	外面：ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ, 天井部ヘラナデ	焼成：不良 胎土：密 色調：灰色	
坏身	-7	底径 7.2	外面：体部ヘラケズリ, 底部回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：暗青灰色	
	-8	底径 10.4	外面：ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ後ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：暗青灰色	
	-9	口径 15.7 底径約 10.3 高さ 4.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ, 底部ナデ仕上げ	焼成：良好 胎土：密 色調：黒灰色~暗灰色	
	-10	口径 15.4 底径 11.0 高さ 4.3	外面：回転ナデ, 底部ヘラケズリ後回転ナデ, 底部に爪形圧痕残る	焼成：良好 胎土：密 色調：暗灰色	
鉄鉢形 土器	-11	口径 17.3 高さ 6.8	外面：横方向のヘラミガキ後横ナデ 内面：ヘラナデ後横ナデ	焼成：不良 胎土：密 色調：黒灰褐色, 内面赤褐色	
	-12	口径 20.4 高さ 9.2	外面：3ヶ所に2条の沈線, 回転ナデ 内面：ヨコナデ	焼成：不良 胎土：密 色調：淡灰褐色~淡灰色	
	-13	口径 23.8 高さ 26.2 胴部最大径 13.3	外面：ヘラケズリ, 口縁部と底部, ヨコナデ 内面：体部ヨコナデ, 底部に指圧痕あり	焼成：不良 胎土：粗 色調：全体淡赤褐色 外面底部と内面淡灰色	
水瓶	-14	胴部最大径 15.2	外面：4ヶ所に2条沈線あり, 胴部ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：不良 胎土：粗 色調：青灰褐色~暗灰色	
灰釉陶器 壺	図12-15	胴部最大径 16.1	外面：回転ナデ, 肩部に自然釉あり	焼成：良好 胎土：密 色調：外面灰色, 内面淡灰色	
土師質土器 环	-16	底径 5.4	外面：回転ナデ, 底部糸切 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：黄褐色	
	-17	底径 6.1	外面：回転ナデ, 底部糸切 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：黄褐色	
土師器 碗	-18	底径 11.6	外面：体部回転ナデ, 底部ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：淡黄褐色	表面に丹塗
甕	-19	口径 25.4	外面：口縁部ヨコナデ, 体部ハケ 内面：口縁部ヨコナデ, 体部ヘラケズリ	焼成：不良 胎土：粗 色調：淡茶褐色	
	-20	口径 28.6	外面：口縁部ヨコナデ, 体部タテハケ後ナデ 内面：口縁部ヨコナデ, 体部ナメヘラケズリ	焼成：良 胎土：粗 色調：青赤褐色	

器種	図版番号	法量 (cm)	調整	焼成・胎土・色調	備考
須恵器 坏蓋	図16-21	口径 13.7 つまみ径 7.2 高さ 3.2	外面：体部回転ナデ、肩部ヘラナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ヘラナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：青灰白色	
坏身	-22	口径 12.0 底径 7.6 高さ 5.6～5.9	外面：回転ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ	焼成：やや不良 胎土：密 色調：灰白色	
	-23	口径 11.5 底径 7.2 高さ 5.5	外面：回転ナデ、底部ヘラケズリ後ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：青灰白色	
土師質土器 坏	-24	底径 5.0	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：淡赤褐色	

用されたものと考えられ、仏教色の入った祭祀にかかわると推定される。しかし、その具体的な内容は遺構が確認されないため、今日窺い知ることはできない。

### 3. H 区

H区はD区の南側150mの丘陵頂部に位置する。標高51mで、尾根の分岐点にあたり、10×20mの平坦面がある。遺構としては、尾根上で古墳時代前期の甕棺1基を検出した。

甕棺は、長径85cm、短径40cm、深さ15cmの楕円形の土壙に、土師器の甕形土器を合わせ口の状態にして横方向で埋葬されていた。その合わせ口部には他の土器片で覆われ、また、片方の甕形土器の底部に、他の甕形土器の口縁部が取り付けられていた。この甕形土器の口縁部は被葬者の頭位を示しているかもしれない。なお、甕形土器の口縁部の近くには拳大の円礫がまとまって存在していた。

これに伴なう副葬品などの遺物はない。棺の大きさより、幼児などを葬ったものであろう。周囲にはまったく遺構はなく、単独で、人里離れた山中の埋葬には特別な意図が窺われる。棺には3個の土師器甕が使用されている。甕（1）は複合口縁部の下方から頸部にかけてのみが図化できたものである。口径13.3cmの小型品。胴部の内側はヘラ削りであるが、他は焼成が悪く、調整は不明。甕（2）は口径15.5cm、器高28.0cmで、複合口縁をもつ。口縁部の内外は横ナデ、体部外面はハケ調整ののち、肩部に11条の櫛状工具による波状文を施す。内面はヘラ削りで、底部には指頭圧痕が残る。器肉は薄く、底は平底。甕（3）は口径12.3cm、器高31.0cmで、3個の内一番大きい。複合口縁をもち、底部はやや平底気味。調整は前述の甕と同じであるが、施文では波状文の上に櫛状工具による刺突文を描く。器肉は薄いが、焼成はよい。山陰地方によく見受けられる形態で、古式土師器の範疇に属する。

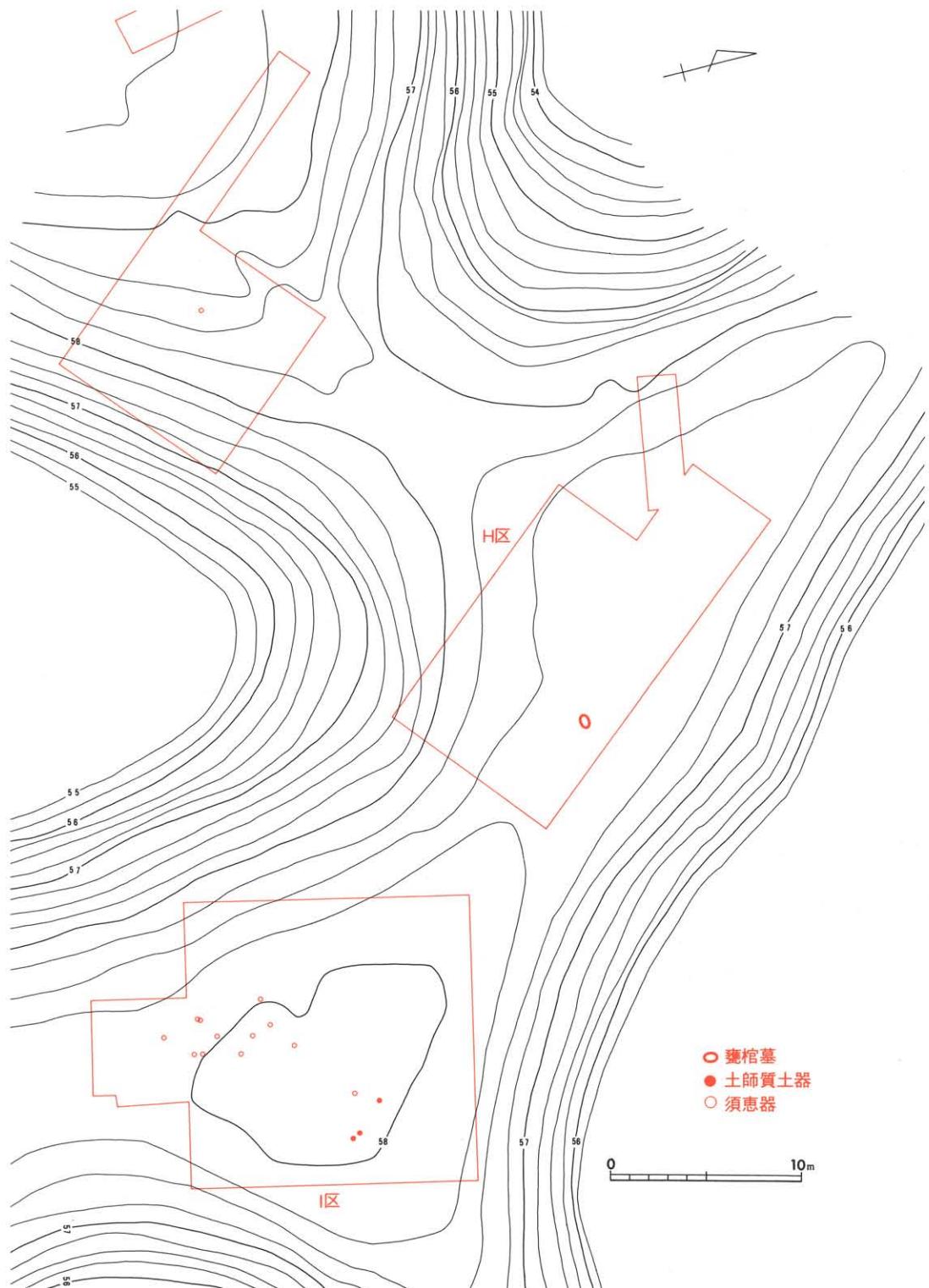


図13 根ノ木田遺跡H・I区測量図

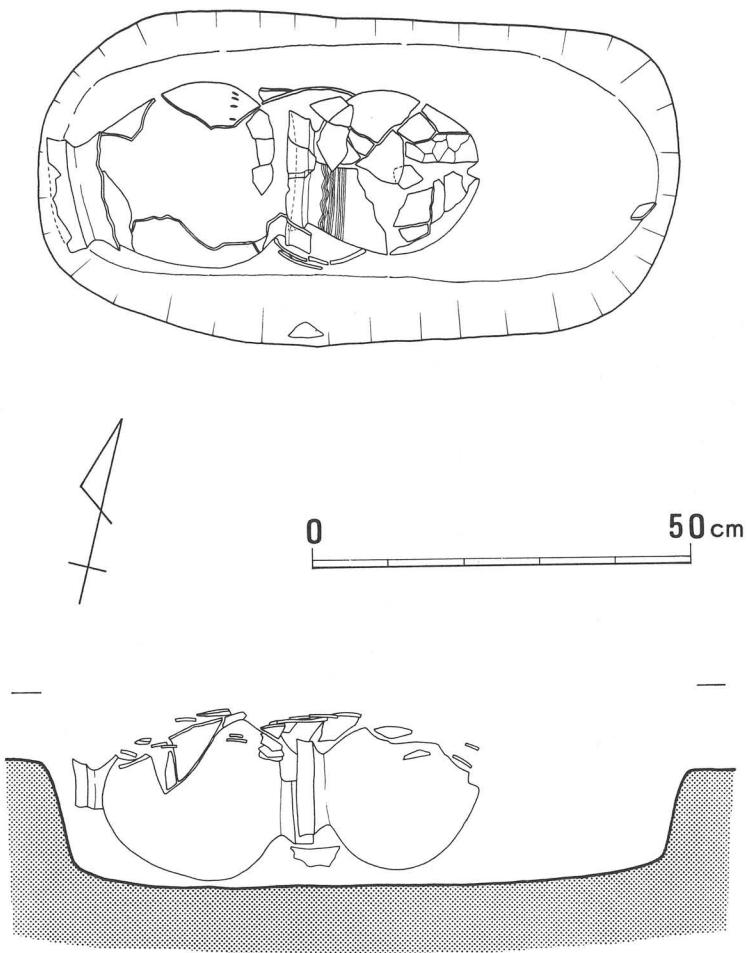


図14 根ノ木田遺跡H区土器棺・土壤実測図

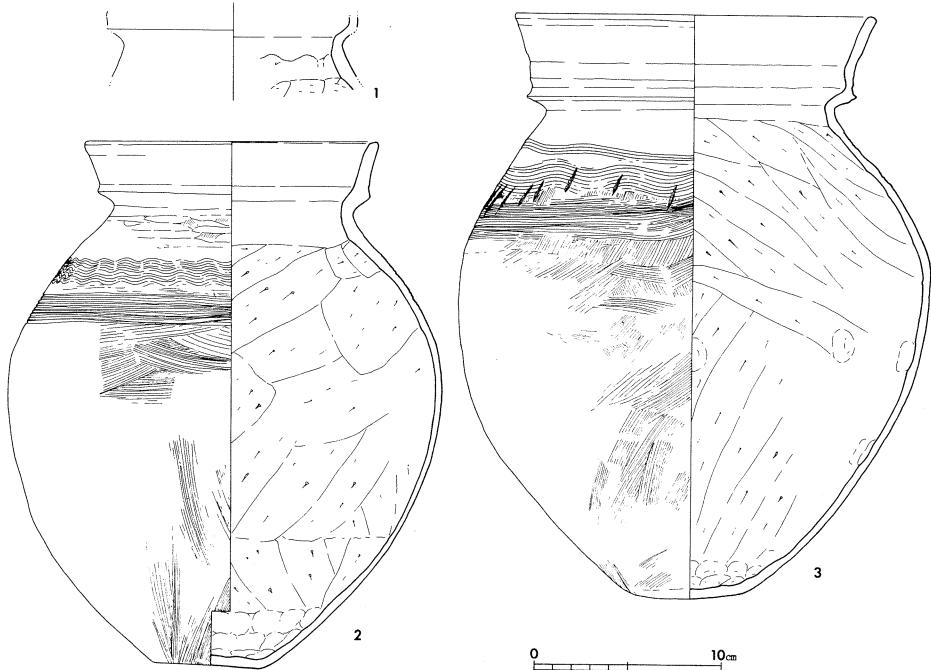


図15 根ノ木田遺跡H区(土壤)出土土器実測図

#### 4. I 区

I区はH区の東に隣接する。H区と同様に15×20mの平坦面が認められるが、表土の下は直に地山となり、遺構は検出できなかった。

この区からは平安時代の須恵器の蓋、壺が少量と土師質土器が僅か出土している。

蓋（1）は輪状のつまみをもつ。肩部は張り、体部の端部は屈曲し、丸くおさまる。壺（2, 3）は底部が深く、体部は直線的にやや開く。底部端には低い脚がある。土師質土器壺（4）小型品。底部は回転糸切り。

須恵器は平安時代初めに属するが、遺跡の性格は遺構が無いため不明である。前述のD区と同じ立地であり、また、土器の出土の仕方も似ており、同様な性格かもしれない。

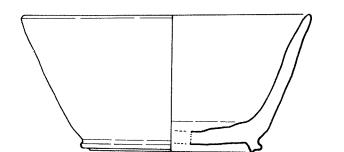
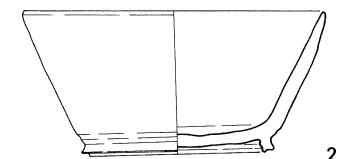
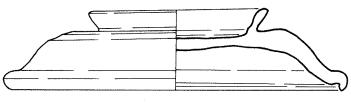


図16 根ノ木田遺跡I区出土土器実測図

## 5. K 区

H, I 区の南100mにあたり、白上川がつくる小さい平野を見下ろす尾根筋に位置する。頂部には径3m、深さ20cmの浅い皿状の土坑と内面が焼けた長径1.1m、短径0.7m、深さ35cmの土坑を検出した。しかし、出土品はなく、時期、性格は不明である。なお、この区の表土中から縄文土器1片が発見されている。

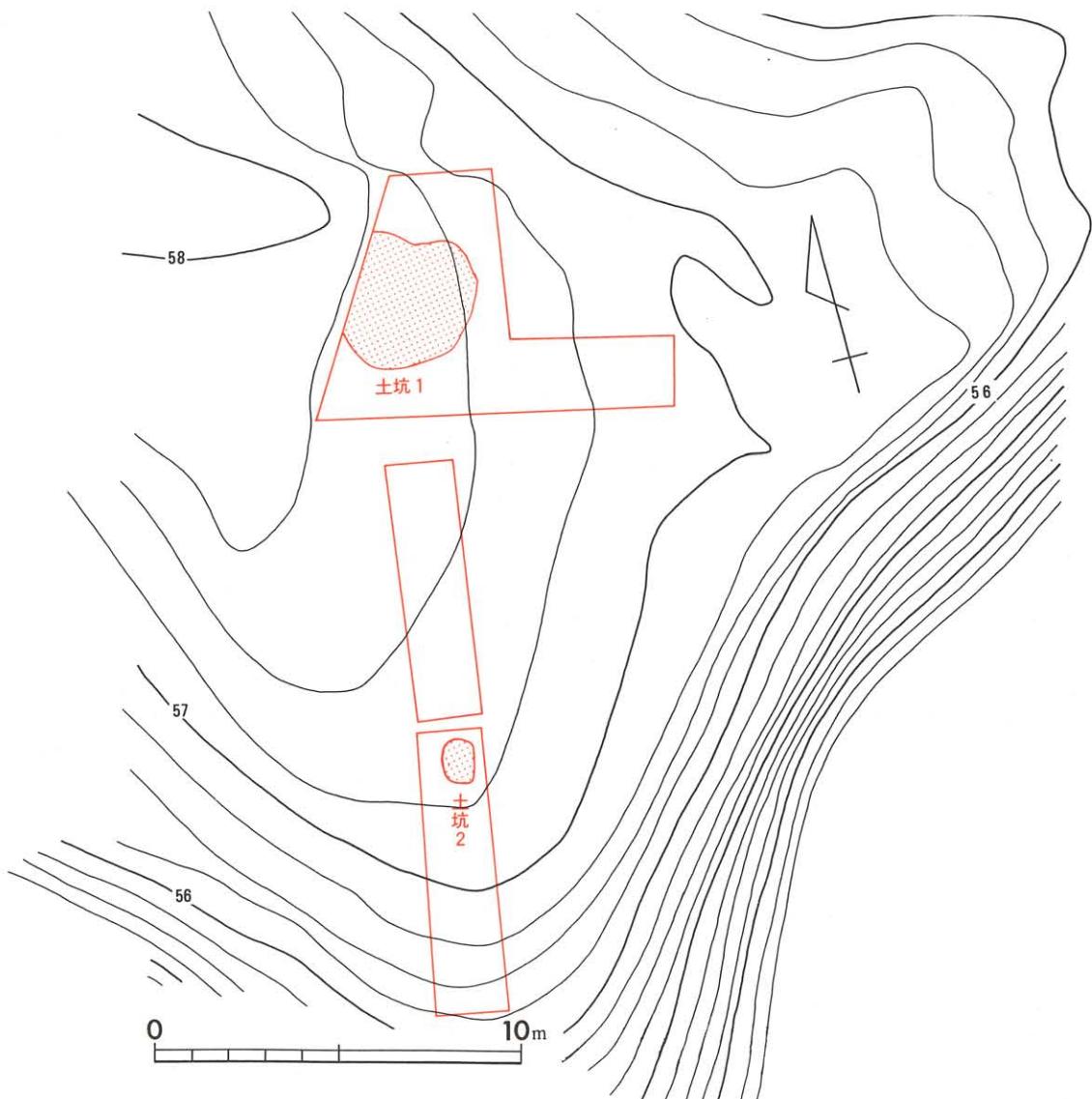


図17 根ノ木田遺跡K区測量図

## 第4章 フケ田平遺跡

### 第1節 遺跡の位置と調査の概要

フケ田平遺跡は根ノ木田遺跡の西側にある。二つの遺跡とも標高は50～60mを測り、高さ・規模とも同程度で、小さい谷をはさんで対峙するかのように存在する。遺跡のある所は平野部より北側に少し入り込んだ山林に位置するが、それより奥部は近年開発され、大規模な草地に変貌している。

範囲確認は尾根上を中心にA～D区の4カ所において行い、D区からは集石遺構1基と炭窯1基を検出した。また、A区からは弥生土器の破片を、D区からは磨製石斧を各1個発見している。

なお、D区については全面を発掘した。

### 第2節 遺構・遺物

#### 1. A 区

尾根の奥部で、標高55mの比較的なだらかな斜面に位置する。遺構は認められないものの、弥生土器の平底が1片、斜面の埋土から発見されている。これは、おそらく畑地等の開墾をする時に周囲から混入したものと思われる。また、畑地跡の平坦面より安山岩の拳大の原石が十数個採集されている。D区においても1片発見されているが、これらは他地域から持ち込まれたものと推定される。

#### 2. D 区

集石遺構は見晴らしのよい標高59mの尾根上にある。一辺10m程の僅かな高まりに、周辺の谷などから運ばれた人頭大の円礫約300個あまりが隙間なく置かれている。この石は厚さ20cmから30cmの黄褐色土層の盛土上にあり、あたかも葺石状に見える。重さはまちまちで、7kgまでのものが多い（図22を参照）。これらの石は同丘陵を構成する地層から出るものである。なお、集石遺構の北側には幅3mの浅い窪地があり、この部分の土を盛土にしたものと推定される。

地表面を少し掘り下げるに、平面プランの円形や不整形な土坑が10個ほど検出された。大きさは1m前後で、深さも20～40cmと浅い。内部の土は単層で、付近の地山と同質の横褐色土層である。この穴から

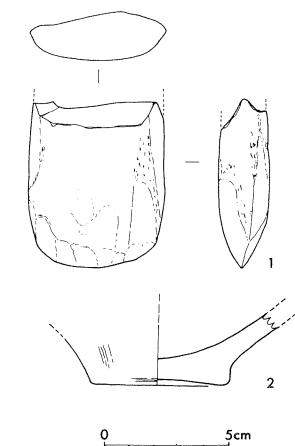


図18 フケ田平遺跡出土弥生土器・石斧実測図

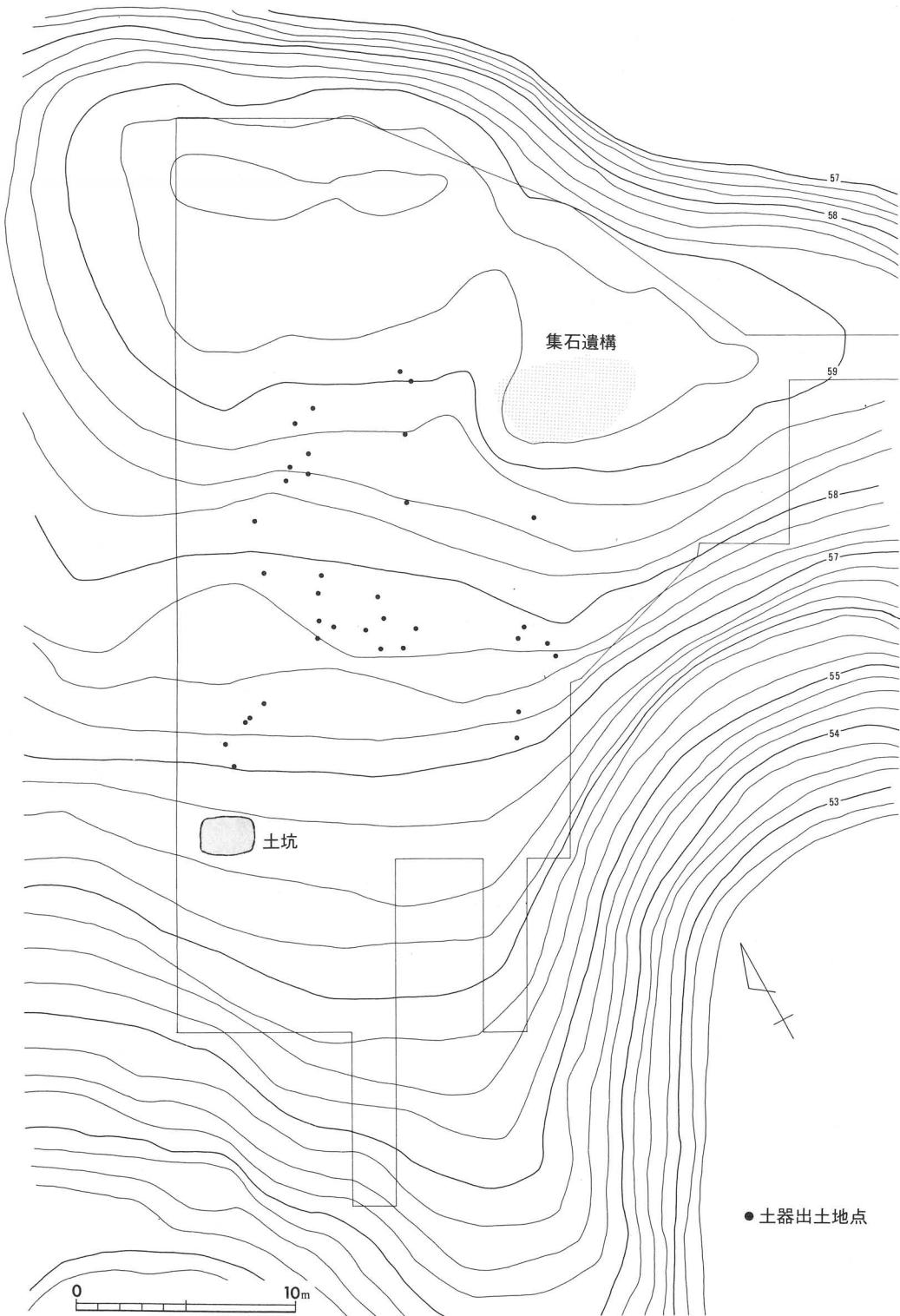


図19 フケ田平遺跡D区地形測量図

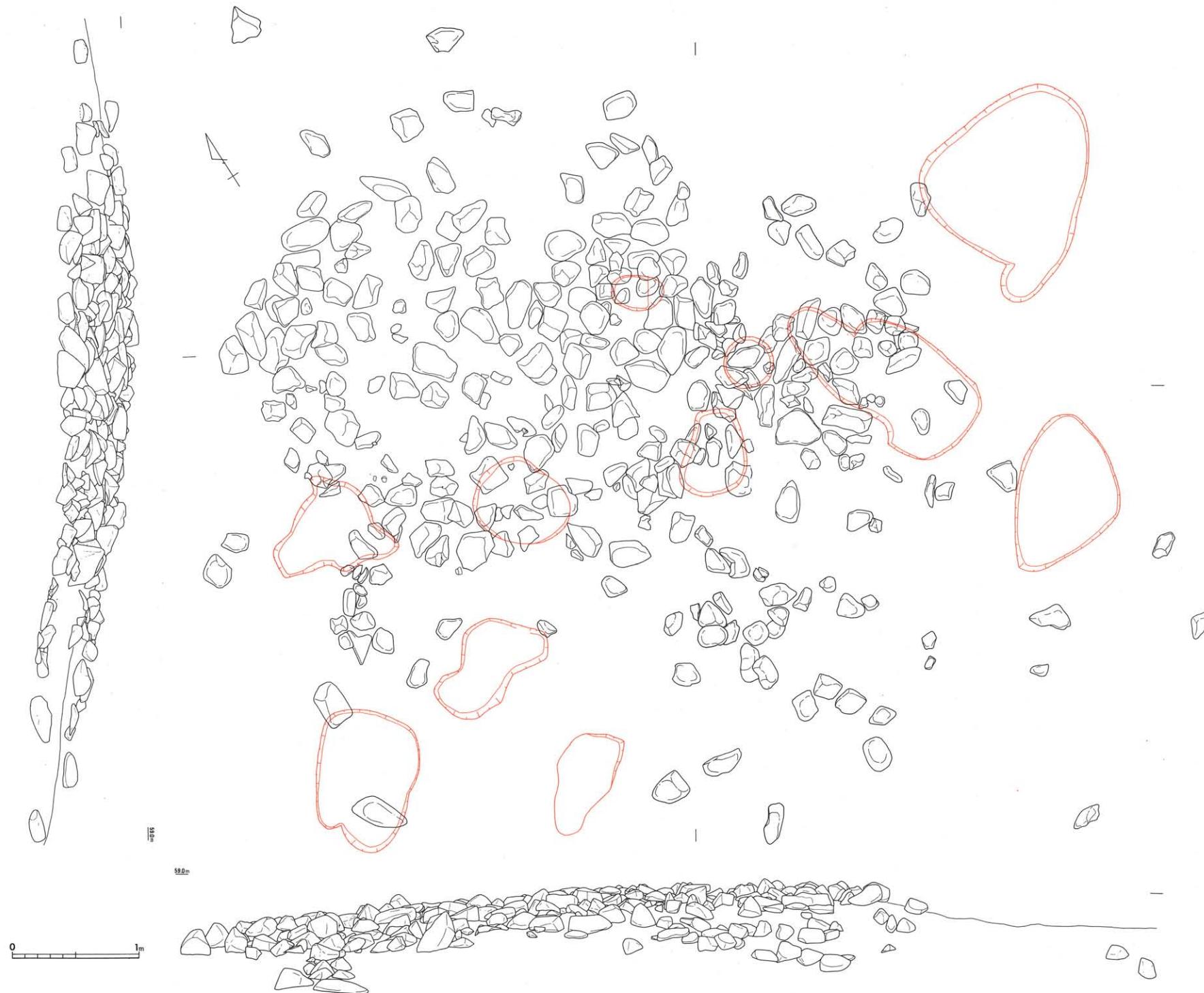


図20 フケ田平遺跡D区集石構造実測図



図21 フケ田平遺跡D区遺構実測図

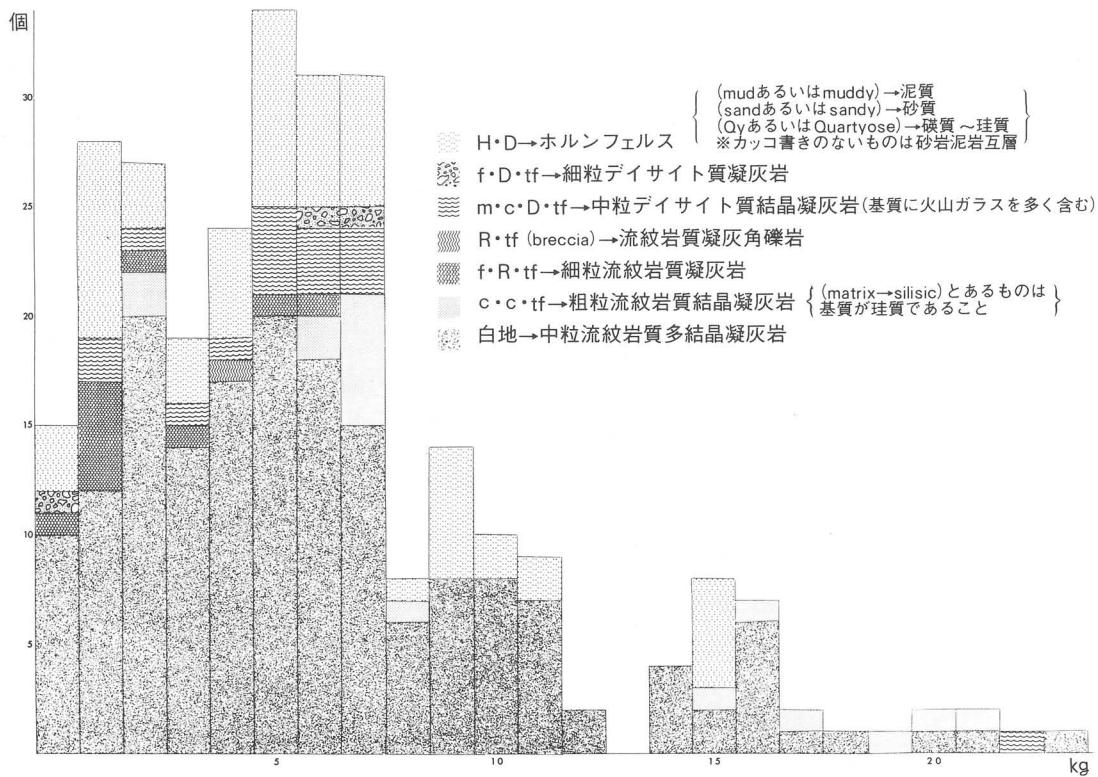


図22 フケ田平遺跡D区集石の石材別数量（竹下浩征による）

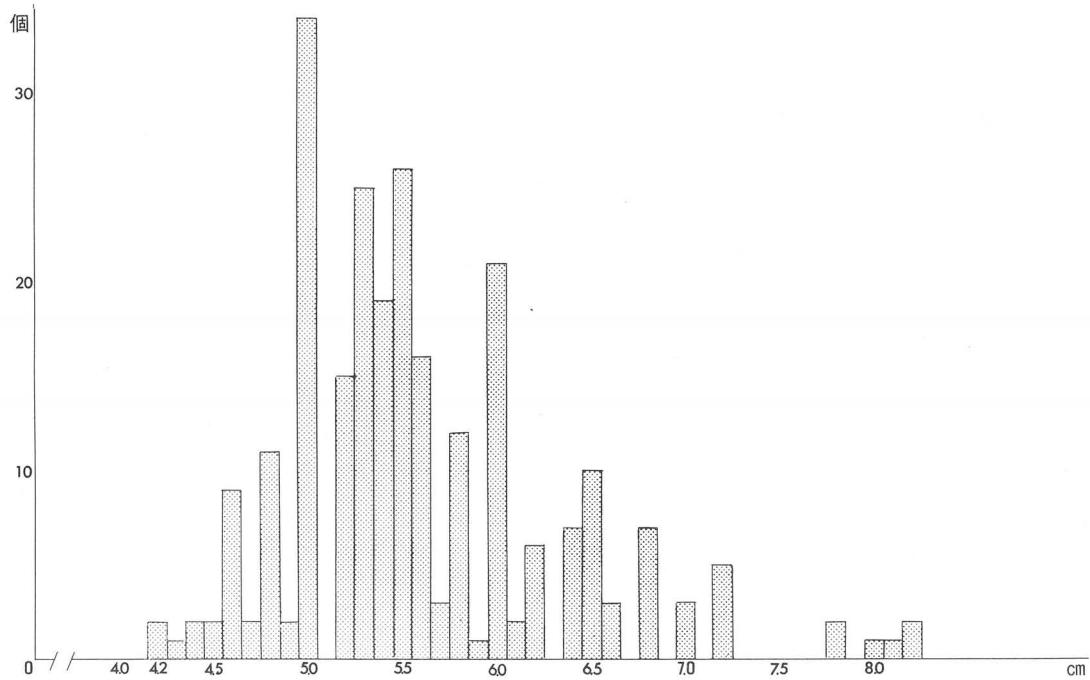


図23 フケ田平遺跡D区集石遺構出土の土師質土器底径法量

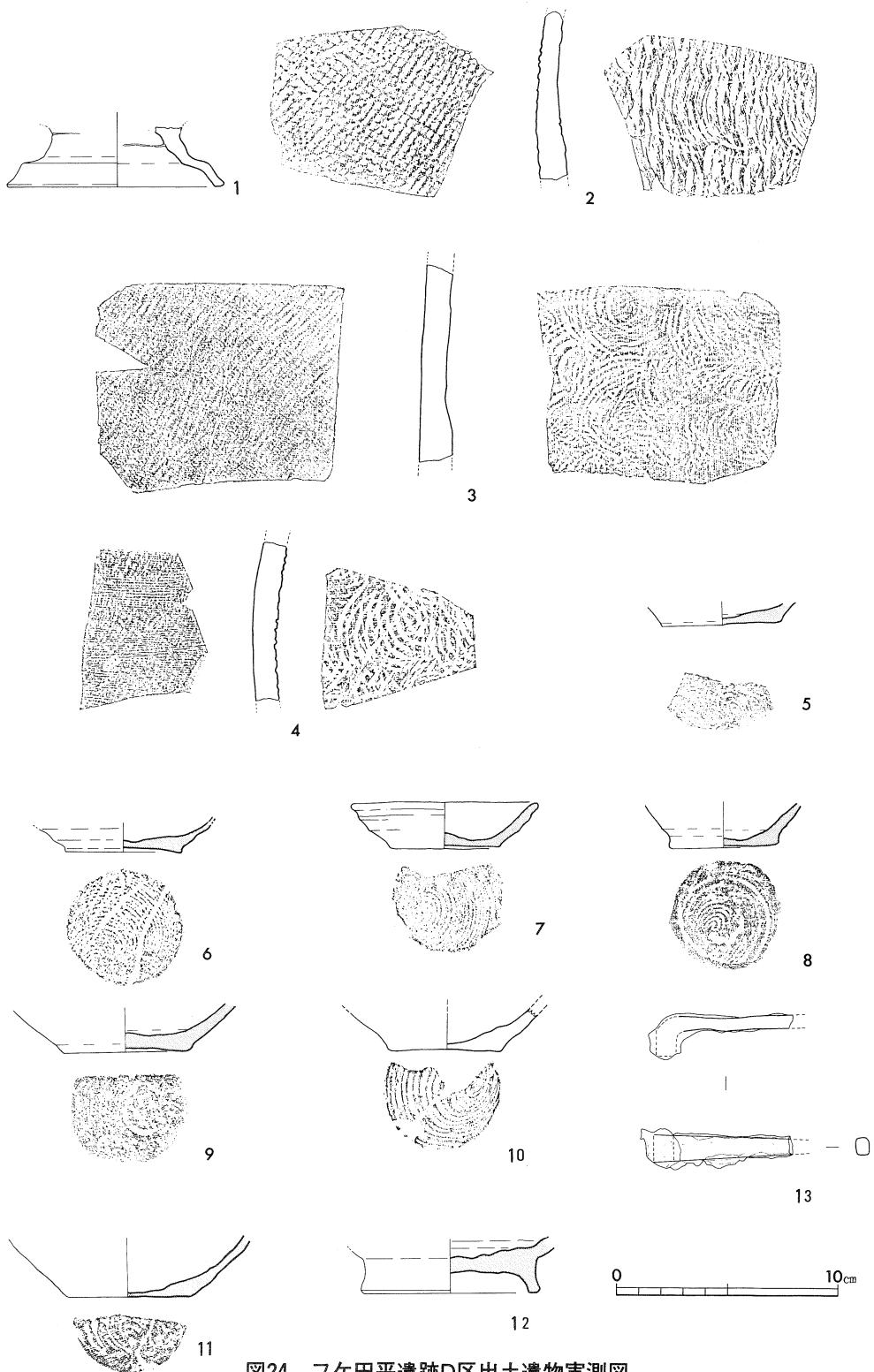


図24 フケ田平遺跡D区出土遺物実測図

の出土品はなく、何の目的で掘られたのかは明らかではない。この遺構に伴う遺物としては、集石付近およびその西側に当たる緩斜面より多くの土師質土器と少量の土師器と須恵器の破片および角釘1が出土している。土

師質土器もすべて破片となっており、完形品はない。図24のように、杯には糸切り底と高台付きの二

種類あるが、大部分は糸切り底のものである。250個体以上が出土しており、底径が5.0~6.0cmに集中し、その数は7割近くとなる。須恵器は集石の西側の斜面より甕の破片と壺か壺の脚の破片が僅かに出土している。脚は径9.8cm、高さ2.7cmで、内外面とも回転ナデで調整している。甕の表面は平行と格子状の叩きで、一部カキ目を施すものもある。内面は全て同心円の叩目をもつ。これらの土器は平安時代から鎌倉時代にかけてのものと推定される。角釘は集石遺構の北側の流土から出ている。遺構に伴うかどうかは不明。長さは6cm以上で、先端が折り曲げられたものである。

遺跡の性格については、明確にする資料はない。しかし、人里離れた山間に位置し、破碎された多くの土師質土器や集石遺構などからみて、根ノ木田遺跡と同様、祭祀に関わる遺構と思われる。

炭を焼いた窯は集石遺構の西側の緩斜面に1基ある。この平面プランは長辺2.2m、短辺1.9m、深さ0.6mの土坑状を呈す。底部部分には炭と焼土を多く含む暗褐色土層が、厚さ15cmで堆積している。さらに、土坑周囲の地面上にも炭化物が薄い層になり、検出された。また、東側では三ヵ所に、炭と焼土とが混ざる凹地もある。この残存する炭の量はコンテナ3箱分にあたる。炭が焼かれた時期は、出土品がなく、明確にはできない。しかし、土坑上の堆積する黄褐色土層にのみ土師質土器を含み、それ以下の層中には1片も認められないので、土坑は集石遺構より古いものと考えられる。

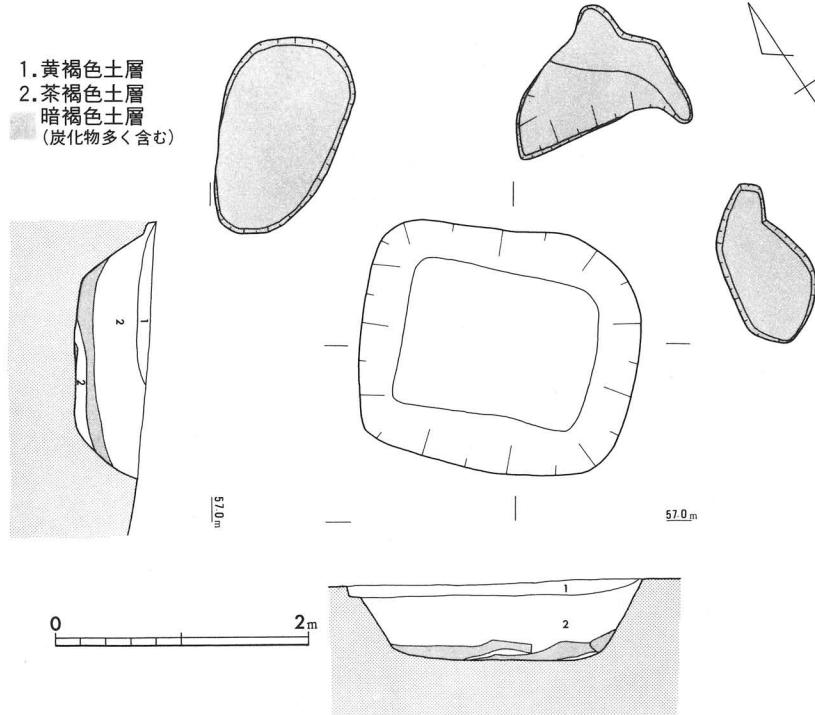


図25 フケ田平遺跡D区土坑実測図

## 第5章 大溢遺跡

### 第1節 遺跡の位置と調査の概要

この遺跡は第2地点にあたり、日本海に臨む標高70mの底丘陵の斜面に位置する。現在、周辺部一帯は山林となっているが、ゆるやかな斜面は20年前までは畠地として利用されていた。また、丘陵の西側には南に伸びる深い谷（地元では谷を溢という）があり、最近までその狭い谷筋で、水田が営まれ、これに伴う溜池も数個存在する。なお、遺跡の北側には持石海岸の砂浜が横たわり、山麓まで砂丘地となり、中世ごろには丘陵も砂で埋もれていたと考えられる。これを裏づけるものとして、尾根の窪地に堆積する砂層や表採される近代以降の陶磁器がある。よって、水田や畠地は近世以降に営まれたものと推定される。範囲確認調査は遺跡推定地を3ブロックに分けて行い、発掘はこれにもとづいて、遺物、遺跡を検出したI、III区を対象として実施した。

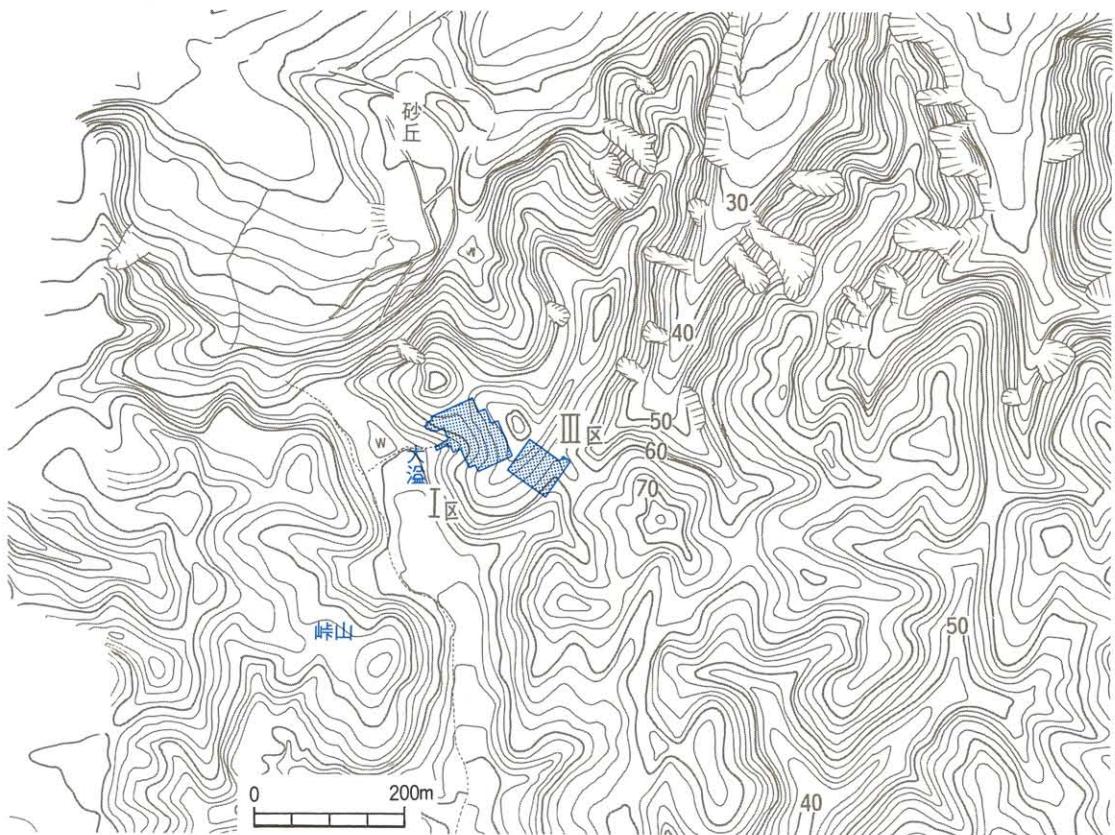


図26 大溢遺跡位置図

## 第2節 遺構

### 1. I 区

尾根の西斜面に位置し、馬蹄形をなす尾根の内側にある斜面に立地する。この部分は昭和40年代ごろまで畠地となっており、かなりの部分が加工され、区画が確認できる程である。

発掘により尾根近くの地山をL字状にカットして、2段と3段のかなり広い帯状の平坦面が検出され、その内側に建物跡5棟と空間を認めた。その平坦面は北側斜面に3段、南側に2段認められ、前者の比高は3m、後者は50cmを測る。この内の一番大きいのは、弧状を呈す最下段であり、長さ

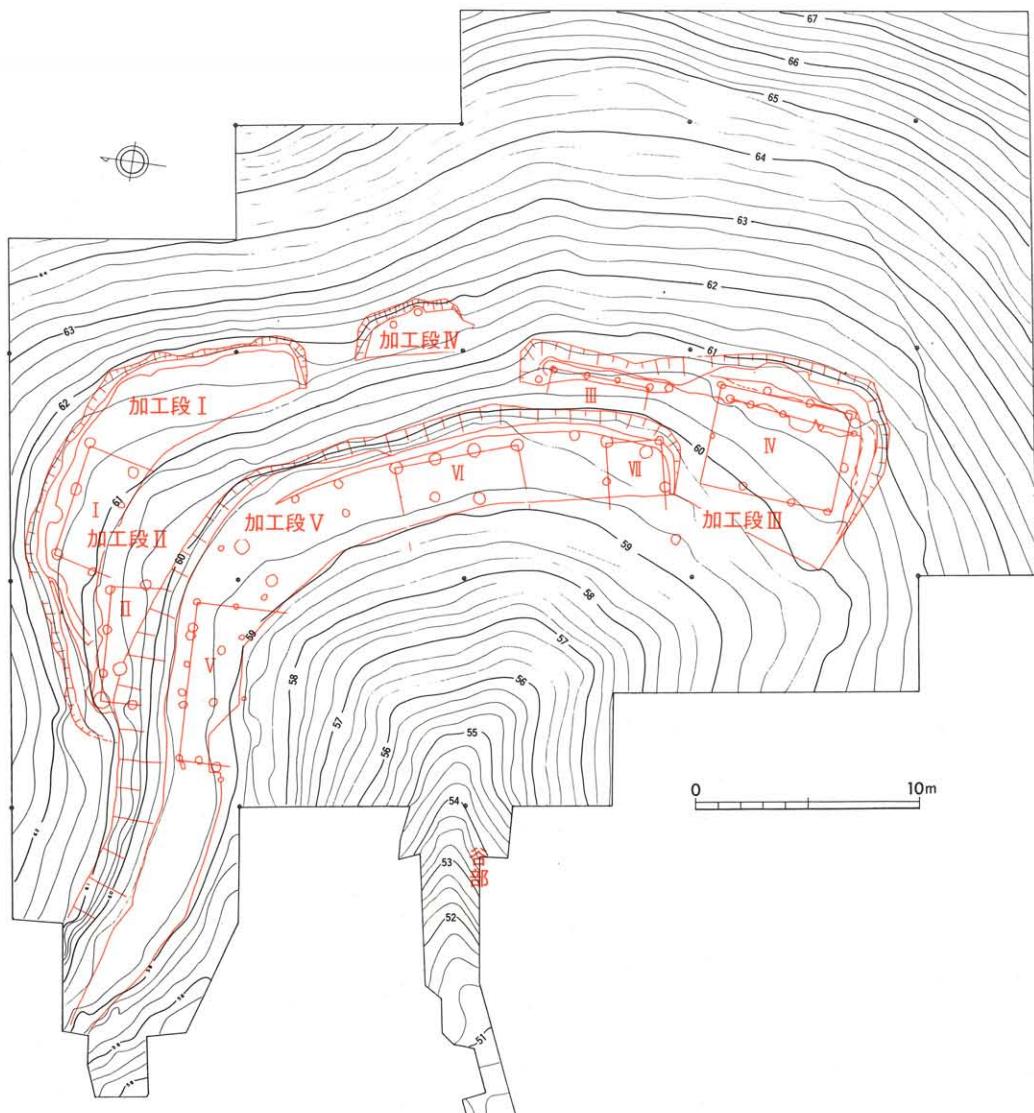


図27 大溢遺跡I区遺構配置図

は50mを超える。幅については、広い所でも5mあまりで、段は細長いものが多い。時期的には、北斜面は中段から上段さらに下段と加工されたものと推定される。

最下段の西側を除く各段の山際には、幅の狭く、深さの浅い断面U字状を呈す素掘りの溝が巡っている。

### 加工段Ⅰと建物跡Ⅰ

加工段Ⅰと建物跡ⅠはⅠ区の北側にあたり、尾根の南側斜面に位置する。これらは検出遺構中、最高所に存在し、標高はほぼ61m50cmである。

加工段は長さ15m、最大幅3mで、断面がL字をなす平坦面と弧状の溝とがあり、その面の西側に建物跡Ⅰがある。溝は素掘りで、山際の全域に巡る。その幅はおよそ60cm、深さは10cm程度で、西側が低くなっている。また、溝に囲まれた長さ8m、幅3mの空地がある。この中に、建物跡Ⅰの北東隅の柱近くに長径80cm、短径40cmの不整形な焼土面が残る。

なお、建物跡の北側にある壁側にもう1個、小さい溝をもつ加工段がある。この段は、加工段Ⅰによりその大部分が切られており、長さは3m、幅は広い所で僅か50cmしかない。溝は幅35cmで、深さは10cmである。規模、性格等は不明。

建物跡Ⅰは平坦面の北側にあり、溝に接して建つ。規模は桁行三間の5.0m、梁間は床面の南側が崩れており、不明である。現存する梁間の柱間は1.8m。柱穴は6個検出され、径25~50cm、深さ40~50cmを測り、一部2段に掘られたものもある。

### 加工段Ⅱと建物跡Ⅱ

加工段Ⅱと建物跡Ⅱは加工段Ⅰの南側下方に位置する。前者と後者の比高差は70cmで、標高はほぼ60m80cmである。加工段は長さ10m、最大幅2mの平坦面となっており、その西側には建物跡Ⅱが存在する。溝は建物跡の西側に接して、長さ1m程確認されるのみで、巡らない。また、建物跡の東側にある空地に長径1.5m、短径80cmの楕円形の焼土面が残る。高温を受けたため赤褐色に変色しており、熱残留磁気の方向を測定した（第8章 理化学的分析参照）。

建物跡Ⅱは平坦面Ⅱの西側に位置する。その規模は建物跡Ⅰと同じで、桁行三間の5.0mであるが、梁間は床面の南側が崩れており、不明。現存する梁間の柱間は1.5mである。柱穴は6個検出され、径27~50cm、深さ20~40cmを測る。また、床面に径60cm、深さ14cmの大きい穴が1個存在する。なお、北西側の壁面には床面から40cmの高さで、長さ7m、幅80cmの帯状を呈する段がある。これは建物にかかわるものと思われるが、加工段Ⅰの溝で、その一部が壊されている。

### 加工段Ⅲと建物跡Ⅲ・建物跡Ⅳ

加工段Ⅲと建物跡Ⅲおよび建物跡ⅣはⅠ区の南側にあたり、尾根の西側斜面に位置する。標高はほぼ60m50cmで、レベル的には加工段Ⅱとほぼ同じである。

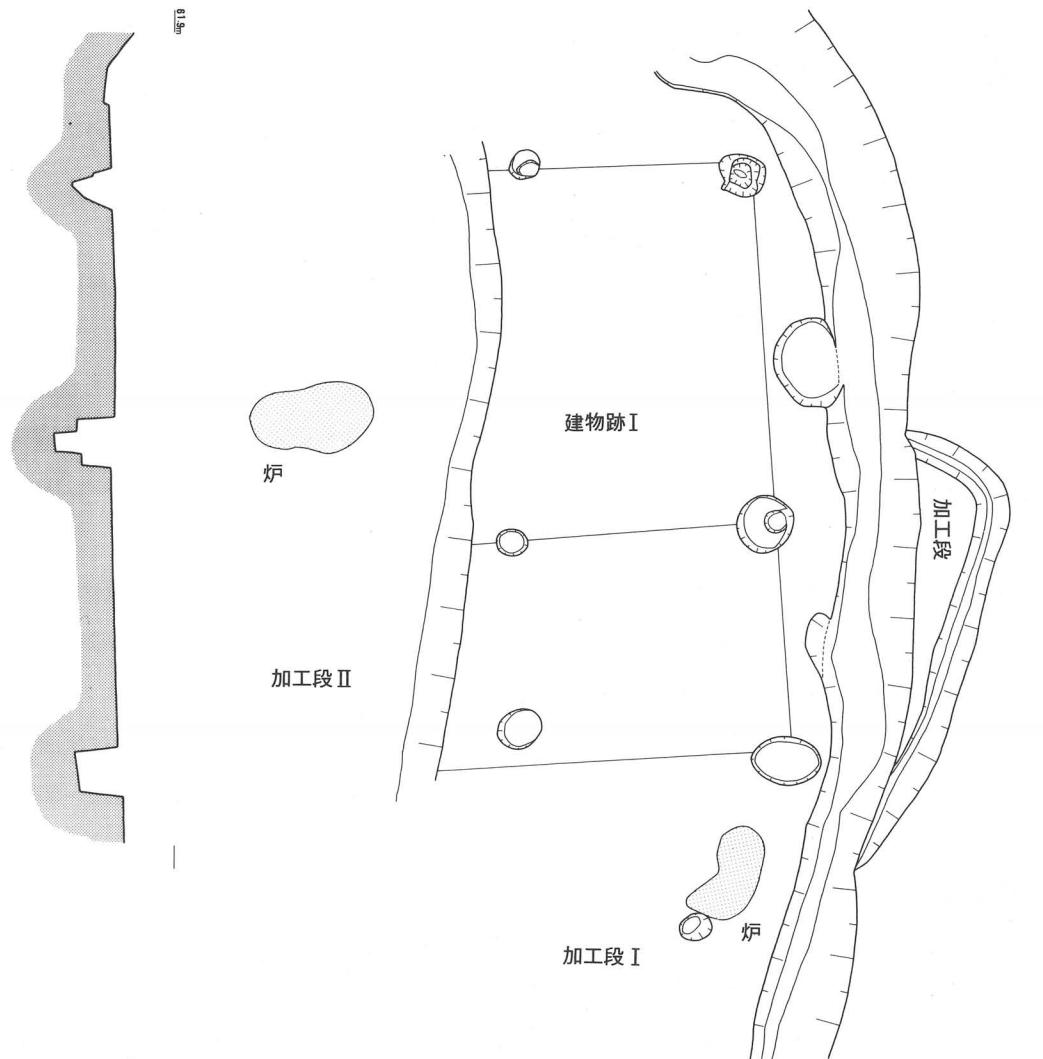


図28 大溢遺跡Ⅰ区建物跡Ⅰ実測図

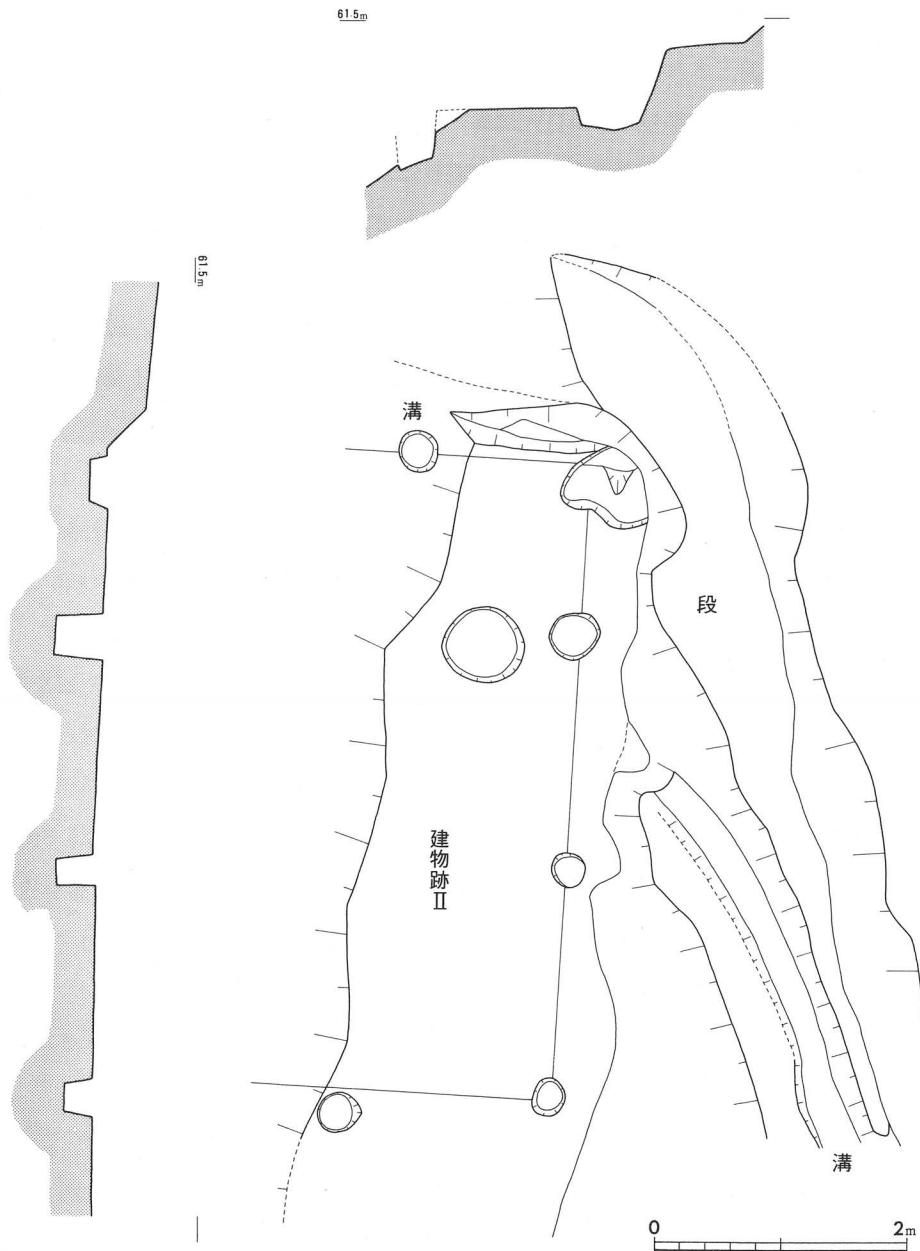


図29 大溢遺跡 I 区建物跡 II 実測図

加工段Ⅲには長さ16m、最大幅8mの平坦面と2条の溝があり、その面の左右には建物跡Ⅲ・柵跡・空地と建物跡Ⅳとが検出された。この段は2時期にわたって使用されたもので、南側は建物跡Ⅳを作るために東斜面を2m削って拡張している。よって、溝も新旧がある。

なお、建物跡Ⅲの東側に、床面から20cmの高さで、長さ5m、幅1mの細長い段がある。その床

には大小3個の不整形な焼土面が残り、大きいのは長径1.3m、小さいのは長径70cmを測る。時期的には建物跡Ⅲの後に加工されたものと考えられる。

建物跡Ⅲは平坦面の北側に建ち、その柱穴は溝に接して桁側の4個が検出されている。規模は桁行三間の4.3mであるが、梁間は床面の多くが加工段Ⅳにより削られており、不明である。柱間は1.5mで、柱の大きさは径26~33cm、深さ20~38cmを測る。また、付近に2個のピットと土坑が存在する。土坑は建物跡の北東隅に位置し、溝を壊して掘られている。15cmの比高差で、2段になっている。上段は長径1.6m、短径80cmの扇形で、深さは10~20cm、下段は長径1m、短径80cmの橢円形で、深さはおよそ20cmを測る。内部からは褐色の土に混じり、須恵器の蓋坏と土師器甕がまとまって発見された。

建物跡Ⅲに伴う北側の溝は幅50~60cm、深さ10cmで、南北に14m伸び、さらに南に4m程ある。この溝の中程から須恵器と土師器がまとまって発見されている。柵跡は建物跡Ⅲの柱列の線上に5本が並び、溝の肩部に40~50cm打ち込まれている。各穴の間隔はまちまちで、狭いのは70cm、広いのは1.6mを測る。なお、柵の西側は空地であり、後に建物跡Ⅳが建つこととなる。

建物跡Ⅳは加工段Ⅲの南側にある空地に建てられたもので、建物跡Ⅲに伴う柵列や溝を埋めて床面を造り、さらに東側の斜面を2m削って、新たに溝を掘っている。よって、溝の付近は5~10cmの厚さで、土層が堆積している。この建物跡は残りが良く、全体の構造を知ることができた。規模は梁間二間の4.5m、桁行三間の6.0mで、梁間の柱間は2.2mと2.4m、桁間のそれは1.8mと2.0mおよび2.2mで一律ではない。深さは30~50cmが大部分で、中には二段に掘られているものもある。また、建物跡の南側と東側に焼土面が各1個ずつあるが、空地の時期にできたものか、その後のものかは不明である。

溝は建物の東側と南側に沿って、L字に巡る。幅は広く、上端で1mもあるが、深さは床面から僅かに10cm程である。

#### 加工段Ⅳ

加工段Ⅰと同Ⅲに挟まれた標高61.5mの斜面に位置する。規模は東西2m、南北5mと小さく、遺構も壁際に径60cm、深さ20cmのピットが1個あるのみである。なお、南側に長径2m、短径1mの焼土面が残る。

#### 加工段Ⅴと建物跡Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ

加工段ⅤはⅠ区では最も大きい段である。斜面の中程、標高59mの南と西に面する部分を、長さ80m、幅8m（現状の最大幅）以上に加工し、弧状の平坦面を造り、その中に複数の建物を設けている。溝は南側にのみに存在する。

建物跡ⅤはⅠ区の北側にあたり、建物跡Ⅱの下方1mに存在する。壁面との間隔は50cm未満であ



図30 大溢遺跡Ⅰ区建物跡Ⅳ実測図

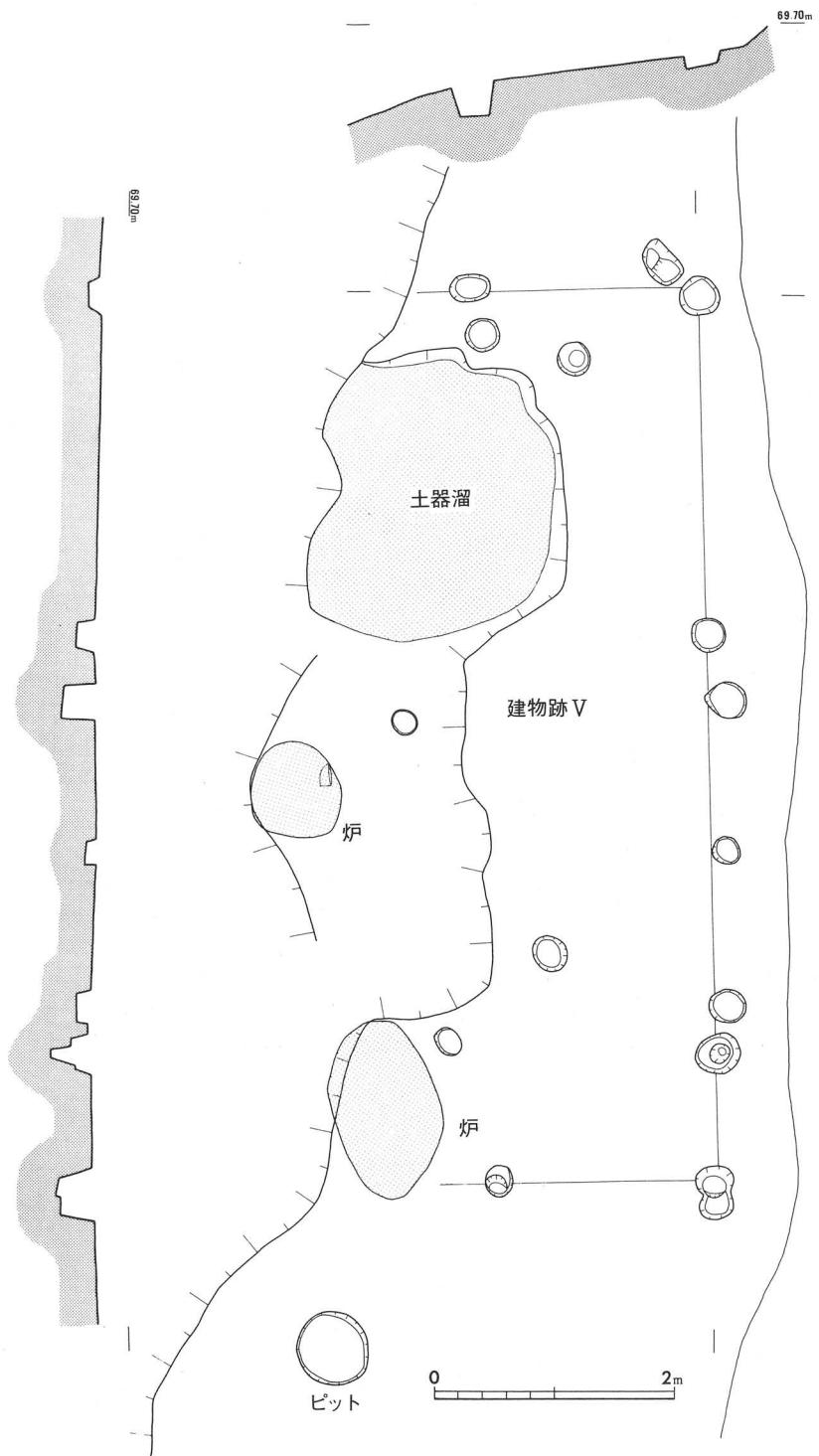


図31 大溢遺跡 I 区建物跡 V 実測図

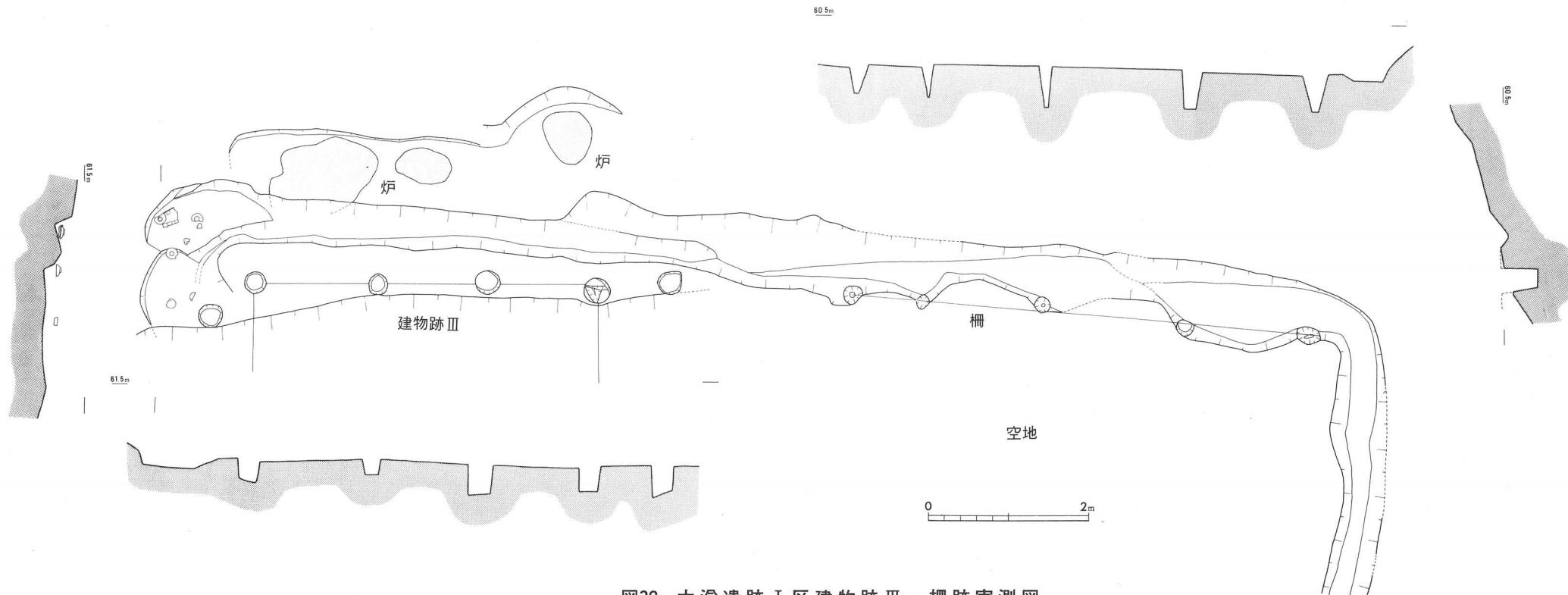


図32 大溢遺跡Ⅰ区建物跡Ⅲ・柵跡実測図

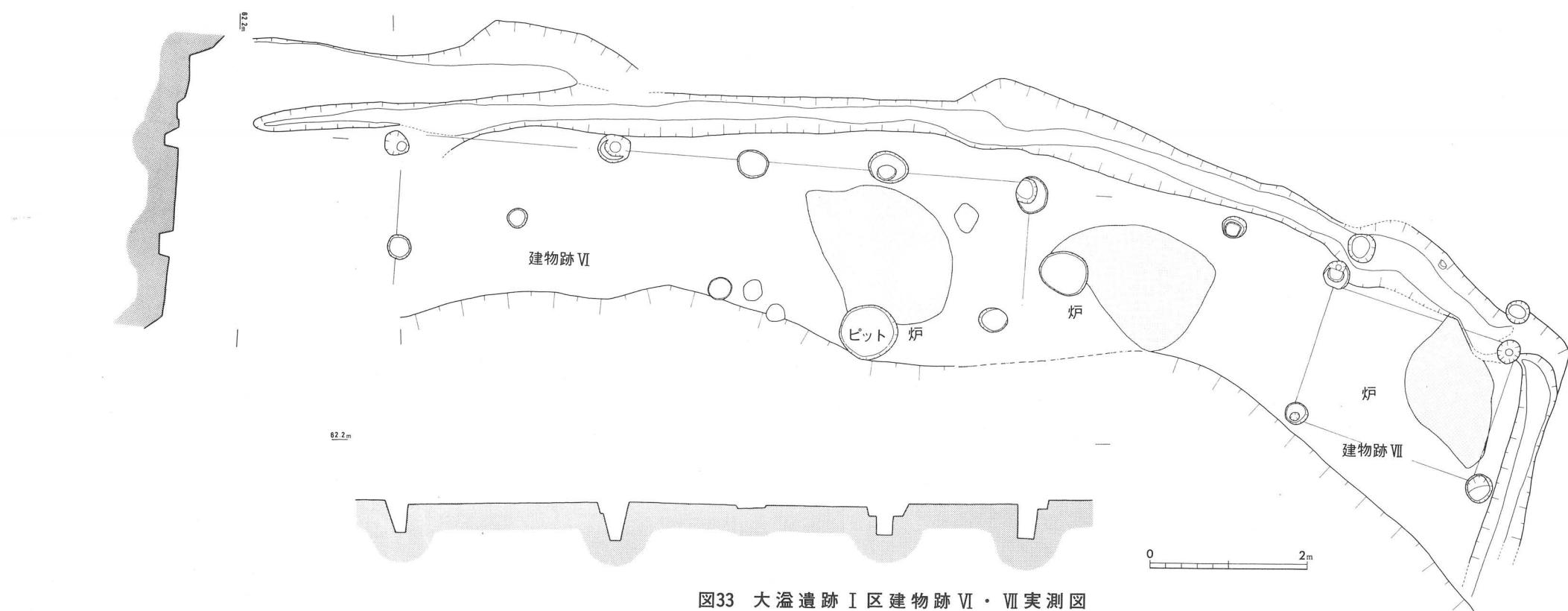


図33 大溢遺跡Ⅰ区建物跡VI・VII実測図

るが、規模は大きく、桁行四間の6.3mで、柱間は1.8mと2.9mを測る。梁間は南側の床面が崩れしており、不明である。現存する柱間は1.8m。柱穴は11個が残り、桁側の4個は重なって掘られており、建て替えられたことが窺える。柱穴の大きさは22~35cm、深さは11~35cmと深いものが多い。床面には径20~30cmで、深さは20cm前後と浅いピットが4個発見された。その性格は不明。なお、北西隅にある穴には須恵器壺の完形品が置かれていた。

また、建物跡の南側は地山が深い所では50cm以上も抉られ、その内部には焼土や土器片を含む褐色土層が堆積していた。特に、西側は径2.5m、深さ20cmの土坑があり、内部には多くの須恵器や土師器の破片が、焼土や炭化物および人頭大の石に混じり出土している。建て替えの原因も考慮すれば、この土器溜は火事場整理時にできたものであろう。

建物跡Ⅶは加工段Vの南側、加工段IVの2m下方に位置する。柱穴は溝に接して、桁側の5穴が検出されている。規模は大きく、桁行四間（3間の可能性もある）の8.0mを測るが、床の西側は崩壊しているため、梁間の1.3mと1.8mを知るのみである。柱穴の大きさは径30~50cm、深さは桁側が30~50cm、梁側は20cm弱で浅い。中には2段に掘られているものもある。また、床面には径70cm、深さ30cmの大形ピット1個と径25cmの浅いピット2個がある。加工段Vにある溝はこの建物跡にかかわるもので、幅およそ50cm、深さは10cm程である。

建物跡Ⅷは加工段Vの南端に位置し、建物跡IV・VIに挟まれている。一間四方か、または一間×二間の小型の建物と推定される。柱穴は6個あり、東側のものは二重に掘られて、多くは溝に接して存在する。よって、この建物は溝が埋められた後に建てられたものと思われる。なお、この建物跡付近には長径2m、短径1mの楕円形の焼土面が3個ある。地山は高温のため赤褐色に変色し、周囲には炭化物や焼けた石が認められる（第8章 理化学的分析参照）。

#### 谷部の遺物出土状況

前述したように各段の谷側にあたる床部分の多くは崩壊し、西側の谷合へ流出している。谷合はV字状となっており、深い所で土砂が2.5mあまり二次堆積している。層序的には上から表土20cm、茶褐色土層60cm、暗褐色土層70cm、黄褐色土層100cm、地山となる。遺物包含層は最下層の黄褐色土層であり、焼土、焼けた石、炭化物および土器等の遺物を多く含み、出土量の大部分はこの谷および加工段下方の斜面から発見されている。

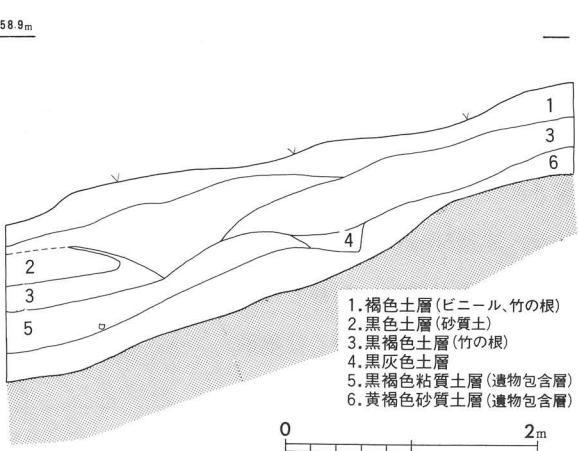


図34 大溢遺跡谷部土層堆積図

## 2. III 区

I区の裏側にあたり、標高70mの尾根を挟んで、東斜面に立地する。この斜面は後世に何らかの手も加えられていない。現在は山林となっている。しかし、谷底は江戸時代末から近代にかけて畠地として使用されており、地形もかなり変化している。

調査は山頂の3m下の斜面から谷部にかけて、25×30mの調査区を設定して、発掘を進めた。その結果、斜面中腹において住居跡と推定される上下2段（比高差は2m）のL字状にカットされた平坦面を検出した。時期的には同時に存在することは不可能で、両者には新旧が認められ、建て替えられた可能性が強い。規模はI区と比べると極めて小さく、存続期間も短い。

### 加工段Iと建物跡I

標高63mで、東向きの斜面中腹に位置する。

加工段Iは小規模で、長さ12m、最大幅2.5mを測る。その中央には建物跡Iと素掘りで、幅40cm、深さ10cmを測る弧状の溝がある。溝は山際に設けられているが、巡らなく、その間には幅の狭い段が存在するのみである。建物跡の両脇には、溝を挟んで、僅かな空間がある。南側のものは幅2mで、やや緩やかな面である。一方、北側のは幅3mで、その面には径40cmのピット2個と幅30cmの溝および土師器の甕がまとまって出土した窪地がある。また、その東側には径1.1m、深さ10cmを測る円形の土坑があり、内部から完形に近い須恵器壊が発見されている。

建物跡Iの柱穴は溝に沿って3個検出されている。柱間は2.0mと2.3mで、柱の大きさは径30cm、深さ30~34cmを測る。南側に長径90cm、短径50cmの楕円形をなす桃色の焼土面が残り、炉跡と推定される。なお、床面の多くは崩壊している。

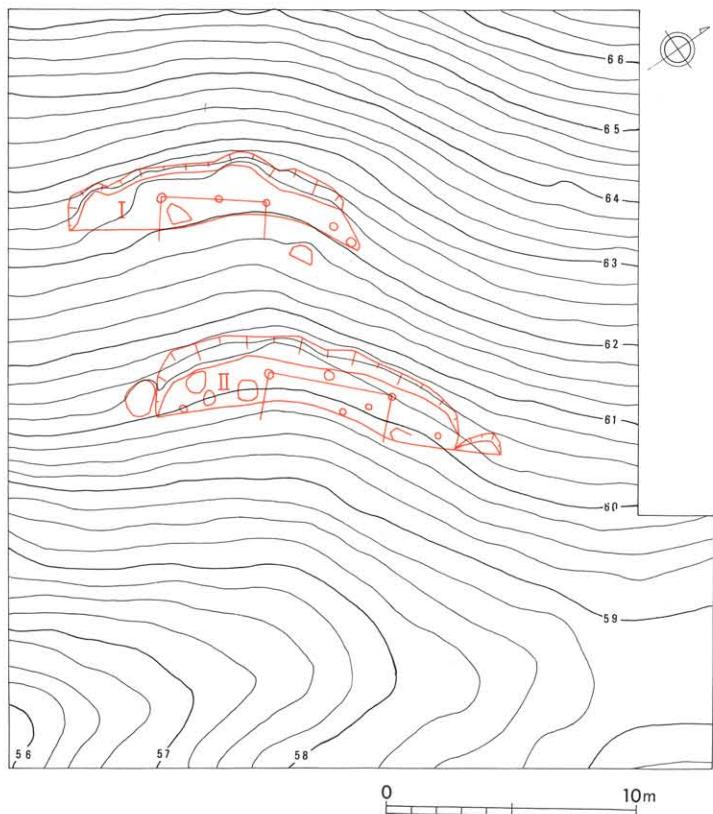


図35 大溢遺跡III区遺構測量図

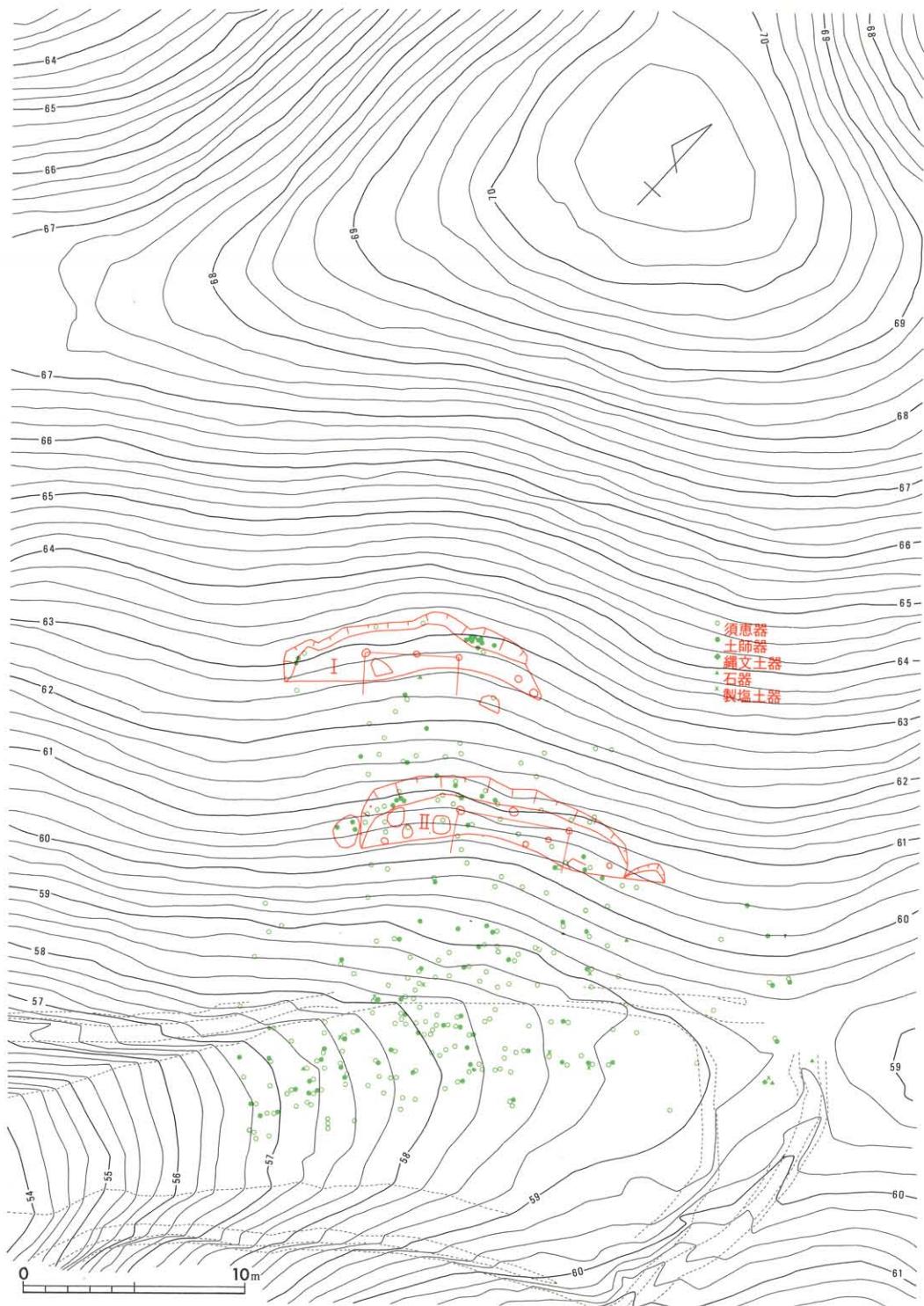


図36 大溢遺跡Ⅲ区地形測量図(調査前)

## 加工段Ⅱと建物跡Ⅱ

加工段Ⅰの下方2mに位置する。長さは15m、最大幅2mを測り、前述の段より大型である。構造は加工段Ⅰと同様で、幅1mの弧状の溝が巡り、その内部に建物が設けられている。この段にも溝を挟んで、両脇に窪地がある。さらに、長径1.3m、短径60cm、深さ25cmを測る楕円形の土坑もある。しかし、上にある段と違うのは南側に径1~1.5mの円形をなす焼土面があることである。高温のため赤褐色に変色している（第8章 理化学的分析参照）。

建物跡Ⅱも溝に沿って3個の柱穴が検出され、その大きさは径30~40cm、深さは40cmを測る。柱間は2.5mと3.0mである。また、大きさがほぼ同じで、深さの浅いピットが4個認められる。なお、この建物跡も床面の大部分を失い、規模、構造は不明である。

## 谷部の遺物出土状況

Ⅲ区の東側には、U字状となる谷合があり、斜面中程の遺構面は壁付近を残して、その他は幅10mばかりの谷底へ流出している。遺物の大部分は谷の西側に集中しており、斜面から落ちたことを物語る。また、土器は畑地耕作時に総て小さな碎片になっている。

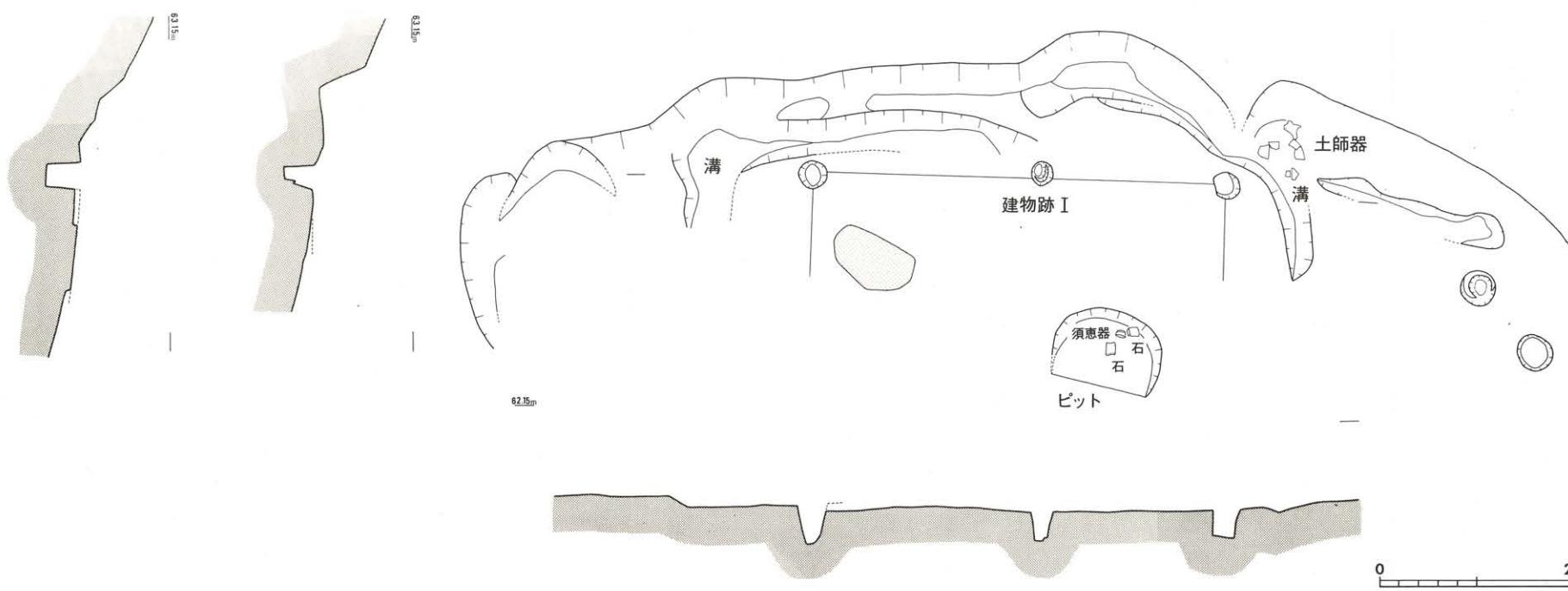


図37 大溢遺跡Ⅲ区加工段Ⅰ・建物跡Ⅰ実測図

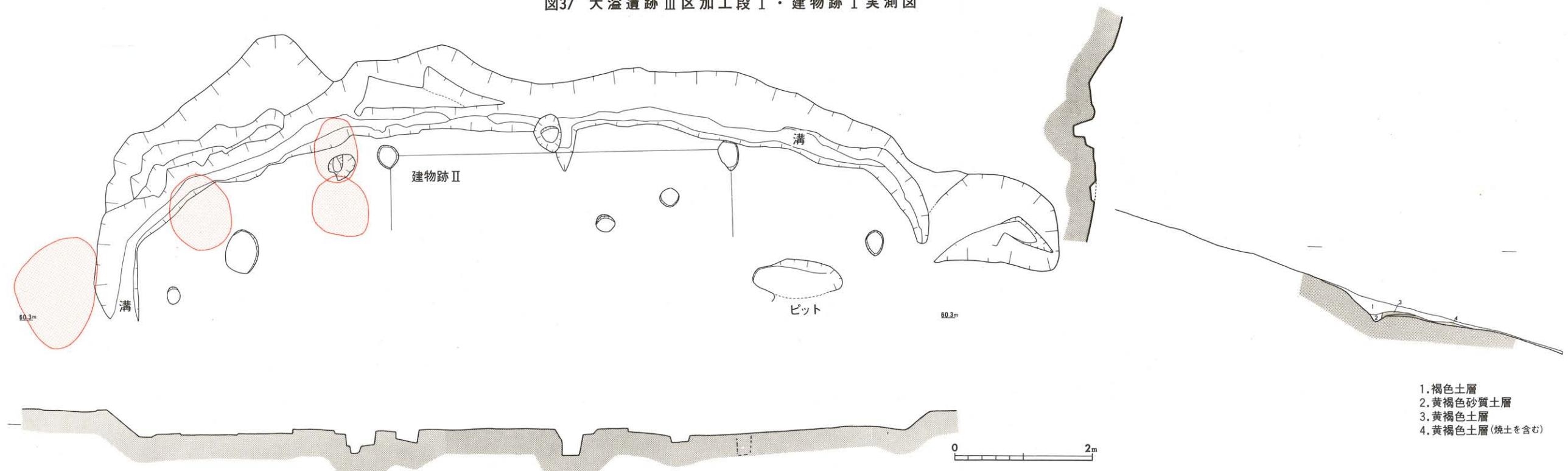


図38 大溢遺跡Ⅲ区加工段Ⅱ・建物跡Ⅱ実測図

## 第3節 遺 物

### 1. 大溢遺跡I区出土遺物

大溢遺跡からは須恵器、土師器を中心に、鉄器や石器および鉄滓が出土している。

須恵器と土師器はコンテナ4箱、石器、鉄器は少量ある。以下、土器は各遺構別に、他の遺物は一括して記述する。

#### 建物跡V（土器溜）

建物跡Vの内部にある土坑より13個体以上の土器が出土している。その多くは須恵器で、蓋、坏、壺、高坏、壺、甕の器種が知られている。蓋（1～3）輪状のつまみをもつ。肩部は張り、口唇部はやや内傾して丸くおさまる。坏（4～8）やや外開きになる体部をもつ。高台は低く、底部の端部近くにつく。坏（4）は小形品、坏（5～7）は中形品、坏（8）は大形品で、全て同じタイプに属する。壺（9）小形品。球形の体部に、短い頸と低い高台がつく。頸部の外面には2条の沈線が施されている。高坏（11）大形品。浅く、大きな坏に、高い脚がつく。脚の外面の中程に2条の沈線がある。壺（12）頸部を欠く。体部は丸い肩部より平底にかけてすぼまる。甕（13）体部は肩部から胴部にかけて丸くなり、平底に至る。大きく外反する口縁をもち、口縁部外面には2条の沈線が3段に施され、その間に、1条の波状文が2段に描かれている。

土師器には甕（10）がある。小形品で、外反する口縁をもつ。

#### 加工段III（溝）

須恵器、土師器が14個体以上出土している。須恵器が多く、器種と数量は坏6、蓋2、コップ状土器1、壺1である。

蓋（14）大形品。輪状のつまみをもち、肩部は張る。蓋（15）小形品で、端部は屈曲する。坏（16、17）体部はやや外開きになり、高台はない。前者の底部には静止糸切り痕が残る。坏（18）体部は斜めに伸び、底部端に低い高台がつく。坏（19～21）やや外開きの体部に、低い高台が底部の端近くにつく。コップ状土器（22）器は深く、体部は直線的に伸びる。壺（23）短く、かつ少し外反する頸部に球形の体部をもつ。蓋（24）壺の蓋である。宝珠状のつまみをもつ。

土師器には、少量の甕がある。

甕（26）小形品。口縁部は外反する。甕（27）大形品。口縁部は大きく外反し、体部は直線的になる。

#### 建物跡III（土坑）

須恵器の蓋3と坏2および土師器甕2が出土している。

蓋（28、29）輪状のつまみをもち、笠形となる。蓋（30）輪状のつまみをもち、口唇部は大きく

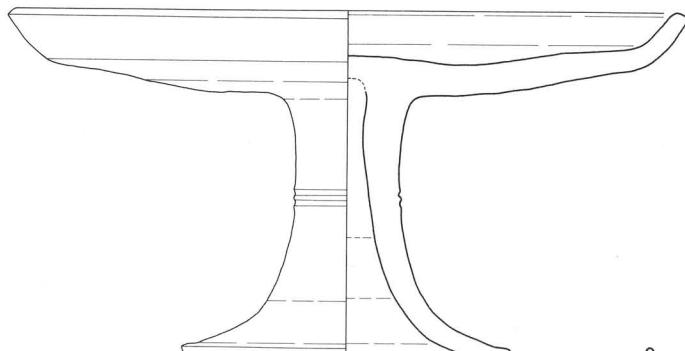
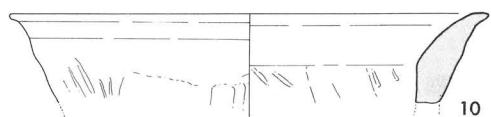
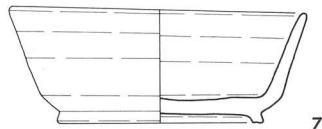
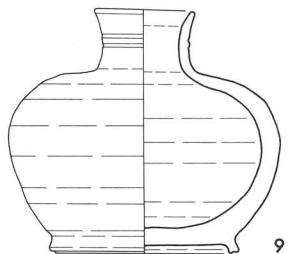
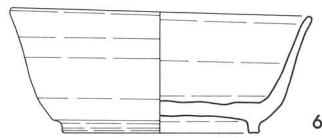
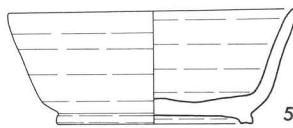
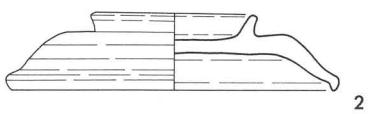
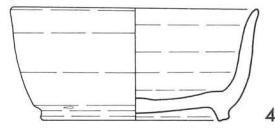
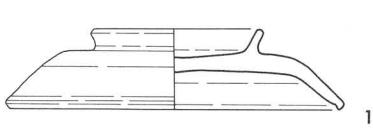


図39 大溢遺跡 I 区建物跡 V(土器溜)出土土器実測図(1)

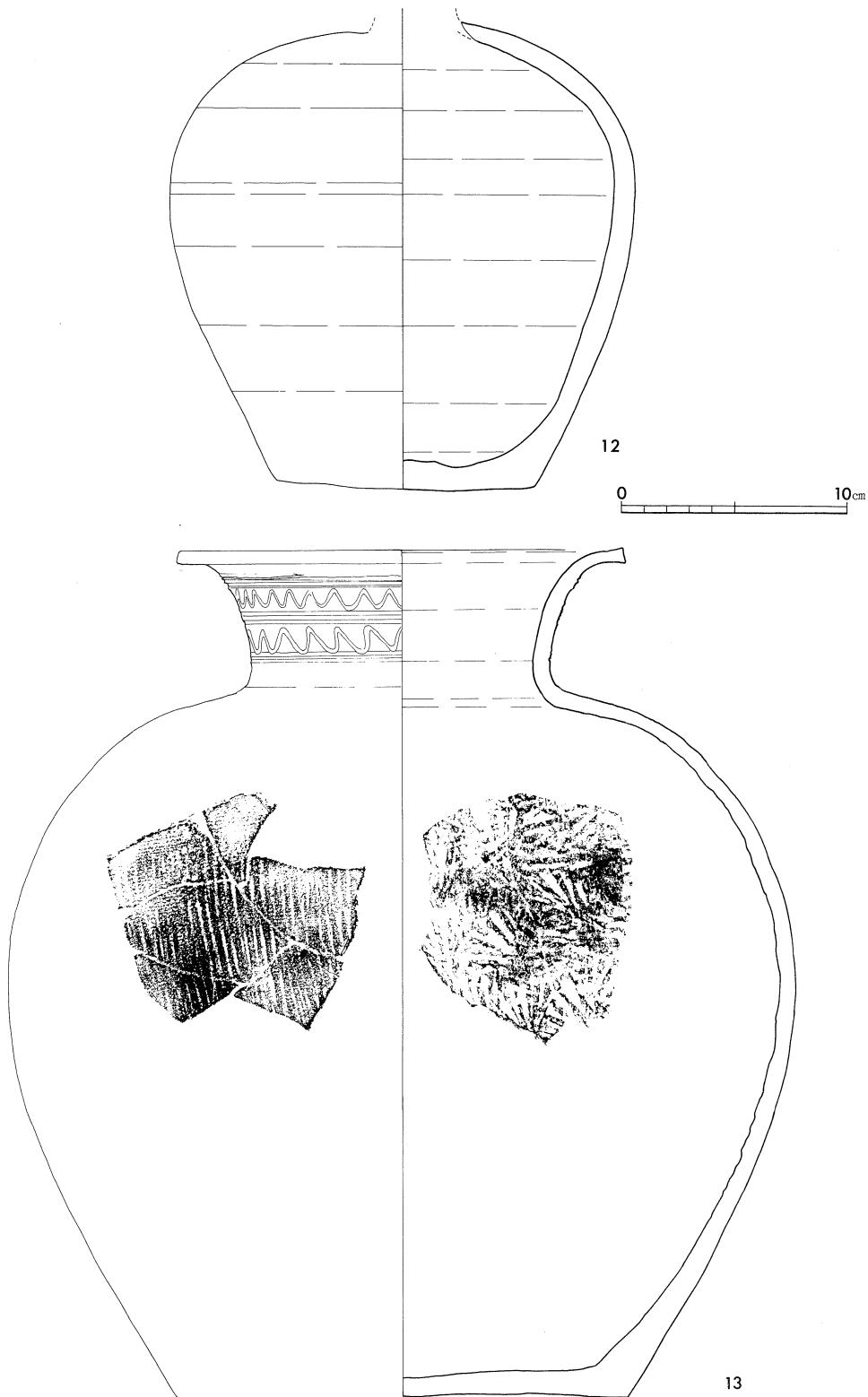


図40 大溢遺跡 I 区建物跡 V(土器溜)出土土器実測図(2)

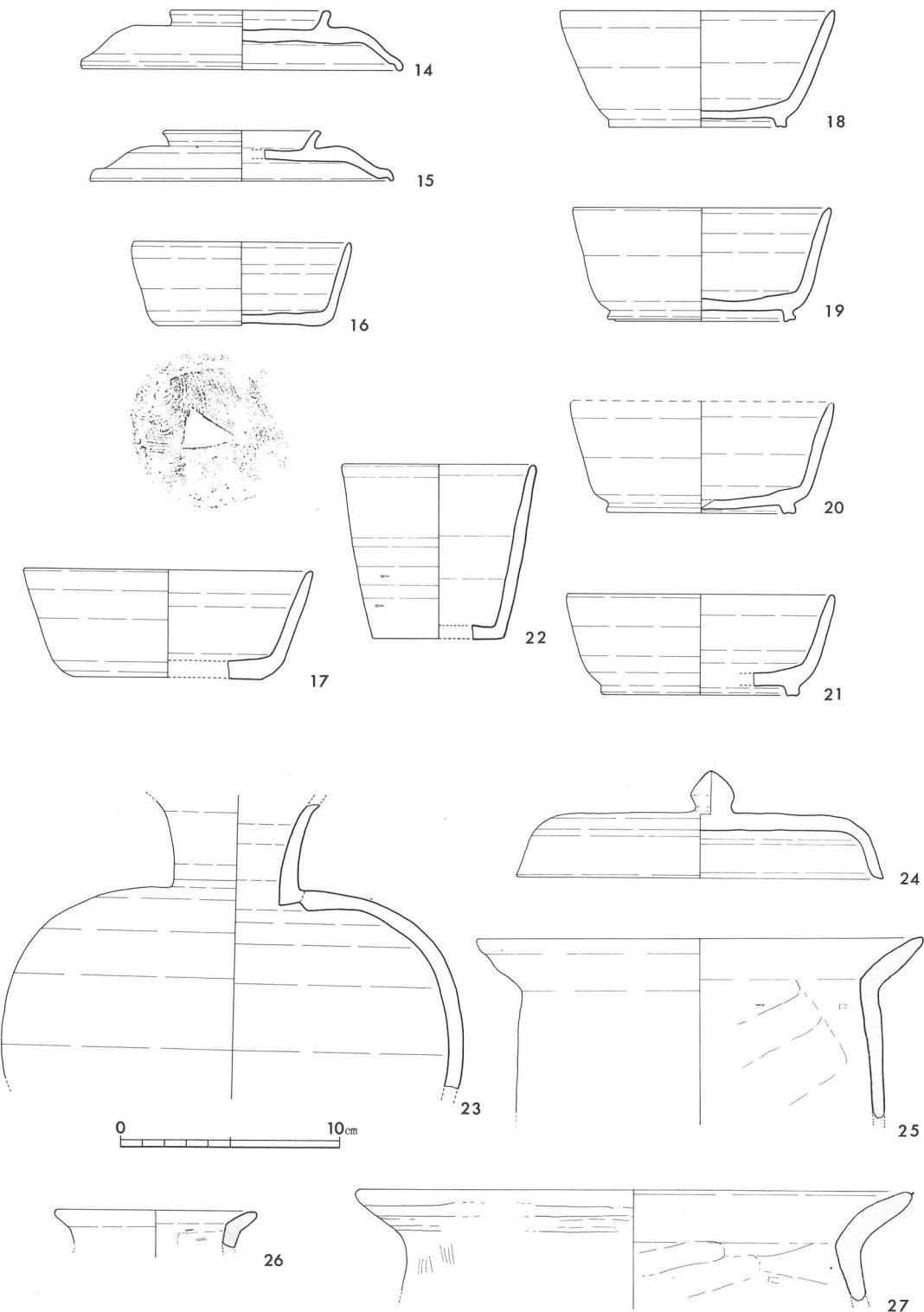


図41 大溢遺跡Ⅰ区加工段Ⅲ溝出土土器実測図

屈曲する。坏（31）小形品で、低い高台がつく。坏（32）体部はやや外反し、高台はやや内側につく。

土師器甕（33, 34）大、小2個あり、口縁部は大きく外反し、体部は下膨れ状になる。

### 加工段I・II

須恵器の蓋、坏、鉄鉢形土器と土師器の甕が少量出土している。坏（36）、鉄鉢形土器（38）、土師器甕（40）は建物跡Iから、土師器甕（35）は建物跡IIから出土している。

蓋（35）輪状のつまみをもち、肩が張る。坏（36, 37）体部はやや外開きになり、低い高台がつく。鉄鉢形土器（38）大形品で、口縁部は内傾する。底部は丸く、深い。

土師器甕（39, 40）口縁部は大きく外反し、体部は直線的になる。

### 建物跡V

土師器は僅かで、須恵器が多い。

須恵器では蓋、坏、高坏等の器種が知られる。蓋（41, 43）肩が張り、口唇部は前者は丸くおさまり、後者は屈曲する。蓋（42）笠状を呈す。蓋（45）大型品であるが、器高は低い。坏はすべて

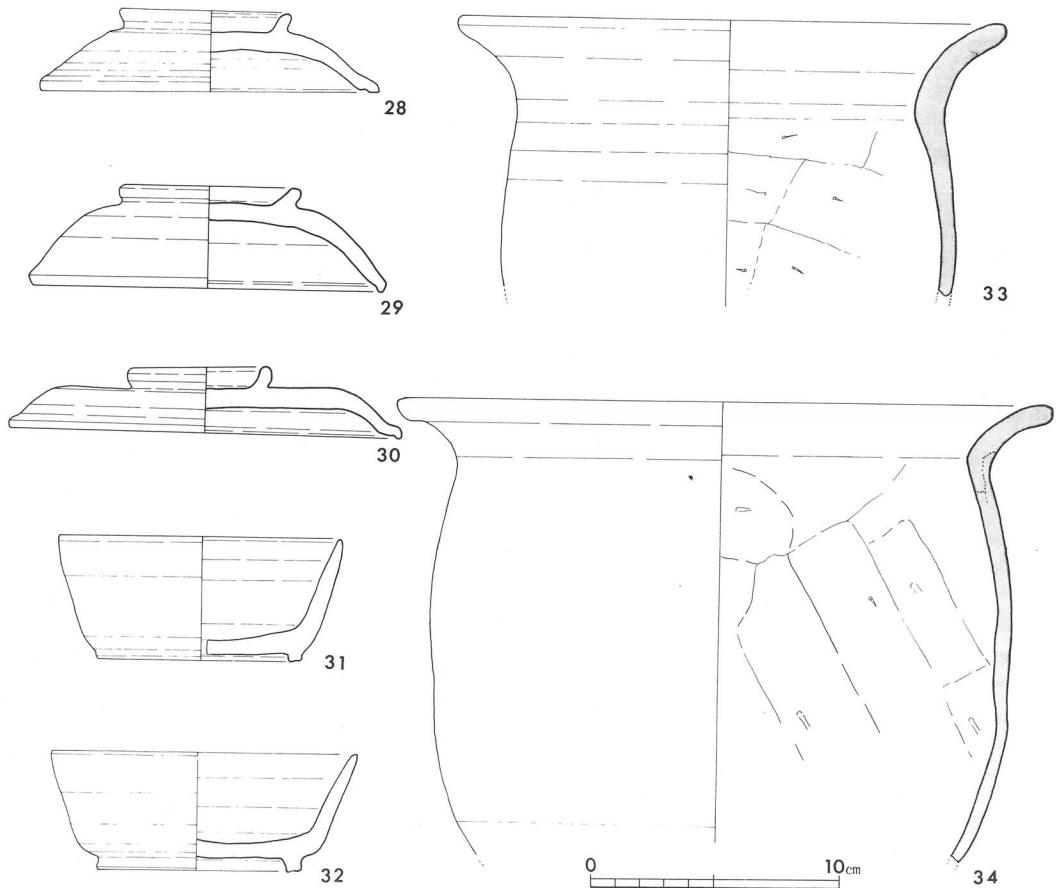


図42 大溢遺跡I区建物跡III(土坑)出土土器実測図

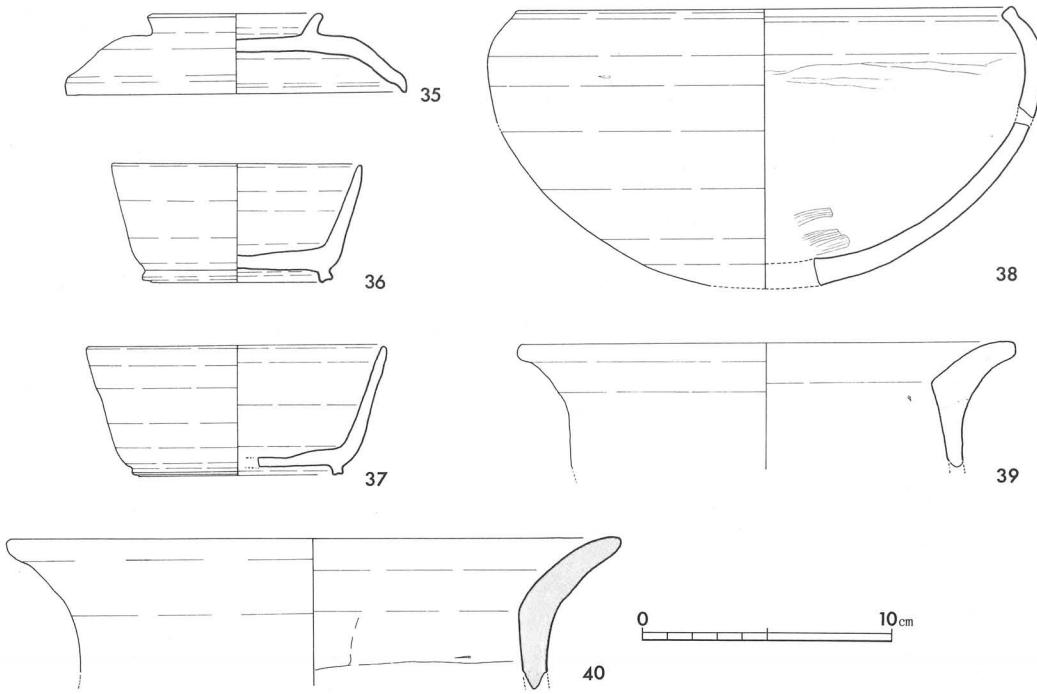


図43 大溢遺跡Ⅰ区加工段Ⅰ・Ⅱ出土土器実測図

低い高台をもつが、体部の開きにより、三形態となる。坏（44）金属写しで、腰が張り、口縁部は外反する。坏（46）体部はやや外反する。坏（47, 48）は底径が小さく、体部は緩やか弯曲し、椀形を呈する。高坏（49）大形品。浅く大きな坏に、高い脚がつく。（11）と同タイプ。

土師器甕（50）大きく「く」の字に外反する。外面はハケ目、内面ヘラ削り。

#### I区西側谷部

西側の谷底には、斜面の加工段から落ちた炭化物や石および遺物が多く堆積していた。遺物の大部分は須恵器や土師器であるが、鉄器や石器も僅かに混じる。

須恵器の器種には蓋、坏、壺、甕がある。蓋（51～65）はすべて輪状のつまみをもつが、形態や調整で3タイプに分けられる。蓋（51～60）大きさはまちまちである。肩が張り、口縁の端部は下垂する。蓋（58, 59）前述と同じ形態であるが、天井部に回転糸切り痕が残る。蓋（61～63）肩が張り、口縁端部は屈曲する。蓋（64, 65）は笠状を呈す。前者の口縁端部は下垂するが、後者は直線状に終わる。坏（66～100）は大きく高台の有無で2タイプに分かれ、さらに高台をもつもので、幾つかに区別できる。坏（66）低い高台をもち、やや外反する体部に、2個の取っ手が対で付く。坏（67～69）体部の傾きはまちまちであるが、3個とも高台をもたない。坏（70～79, 83～88, 99, 100）やや外開きの体部に低い高台がつく。大きさはまちまちである。坏（85～88）糸切

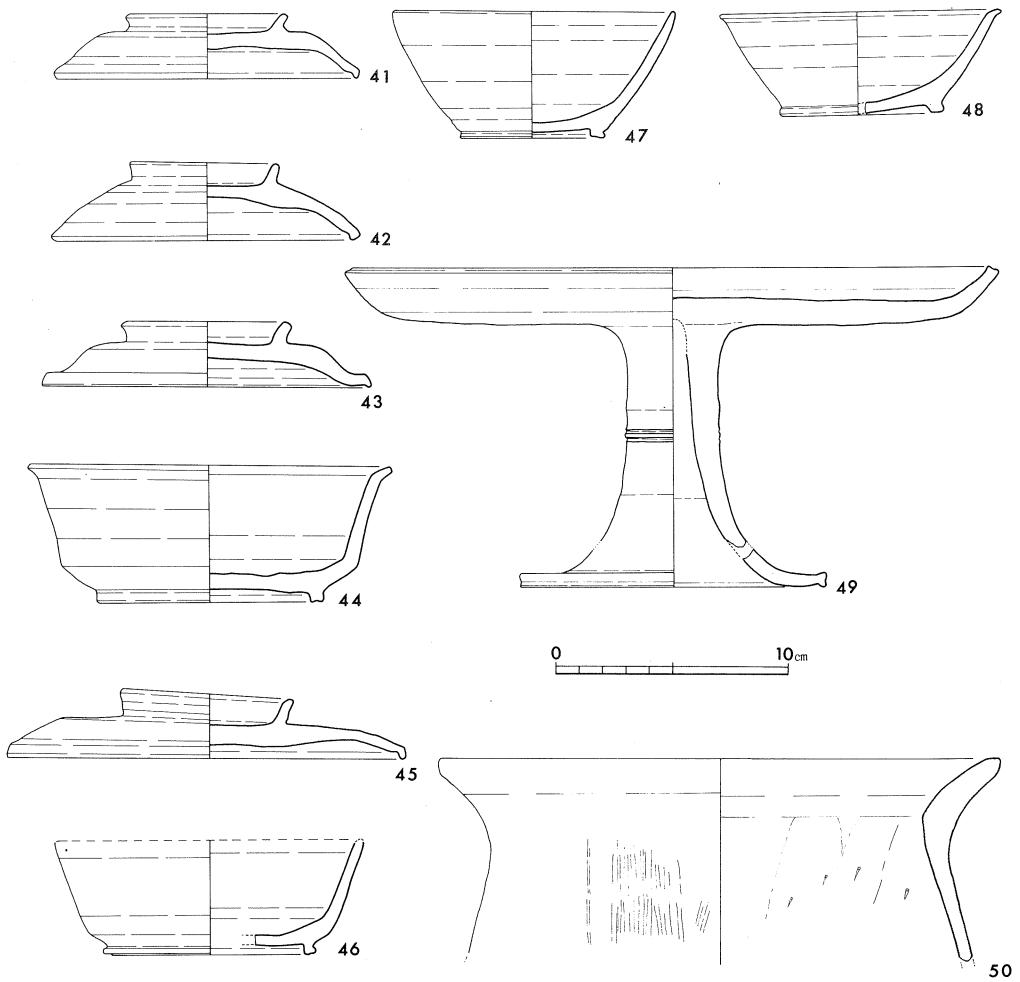


図44 大溢遺跡I区建物跡IV出土土器実測図

り痕が残る。壺(80~82, 89, 97, 98)金属写しで、腰が張る。大形品が多い。壺(97)糸切り痕が残る。壺(90~93)体部がやや内湾し、椀状となる。大きさはまちまちである。壺(94~96)前述のものに比べ高台の場所が外側か内側かで分けている。前の2個は高台が端につく。壺(95)には糸切り痕が残る。壺(96)の高台は内側につく。体部は短い。これらは時期の違いによるものかどうかは分からぬ。壺(101~105)大小に分けられる。蓋を有すものもある。壺(101)は球形の肩部に直立する極めて短い口縁部がつく。胴以下は欠く。壺(102)は小形品で、やや外反する短い頸部をもつ。胴部外面の下方には荒いヘラ削りが認められる。壺(103)は頸部を欠く。肩部は丸く、胴部は直線的になる。底部には低い高台がつく。壺(104, 105)は宝珠状のつまみがつく蓋をもつ。口縁部は欠くが、球形に近い体部に低い高台がある。甕(106)球形の肩部に外反する口

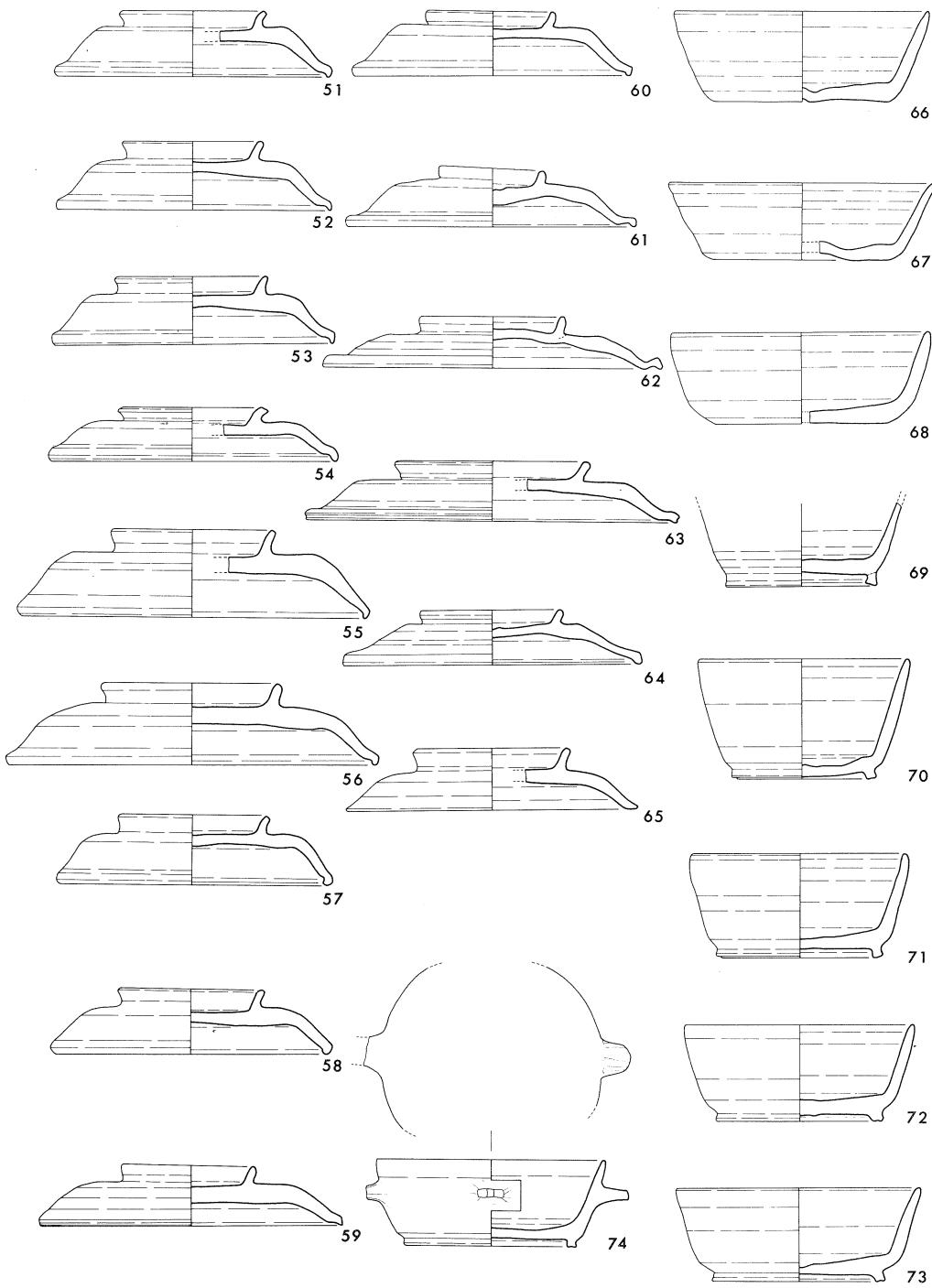


図45 大溢遺跡Ⅰ区谷部出土土器実測図(1)

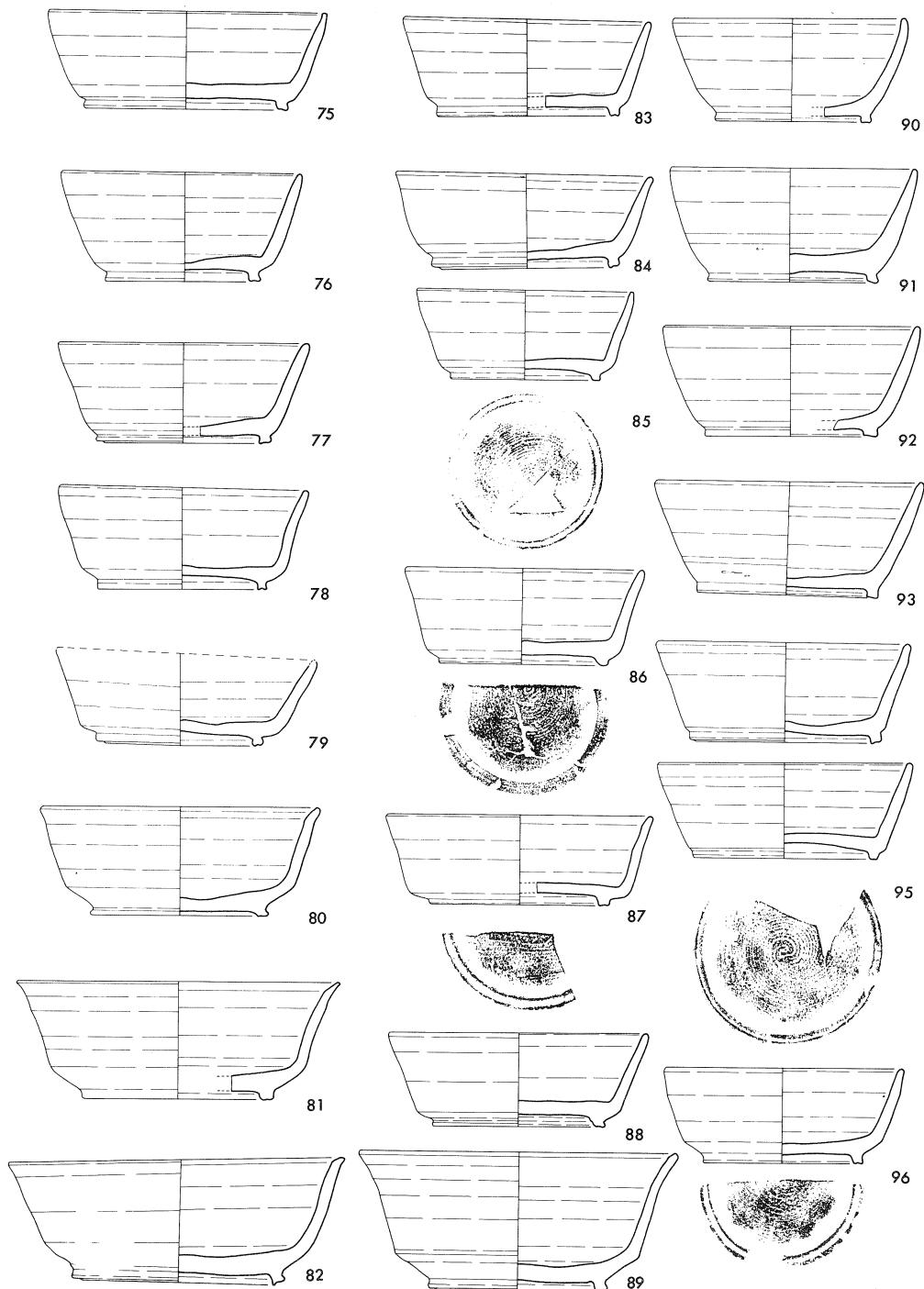


図46 大溢遺跡Ⅰ区谷部出土土器実測図(2)

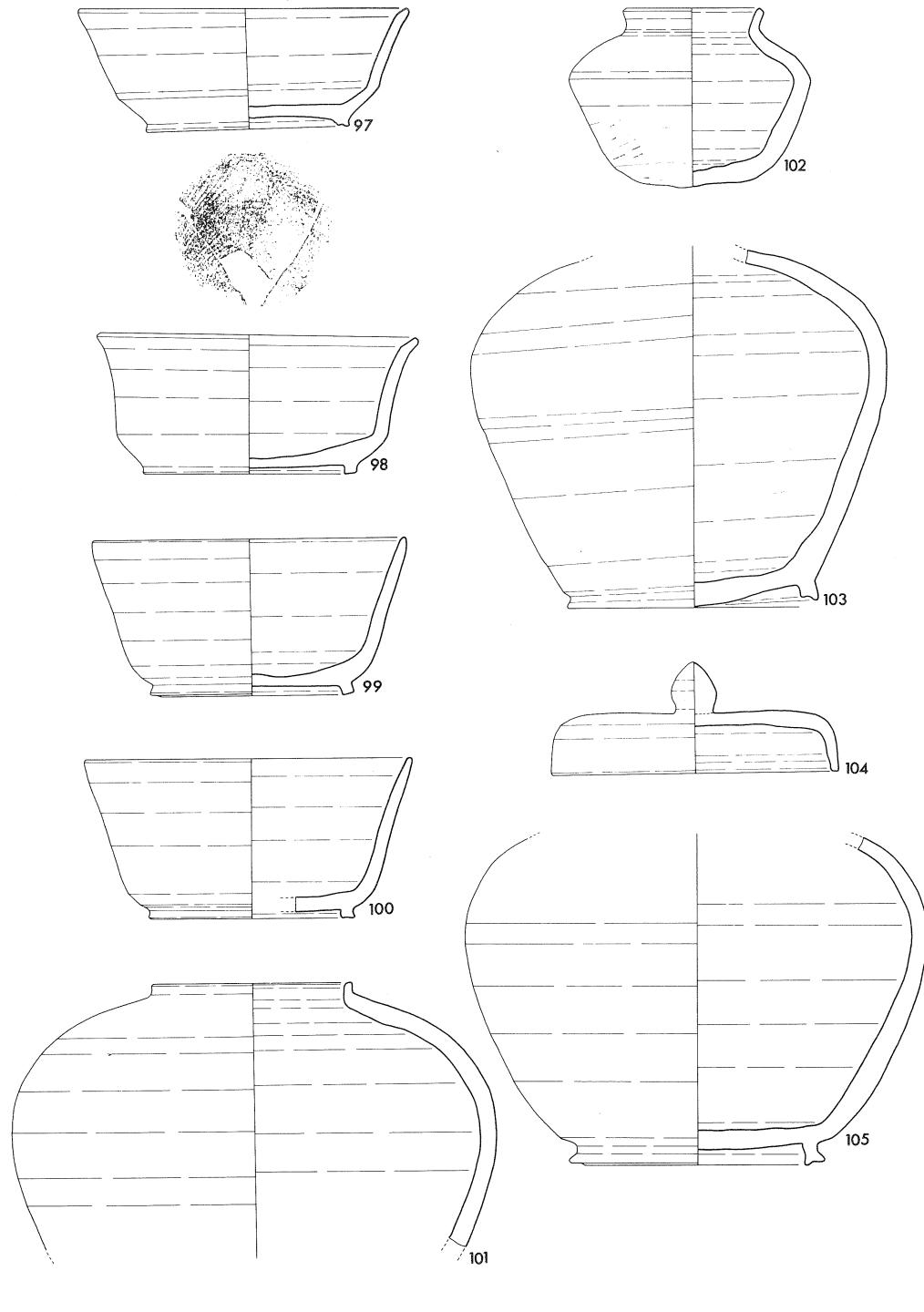
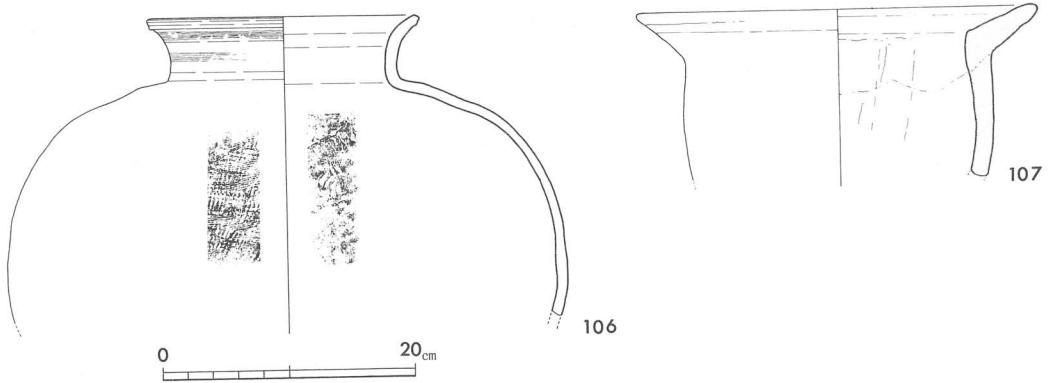
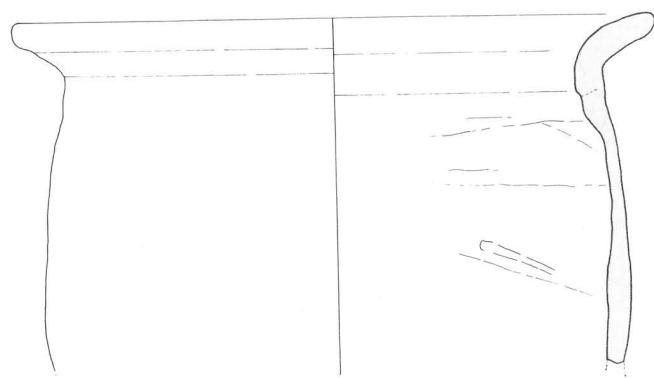


図47 大溢遺跡Ⅰ区谷部出土土器実測図(3)

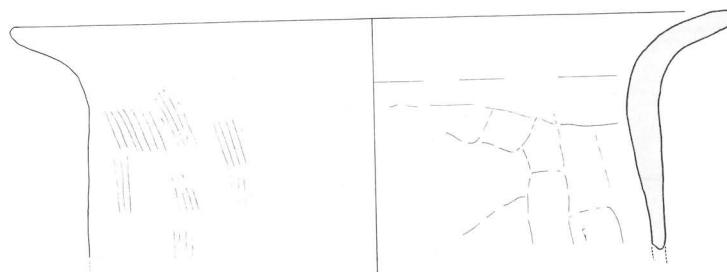


106

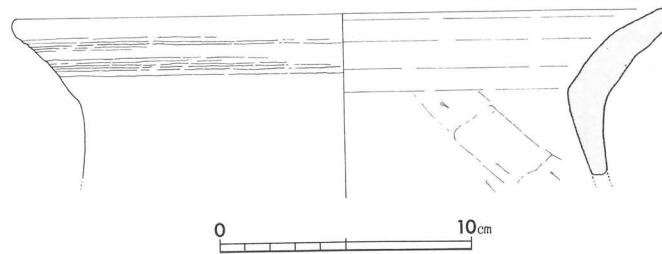
107



108



109



110

図48 大溢遺跡Ⅰ区谷部出土土器実測図(4)

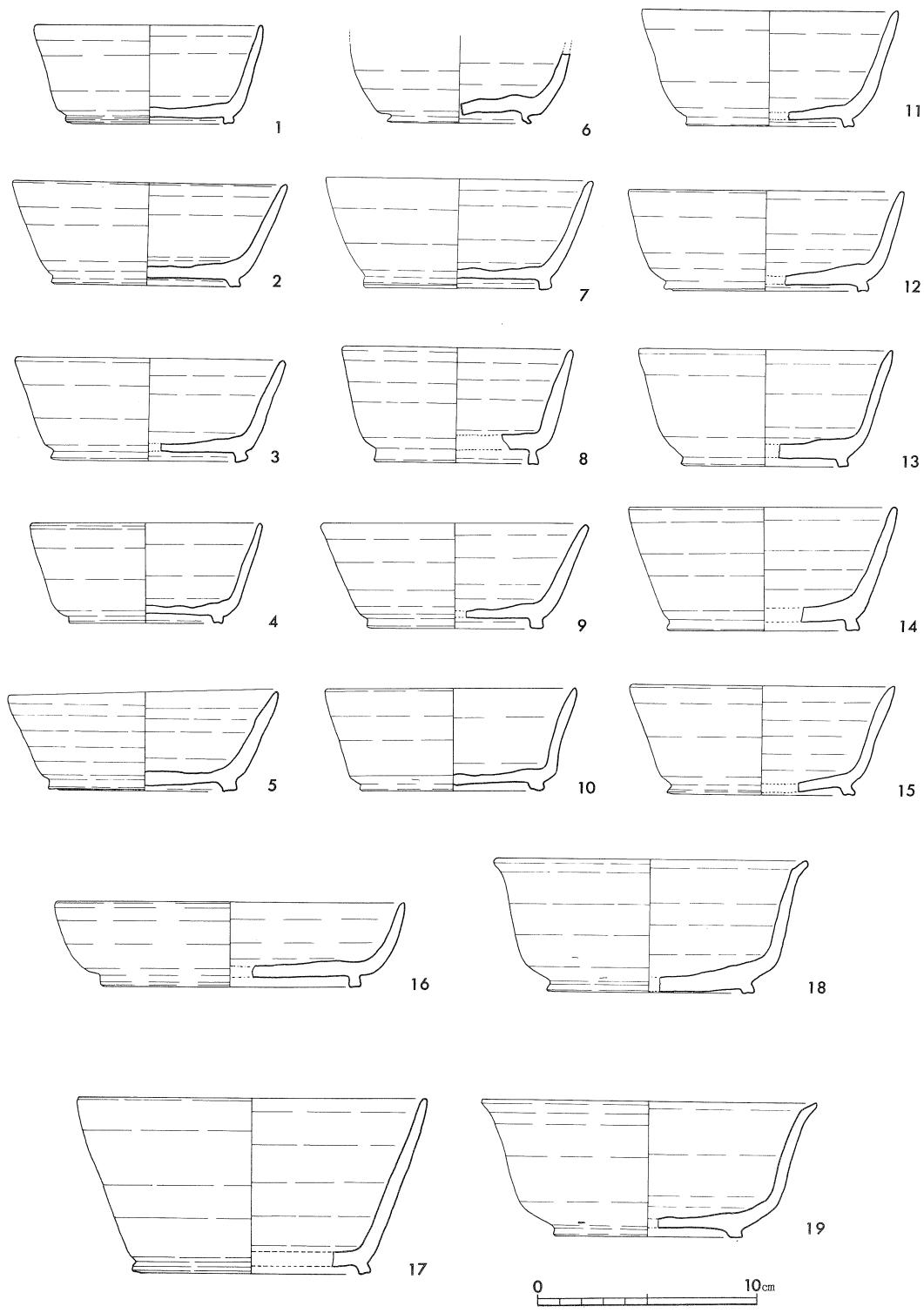


図49 大溢遺跡Ⅲ区出土土器実測図(1)

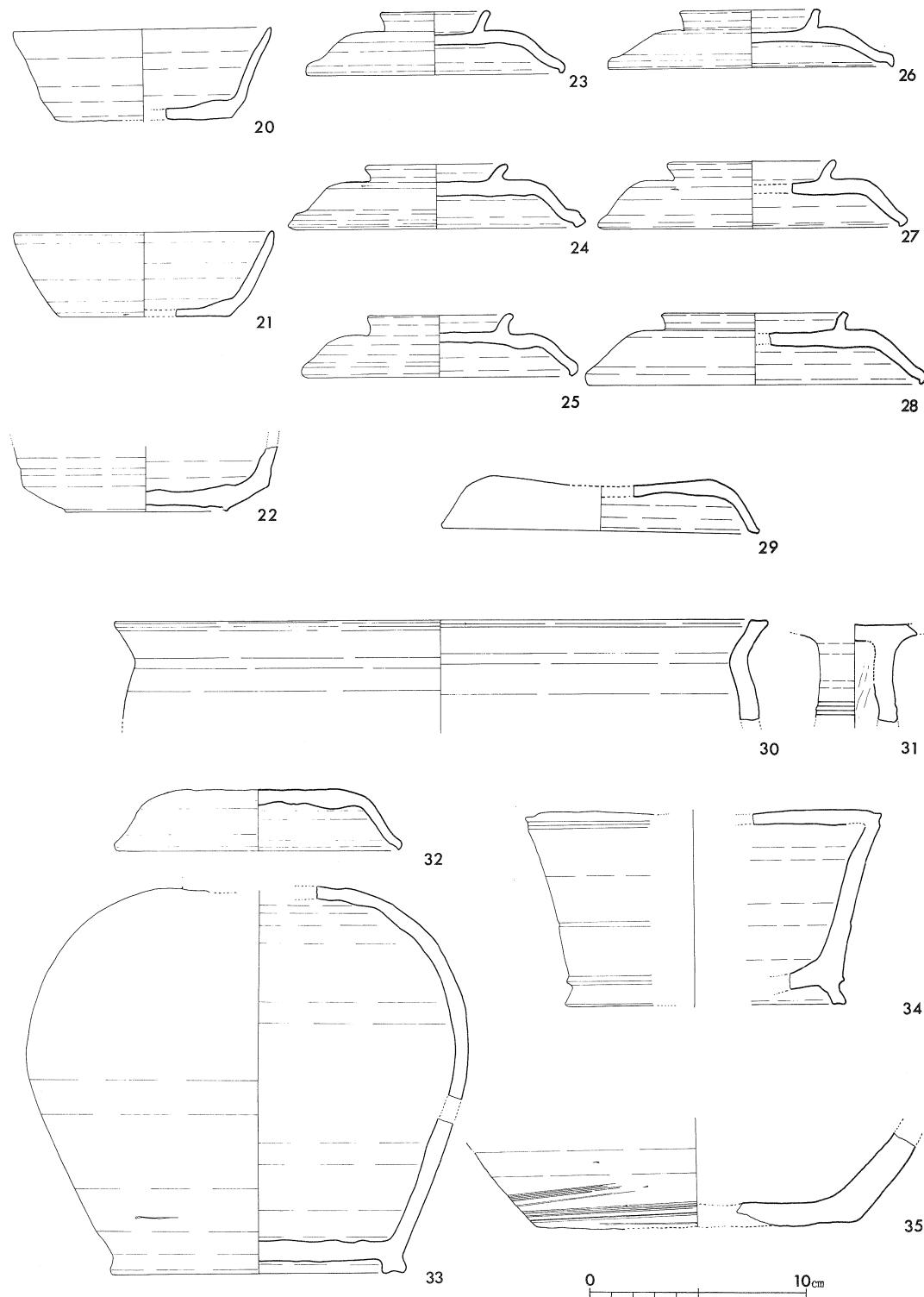


図50 大溢遺跡Ⅲ区出土土器実測図(2)

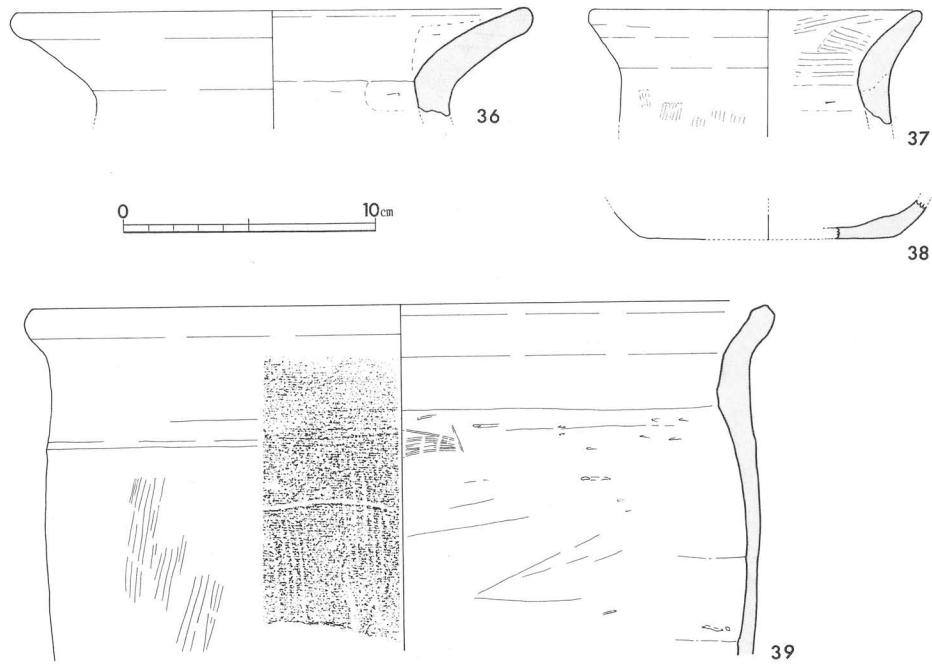


図51 大溢遺跡Ⅲ区出土土器実測図(3)

縁部がつく。大形品。胴部以下は欠く。

土師器には、大小の甕（107～110）がある。甕（107）小形品。口縁部は外反する。甕（108～110）大形品。口縁部は大きく外反し、体部は直線的になる。

#### 製塩にかかわる土器

谷部を中心に20個出土している。すべて内面には布目が残り、いわゆる六連式の焼塩壺（注1）である。いずれも破片で、全体の形を知ることはできないが、大形のもの（8）は胴の径16cmを測る。型作りのため、外面には指押さえの凹凸が認められ、器肉も一様ではない。布目は粗いものと、細かいものの二種類がある。胎土は密で、焼成はよく、色調は黄褐色か赤桃色を呈す。また、（13）は土師器甕の破片である。この甕の外部には平行叩きが、内面には同心円叩き（後ナデ）が施されている。僅かに1片のみであり、明確にしえないが、煎熬（せんごう）土器の可能性もある。なお、各加工段では高温で赤く焼けた面が多く検出され、さらに谷部でも焼けた石や焼土および炭化物が多く発見されており、この集落で製塩の最終段階の焼塩を作ったとも推定される。

第3表 大溢遺跡I区出土土器観察表

器種	図版番号	法量 (cm)	調整	焼成・胎土・色調	備考
須恵器 坏蓋	図39-1	口径 13.3 つまみ径 6.8 高さ 3.2	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密、小砂粒を少し含む 色調：外面内面とも淡青灰色	建物跡V土器溜
	-2	口径 12.8 つまみ径 6.6 高さ 3.0	外面：口縁部回転ナデ、肩部ヘラナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密、小砂粒を少し含む 色調：外面内面とも淡灰色	
	-3	口径 13.7 つまみ径 7.1 高さ 2.9	外面：口縁部回転ナデ、肩部ヘラナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密、砂粒はあまり含まない、 色調：外面淡青灰色、口縁部のみ黒色の 自然釉(重ね燒の跡)かかる。内面 淡青灰色、外面淡灰色	
坏身	-4	口径 9.8 底径 4.4 高さ 4.5	外面：体部回転ナデ、底部ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密、2 mm大の砂粒を少し含む、 色調：外面灰色、底部自然釉がはげ、黄灰 色を呈する。内面灰色	
	-5	口径 11.4 底径 7.7 高さ 4.5	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良 胎土：密、砂粒はあまり含まない 色調：外面内面とも淡青灰色	
	-6	口径 11.9 底径 7.8 高さ 4.6~5.0	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密、1 mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも灰色	
	-7	口径 11.8 底径 8.1 高さ 4.3~4.6	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密、黒色の粒子を含む 色調：外面青灰色、体部一部に黄褐色の 自然釉かかる。内面青灰色	
	-8	口径 15.0 底径 9.6 高さ 6.6~6.8	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良 胎土：密、1 mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも淡青灰色	
壺	図39-9	口径 4.0 底径 7.5 高さ 9.5~9.7 胴部最大径 10.7	外面：頸部に2条の沈線を施す。胴部下方ヘラケズリ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密、1 mm大の砂粒を少し含む 色調：暗青色、肩部に緑褐色の自然釉か かる	
土師器 甕	-10	口径 18.8	外面：口縁部ヨコナデ、体部タテハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密、1 mm大の砂粒を含む 色調：外面赤褐色、一部スス付着。内面赤 褐色	
高坏	-11	口径 26.7 脚端部径 12.4 高さ 13.9	外面：脚部に2条の沈線を施す。坏部の 底部分にヘラケズリあり。 内面：坏部は口縁部回転ナデ、底部ナデ、 脚部は回転ナデ、絞りめあり	焼成：良 胎土：密、4 mm大の砂粒を少し含む 色調：外面内面とも淡青灰色	
須恵器 壺	図40-12	底径 11.4 胴部最大径 20.6	外面：胴部下方ヘラケズリ 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密、4 mm大の砂粒、黒色粒子を含む 色調：外面暗灰色、上半部黄灰色の自然 釉かかる。内面灰色	
甕	-13	口径 19.7 底径 20.0 高さ 37.6	頸部：2条の凹線を3段、波状文を2条 施す、回転ナデ 外面：平行タタキ 内面：放射状タタキ	焼成：良 胎土：密、2 mm大の砂粒を少し含む 色調：外面内面とも青灰色	
須恵器 坏蓋	図41-14	口径 14.6 つまみ径 7.2 高さ 2.7	外面：体部回転ナデ、天井部ナデ 内面：回転ナデ	焼成：不良 胎土：密、外面、黄白色。内面黄白色	加工段Ⅲ溝 一部墨付着
	-15	口径 13.8 つまみ径 7.1 高さ 2.3	外面：口縁部回転ナデ、肩部ヘラナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密、小砂粒を少し含む 色調：外面青灰色、口縁部一部に自然釉 かかり光沢がある。内面青灰色	一部墨付着
坏身	-16	口径 9.9 底径 7.5 高さ 3.9	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面内面とも青灰色	
	-17	口径 13.2 底径 8.6 高さ 4.9	外面：体部回転ナデ、底部ヘラケズリ 内面：回転ナデ	焼成：不良 胎土：密、砂粒はあまり含まない 色調：外面内面とも黄白色	
	-18	口径 12.5 底径 8.1 高さ 5.3	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密、小砂粒を少し含む 色調：外面黒色の自然釉かかる。はげた 部分は灰色。内面暗青灰色	
	-19	口径 11.9 底径 8.6 高さ 5.2	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密、1 mm大の砂粒を含む 色調：外面青灰色、体部黄褐色の自然釉 かかる。内面青灰色	
	-20	口径 12.0 底径 8.6 高さ 5.1	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：緻密、2 mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも灰色	

器種	図版番号	法量 (cm)	調整	焼成・胎土・色調	備考
	図41-21	口径 12.0 底径 9.0 高さ 4.6	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良 胎土：密，2mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも淡青灰色	
环 (コップ状)	-22	口径 8.9 底径 6.1 高さ 8.0	外面：体部下方ヘラケズリ 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密，小砂粒を含む 色調：外面淡茶色，自然釉かかり光沢がある。内面淡灰色	加工段Ⅲ溝
壺	-23	残存高 12.9 最大径 21.0	外面：頸部回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：2mm大の砂粒を多く含む 色調：外面黒褐色の自然釉がかかる。はげた部分は淡黄色。内面暗灰色	"
短頸壺蓋 (宝珠状) (つまみ)	-24	口径 16.8 つまみ最大径 2.0 高さ 4.9	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラケズリ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密，1mm大の砂粒を少し含む 色調：外面黄褐色の自然釉がかかる。はげた部分は漆灰色。内面体部と黒褐色の自然釉がかかる。ほか暗灰色	"
土師器 甕	-25	口径 20.4	口縁部：外面内面ともヨコナデ 体部：外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密，3mm大の砂粒を少し含む 色調：外面内面とも黄褐色	"
	-26	口径 9.2	口縁部：外面内面ともヨコナデ 体部：外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密，1mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも赤褐色	"
	-27	口径 25.4	口縁部：外面強いヨコナデで沈線状になる。内面ヨコナデ 体部：外面タテハケ後ヨコナデか 内面ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密，1mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも黄褐色	"
須恵器 坏蓋	図42-28	口径 13.7 つまみ径 6.9 高さ 3.2	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良 胎土：密，2mm大の砂粒を少し含む 色調：外面内面とも淡褐灰色，重ね焼の跡あり	建物跡Ⅲ土坑
	-29	口径 14.0 つまみ径 6.8~7.3 高さ 4.1	外面：体部回転ナデ，爪形状圧痕をもつ 内面：体部回転ナデ	焼成：不良 胎土：密 色調：外面内面とも黄白色	
	-30	口径 16.0 つまみ径 5.8 高さ 2.5~2.7	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密，1mm大の砂粒を含む 色調：外面黄灰色，口縁一部褐色の自然釉かかる。重ね焼の触着痕もある。内面暗褐灰色，焼け歪はげしい	
坏身	-31	口径 11.4 底径 8.3 高さ 4.9	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：不良 胎土：密，砂粒はあまり含まない 色調：外面内面とも淡黄灰色	
	-32	口径 12.3 底径 8.3~8.5 高さ 4.7	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ，爪形状圧痕をもつ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密，砂粒はあまり含まない、 色調：外面暗青灰色の自然釉かかる。底部には火だすき。内面淡青灰色，底部のみ自然釉かかり光沢がある	
土師器 甕	-33	口径 22.0	外面：口縁部ヨコナデ，体部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密，6mm大の砂粒を少し含む 色調：外面黄褐色，体部と口縁部の一部にスス付着	
	-34	口径 26.2	外面：口縁部ヨコナデ，体部ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密，5mm大の砂粒を少し含む 色調：外面淡茶褐色。内面黄褐色	
須恵器 坏蓋	図43-35	口径 13.6 つまみ径 7.1 高さ 3.2	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：回転ナデ，天井部ナデ	焼成：不良 胎土：密，砂粒はあまり含まない 色調：外面内面とも淡黄灰色	加工段Ⅰ・Ⅱ
坏身	-36	口径 10.0 底径 7.6 高さ 4.7	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密，砂粒はあまり含まない、 色調：外面青灰色，体部一部に黒灰色の自然釉かかる。内面青灰色	"
	-37	口径 12.0 底径 8.4 高さ 5.2	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密，1mm大の砂粒を含む 色調：外面黄灰色の自然釉かかる。内面灰色	"
鉄鉢形土器	-38	口径 19.7 最大径 22.0 高さ 11.1	外面：体部ヘラケズリ後回転ナデ，口縁部回転ナデ 内面：口縁部回転ナデ以下手持ちケズリ	焼成：良 胎土：密，砂粒はあまり含まない。黒色粒子を含む 色調：外面淡黄灰色，口縁部淡褐色の自然釉かかる。内面淡黄灰色	
土師器 甕	-39	口径 19.8	外面：全てヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密，1mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも黄褐色	"
	-40	口径 24.4	外面：ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ，体部ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密，2mm大の砂粒を含む 色調：外面茶褐色。内面赤褐色	"
須恵器 坏蓋	図44-41	口径 12.9 つまみ径 6.9 高さ 2.8	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密，4mm大の砂粒を少し含む 色調：外面灰色，体部のみ黄灰色の自然釉かかる。内面灰色	建物跡Ⅳ

器種	図版番号	法量 (cm)	調整	焼成・胎土・色調	備考
	図44-42	口径 13.2 つまみ径 6.4 高さ 3.4	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良 胎土：密、5 mm大の砂粒を少し含む 色調：外面内面とも淡赤褐色	
	-43	口径 14.1 つまみ径 7.4 高さ 2.8	外面：体部回転ナデ、天井部ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密、黑色粒子(最大3 mm)を少し含む 色調：外面灰色、口縁部暗灰色の自然釉かかる。内面灰色、外面口縁部に重ね焼の触着痕がある	
环身 (金属穿し)	-44	口径 15.6 底径 9.7 高さ 5.7~6.0	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面体部に黒灰色の自然釉かかる。はか灰色。内面灰色	
	-46	口径 13.2 底径 9.1 高さ 4.8	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密、砂粒を少量含む 色調：外面体部暗赤褐色の自然釉かかる。はか褐色。内面褐色	
	-47	口径 12.2 底径 6.2 高さ 5.2~5.5	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面体部自然釉がはげ黒灰色、はか灰色。内面灰色	
	-48	口径 12.2 底径 7.1 高さ 5.4~5.5	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密、砂粒を少し含む 色調：外面淡赤褐色、体部一部自然釉かかり光沢がある。内面淡赤褐色	
高坏	-49	口径 28.2 底径 13.2 高さ 13.7 脚胴部径 4.0	外面：脚部に2条の沈線施す。坏部下方にヘラケズリあり 内面：坏部は口縁部回転ナデ、底部ナデ、脚部回転ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面内面とも淡青灰色	建物跡IV
土師器 甕	-50	口径 24.2	外面：口縁部ヨコナデ、体部タテハケ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密、6 mm大の砂粒を少し含む 色調：外面黄褐色、一部スス付着。内面黄褐色	
須恵器 坏蓋	図45-51	口径 12.7 つまみ径 6.9 高さ 3.1	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面淡青灰色、口縁のみ黄灰色、重ね焼跡あり。内面淡青灰色	谷部
	-52	口径 12.8 つまみ径 6.6 高さ 3.2	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ、肩部ヘラナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面内面とも青灰色、口縁部外面に触着痕がある	
	-53	口径 13.1 つまみ径 7.2 高さ 3.2	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ、肩部ヘラナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面淡灰色、口縁部淡黄灰色。内面淡灰色、重ね焼跡あり	
	-54	口径 13.5 つまみ径 7.1 高さ 2.5	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密、2 mm大の砂粒を含む 色調：外面灰色、口縁部赤褐色の自然釉かかる。内面白口縁部自然釉かかり光沢がある、重ね焼跡あり	
	-55	口径 16.3 つまみ径 7.7 高さ 4.1	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ、肩部ヘラナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：外面内面とも淡青灰色	
	-56	口径 17.3 つまみ径 8.5 高さ 3.8	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ、肩部ヘラナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：外面内面とも淡黄灰色	
	-57	口径 12.5 つまみ径 7.0 高さ 3.3	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密、3 mm大の砂粒を少し含む 色調：外面淡灰色、口縁部のみ淡黄灰色の自然釉かかる。内面青灰色、焼け歪著しい、重ね焼跡あり	
	-58	口径 12.8 つまみ径 6.9 高さ 3.0	外面：体部回転ナデ、天井部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：不良 胎土：密、2 mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも淡黄灰色、重ね焼跡あり	
坏蓋	-59	口径 14.2 つまみ径 6.3 高さ 2.8	外面：体部回転ナデ、天井部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密、4 mm大の砂粒を少し含む 色調：外面内面とも灰色	谷部
	-60	口径 13.0 つまみ径 6.1 高さ 3.6	外面：体部回転ナデ、天井部回転糸切り後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密、2 mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも暗灰色	
	-61	口径 13.5 つまみ径 5.0 高さ 2.6~2.9	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：不良 胎土：密 色調：外面内面とも黃白色	
	-62	口径 16.0 つまみ径 6.9 高さ 2.4	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：外面内面とも淡灰色	
	-63	口径 17.5 つまみ径 8.7~9.2 高さ 2.8	外面：体部回転ナデ、天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、天井部ナデ	焼成：良 胎土：密、2 mm大の砂粒を含む 色調：外面淡青灰色。内面青灰色	

器種	図版番号	法量 (cm)	調整	焼成・胎土・色調	備考
	図45-64	口径 つまみ径 高さ 14.1 6.8 2.5	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密，最大1mmの黒色の粒子含む 色調：外面内面とも灰色	
	-65	口径 つまみ径 高さ 13.7 7.4 2.9	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面内面とも灰色	
环身	図46-66	口径 底径 高さ 12.0 8.0 4.2	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：不良 胎土：密 色調：外面淡黄灰色，体部淡褐灰色。内面淡黄灰色，口縁部淡黄灰色	谷部
	-67	口径 底径 高さ 13.2 8.3 3.6	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：やや不良 胎土：1mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも淡灰色	
	-68	口径 底径 高さ 12.1 8.0 4.3	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：不良 胎土：密 色調：外面淡灰色。内面淡黄灰色	
	-69	口径 底径 高さ 9.4以上 7.0 3.5以上	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：やや粗 色調：外面内面とも青灰色	
	-70	口径 底径 高さ 9.8 6.8 5.6	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面淡黄灰色，底部と体部の一部黄褐色の自然釉かかる。内面淡灰色	
	-71	口径 底径 高さ 10.1 7.7 4.9	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面灰色，体部一部暗青色の自然釉かかる。内面黄灰色，底部一面に赤色顔料付着	
	-72	口径 底径 高さ 10.7 7.8 4.5	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面淡灰色，体部一部緑褐色の自然釉かかる。内面淡灰色	
	-73	口径 底径 高さ 11.5 8.1 4.4	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面内面とも淡灰色	
(双耳椀)	-74	口径 底径 高さ 10.7 6.2 4.1	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面紫灰色，底部に火だすきがある。内面淡黄灰色	
	-75	口径 底径 高さ 13.1 9.6 4.6	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面黄褐色の自然釉かかる。内面灰色	谷部
	-76	口径 底径 高さ 11.3 7.3 5.2	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面灰色，体部一部緑褐色の自然釉かかる。内面灰色	
	-77	口径 底径 高さ 11.6 8.2 4.8	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面灰褐色。内面灰褐色	
	-78	口径 底径 高さ 11.8 8.0 4.6~4.9	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面暗青灰色，体部一部黄褐色の自然釉かかる。底部灰色。内面淡青灰色	
	-79	口径 底径 高さ 12.3 7.9 4.0~4.2	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面暗青灰色，一部自然釉のため光沢がある。内面青灰色，焼け歪あり	
(金属写し)	-80	口径 底径 高さ 13.3 8.4 5.1	外面：自然釉のため不明 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面緑褐色の自然釉かかる。内面淡灰色	
(金属写し)	-81	口径 底径 高さ 15.2 9.0 5.5	外面：体部回転ナデ，底部ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面体部緑褐色の自然釉かかる。底部灰色。内面灰色	
(金属写し)	-82	口径 底径 高さ 15.1 10.0 6.2	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面体部淡灰色の自然釉かかる，底部淡灰色。内面淡灰色，底部に黄白色の自然釉が少量かかる。口縁端部重ね焼のため一部欠損	谷部
	-83	口径 底径 高さ 11.7 8.6 4.4~4.7	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密，2mm大の砂粒含む 色調：外面体部黄灰色の自然釉かかる。底部灰色。内面灰色	
	-84	口径 底径 高さ 12.1 8.8 4.2~4.6	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：不良 胎土：密 色調：外面内面とも黄灰色	

器種	図版番号	法量 (cm)	調整	焼成・胎土・色調	備考
	図46-85	口径 底径 高さ	10.2 7.1 4.2	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面淡灰色、一部黄褐色の自然釉かかる。内面淡灰色
	-86	口径 底径 高さ	11.2 8.0 4.5	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：不良 胎土：密、2mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも淡灰色
	-87	口径 底径 高さ	12.5 8.4 4.2	外面：体部回転ナデ、底部静止糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密、4mm大の砂粒を少し含む 色調：外面淡青灰色。内面淡灰色
	-88	口径 底径 高さ	11.6~12.2 8.1 4.4	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：不良 胎土：密 色調：外面内面とも淡黄灰色
(金属写し)	-89	口径 底径 高さ	15.0 8.4 6.5	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面灰色の自然釉かかる。内面灰色
	-90	口径 底径 高さ	10.7 7.2 4.9	外面：回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面淡黄灰色、体部一部に青灰色の自然釉かかる。内面淡黄灰色
	-91	口径 底径 高さ	11.6 8.0 5.4	外面：回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面内面とも淡黄灰色
	-92	口径 底径 高さ	12.0 8.0 5.2	外面：回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密、2mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも淡灰色
	-93	口径 底径 高さ	12.6 8.4 5.2~5.5	外面：回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：外面淡灰色、体部一部緑褐色の自然釉かかる。内面淡灰色
	-94	口径 底径 高さ	11.9 9.0 4.7	外面：回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面淡青灰色、一部黒色の自然釉かかる。内面淡青灰色
	-95	口径 底径 高さ	11.9 8.6 4.5	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面黒灰色の自然釉かかる。内面灰色
	-96	口径 底径 高さ	11.1 7.4 4.5	外面：回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ、底部ナデ	焼成：不良 胎土：密 色調：外面内面とも淡灰色
(金属写し)	図47-97	口径 底径 高さ	15.6 9.6 5.5~6.0	外面：回転ナデ、底部静止糸切り後回転ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	焼成：良 胎土：密、1mm大の砂粒を含む 色調：外面内面とも青灰色、焼き歪がある
	-98	口径 底径 高さ	14.6 10.1 6.5	外面：回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面体部黒灰色の自然釉かかる。底部青灰色。内面青灰色、体部一部淡灰色
	-99	口径 底径 高さ	14.8 9.7 7.4	外面：回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	焼成：やや不良 胎土：密 色調：外面内面とも淡灰色
	-100	口径 底径 高さ	15.5 9.8 7.5	外面：回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：回転ナデ、底部ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：外面内面とも淡青灰色
(壺 (有蓋))	-101	口径 最大径 残存高	9.5 22.9 12.4	外面：肩部回転ナデ、体部下方ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面一部自然釉残り緑灰色。内面口縁部底部のみ自然釉かかり黒褐色、ほか灰色
	-102	口径 底径4.0~6.0 高さ	6.6 8.0 8.3	外面：底部ヘラキリ未調整、体部下方ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面体部、口縁各一部黒灰色ほか淡灰色。内面白口縁付近黒灰色、ほか淡黃灰色
(壺 (有蓋))	-103	底径 残存高	12.1 16.9	外面：底部ヘラキリ後ケズリ、体部下方上半部ケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ、底部未調整	焼成：良好 胎土：密 色調：外面体半分自然釉により緑褐色ほか、青灰色。内面淡灰色
壺の蓋	-104	口径 つまみ最大径 高さ	13.6 2.2 5.2	外面：回転ナデか 内面：体部回転ナデ、天井部静止ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面自然釉かかり暗緑色。内面灰色
(壺 (有蓋))	-105	底径 残存高	12.0 15.4	外面：底部ヘラキリ後ナデ、爪形状圧痕残る。体部中部までケズリ後ヘラナデ 内面：体部回転ナデ、底部静止ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面暗灰色、一部自然釉。内面底のみ自然釉、淡黄色ほか灰色

器種	図版番号	法量 (cm)	調整	焼成・胎土・色調	備考
甕	図48-106	口径 21.7 最大径 44.6	外面：口縁～頸部回転ナデ後頸部カキメ。 体部格子タタキ後カキメ 内面：口～頸部回転ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面釉かかり口縁部と体部下半灰色の光沢、体部下半黃灰色。内面灰色	谷部
土師器甕	-107	口径 16.0	外面：ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密 色調：外面内面とも黄褐色、外面スス付着	
	-108	口径 25.6	外面：横ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密 色調：外面内面とも黄褐色	
	-109	口径 28.8	外面：口縁部横ナデ、体部ハケ 内面：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密 色調：外面内面とも赤褐色	
	-110	口径 26.4	外面：横ナデ、口縁部7条の沈線 内面：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	焼成：良 胎土：密 色調：外面内面とも黄褐色、外面スス付着	

第4表 大溢遺跡Ⅲ区出土土器観察表

器種	図版番号	法量 (cm)	調整	焼成・胎土・色調	備考
須恵器 环身	図49-1	口径 10.4 底径 7.7 高さ 4.5	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ、底部に爪形状圧痕残る 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面黒灰色、内面灰色	
	-2	口径 12.4 底径 8.6 高さ 4.7	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：淡灰色	
	-3	口径 12.3 底径 8.9 高さ 4.7	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：灰色	
	-4	口径 10.6 底径 7.0 高さ 4.5	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：灰色	
	-5	口径 12.3 底径 8.6 高さ 4.3	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ、底部に爪形状圧痕残る 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：淡灰色、外側に自然釉が残る	
	-6	口径 10.8 底径 6.6 高さ 3.0	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：灰色	
	-7	口径 12.1 底径 8.5 高さ 5.05	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：灰色、外面底部黄灰色	
	-8	口径 10.5 底径 7.5 高さ 5.3	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：やや不良 胎土：密 色調：淡灰色	
环身	-9	口径 12.2 底径 8.0 高さ 4.8	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面灰色、光沢あり。内面淡灰色	
	-10	口径 11.4 底径 8.5 高さ 4.7	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ、底部に爪形状圧痕残る 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面青灰色、自然釉が残っている。内面灰色	
	-11	口径 11.7 底径 7.7 高さ 5.3	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面淡黄灰色、内面淡灰色	
	-12	口径 12.5 底径 9.3 高さ 4.6	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面淡黄灰色、自然釉あり。内面灰色	
	-13	口径 11.5 底径 7.6 高さ 5.3	外面：体部回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ、底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：灰色	

器種	図版番号	法量 (cm)	調整	焼成・胎土・色調	備考
	図49-14	口径 底径 高さ	12.2 8.8 5.6	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面口縁部から高台に自然釉，緑灰色。内面灰色
	-15	口径 底径 高さ	12.0 8.6 5.0	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面口縁部から高台にかけて自然釉，緑灰色。内面体部のみ自然釉，緑色以下灰色
	-16	口径 底径 高さ	15.9 11.9 3.9	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：青灰色
	-17	口径 底径 高さ	15.9 10.8 8.0	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面淡青灰色。内面灰色
(金属写し)	-18	口径 底径 高さ	14.4 9.5 6.1	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：淡灰色。外面自然釉残る
(金属写し)	-19	口径 底径 高さ	15.3 8.7 6.2	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面黒灰色。内面灰色
	図50-20	口径 底径 高さ	11.9 8.2 4.2	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：淡灰色
	-21	口径 底径 高さ	12.0 7.9 3.9	外面：体部回転ナデ，底部ヘラキリ 内面：回転ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：淡灰色
	-22	底径	6.3	外面：回転ナデ 内面：体部回転ナデ，底部ナデ	焼成：やや不良 胎土：密 色調：淡灰色
須恵器 坏蓋	-23	口径 高さ	11.9 2.9	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：灰色
	-24	口径 つまみ径 高さ	13.7 8.2 3.0	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：淡灰色
	-25	口径 つまみ径 高さ	12.7 6.7 2.9	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：淡灰色，重ね焼跡あり
	-26	口径 つまみ径 高さ	13.2 6.4 2.7	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：灰色
	-27	口径 つまみ径 高さ	14.3 7.8 3.1	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：灰色，重ね焼跡あり
	-28	口径 つまみ径 高さ	15.7 8.6 3.3	外面：体部回転ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面青灰色，黄灰色の自然釉かかる。内面青灰色
蓋 (壺の蓋)	-29	口径 高さ	14.7 2.4	外面：自然釉のため不明 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面緑褐色の自然釉。内面天井部灰色，口縁部緑褐色
甕	-30	口径	30.2	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面灰色。内面青灰色
高坏 (脚部)	-31			外面：回転ナデ，二条の沈線あり 内面：しぶりめあり	焼成：良好 胎土：密 色調：淡灰色
蓋 (壺の蓋)	-32	口径 高さ	13.2 3.0	外面：体部回転ナデ，天井部ヘラキリ後ナデ 内面：体部回転ナデ，天井部ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：淡灰色
壺	-33	胴部最大径 底径	20.4 13.6	外面：体部下方ヘラケズリ後回転ナデ 内面：回転ナデ，底部静止ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面の肩部淡黄色，体部暗褐色。内面暗灰色
	-34	肩部径 底径	16.5 12.9	外面：回転ナデ，3ヶ所に沈線，肩部と胸部に突帯あり 内面：回転ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：外面褐灰色，一部黒色自然釉。内面灰色

器種	図版番号	法量 (cm)	調整	焼成・胎土・色調	備考
	図50-35	底径 15.0	外面：回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデ 内面：ナデ	焼成：良 胎土：密 色調：外面淡灰色。内面灰色	
土師器 甕	-36	口径 20.7	外面：ナデ 内面：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	焼成：良 胎土：1mm大の砂粒含む 色調：黄褐色	
	-37	口径 13.2	外面：外面口縁部横ナデ、体部ハケメ 内面：口縁部粗い横ナデ、体部ヘラケズリ	焼成：良好 胎土：1mm大の砂粒含む 色調：黄褐色	
坏	-38	底径 9.9	外面：不明 内面：横ナデ	焼成：良好 胎土：密 色調：赤褐色	
甕	-39	口径 30.0	外面：口縁部横ナデ、体部に粗いハケメ 内面：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	焼成：良好 胎土：1mm大の砂粒含む 色調：赤褐色	

### 鉄器（2～7）

刀子、釘、鎌などがある。多くは谷底より出土。刀子（2）刃部は中程で折れている。茎部の長さ3.5cm、刃部の最大幅1.1cmを測る。建物跡IV付近出土。金具（3）長さ5.8cm、最大幅2.6cm、厚さ2mmを測る薄い板状のもの。使途不明。釘（4～6）角釘で、断面方形となる。頭部は折り曲げられている。釘（6）は大形品。建物跡V付近出土。鎌（7,8）2本を確認する。錆化が著しく、形態は定かではない。鎌（8）の刃部は鑿状を呈し、長さ1.4cm、幅7mm、厚さ4mmを測る。建物跡IV付近出土。

### 石器（9～13）

砥石、斧、凹石がある。砥石は集落跡の時期のものであるが、他はそれより古く、遺構に伴なわない。砥石（9）端部は自然面で、他の4面は使用されており、かなり擦り減る。最大厚3.6cm。流紋岩（注2）。建物跡IVより出土。砥石（10）2面を使用。片面はかなり使用されている。厚さ3.6cm。流紋岩。建物跡IV付近出土。蛤刃石斧（11）刃は丁寧に研がれている。刃部のみが残り、幅6cm、厚さ3.2cmを測る。流紋岩。石鍬（12）偏平な石で、幅8cm、厚さ1.3～1.8cmを測る。折れており、刃部のみ残る。石材は当地方では見られない石英絹雲母変岩である。凹石（12）径10.3cm、厚さ3.2cmの円礫を加工している。両面とも中央部に叩き痕があり、1～2mmの窪ができる。角閃石安山岩。

### 羽口・鉄滓

ふいご 輞の羽口（1）素焼きで、径8.3cm、器肉2.4cmを測るが、長さは不明。胎土中には砂粒を多く含み、高温のため、器表は桃色となっている。谷底より鉄滓も出土しており、集落内で鍛冶を行っていたものと考えられる。加工段の西側の斜面と谷底より製鍊滓（注3）3個と鍛冶滓1個が出ている（写真図版参照）。鍛冶滓は、輞の羽口の破片も発見されており、鍛冶を行った時のものであり、

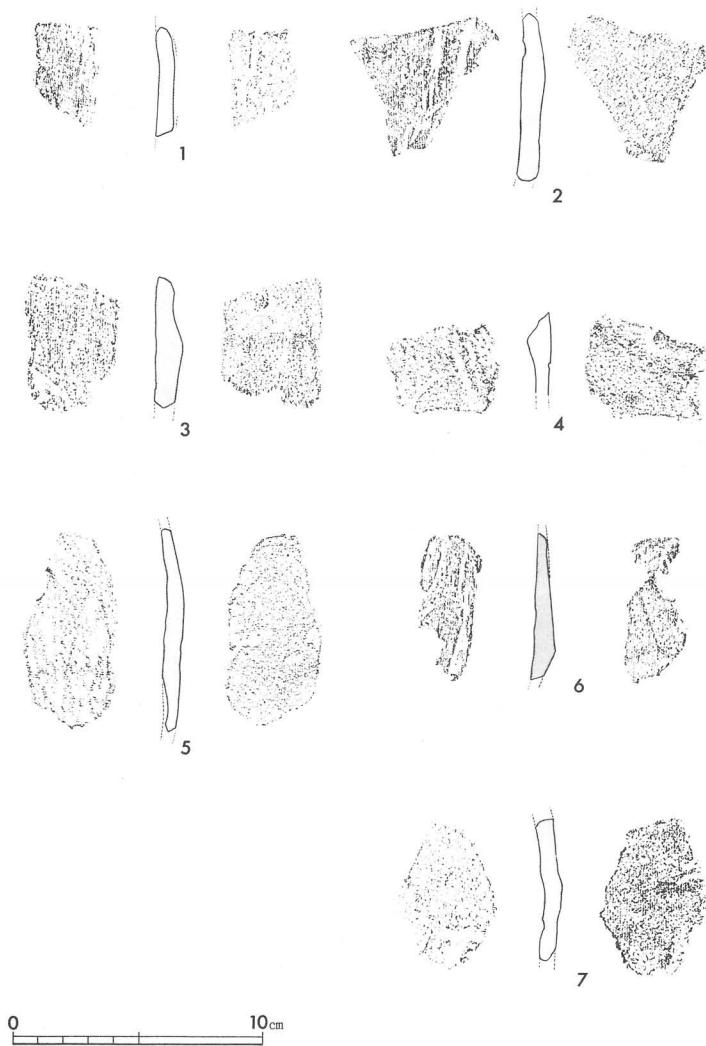


図52 大溢遺跡Ⅰ区出土製塙土器(1)

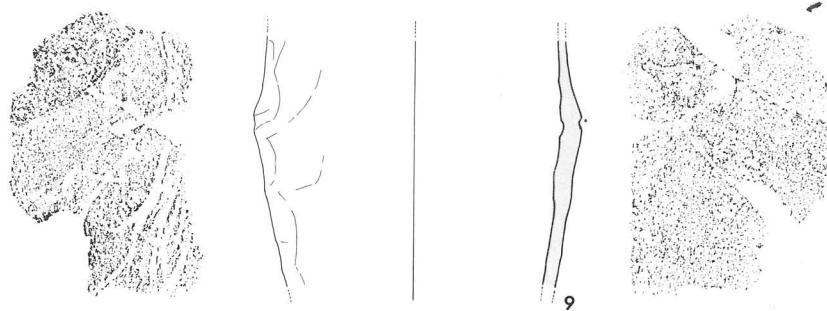
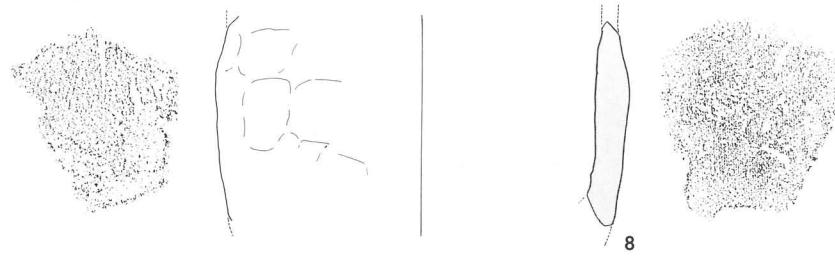
製鍊滓はその折に持ち込まれたものと思われる。

## 2. 大溢遺跡Ⅲ区出土遺物

須恵器コンテナ3箱と土師器コンテナ1箱および縄文土器・石器数個があり、その多くは破片となって出土している。斜面の建物跡から出土したものは少なく、大部分は谷部で発見された。

須恵器はおおよそ100個体が確認できる。その内訳は壺67、壺蓋22、甕5、壺2、壺の蓋2、高壺1で、壺が多く、甕、壺、高壺が少ないのが特徴である。

壺（図49-1～15）直線的で、やや外開きの体部をもつ。体部と底部の境よりやや内側に低い高



0 10cm

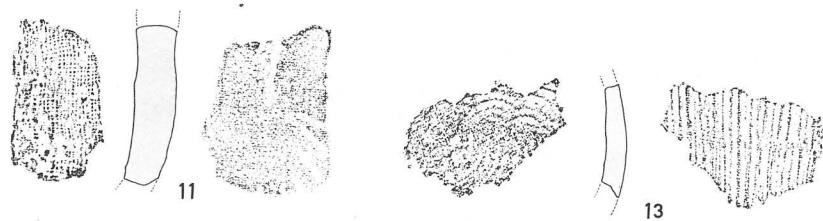


図53 大溢遺跡Ⅰ区出土製塙土器(2)

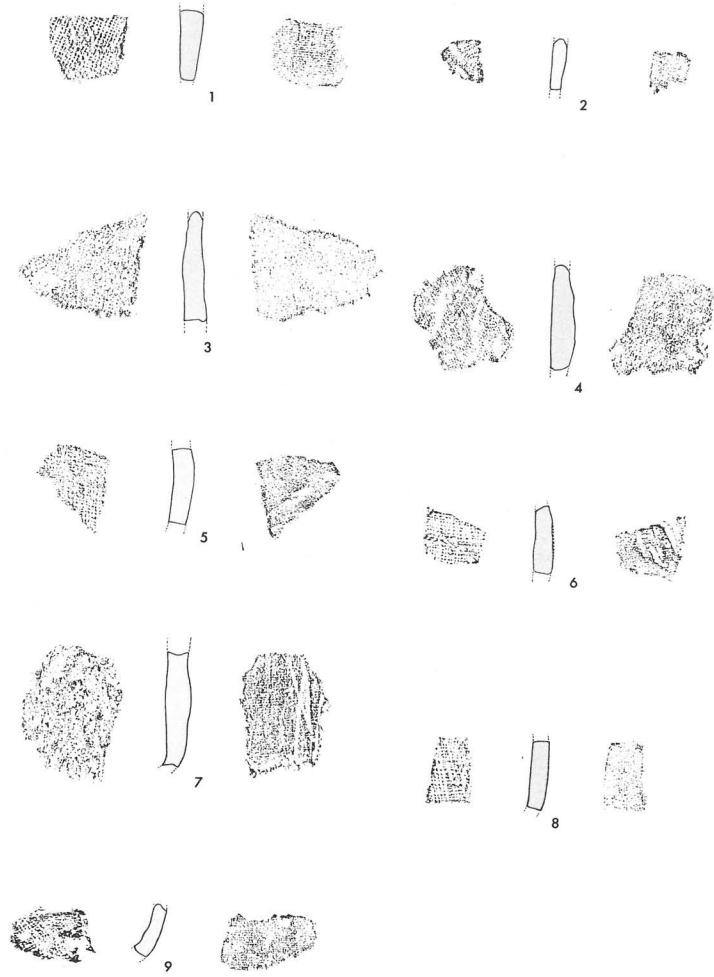


図54 大溢遺跡Ⅲ区出土製塩土器

台がつく。体部はヨコナデ、底部はヘラ削り。坏（16）短く、やや丸みのある体部をもつ。高台は低く、体部と底部の境よりやや内側につく。坏（17）直線状に長く伸びる体部に、低い高台がつく。坏（18、19）やや開き気味の体部に、外反する口縁部をもつ。腰部に稜がはいり、低い高台がつく。大形品で、瑠璃椀写しである。坏（20、21）外に開く体部をもつが、高台はつかない。

坏（22）坏底部の破片か。上げ底状で、高台はつかない。腰がはり、稜をもつ。

坏蓋（23～27）輪状のつまみをもつ。体部は屈曲する。坏蓋（28）輪状のつまみをもつ。体部は直線状に開く。

壺の蓋（29、30）外開き状な体部に、直線状の天井部がつく。つまみはない。

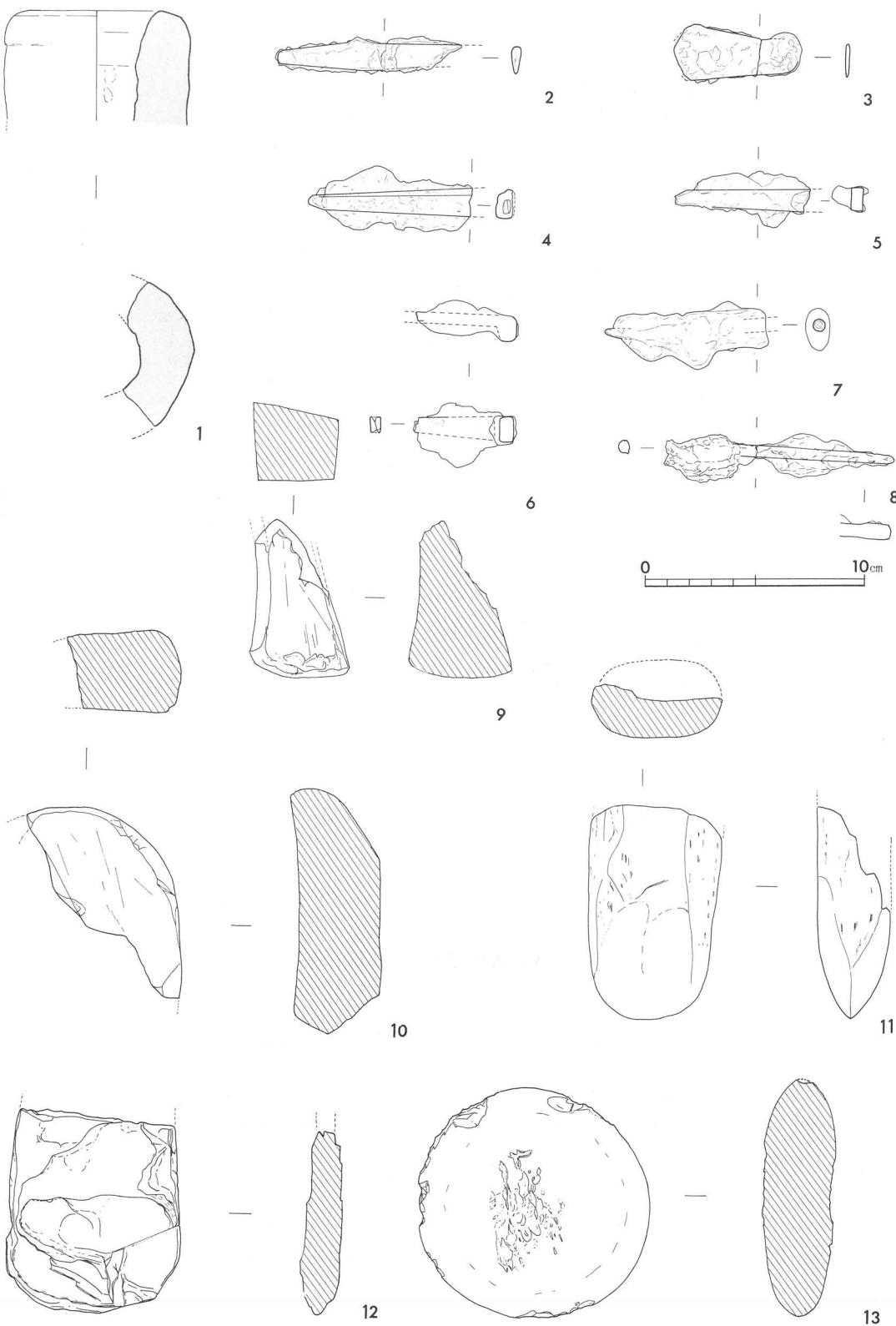


図55 大溢遺跡Ⅰ区出土遺物実測図

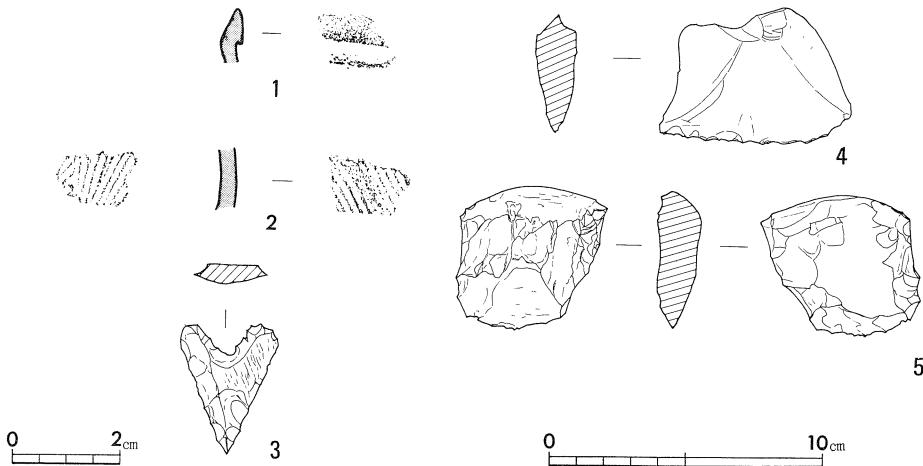


図56 大溢遺跡Ⅲ区出土遺物実測図

甕（22）くの字状の口縁に、平坦な口唇部をもつ。

高坏（32）坏部と高坏の接合部である。坏部の外面に2条の沈線が施され、内面に絞り目が残る。

壺（33）頸部を欠く。L字状に肩が張り、外に開く低い高台がつく。肩部と体部下方に突帯があり、また、肩部と体部の中程に沈線が施されている。壺（34）頸部を欠く。肩部は球形を呈し、体部下方は直線状にすぼまり、低い脚がつく。甕（35）底部のみ残る。平底で、胴部にかけてはやや開く。

土師器の多くは甕で、坏は1片のみが知られる。

甕（36, 37）小形品で、口縁部はくの字状に外反する。甕（39）大形品で、口縁部はわずかに開く。肩部から体部にかけて直線状となる。

坏（38）平底をもつ大形品。体部は欠く。

製塩土器（図54-3～5）谷底部より9個の細片が出土している。I区発見のものと同じであり、内面には布目痕が残る。煎熬用の土器は発見されていないものの、海岸に近く、製塩と深くかかわった住居と推定される。

遺構に伴なわない遺物としては縄文土器、石器、古銭（天保通宝）がある。

縄文土器（1, 2）深鉢の破片が4個、谷底から出土している。器表面には二枚貝の条痕が残り、肥厚した口縁をもつ。時期は縄文時代早期末に属する（注4）。

石器には鎌、スクレイパー、楔形石器がある。出土地は鎌が建物跡I、他の2個は谷部で、縄文土器が出土した地点の近くである。石鎌（3）凹基無茎式で、長さ2.4cm、厚さ3.5mm、重さ0.99g。スクレイパー（4）台形を呈し、長さ7.0cm、幅5.0cm、厚さ1.5cmで、刃部は片面にのみある。流

紋岩製。楔形石器（5）長さ5.5cm、幅5.2cm、厚さ1.6cmで、流紋岩製。上部には自然面を残し、中程を加工している。

#### （注）

1. 山口県教育委員会『山口県埋蔵文化財調査報告書』80—生産遺跡分布調査報告書— 1984年
2. 石材については島根大学教授三浦 清氏の鑑定による。
3. 流動溝で、古代のもの。タタラ研究会委員穴澤義功氏の教示による。
4. 島根県教育庁文化課足立克己氏の教示による。

## 第4節 小 結

### 1. 遺跡の立地

大溢遺跡は古代の集落跡である。日本海に面す低丘陵（都野津層からなる）の裏側斜面にあたり、海からの北西風を避けることできる所に位置する。また、字名が示すように、南から深く入り込んだ谷（地元では溢：えきと言う）が西側に存在し、遺跡はその谷の奥部に営まれている。建物跡は尾根筋から僅かに下った乾燥した所にあるが、現在、付近の谷頭には溜池が数箇所に認められ、さらに泉も知られており、飲料水にはこと欠かなかったと推定される。

一方、北側の山麓には小さな砂丘が横たわり、海岸線はJR山陰線と国道191号に平行して東西に走る。遺跡がのる尾根は、比高差はあるものの、海岸には極めて近い場所に位置し、細砂が数10cmほど堆積している。これは中世以降の寒い時期に海岸線が後退し、砂が遺跡の周囲にも及んだことを物語るものである。

### 2. 遺 構

今回の調査で、二つの区において9棟の掘立柱建物跡と数段の加工段を確認した。

#### 加工段

尾根近くの斜面をL字状にカットして、平坦な加工段を造り、その面に建物を設けている。I、Ⅲ区とも同様であるが、規模や数ではI区が優る。Ⅲ区は2段、I区は4段で建物が作られ、後者は切り合いが多く、かなり長期間の生活が行われていたと考えられる。また、多くの場合、山際の壁下には素掘りの浅い溝が巡り、雨水などを流すためのものと推定される。I区の場合には段の一方に建物があり、残りの部分は空地となり、広い空間をもつ。Ⅲ区の段は規模が小さく、建物の両脇に2m程のテラスが付くだけである。

なお、各段とも建物跡の柱穴は山側の1列のみ残り、谷側は現存していない。よって、造られた頃の段の幅は不明である。

## 掘立柱建物跡

大溢遺跡で検出された掘立柱建物跡は、Ⅰ区で7棟、Ⅲ区で2棟の計9棟を数える。

これらの建物は総て山際の溝や崖（壁）に接して作られているため、その多くは谷側の柱穴跡は削られ、かつ、後世に自然崩壊し、現存していない。幸い、Ⅰ区の建物跡Ⅳは残り具合が良く、桁行三間（6.0m）、梁間二間（4.5m）の規模であることが分かる。地形からみて、桁方向は溝方向と思われる所以、前述の建物跡が一般的な大きさであろう。同様のものとして、建物跡Ⅱ、Ⅲ、Ⅳがある。Ⅲ区は加工段が狭いため、二間四方の小さい建物しか作れなかつたと推定される。

立て替えが確認されるのはⅠ区の建物跡Vで、柱穴が重なっている。この床面に焼土や炭および多くの壊れた土器が埋められた穴が検出されており、火事場処理用に掘られたものと思われる。

建物跡の時期は段の切り合い関係や出土している須恵器より三時期に区分される。詳細は遺物の項に譲るが、大まかにみて集落の成立期、最盛期、衰退期となる。成立期にはⅠ区の加工段Ⅱ・建物跡Ⅱと加工段Ⅲ・建物跡Ⅲが、さらにⅢ区の建物跡Iも営なされた。最盛期は加工段が造り替えられたり、規模を大きくした時期である。特に、加工段Vの出現の時が集落としては最も拡大した頃で、5棟の建物（建物跡I・II・V・VI・VII）が同時に存在した可能性が強い。衰退期には加工段は営まれず、以前より存続していた2棟の建物（建物跡I・IV）が残っているのみである。

## 3. 遺 物

### 製塩土器について

特異な遺物としては製塩土器がある。これは内面に布痕を有する小型の土器で、Ⅰ区とⅢ区からまとまって出土している。この土器は北九州から瀬戸内さらに日本海海岸部と広く分布しており、山口県下関市周辺の資料をもとに「六連島式土器」と呼ばれるものである。また、塩生産のできない内陸部からも発見されており、固形塩作製用すなわち焼塩壺で、運搬容器も兼ねていたと推定されている（注1）。近年、島根県内においても出土例が増している（注2）。

大溢遺跡からは、塩の煎熬に用いた土器はほとんど出土していない。ただ、土師器の甕で、内面にタタキ（後ハケ調整）をもち、器表に火を受けているものが1片あり、煎熬用土器の可能性もある。大溢遺跡は海岸に接しており、山麓の砂浜で製塩が行われ（注3），その後、固形塩作製の作業が、ある程度は集落内でも行われていたことを物語っている。なお、この遺跡の床面には前述したように多くの焼土面が検出され、谷部から焼けた石や炭も土器とともに多く出土していることは、この作業を裏付けるものである。

さらに、Ⅰ区の斜面や谷部からは轆の羽口1片や鉄滓数片が発見されている。どの建物で鍛冶を行っていたかは明らかではないが、ある時期、鉄器生産も行っていたことが知られる。このように奈良時代から平安時代にかけての生活を具体的に知り得る遺跡は当地方においては稀であり、貴重

といえる。

### 須恵器の特徴と時期について

石見空港予定地内遺跡の調査では、根ノ木田遺跡と大溢遺跡から須恵器がまとまって出土している。特に、大溢遺跡の場合には住居跡の新旧関係も知られ、調査例の少ない石見西部においては貴重な資料といえる。これらの須恵器は、益田市周辺の古墳や横穴墓からは全く発見されていなく、奈良時代以降の時期のものである。

個々については既に遺跡の概要において記載しているので、この項では須恵器の形態変遷をI～IV期までに分類し、各時期の特徴を述べる。なお、石見地方西部において奈良時代以降の須恵器編年はほとんど進んでいないので、隣接する山口県北部（長門地方）の資料を参照しながら考えたい。

#### I期

根ノ木田遺跡D区から蓋坏が僅かに出土している。蓋はボタン状のつまみをもち、器高は低く、偏平である。肩部はなだらかで、端部は下垂する。坏は低い高台をもち、体部は少し外開きになり、高台は底部の端より僅かに内側に付く。器種の割合については、蓋坏のみ出土しており、不明である。

石見地方において、類似する須恵器をもつ遺跡としては益田市遠田町の本片子遺跡（注4）や浜田市日脚遺跡（注5）が知られている。本片子遺跡の窯跡からの土器は大きく二時期に分けられ、古い様相のものは終末の古墳や横穴墓からも発見されている。新しいものは根ノ木田遺跡D区の蓋、坏と同じ形態であり、I期に該当する。この窯では瓦も焼かれており、この時期から当地方では瓦製作も始まったことが窺える。また、長門地方では山口県美祢郡美東町の長登銅山跡（注6）からも同様の須恵器が発見されている。特に、大切ⅢC区2Tから出土した坏は、低く、外開きの高台が底部のやや内側に付き、形態のうえではI期のものと区別がつきにくい程に類似している。この調査区からは8世紀前半の年号が記された木簡数点が共伴したことでも注目されている。

以上の点より、I期は奈良時代前半期に属するものと考えられる。

#### II期

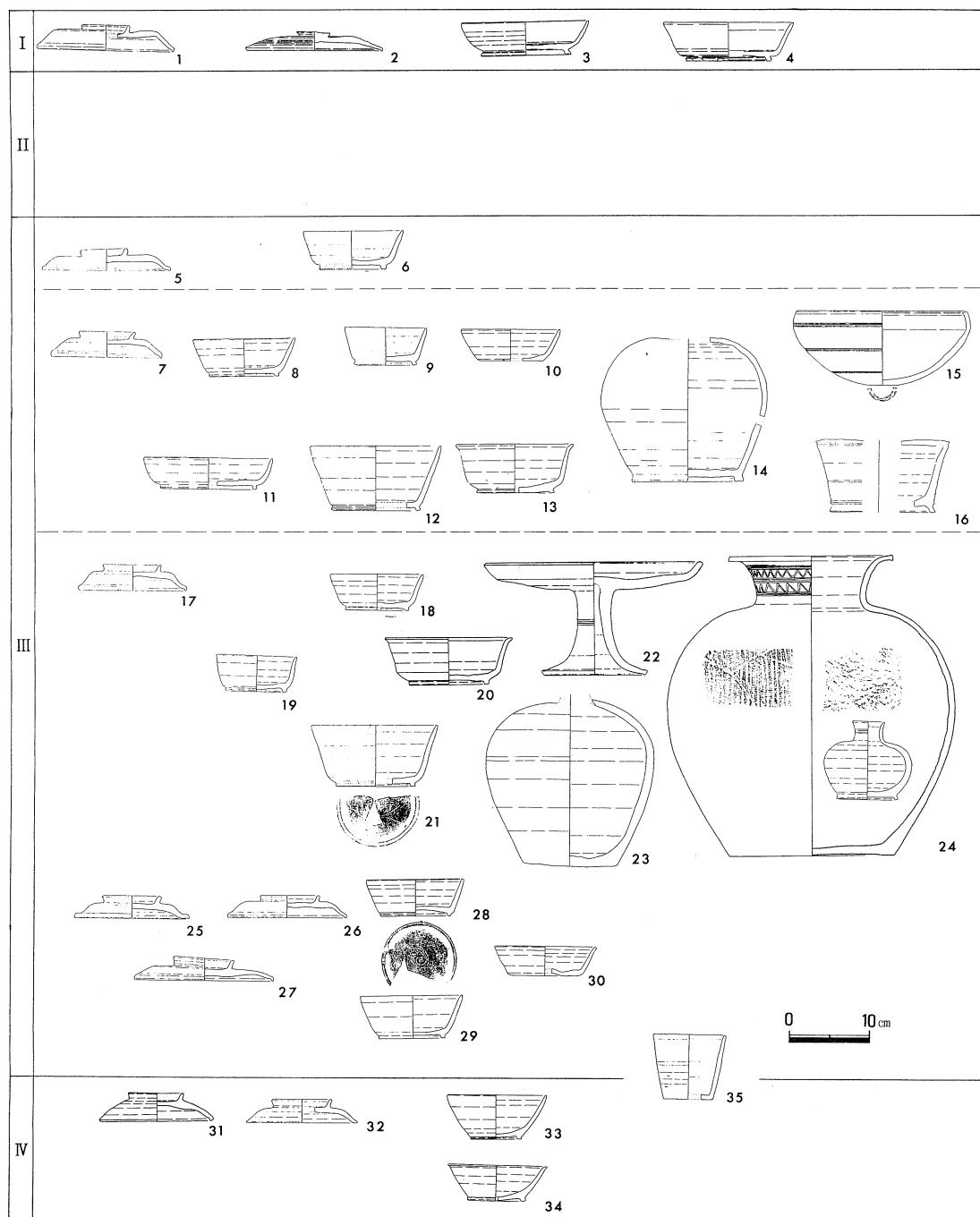
8世紀中頃を中心とする資料は本調査においては出土しておらず、また、石見西部においても一括資料に恵まれていなく、詳細は不明である。ここではとりあえず、この時期をII期としておく。

#### III期

大溢遺跡の大部分と根ノ木田遺跡D区出土の一部がこの時期に相当する。

蓋坏については形態の違いが認められ、3区分が想定される。坏は高台のないものをA、あるものをBとし、さらに、法量、体部の形態からBをIからIVに分類する。この時期の高台は低く、底部の端に付く。

第5表 石見空港予定地内遺跡出土須恵器編年表



(1～4は根ノ木田遺跡、5～35は大溢遺跡)

坏A 高台のないもの。

B I 大形品。口径15~16cm程度、器高5cm以上のもの。

- a 高台が体部と底部の境に付き、体部は直線状に立ち上がるるもの。
- b 金属器を模倣したもの。

II 中形品。口径12cm程度、器高4~5cmの最も一般的なタイプ。

- a 高台が体部と底部の境に付き、体部は直線的に立ち上がるもの。
- b 高台が体部と底部の境よりやや内側に付くもの。

III 小形品。口径10cm程度のもの。

蓋は総て輪状のつまみをもつ。口縁部、体部の形態からA、B、Cに分類する。

A 天井部から肩部にかけて、屈曲しながら外反気味の口縁部につづき、端部はやや内傾して丸くおさまるもの。

B 肩部から口縁部に至るまでが、なだらかなもの。端部は内側に丸くおさまるものとやや外方へ下垂するものがある。輪状つまみは内湾気味のものもある。

C 肩部から口縁部に至るまでが強く内弯するもので、口縁部はやや外方へ下垂するもの。輪状つまみは内弯気味のものもある。

蓋、坏ともヘラ切りが大部分を占めるが、蓋は3パーセント、坏は8パーセントの糸切り（回転、静止とも存在する）が混じる。糸切りをもつものは最盛期以降の加工段や建物跡から出土しており、これらは当地方の糸切りの出現を知るうえでは貴重である。調整は丁寧であり、ヘラ切りの後、ナデで仕上げるものが多く、蓋の中には体部外面をヘラでナデるのも認められる。なお、輪状つまみや高台の内側に爪状圧痕が付くものもある。

しかし、蓋坏以外の器種には相違は認められない。それは出土数も少なく、I区の建物跡V内の土器溜以外には一括資料に必ずしも恵まれてはいない。

器種構成についてみると、その内訳は下表のようになる。確認できる個体数は大溢遺跡の場合

第6表 大溢遺跡出土須恵器の器種構成

	坏身	坏蓋	高坏	壺	甕	鉄鉢形土器	コップ	計
I区	156 (52.0)	127 (42.3)	2 (0.7)	8 (2.7)	2 (0.7)	1 (0.3)	1 (0.3)	300個
III区	67	22	1	2	5	0	0	100個
計	223 (55.8)	149 (37.3)	3 (0.8)	10 (2.5)	7 (1.8)	1 (0.3)	1 (0.3)	400個

( ) 内の数字はパーセントを表わす。

400にのぼり、蓋坏の出土が顯著で、とりわけ坏身の割合が多い。他の器種は1ないし数パーセントと僅かである。特異なものとしては、鉄鉢形土器が根ノ木田遺跡で3個、大溢遺跡で1個出土している。

最近、この時期の須恵器は多くの遺跡で確認されている。石見地方では江津市の波来浜遺跡（注7）、浜田市の石見国分寺跡（注8）、日脚遺跡、美濃郡匹見町長グロ遺跡・下正田遺跡（注9）、鹿足郡六日市町の前立山遺跡（注10）で、長門地方では山口県萩市の見島ジーコンボ古墳群や大井大寺廃寺（注11）および下関市の長門国分寺跡（注12）で知られている。これら遺跡の報告書で、時期に言及されているのは日脚遺跡と見島ジーコンボ古墳群である。日脚遺跡の場合はC区より出土している蓋、坏がこの時期にあたる。ただし、壺のみは若干古い。また、同遺跡のB区調査区-3の土器はⅢ期の新しい要素のものと類似しているが、同遺跡の報告では次の形式としている。年代については前者を8世紀後半に、後者を9世紀前半とする（注13）が、その根拠については触れられていない。一方、見島ジーコンボ古墳群では16号墳出土の須恵器がⅢ期のものに属し、特に、蓋と坏は輪状のつまみや底部の端に付く低い高台など、形態・調整等が大溢遺跡の土器溜のものと極めて類似する。同古墳の時期は山口県内の須恵器窯跡資料の検討や副葬された石鎧の年代観から9世紀前葉に求められている（注14）。

なお、畿内地方や北九州地方のものと比べた場合、蓋は輪状つまみとボタン・宝珠つまみの違いがあり、比較は難しいものの、坏は8世紀末から9世紀初頭のものと体部や高台の形態は同じ特徴をもっている（注15）。

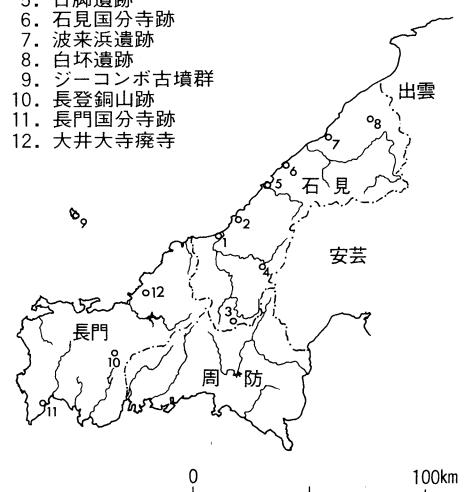
#### IV期

蓋坏のなかで、形態的にみて後出なものを一型式とした。他の器種については数も限られ、かつ、一括資料がないために、明確な区分はできなかったので取り上げない。

蓋は輪状のつまみをもつ笠形のものである。坏は椀形で、体部から底部にかけては丸くなり、Ⅲ期と同様の低い高台が付くなどの特徴を有している。

IV期はⅢ期より新しい要素をもつものを抽出している。蓋と坏がセットにはならない。坏は蓋を伴わないもので、須恵器の製作が終わる時期に近いものかもしれない。石見地方で最も新しい須恵器としては、大田市水上町にある白坏遺跡（注16）出土の一群が挙げら

1. 根ノ木田遺跡、大溢遺跡
2. 本片子遺跡
3. 前立山遺跡
4. 長グロ遺跡、下正田遺跡
5. 日脚遺跡
6. 石見国分寺跡
7. 波来浜遺跡
8. 白坏遺跡
9. ジーコンボ古墳群
10. 長登銅山跡
11. 長門国分寺跡
12. 大井大寺廃寺



れる。坏を見ると、大溢遺跡のものに類似する蓋坏と蓋をもたなく、口縁部がやや内弯するものとに大別される。これらの須恵器と延喜2年（909）銘の木簡が共伴しており、後者は9世紀末～10世紀初頃に位置づけても誤りはないものと考えられる。

（付記）須恵器については島根大学学生野田直子と調査員西尾克己が検討し、西尾がまとめたものである。

（注）

1. 山口県教育委員会『山口県埋蔵文化財調査報告書』80 一生産遺跡分布調査報告書— 1984年
2. 島根県川本町教育委員会『キタバタケ遺跡発掘調査報告書』 1992年
3. 大溢遺跡の北側に広がる持石海岸では、戦前から戦後間もない頃まで、地元をはじめ美濃郡・鹿足郡の人々が夏季に製塩を行っていたという。
4. 島根県益田市教育委員会『国営農地開発事業関係埋蔵文化財調査報告書』 一本片子遺跡、木原古墳— 1982年
5. 島根県教育委員会『日脚住宅団地予定地内発掘調査報告書』 一日脚遺跡— 1985年
6. 山口県美東町教育委員会『長登銅山跡』 —古代採銅・製錬遺跡発掘調査略報— 1992年  
美東町教育委員会池田善文氏の教示による。
7. 島根県江津市教育委員会『波来浜遺跡発掘調査報告書』 1981年
8. 島根県浜田市教育委員会「石見国分寺跡発掘調査概報」『季刊文化財』58 島根県文化財愛護協会  
1987年
9. 島根県匹見町教育委員会『水田ノ上A遺跡、長グロ遺跡、下正ノ田遺跡』 1991年
10. 島根県教育委員会『中国縦貫自動車道に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1980年
11. 山口県教育委員会『山口県埋蔵文化財調査報告書』73 一見島ジーコンボ古墳群— 1983年  
山口県教育委員会秉安和二三氏の教示による。
12. 山口県下関市教育委員会『長門国府周辺遺跡発掘調査報告』Ⅵ 1988年
13. 注2に同じ。
14. 注8に同じ。
15. 伊野近富「篠窯原型と陶邑窯原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』37 京都府埋蔵文化  
財調査センター 1990年  
福岡県教育委員会『福岡県文化財調査報告書』 一牛頭窯跡群Ⅱ— 1989年  
九州歴史博物館横山賢次郎氏の教示による。
16. 大田市教育委員会『大田市埋蔵文化財調査報告書』8 一白坏遺跡発掘調査概報— 1989年

## 第6章 仁右エ門山遺跡

### 第1節 遺跡の位置と調査の概要

持石海岸から南に約1kmの狭隘な谷の最奥部の標高約60mの位置に立地している。窯跡は谷の東斜面に1基あり、窯の南側に物原、西側の谷底に作業場跡と考えられる平坦面があり、総面積約3,000m<sup>2</sup>をはかる。

窯跡の存在はこれまで知られておらず、1984年度に島根県が実施した生産遺跡分布調査（窯業関係遺跡）でも確認されていなかった。「瓦ヤ下」の小字名が残っていたが、この他には窯跡に関する所伝はない。

空港建設の計画では滑走路に隣接する位置にあり、造成工事にともなって物原の一部が埋没することから谷底と物原につき約250m<sup>2</sup>について調査を実施することになり、窯跡を含む遺跡の大部分は現況のまま残ることになった。

調査は谷の主軸を任意の基準線とし、谷底に約200m<sup>2</sup>の調査区を設定して遺構の確認をおこなった。また、丘陵斜面の物原では任意でトレーニングを設定し物原の範囲確認をおこなった。

### 第2節 遺構

#### 1. 連房式登り窯

窯跡は狭長な谷の東斜面に立地しており、現況でも崩壊した窯壁部材が多量に堆積していた。

標高58mから67mの間にS-86°-Eに主軸をとる。水平長約

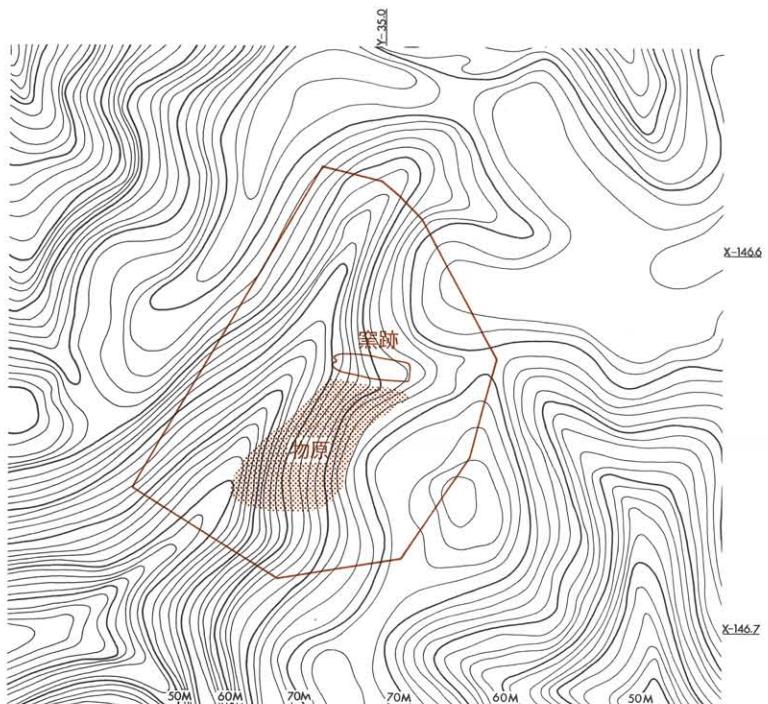


図58 仁右エ門山遺跡位置図 (S=1:2000)

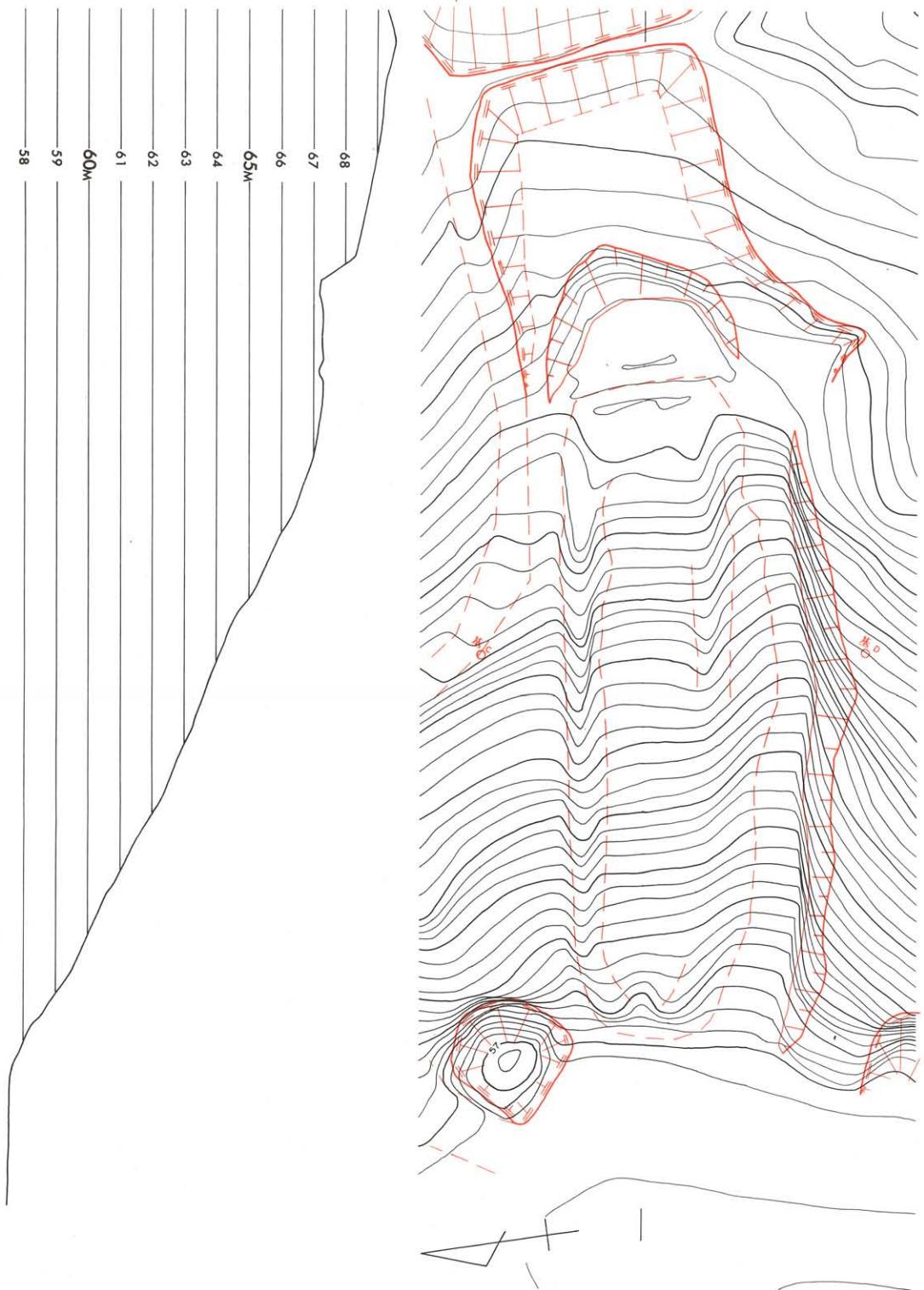


図59 連房式登り窯測量図

20.5m, 房の幅約5mを測る。小規模な谷地形の緩斜面を利用し、約25°の勾配で構築されている。

最下段の燃焼室（大口）<sup>おおぐち</sup>は平面逆三角形を呈し、これに長方形の焼成室（房）が横並びに続く形態の、いわゆる連房式登り窯である。房の数は不明であるが、仮に幅を1.5mとすれば10房前後の規模の窯と推定できる。房の入口は全て南側につくようで、窯壁の外側に若干の余地が認められる。

窯と南側の丘陵の法面との間には幅約1mの溝が造られていることが現況の測量図からもわかる。また窯の後背には半円形の法面があるが、類例からすると山側からの雨水の流入を防ぐ溝の一部と考えられる。窯の北側は里道と隣接するため詳細は不明であるが、南側と同様な溝が存在するとも考えられる。以上から窯の防湿を意図した排水溝の整備が念入りにおこなわれていたものと考えられる。以上の表面観察からも窯跡は比較的に良好に遺存していると思われる。

大口北側に直径約4m、深さ約1.5mの土壙があるが性格は不明である。また煙り出し後背約10mの上方には丘陵鞍部をつなぐ土堤状の遺構があるが、窯跡に伴う施設であるかは不明である。

## 2. 物 原

物原は現状観察から窯の南側の丘陵斜面約150m<sup>2</sup>および谷底の平坦面南側の約50m<sup>2</sup>で認められた。堆積物の多くは瓦と窯道具および窯体の部材に使われた「トンバリ」と呼ばれるレンガで、地表面上でも大量に散乱していた。

調査は物原の南と谷底についておこなったが、丘陵南斜面では一部に瓦がみられる程度で物原の

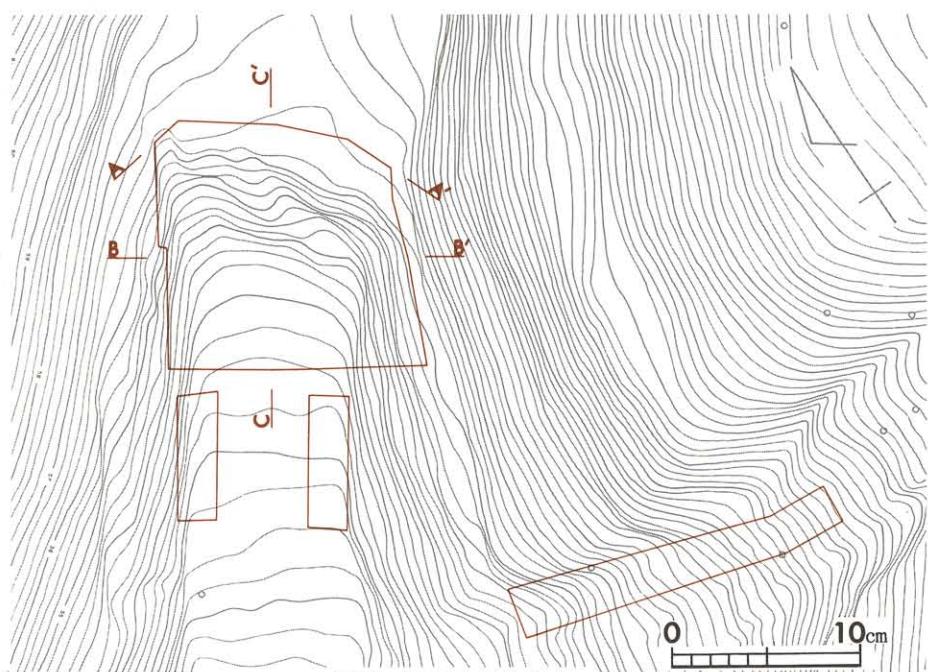


図60 調査区設定図

南端をおさえるにとどまった。

平坦部法面は調査前の状況でも比較的に遺物の堆積が顕著な箇所であった。加えて瓦、窯道具の種類も豊富であったことから、この窯場の生産を考えるうえで有用な知見が得られることが期待された。

調査ではまず谷筋方向から任意の基準線C-C'を設定し、これに直行するB-B'と、平坦部の調査区壁面としたA-A'で土層の堆積状況を観察しながら掘り下げを開始した（図60、61）。

A-A'は窯場平坦面をほぼ東西方向に横断した断面となっている。地山および基盤は中央と西寄りの一部で確認できた。遺物は地山を除く全層で出土したが、各層位の分層は土質、包含する遺物の量を基準に行なった。

層序は黄褐色粘質土の第6層を境に上下2層に大別できる。この第6層は北西斜面から堆積しており、遺物をあまり含まない。この間層の成因は明確にしえなかつたが、土質の性状が地山のそれと近似すること、第6層堆積以前に相当量の不良品が投棄されていることからすると、窯場の拡張造成にともなう排土の可能性が考えられる。

C-C'では、緩やかに下方に向かって傾斜する地山を確認している。間層を含む上下の包含層は谷の下方に向かって傾斜堆積している。上層の第1、2層は瓦、トンバリ、モミ土などの堆積層で、若干土を交える程度である。第3、4層は上層に比べ土の含有量が多いが、瓦、トンバリ、モミ土を多く含む。下層は第9層が上層と同様の堆積を示すほかは、全般に遺物を包含する土が多い。最下層の第11、12層では遺物の量が少ない傾向にあった。

なお、この断面で瓦の積み重なりを4層中で確認した。谷の西斜面側に一部つながっており、土留めのためとも考えられたが、詳細は不明であった。

B-B'では斜面堆積の下端にあたることから土層の堆積は薄く、遺物の出土量も少ない。東西両斜面では地山および基盤が確認できたが、谷底では基盤は確認できなかつた。谷底の旧表土は比較的に平坦で、谷底が窯場の操業以前にも同様に平坦であったことがわかる。調査の結果、旧表土上では遺構は確認できなかつた。また、これより下方でもトレンチ調査を行つたが遺構は確認されなかつたので、窯場はこれより下方には広がらないものと判断した。

調査区の北側に広がる平坦面については今回調査を行なわなかつたが、以上の調査所見からすると窯場の造成土と併に大量の遺物が埋められているものと考えられる。窯跡南に広がる物原についても詳細は不明であり、これと谷底の遺物の関係も今回の調査では明らかにしえなかつた。この点については窯構造の把握を含め、今後の調査を待つこととしたい。

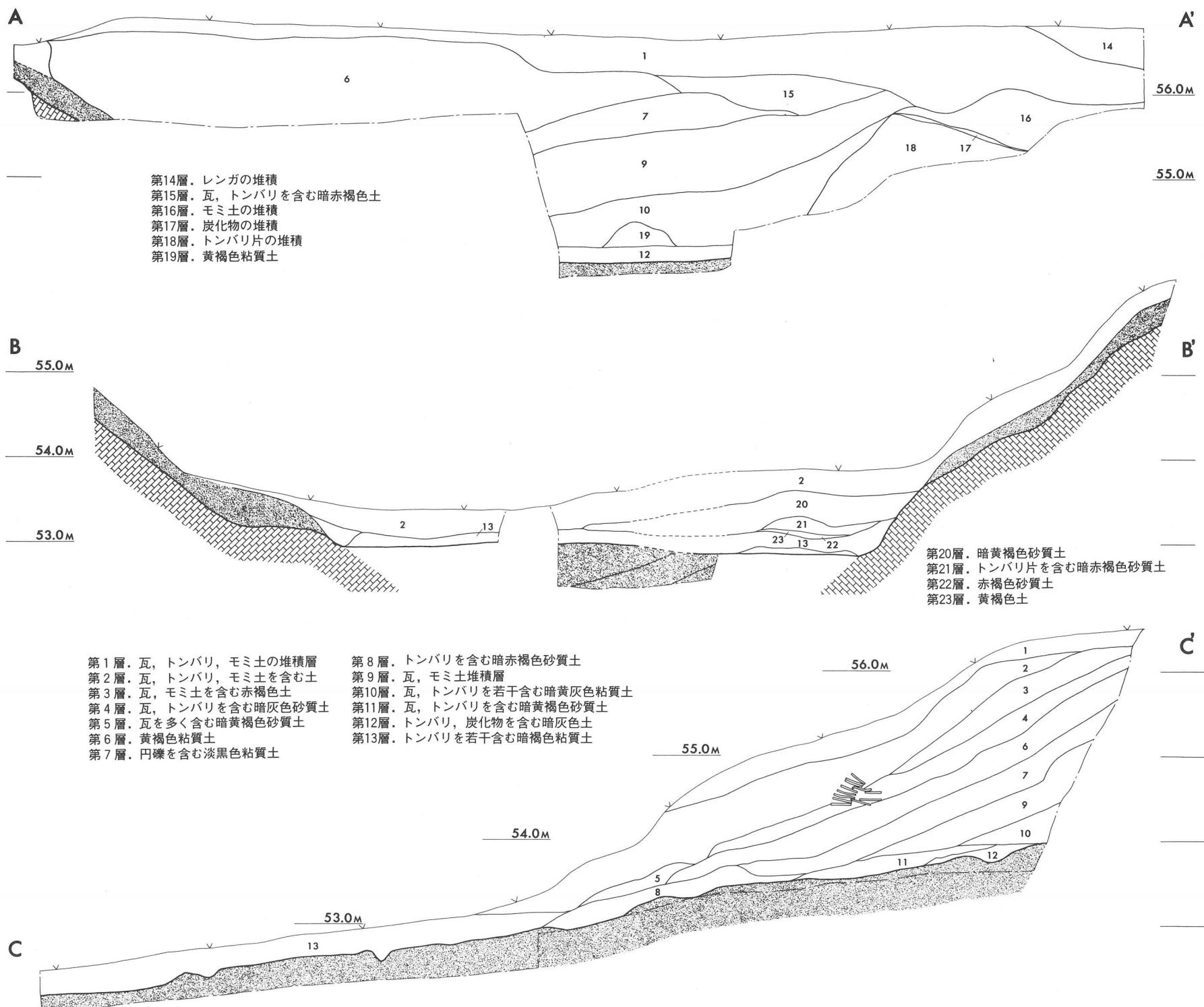


図61 仁右門山遺跡物原断面図

### 第3節 遺 物

物原から出土した遺物は陶磁器類、瓦類、窯道具、その他の土製品、石製品があり、以下順に説明する。

#### 1. 陶 器

##### 碗

図62-1は9層から出土した端反りの形態を持つ小形の碗である。器高5cm、口径7.8cmを測る。釉薬は暗緑色を呈し目跡の有無は不明。2は1、2層中出土で体部から口縁端に向かって単純に伸びる形態である。口縁径は推定で約11.6cm、緑色釉が掛かる。3は鋭く削り出された高台から明確な稜線を境に逆はの字状に開く体部を持ち口縁端部は丸く単純に納める。淡灰白色を呈する釉薬は底部外面に留まり、高台には達していない。器高約6cm、口径11.7cmを測る。同じ特徴を持つのが7で共に目跡はない。前者は9層、後者は8層から出土している。この種の碗は山口県萩市所在の萩焼古窯跡の深川窯で生産されていたことが判っている。4は碗の蓋であろうか。緑色の釉が不規則に残っている。5は1と同様の形態を持つ端反り形の碗で緑色を基調とした透明釉が高台外面まで掛かる。器高4.8cm、口径8.4cmを測る。高台は短く薄く削り出されている。6は口縁部を欠くが高台は比較的にしっかりと削り出されている。乳白色を基調とした釉は底部高台近くまで厚く掛かる。8は広東形碗の陶器写しで淡緑色の釉が高台外面の中程まで掛かる。胎土中に0.5mm大の砂粒を多く含む。目跡はない。11層出土。

##### 灯明具

図62-9、10は灯明皿で共に糸切り底である。9は褐色の釉が、10は二次的な被熱で明確ではないが乳白色を呈する釉が掛かる。11~14は灯明皿を載せる台である。高台を削り出した浅い皿に輪状の台部を貼り付けて作られている。11、12では輪状の台部と皿部分とでは破断面の色調、砂粒の量に違いが見られることから異なる2種類の土で作られた可能性が考えられる。釉は3者とも輪状の台部端には掛けられていない。11、12が黄緑色、暗緑色で、13は褐色の釉ある。焼成に際しては窯道具を使用せず直に重ね焼きをしたらしく台部端に熔着痕が観察できるものもある。12は9層出土。14は輪状の台部と皿の境に0.7mmの円孔が開けられている。

##### 小壺・小鉢

図62-15は器高6.1cmの小形の短頸壺で暗緑色の釉が掛かる。16~20は同様の形態の小形の鉢である。褐色釉を基調とし、目跡はない。18、21はこれらよりやや浅めのもので、前者は黄褐色を呈し目跡があり後者は褐色を呈し蛇の目凹形高台状に成形されている。16は2、9層出土。

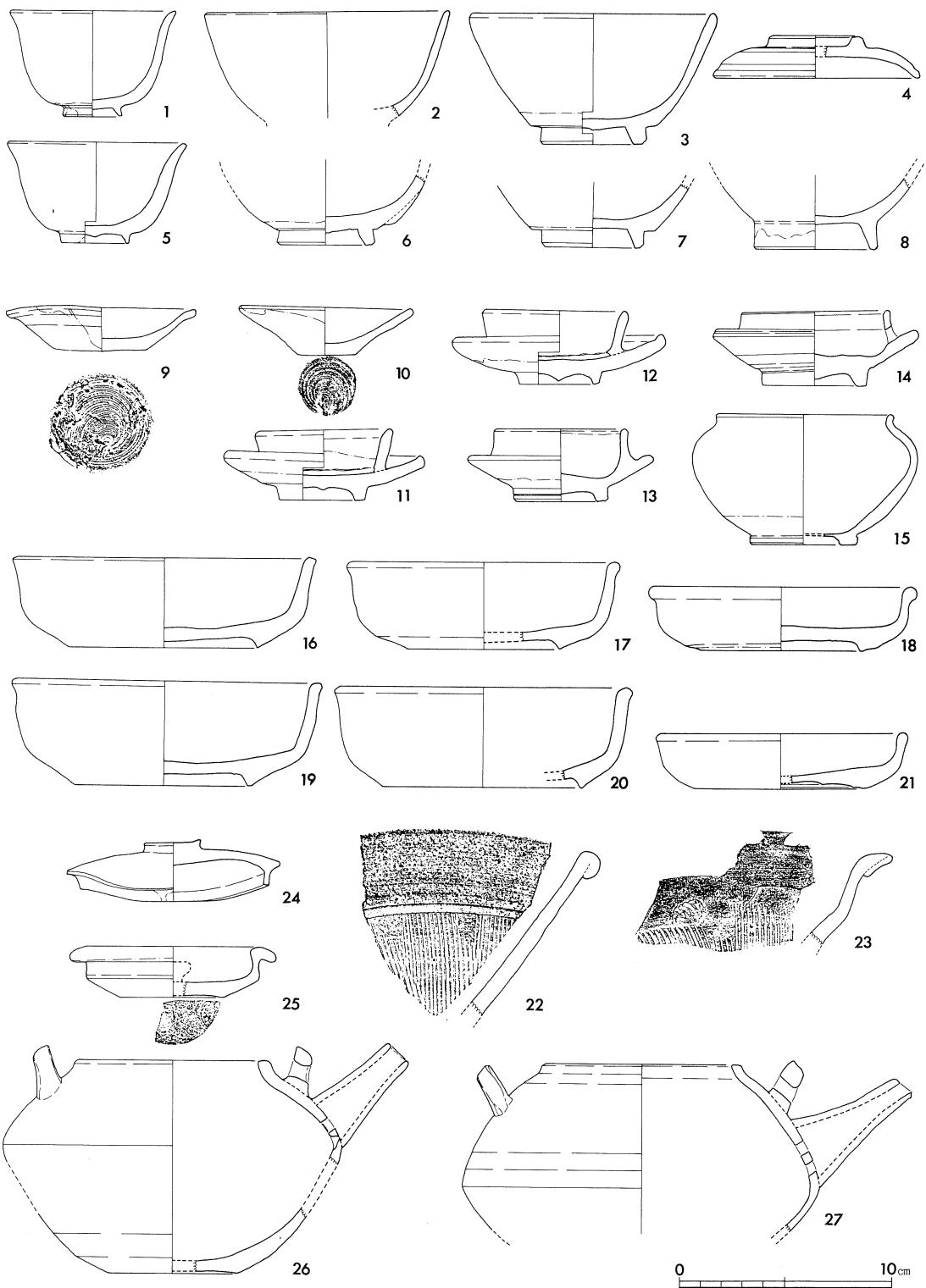


図62 陶 器 (1)

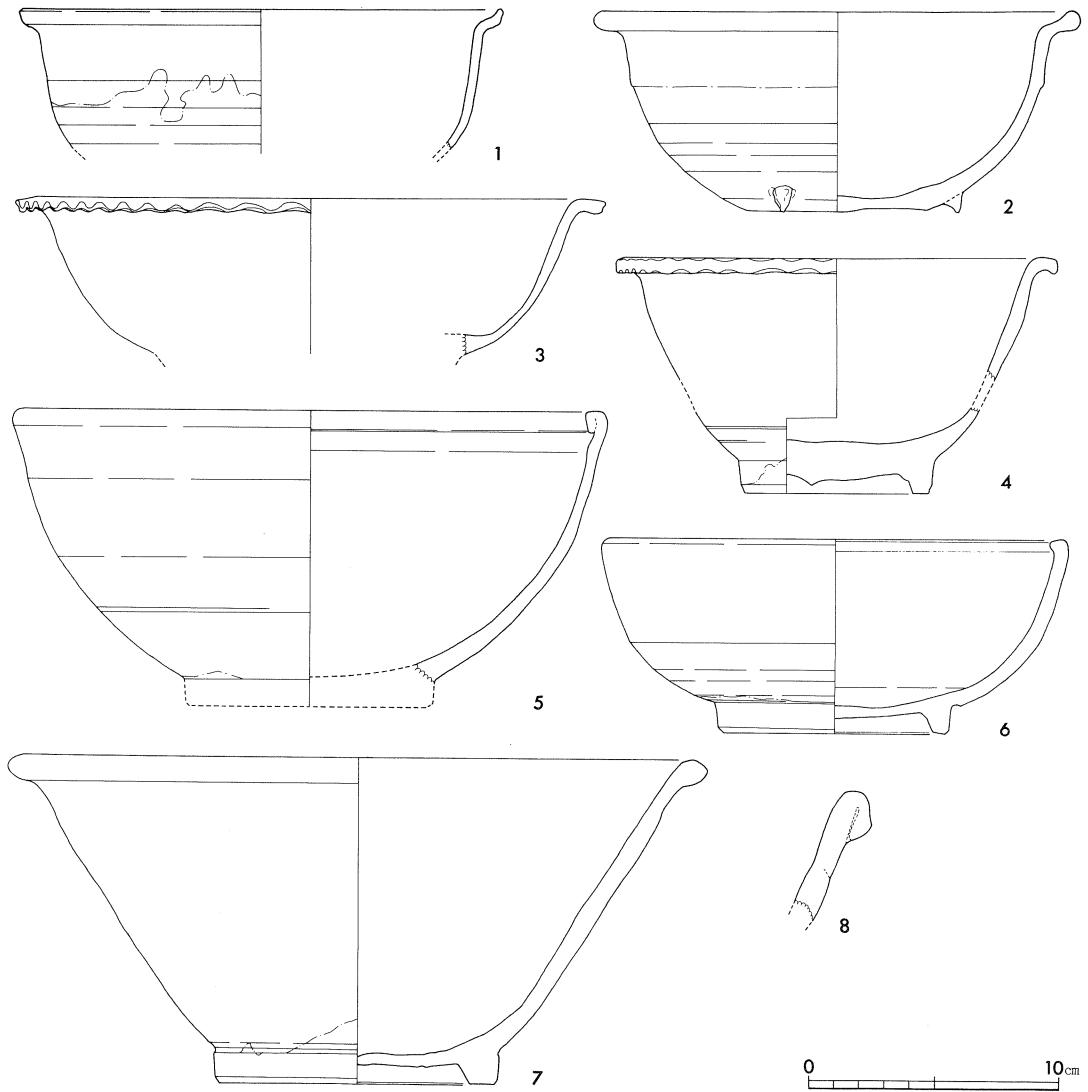


図63 陶 器 (2)

### 蓋

図62-24は茶褐色釉の壺の蓋で、25は暗茶褐色を呈する土瓶の蓋であろう。

### 土瓶

図62-26、27は算盤玉状に胴部の張った土瓶である。注口は胴部最大径の上部に付設されている。

把手を掛ける耳は三角形を呈する。共に褐色釉が掛けられている。26は9層、27は1層出土。

### 土鍋

図63-1は淡緑色の透明釉を内面から外面上半にかけて施釉している。器壁はカンナ削りによつて比較的に薄く仕上げられている。1層出土。2は三足付のものでカンナ削りは底部から胴部中程

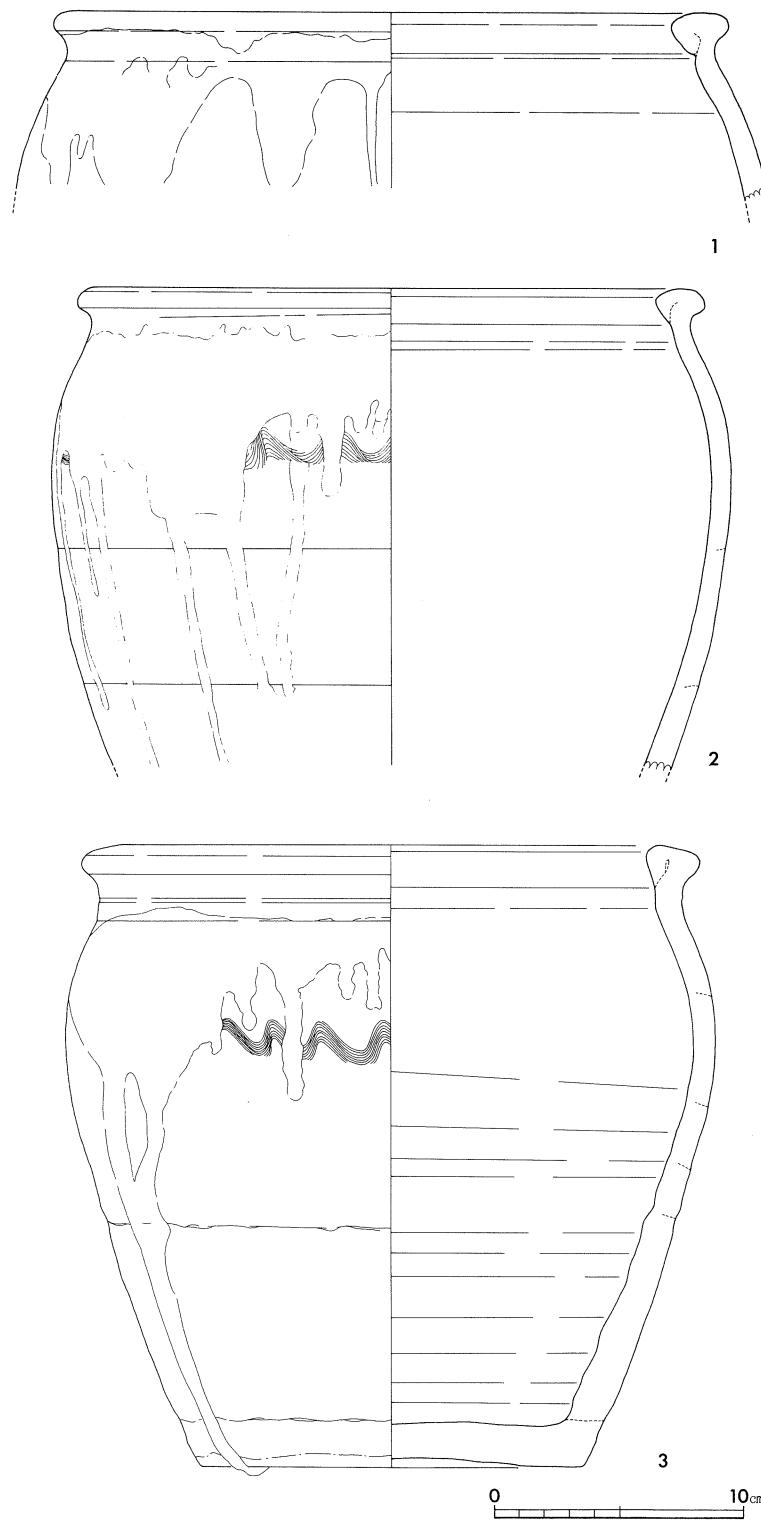


図64 陶 器 (3)

ま施されている。

### 鉢

図63-3, 4は外方に折り曲げた口縁端部の上下を波状に作り出したもので、共に褐色釉が掛かる。4は9層出土。5, 6は口縁端部を内側に折り込んで肥厚させる点で共通する。緑色を基調とする釉が掛かる。目跡の有無は不明。6は2層出土。7, 8は口縁端部を外側に肥厚させるタイプでいわゆる捏鉢である。7は10層出土。

### 甕

口縁は端部を内側に折り込み肥厚させ、褐色釉は比較的に厚く掛けられている。「流し」と呼ばれる別種の釉が頸部下から掛けられている。図64-2, 3は胴部の肩に櫛状工具による波状文が見られる。成形は粘土紐の巻き上げとロクロによる。3の底部内面には目跡が3個残っている。1は2層、2は11層、3は2層から出土。

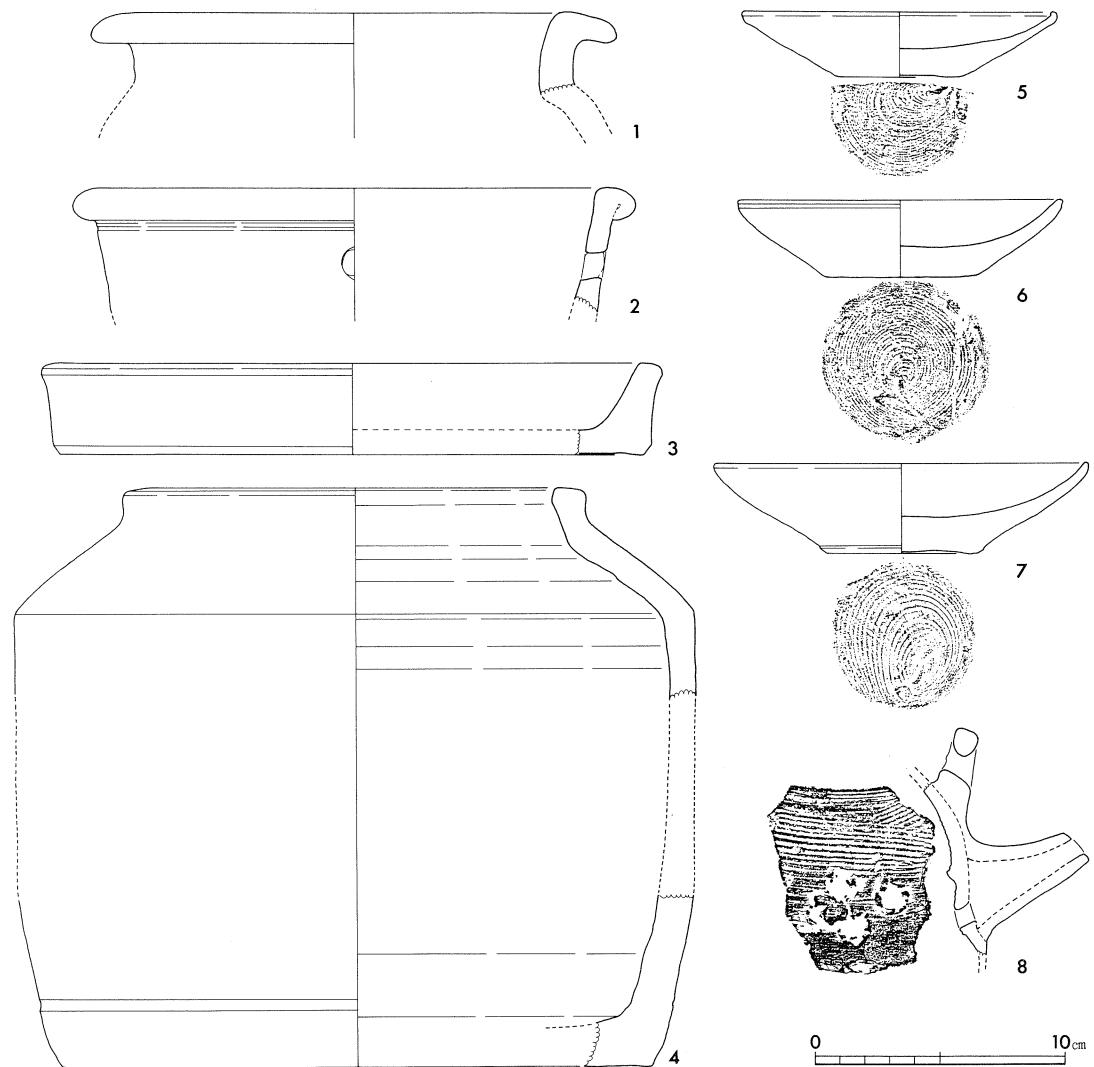


図65 陶器・素焼・瓦質土器

### 素焼き

素焼きの器には施釉後本焼きをするものと施釉をせず製品となるものがある。ここでは後者について記述する。図65-1は甕の口縁。2, 11層出土。2は口縁端部を外方に肥厚させた丸縁の下に円孔を持つ壺のようである。3は浅い皿状の物であるが蓋の可能性もある。4は胴部が筒状に張る短頸壺である。器壁は比較的に厚い。5, 6, 7は糸切り底を持つ皿である。7は内面と外面の一部に煤の付着が見られることから灯明皿として使用した可能性もある。7, 9層出土。

### 瓦質土器

図65-8は瓦質の土瓶で、注口と取手を付ける耳を持つ小片である。内面は粗い櫛目状の条線が施されている。茶釜形のものであろう。

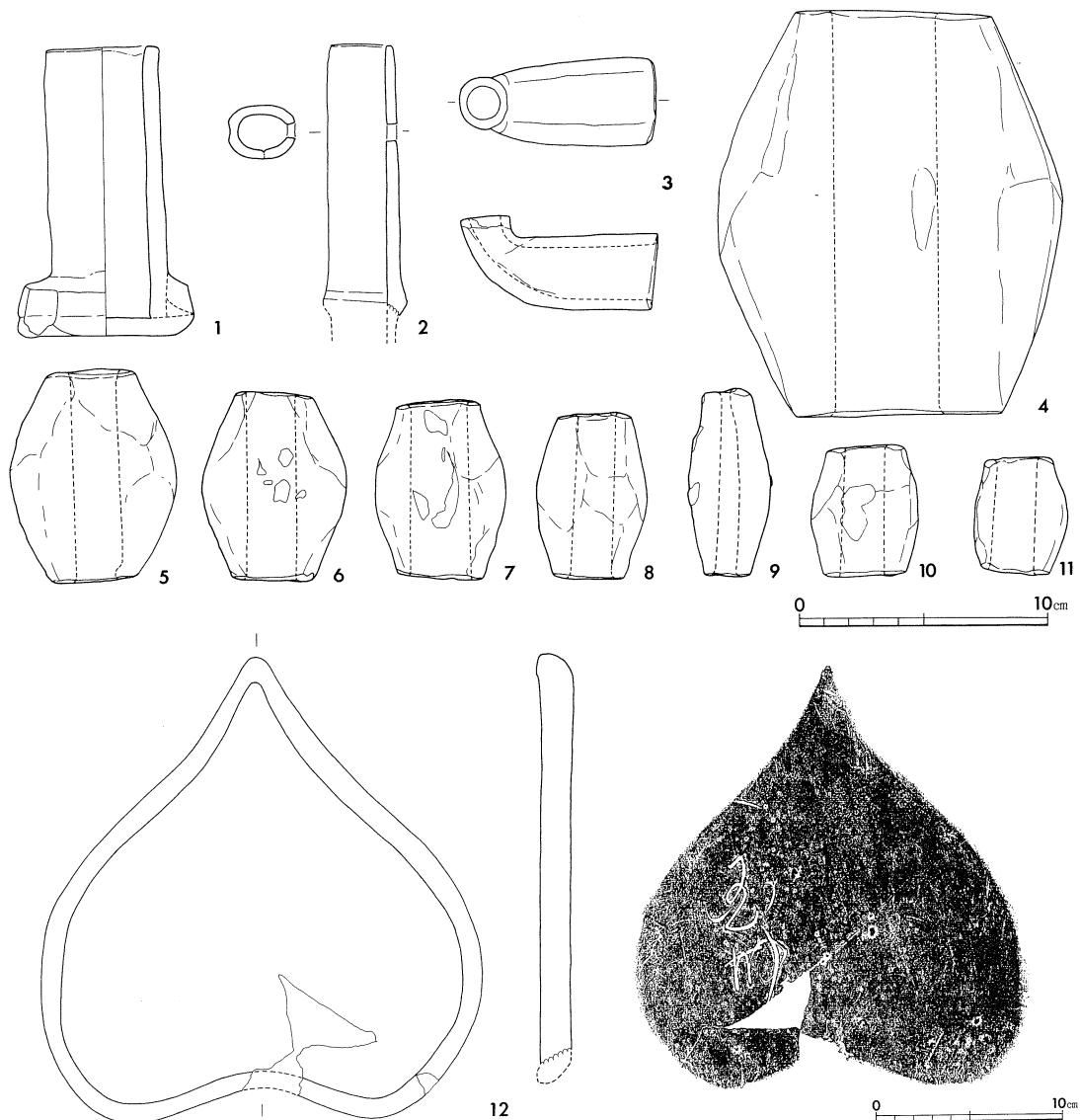


図66 陶 器 類

#### その他の陶製品

器以外の陶製品も出土している。すべて褐色釉を施す点で共通している。図66-1は線香立てであろうか。9層出土。2は竹をまねたもので節、筋を表現しているが側面に小円孔が穿たれている。用途は不明。3は煙管の雁首で、実用品としては大形である。土垂は65個出土している。図示したのは重量分布から分類した代表的な物である。4は3,650 gを計り最大の個体である。12は逆ハート形を呈する製品で、縁は若干作りだしている。上面には褐色釉を掛けている。裏面にはヘラ状工具で「国助」と線刻してある。正確な用途は不明であるが、鍋敷きあるいは花器を載せる台のようなものであろうか。9層出土。

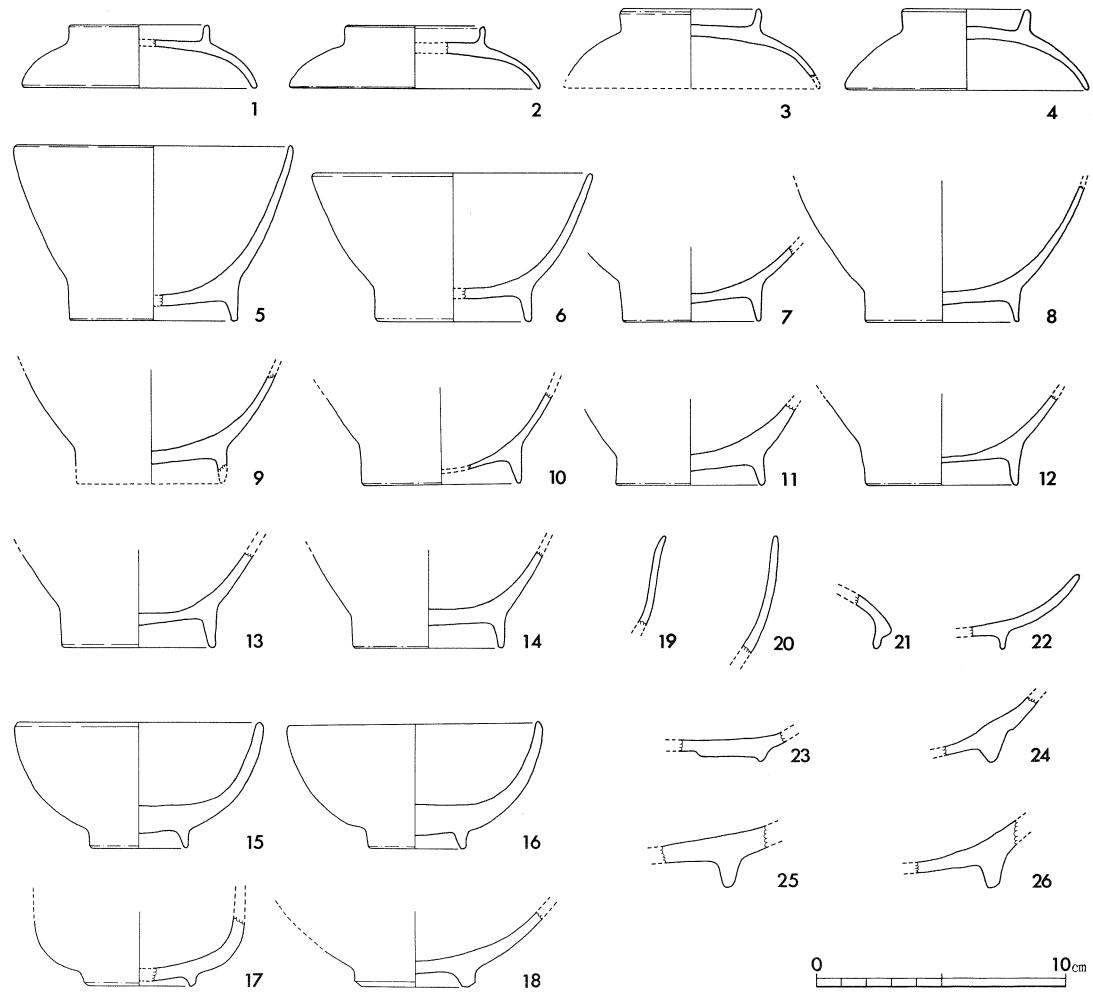


図67 磁 器

## 2. 磁 器

蓋（図67-1～4）は広東形碗の蓋である。1は外面に網干山水文、2は外面に梵字文、内面に花文で1層出土。3は外面に稻束と鳥、内面に花文。4の外面には帆かけ舟と芭蕉の葉が描かれている。

碗は、垂直に立ち上がる高台から逆ハの字状に広がる体部を持ついわゆる広東形碗（5～14）が量的に多い。すべて外面には染付けが施されている。5は5, 7層から出土。7は2層出土。8には松束文が描かれ、内面には窯道具の熔着痕が残っている。9は山水文。10は5層出土で、流水文に墨はじき技法による紅葉文が描かれている。11は9層、12は8層出土。

丸形碗（15, 16）はともに外面に二重網目文が描かれているもので、法量も近似している。16は

2層出土。18C後半の長崎県波佐見窯跡の製品に近いものと考えられる。17は1,2層から出土し、低い高台から丸みをもって続く胴部が垂直に伸びる形態を持つ。18は青磁釉を掛けた碗であろうか。19は8層から出土した端反碗の小片で、外面に毘沙門亀甲文が描かれている。20は18C中葉から末葉の肥前産の青磁染付碗である。

21は外面に牡丹文を描く段重の蓋で18C末から19Cにかけてのものと考えられる。22は高台付きの皿で、2層から出土。23は内面に牡丹唐草文を描く蛇の目凹形高台の皿で19C初頭の佐賀県志田窯系のものと考えられる。9層出土。25は大形の皿の高台部分で、内面に染付があるが文様は不明。24, 26は徳利の底部片である。

注) 磁器については佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏から御教示を受け、これを参考に記述をおこなった。したがって文責の一切は調査担当者にある。

### 3. 瓦

物原出土の遺物のうち量的に他を圧倒するのが瓦とその窯道具である。出土した瓦はすべて施釉されたいわゆる釉薬瓦で、無釉還元炎焼成の燻瓦は含まれていない。釉薬の色調は個体差が著しく一概にその典型を示し得ないが、瓦の破断面の観察から比較的に堅緻な焼き上がりを示す個体は暗褐色、暗茶褐色を呈するものが多い。逆に焼成のあまいものは黒色に発色する傾向にある。施釉範囲は桟瓦の場合、尻部を除く凹面を基本とし、両側辺および頭を除く凸面に釉は掛からない。釉薬の掛かりは概して厚く、瓦当文様の細部が判別できない個体もある。施釉された瓦の表面は光沢があり、色調の同一性と相まって石見地方で一般的に生産された陶器の代表である甕（飯銅）と近似した印象を与える。

#### 瓦の分類

屋根葺の基本形態の違いで大きく二通りに分けられる。本瓦葺は平瓦と丸瓦を交互に組み合わせて屋根を覆うもので、古代寺院以来の伝統をもつ型であり、一方、桟瓦葺は断面S字状を呈する瓦（桟瓦）を基本とし、本瓦葺にヒントをえて近世前半に考案されたと言われている。

仁右エ門山遺跡では若干の例外を除いて、後者を構成する瓦群を専ら生産していたようである。桟瓦類ではもっとも数多く必要とする桟瓦、妻側を納める袖瓦、唐草文様の瓦当を持ち軒先に並ぶ軒桟瓦、建物の妻側の破風に葺く掛桟瓦などがある。丸瓦類は本瓦葺と同様の丸瓦、軒丸瓦等がある。棟積瓦類には輪違い、熨斗瓦、青海波、雁振、棟止瓦がある。棟飾りには鳥伏間、鬼瓦などがある。以下、順に説明する。

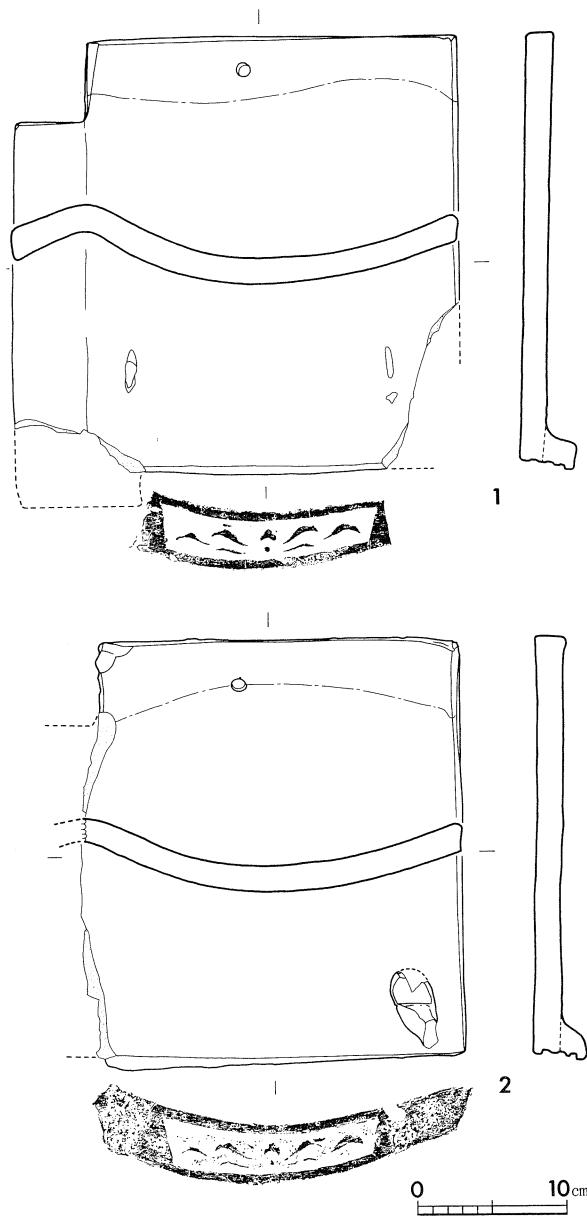


図68 軒棧瓦 (1)

### 軒棧瓦類

瓦当文様は小形の中心飾りから端部の肥厚する2対の唐草が外反し、その外方に唐草の上段と同形態の子葉が外反する均整唐草文である。個体によって文様の再現性は異なる。瓦当のつくものでは、軒袖瓦、軒隅瓦がある。

図68-1は棧部前面を欠くが三巴の小丸(万十あるいは小巴とも呼ばれる)が付くものである。長さ28.5cm、幅29.8cmを測る。瓦当文様は退化した均整唐草文である。瓦当部は棧瓦に粘土紐を帶状に接合して作りだしている。

釉薬は暗褐色を呈し、尻を除く上面および瓦当裏面に掛かっている。尻には中心よりややそれた位置に釘穴が1つ開く。

凸面の瓦当寄りには左右に細長い2つの窯道具熔着痕がのこる。これは棒状の窯道具を用いていたことによると思われる。1層出土。

2は棧部を欠くが、小丸の付かない軒棧瓦である。長さ28cmを測る。瓦当には1同様やや退化した均整唐草文で焼成時の灰もしくは砂粒の付着により文様の細部が明確ではない。暗茶褐色の釉が掛かる。瓦当寄りの上面左隅には梢円形の窯道具が熔着している。これを見ると下半は瓦の圧痕により平坦になっており、熨斗瓦等を立て並べて窯詰めしたと考えられる。施釉の範囲は1と同じで、釘穴は1つ開く。2層出土。

ている。これを見ると下半は瓦の圧痕により平坦になっており、熨斗瓦等を立て並べて窯詰めしたと考えられる。施釉の範囲は1と同じで、釘穴は1つ開く。2層出土。

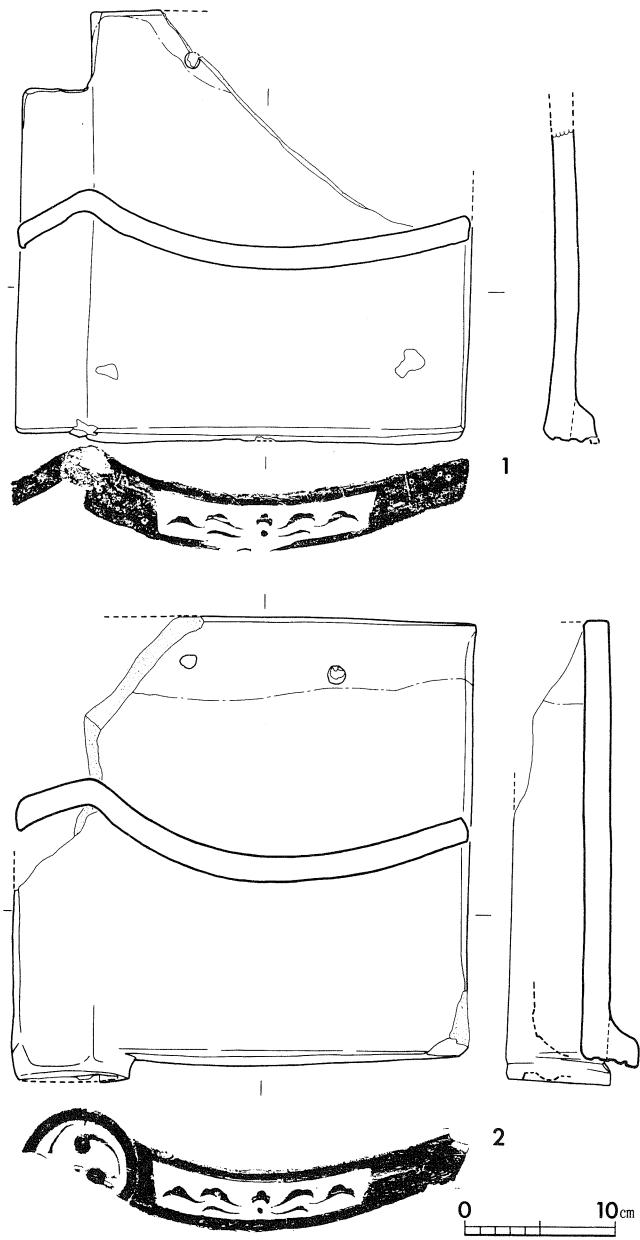


図69 軒桟瓦(2)

図69-1は小丸の付かない軒桟瓦である。長さ28.7cm、幅30cmを測る。瓦当文様の子葉はやや肉厚になっている。瓦当の頸は下面でやや傾斜をもち、瓦当面が少し膨らみぎみになっている。

茶褐色の釉は一部尻際まで達しており、切隅の軒桟瓦の可能性もある。釘穴は棟寄りに1つ確認できるのみであるが、位置から推定するともう1つ平部寄りにあった可能性がある。凸面調整は棟部が縦ナデ、他は横ナデである。

不整形の窯道具の熔着痕が2つ瓦当寄りの凸面の左右に残る。ハセとは異なる形状の窯道具を使用したと考えられる。2層から出土。

2は軒桟瓦の棟部に反時計回転の三巴文の小丸のつく軒桟瓦である。長さ29cm、幅30cm、小丸の直径7.5cmを測る。瓦当左隅は葺上げの際に同様の瓦の小丸が覆うため納まりのための面取りが施されている。凸面は横方向の、棟部は縦方向のナデで調整されている。

釉は暗褐色を呈し瓦尻には至っていない。釘穴は尻の左右に2つ開け

られている。明確な窯道具の熔着痕は認められない。5層から出土。

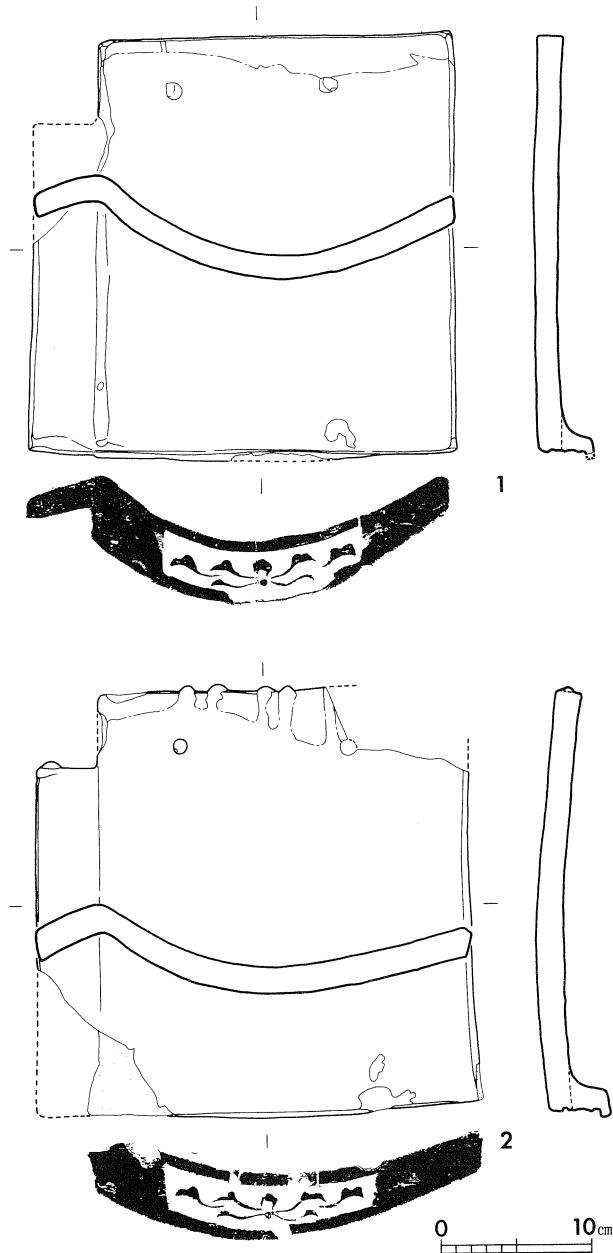


図70 軒桟瓦(3)

図70-1は小丸の付かない軒桟瓦である。長さ28cm、幅28cmを測る。瓦当文様は同様の均整唐草文であるが、従前の資料とはちがい文様を構成する各単位に立体感があり、全体的に伸びのある表現になっている。焼成は良好では断面は灰白色、釉は茶褐色を呈する。凸面は棟部が縦ナデ、他は横ナデである。桟の切り込みの一部を欠くが焼き歪みも少なく比較的良好な資料の一つである。

釘穴は尻に2箇所あり、窯道具の熔着痕は頭の左右に残る。9層出土。

図70-2は小丸の付かない軒桟瓦である。縦28.5cm、幅29cmを測る。同図-1と同様の特徴を示す均整唐草文であるが文様の構成単位はこれより更に肉厚で、立体的である。あるいは同範の可能性もある。破断面は淡灰白色を示し焼成は良好であるが、釉は全体的に銀ねず色を呈し風化の加減もあろうが光沢はあまりない。また、尻部付近は裸胎であるが釉が玉垂れ状になっていることから比較的に粘性の強い釉薬を使用していたと考えられる。

凸面調整は横ナデである。釘穴は2箇所あり窯道具熔着痕は不整形なもののが1箇所残っている。12層出土。

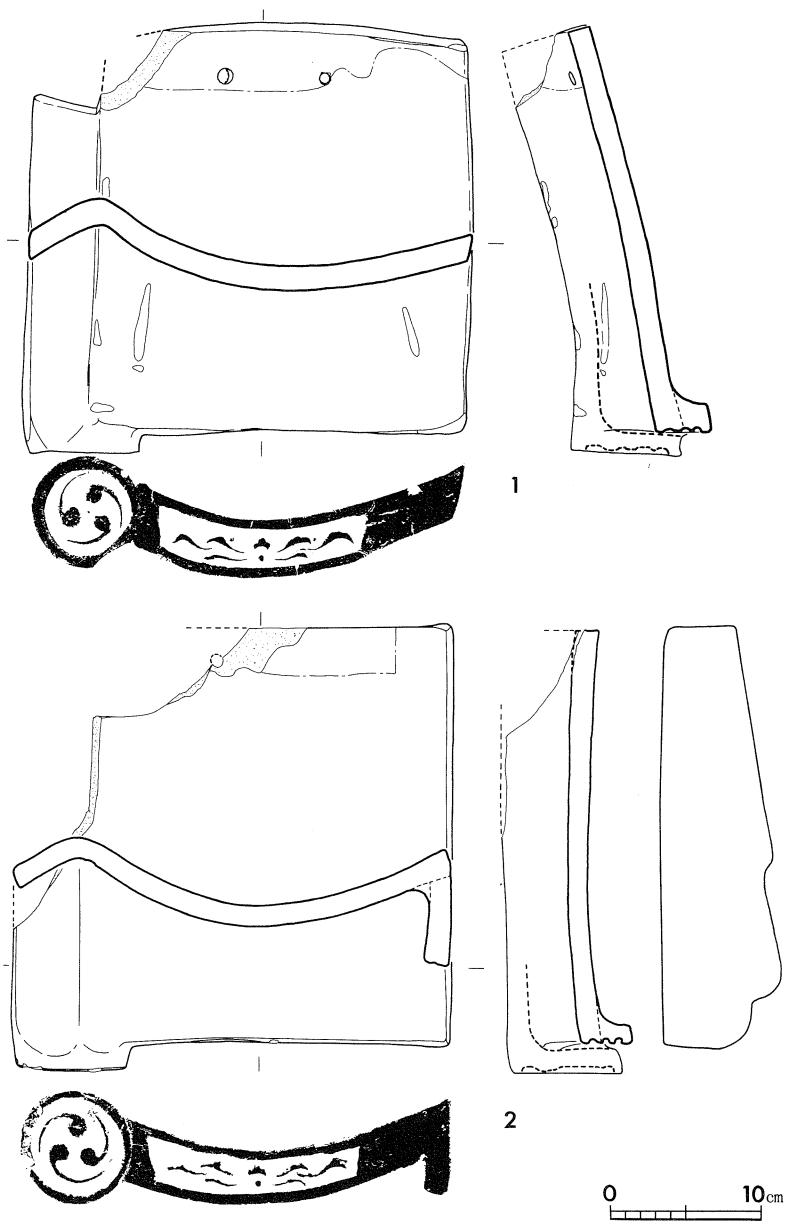


図71 軒桟瓦(4)

草文で、小丸は時計回転の三巴文である。尻部をやや欠くが釘穴は1つのようである。袖の板には特別の装飾は認められない。

図72-1も軒袖瓦であるが、前例のものとは相対する位置に葺くため、袖の位置が逆になっており、桟および棟部の切り込みを欠く点が異なっている。縦28.4cmを測る。

同図-2は袖瓦の破片であるが、袖の板が頭まで伸びている点に特徴がある。瓦と袖板の接合部

図71-1は小丸付きの軒桟瓦である。縦28cm、横29.6cm、小丸の直径7.4cmを測る。瓦当文様は図69-1と同様にやや退化した均整唐草文で、小丸は反時計回りの三巴文である。瓦当平部側は面取りが施されている。

焼成は比較的良好で、袖は茶褐色を呈する。窯道具熔着痕はハセと思われる細長の痕跡が2ヶ所残る。釘穴はやや間隔を狭くとり2箇所に穿孔されている。

#### 軒袖瓦、袖瓦

図71-2は軒袖瓦で、平部の側辺に2段に屈曲する板状の袖が取り付けられている。縦27.5cm、横29.2cm、小丸の直径7.5cmを測る。瓦当文様は同図-1よりやや退化した均整唐

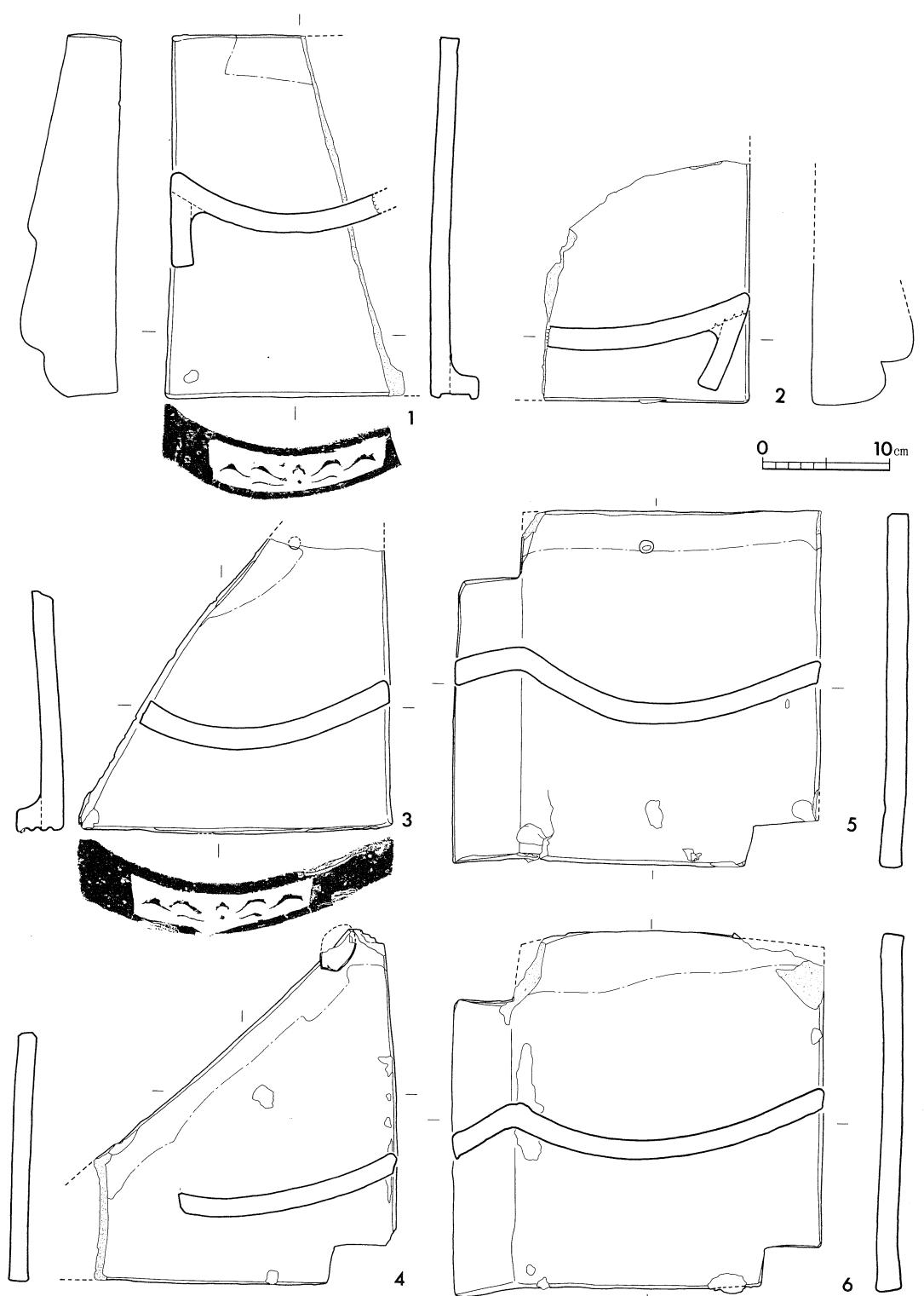
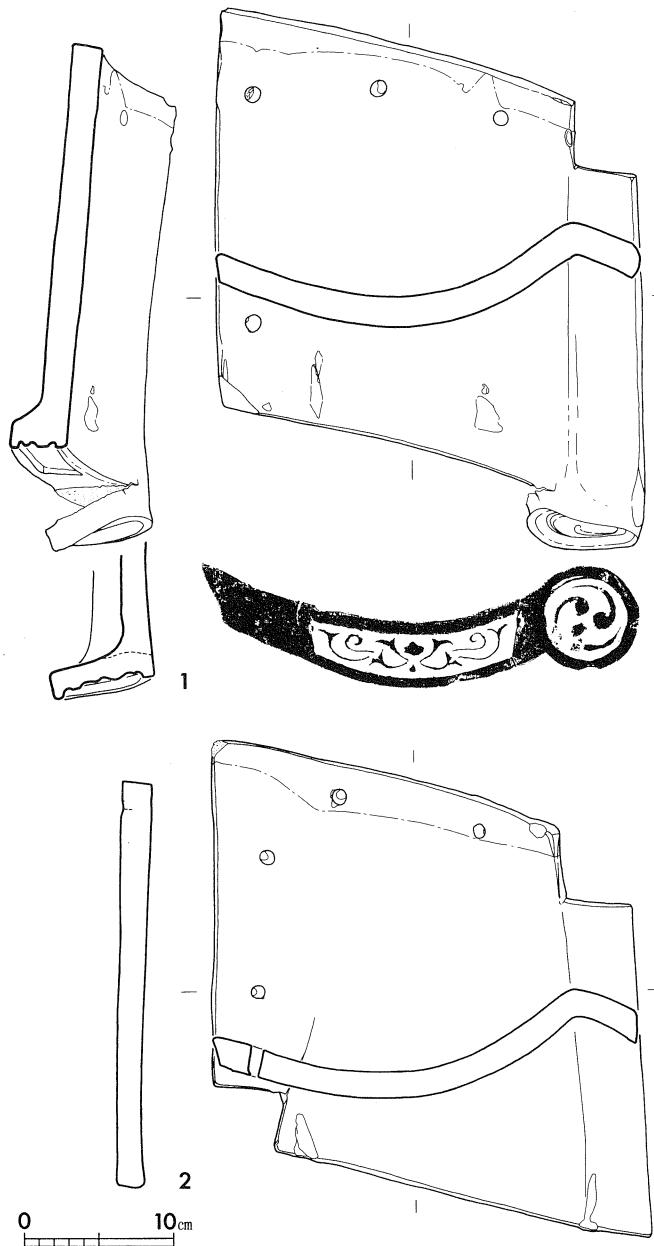


図72 軒桟瓦・棟瓦

には縦方向の櫛目状の条線が施され、さらに、支持粘土で接着を強化する手法が採られている。

### 軒隅瓦、隅瓦

図72-3は棟部を隅切した軒隅瓦である。分割面には凹面側から約3分の2程度まで分割線が残り、凸面側3分の1に焼成後の分割破面が残る。切断面に接して釘穴が1つ穿孔されている。釉薬は分割線に一部達しているが分割破面には掛からない。瓦当文様は退化した均整唐草文で、明確な窯道具熔着痕は認められない。2層出土。



同図72-4は棟部を隅切りした隅瓦である。前例の軒隅瓦とは異なり分割面は面取りが施されており釉はこの分割線から2cm前後の間隔を置いて施釉されている。釘穴はなく尻に扁平な窯道具の一部が熔着している。

この2例の場合前者が焼成後に分割使用するのに対し、後者は焼成時には目的とする形態が既に完成している点で相違している。

### 棟瓦

瓦を葺く際に最も量が多いもので、遺跡からの出土量も最も多い。石見地方では「なかぶき」ともゆう。

平面四角形の左に棟を作り、前面（頭）と平部側辺、後面（尻）と棟部側辺の間に矩形の切り込みが入る。釉薬は尻を除く凹面に掛けられ、頭と両側辺を除き凸面は裸胎である。

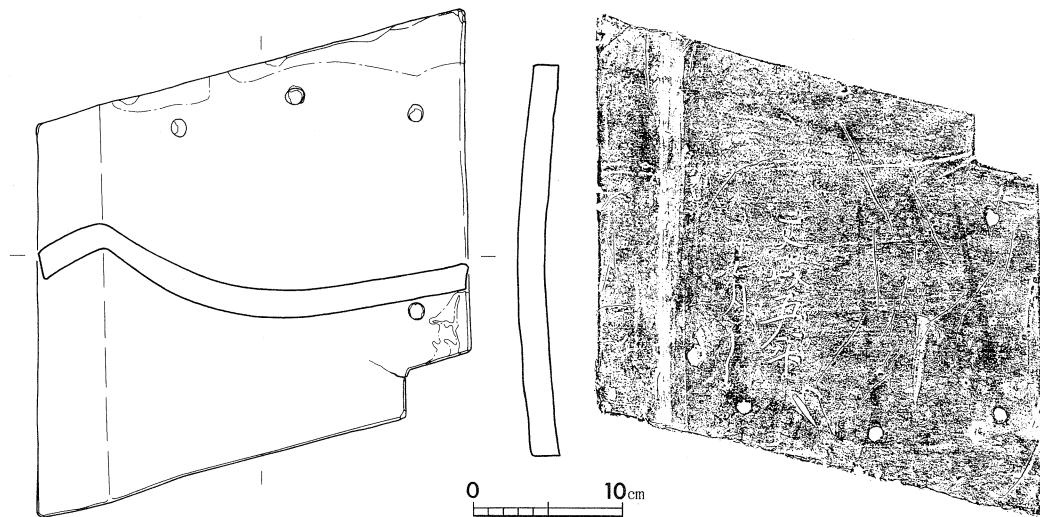


図74 掛 桟 瓦

図72-5は縦27.7cm、横28.9cmを測る。釘穴は尻中央に1つ穿孔されている。凸面は横ナデ調整。凹面の頭側に窯道具の熔着痕が残る。同図-6は縦28cm、横29.4cmを測る。凸面の桟部と平部は縦ナデ、その他は横ナデ調整が観察できるが、凸面中央には部分的に布目の圧痕が残っている。横ナデとの切り合い関係が必ずしも明確ではないが、調整以前の圧痕ではない。2層出土。

### 掛桟瓦

屋根の破風に葺く瓦である。平面菱形を呈するが、左右に葺き分けるためこれに合わせて桟の位置が異なる。破風で斜めに葺かれるため、釘穴は尻と平部側辺に2対穿たれている。

図73-1は破風に向かって右側に葺かれるもので、桟は右につく。三巴の小丸と均整唐草文の瓦当がつく。縦は凹面中央で26.7cm、横28.3cm、小丸の直径7cmを測る。

瓦当文様は従前の軒桟瓦のそれと異なる。中心飾りから伸びる2対の唐草の先端は二股に分かれ、さらに蕨手に巻き込む短い子葉と二股の子葉がそれぞれ1対ずつ派生する均整唐草文である。文様の彫りは深く立体感があり、軒桟瓦の瓦当文様と比較して作りが丁寧である。この均整唐草文は掛桟瓦に限って使用されていたようである。

瓦当左側は面取りが施されている。凸面は瓦当部を除き裸胎で、桟部は縦ナデ、他は横ナデ調整である。釉薬はやや明るみのある褐色を呈する。凹面瓦当寄りには窯道具の熔着痕が残る。

同図-2は瓦当を持たない種類の掛桟瓦である。縦は凹面中央で27.1cm、横28.5cmを測る。1と同様に桟は右に付き、釉の色調、掛け方、釘穴など共通する特徴をもつ。窯道具の熔着痕は桟の肩と平部切込みに近接する位置に見られる。

図74は桟が右に付く掛桟瓦である。凹面中央で縦26.3cm、横28.7cmを測る。建物の妻に接する位

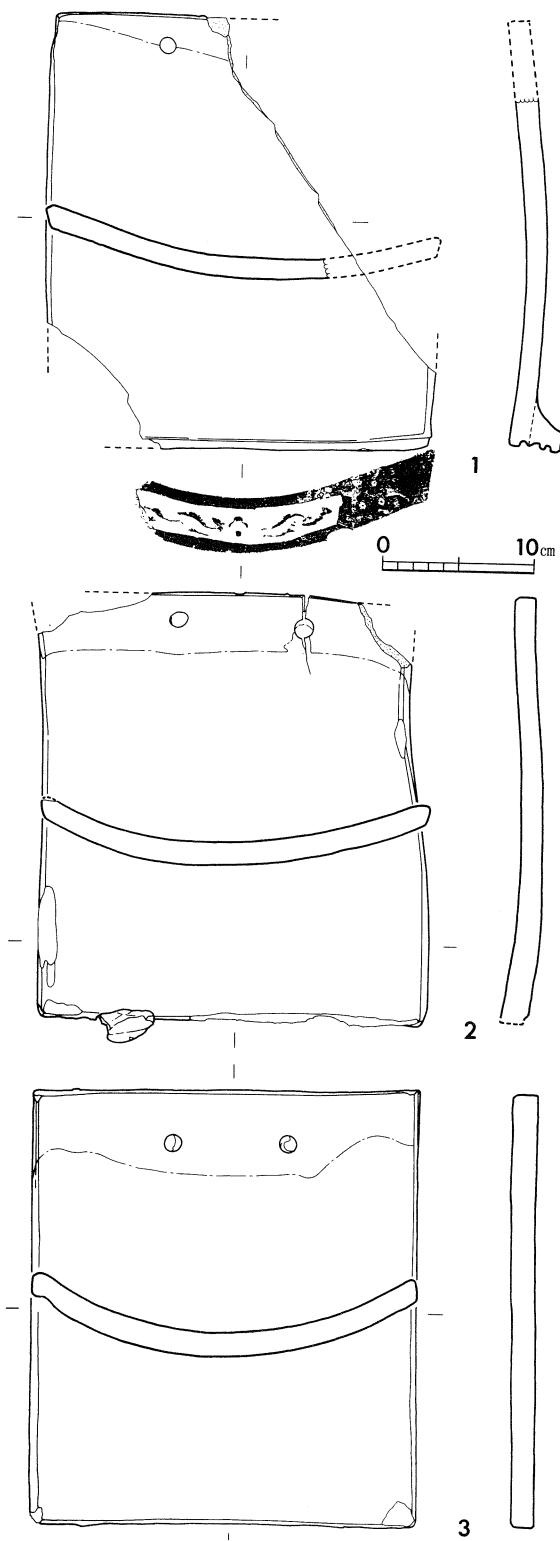


図75 平瓦

置に葺くためか、棟部の切込みは無い。釉は比較的明るい茶褐色を呈し、焼成は良好である。凸面調整は棟の裏が縦方向のナデのほかはヨコ方向のナデのようである。また部分的にコビキ痕らしい筋が見られる。凸面の棟より尻側には「文政五年 午七月十日」の刻銘がある。この遺跡の紀年銘資料としては唯一のものである。

### 平瓦

棟瓦以外に平瓦も出土している。ただし絶対量が少ないので本瓦葺用の瓦であるかは不明である。

1は棟を持たない軒平瓦である。縦28.3cm、横25.9cmを測る。瓦当文様は軒棟瓦に見る均整唐草文と同じであるが、やや退化した形状である。茶褐色の釉は尻を除く凹面と凸面瓦当部に掛かる。側面は若干の面取りが施されている。釘穴は1つ残っているがもう1つあったと考えられる。窯道具の熔着痕は明確ではない。

2, 3は平瓦である。尻に釘穴2ヶを持つ。2は縦28.2cm、横25.3cmを測る。両側辺を若干面取りしているほか、瓦尻を除く凹凸両面に施釉されている。両面施釉されている個体はこれ以外ではなく、他の器種にも認められなかった。窯道具は不定型なものが頭の側面に2ヶ所取り付いていたようだが、あるいはモミ土の熔着であるかもしれない。他の瓦とことなり、頭を下にしてハセを尻側に取り付けて焼成した可能性が考えられる。

3は凹面施釉の個体である。縦28.5cm、横25.4cmを測る。両側面は面取りされているが右側面の凸面側に凹型台の圧痕らしき返りが見られる。使用された型台は不明であるが、棟瓦の凹型台を利用した可能性も考えられる。

### 丸瓦

図76-1～図77-1は丸瓦である。棟瓦葺では棟の一部に使われる。遺跡からは相当量出土している。長さに長短がある。

1は全長は不明であるが、体部の幅からすると短い部類に当たるものと考えられる。玉縁、体部側縁はそれぞれ平滑に面取りがなされている。筒部凹面には横方向のコビキ痕が残り、その上にタテ方向の内叩き痕がある。内叩きは叩き板の幅広の面を使用したらしく、玉縁との境に原体の圧痕が残っている。釉は茶褐色を呈し、玉縁先端を除く凸面に掛かっている。2層出土。

2は全長の短い部類の丸瓦である。長さ24.5cm、幅12.9cmを測る。玉縁から筒部にかけ連続して面取りが成されている。体部端面も幅広に面取りされている。筒部凹面にはコビキ痕が見えないほど細い筋状の内叩き痕が残されている。この内叩きは1のような板面を使わずに板の背で叩いているようである。釉は茶褐色を呈し、玉縁先端を除く凸面および側面の一部に比較的薄く掛かる。

3は釉の掛け具合も薄く非常に似かよって見える。長さ25.1cm、幅13.3cmを測る。玉縁、両側

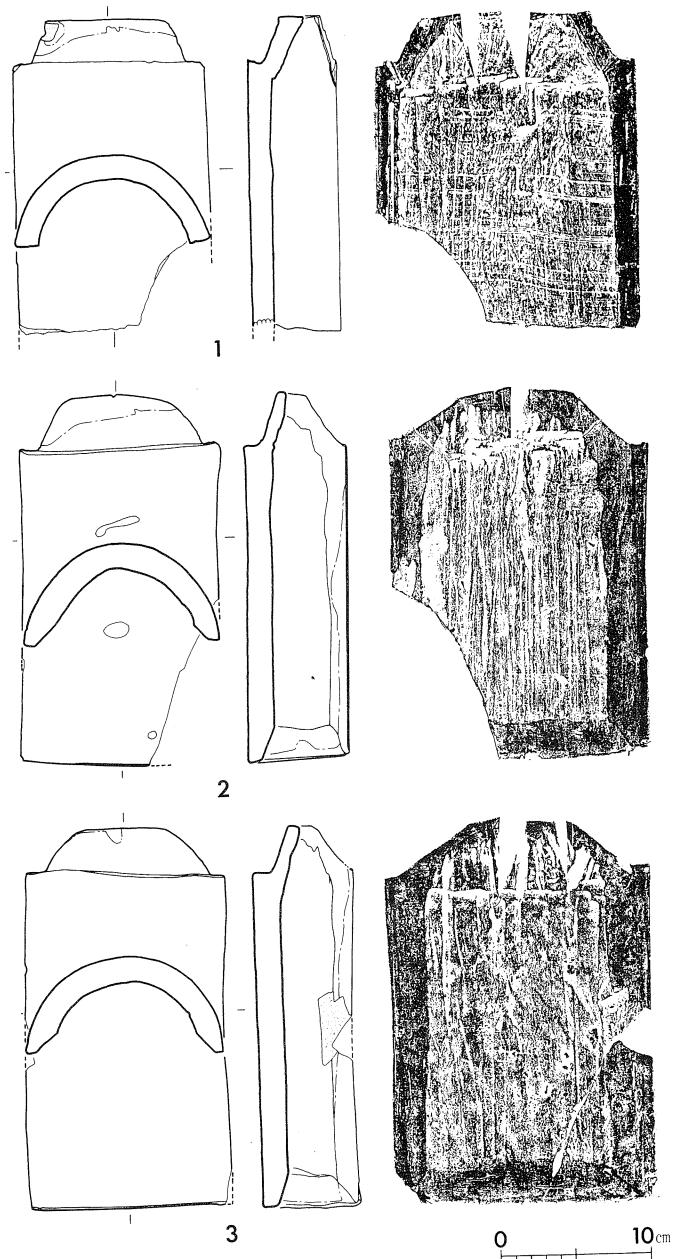


図76 丸 瓦

辺、端部の面取りも2に共通する。凹面の内叩きは幅広の叩き板の圧痕が残る。8層出土。

1は全長36.3cmを測り、丸瓦のなかでは大型のものである。全長に比べて玉縁は短く先端に向かってやや尖り気味の形状を示す。玉縁の面取り幅は狭く、筒部の面取りも、円筒の切除後の若干の調整で終えている。凹面はコビキ痕のほか幅広の内叩き痕が残るが布目圧痕は認められない。筒部に釘穴はない。窯道具の明瞭な痕跡は認められない。

#### 軒丸瓦

図77-2～図78-2は瓦当をもつ軒丸瓦である。

2は肉厚な三巴と珠文の瓦当をもつ軒丸瓦である。残存長で27cm、幅は13.7cmを測る。筒部に釘穴1をもつ。凹面には内叩き痕が明瞭に残る。側縁部は面取りされている。凸面の上下には窯道具の熔着痕が残る。

3は軒丸瓦の欠損品であるが、瓦当の直径が約17.5cmで出土品中最大の物である。側縁部は面取りが施されている。9層出土。

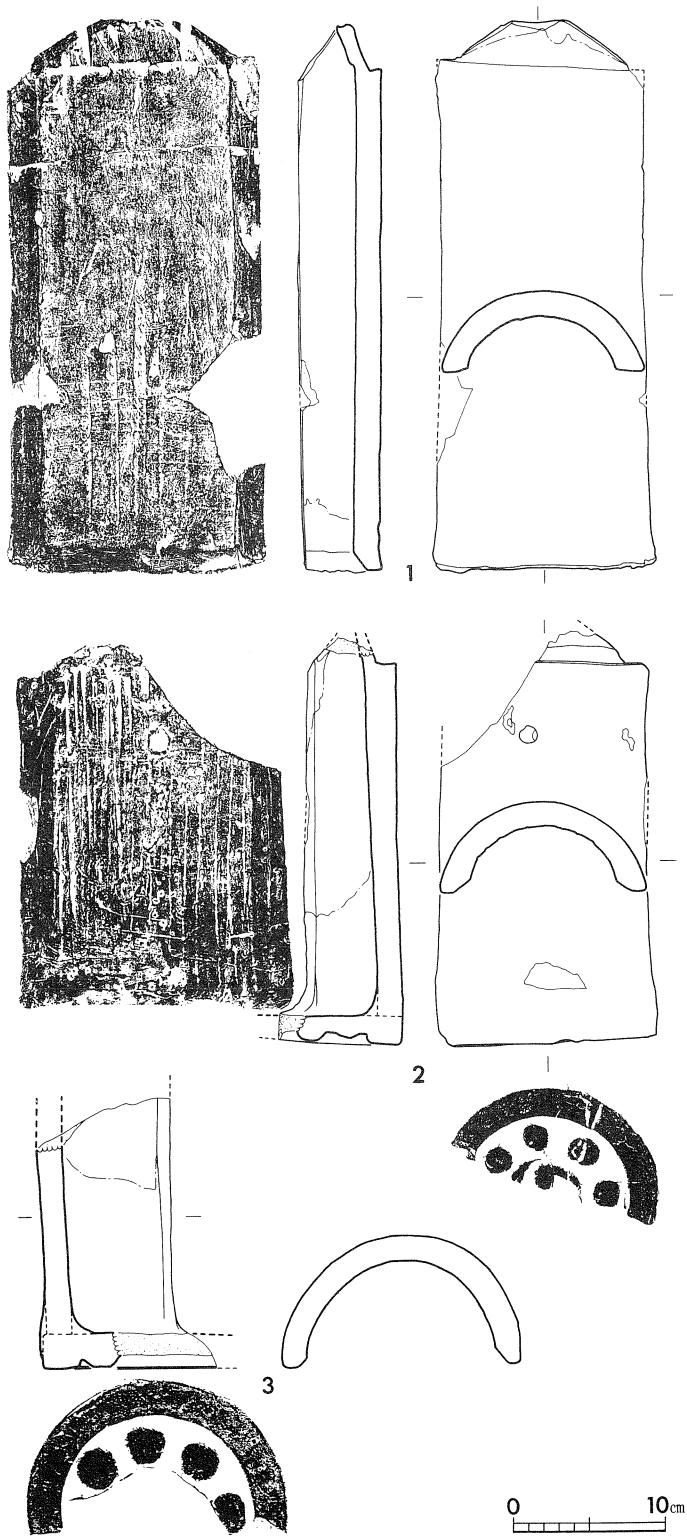


図77 丸瓦・軒丸瓦

1は全長39.8cm、幅13.5cm、瓦当直径13.8cmを測る軒丸瓦である。図77-1とほぼ同様の形態の筒部に、肉厚の三巴、珠文を配した瓦当をもつ。釘穴は筒部の中央と玉縁寄りに穿たれている。凹面にはコビキ痕、内叩痕が残る。丸瓦部と瓦当の接続部には荒い櫛目状の条線が両面に施されている。窯道具の熔着痕は筒部凸面の一部に不整形に残るほか、瓦当の両側縁側にも認められる。

2の軒丸瓦は筒部から玉縁にかけて欠損する個体で、幅12.2cm、瓦当直径14.2cmを測る。瓦当文様は三巴と珠文である。釘穴は2つあり、側縁は面取りが施されている。内面は内叩痕が残り、中央寄りに連続する指頭圧痕状の痕跡がある。

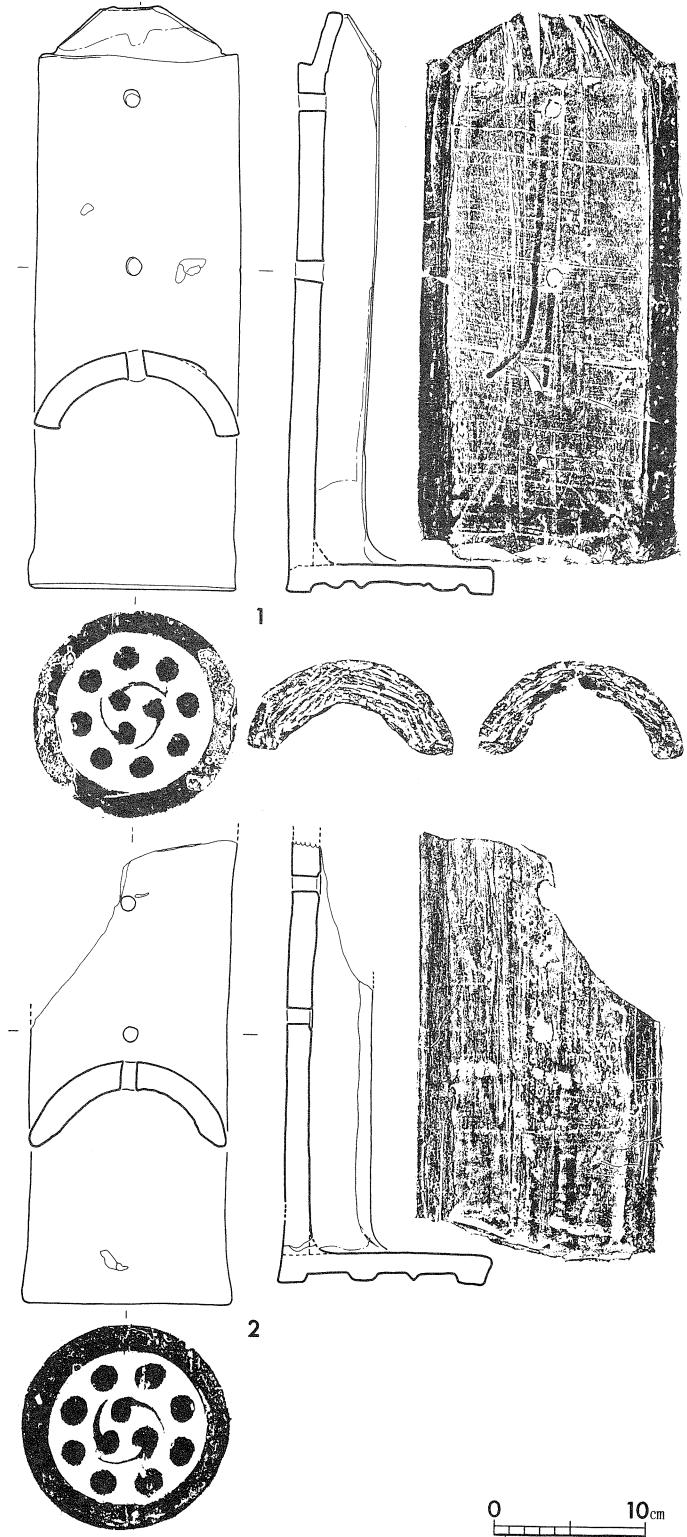


図78 軒丸瓦

## 輪違い

図79は棟積みに使う輪違いである。数多く出土しているが形態はほぼ共通している。平面および断面は丸瓦の筒部の一部と変わりはない。これは、丸瓦を所定の長さで切断した素材を輪違いに使用しているためと考えられる。内面はコビキ痕、内叩き痕が残る。釉は凹凸両面の半分もしくは3分の2程度掛かる。

1は側縁の面取りを幅広く施している。施釉は2分の1程度でハセ様の窯道具を使用したと考えられる熔着痕が認められる。内面は内叩き痕がのこる。2は側縁の面取りが左右でやや異なる。施釉は2分の1弱程度。内面は不明確ながらも変則的な凹みがある。窯道具の痕跡は不成形。3は側縁の面取りの幅が狭く、内面にはコビキ痕のほかむしろ状の圧痕がある。施釉は2分の1程度。凹面尻側の端面際に浅い条線が残っており、半截された丸瓦から所定の長さに切断するための目印であった可能性がある。この目印は4にも認められる。4,5は面取りの幅が広く施釉は3分の2程度である。この2個体の凸面の左右には施釉以前の浅い筋が認められる。切除時あるいは側面の面取り時に丸瓦を載せた凹形台の側辺の圧痕とも考えられる。

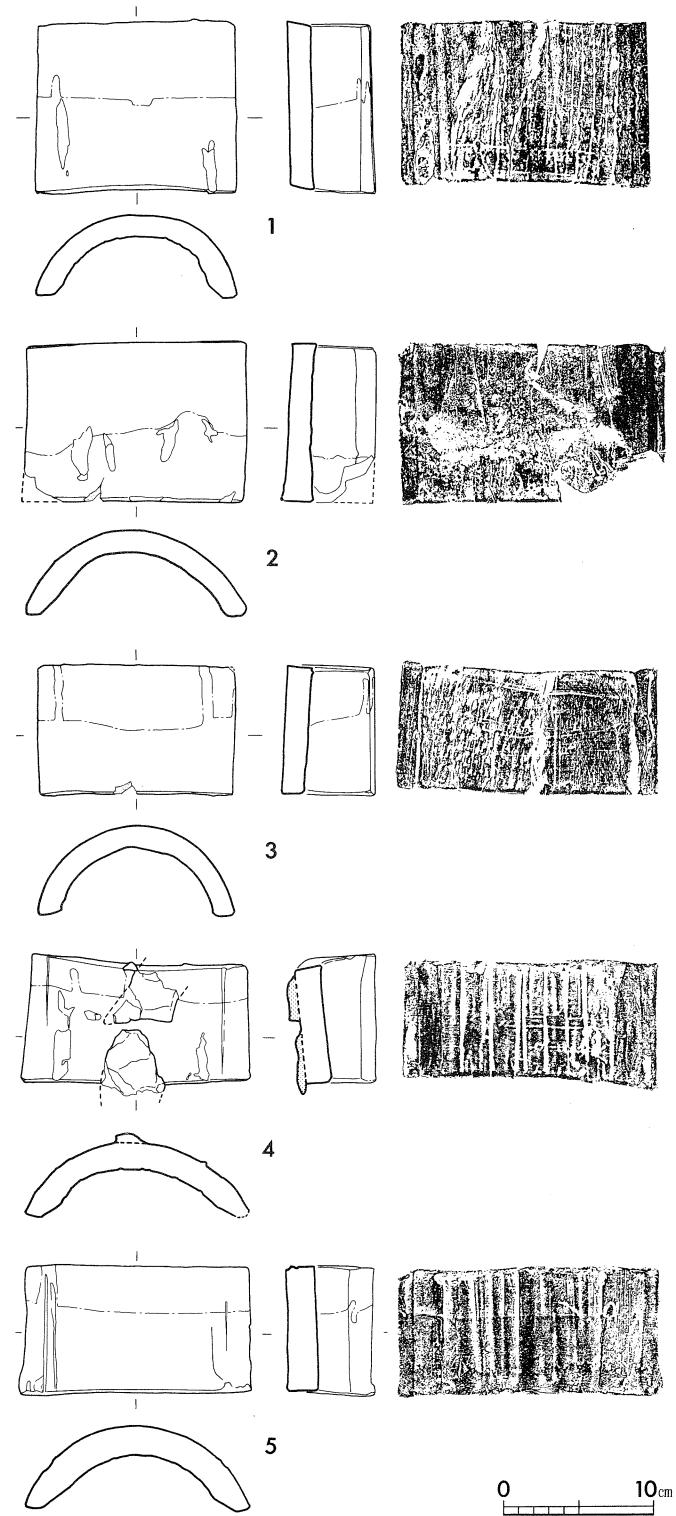


図79 輪違い

## 熨斗瓦

図80-1～図81-

2は棟積みに使う熨斗瓦である。

1は22×23cmを測る。釉薬は釘穴の付く辺を除く凸面に施されている。凹面は

2単位の条線が並行して付けられている。凸面中程には調整台の圧痕とも考えられるかすかな凹凸が認められる。2は1と同様の形態であるが、凹面に条線が施されていないものである。

3は割り熨斗と呼ばれるもので、凹面中央の分割線を境に左右対称に作られており、使用にあたり分割されるものである。釘穴は分割線側に偏って1対あけられている。凹面に条線は施

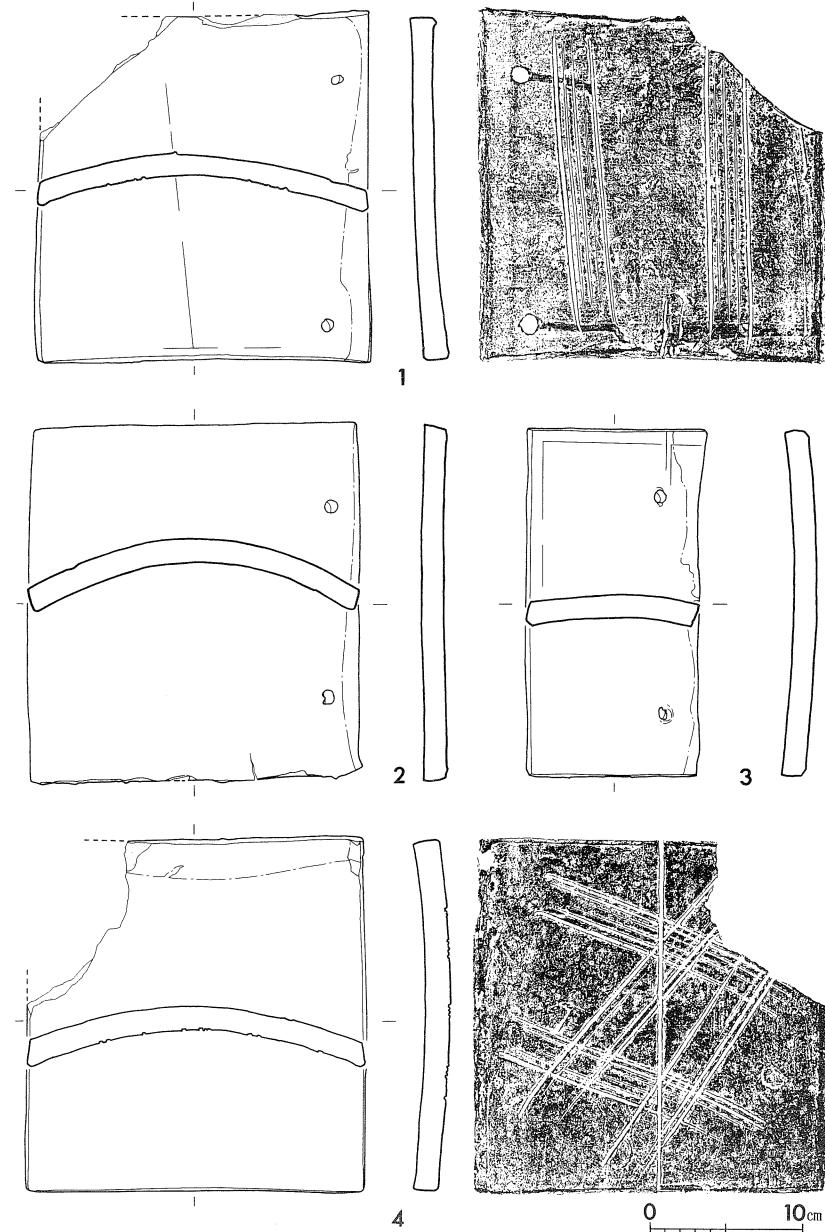


図80 熨斗瓦

されていない。凸面の2側辺には凹型台の圧痕と考えられる若干の凹凸が認められる。

4も割り熨斗である。釘穴はなく、単側辺側に露胎を残す。凹面中央に分割線があり、井形状に条線が施されている。2層出土。

1は図80-1と同じ  
タイプの熨斗瓦である。  
分割線を境に2単位の  
条線が施されている。

2も割り熨斗だが、凹  
面に条線がない。凸面  
に凹型台の痕跡らしい  
若干の凹凸が残る。

### 青海波

図81-3は青海波と  
呼ばれる棟積みの瓦で  
ある。図示したものは  
2枚が窯道具を挟まず  
熔着している。幅は熨  
斗瓦とほぼ同じで長さ  
は2分の1である。釉  
薬は凹凸両面の下半部  
に施されている。凸面  
の両短側辺寄りには凹  
型台の痕跡が認められる。凸面の施釉側には窯道具の熔着痕が認められる。

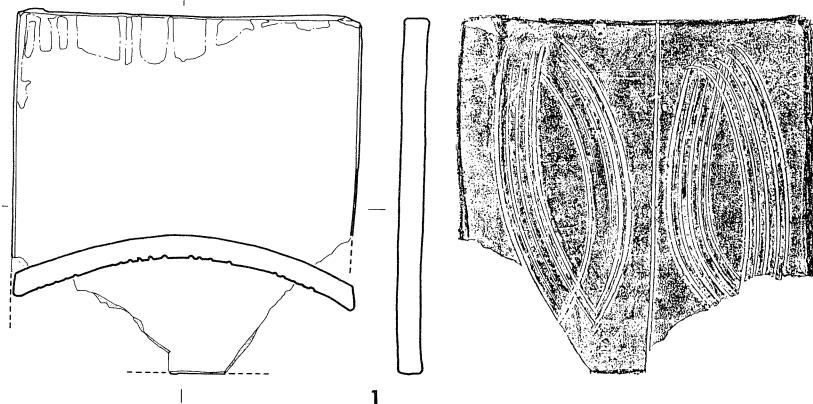


図81 熨斗瓦

### 雁振瓦

図82-1～5は棟積みの頂部に葺く瓦で、凸面を上面にし、雨の流入を防ぐための帯状の棧が付く。1は横断面がゆるいカーブを呈するものである。剝落した突帯部には接合のための条線がみられる。凸面尻側辺に平行して1条の沈線があり、釉薬もここまで施され、この中央に釘穴が一つ穿たれている。2は横断面に若干の屈曲があり、1よりやや小型の物である。尻部に釘穴はない。剝落した突帯部に条線が施されている。凹面突帯側には団子状の窯道具が熔着している。3は凸面上部に稜線をもち、横断面が山形を示すものである。尻には釘穴はない。この瓦の釉薬は、暗青灰色を呈し、光沢がなく表面はむしろざらついていて、他の瓦とは明瞭に異なっている。いわゆる鉄砂釉と呼ばれるものに近い印象を与える。4は突帯がないが、形状から雁振瓦と判断した。横断面は山形を呈し、尻には沈線はない。縦32cm、横30cmを測り他の雁振瓦に比べ大型である。5は断面がゆるいカーブを呈するタイプである。凹面に凸型台の痕跡と考えられる凹凸が残る。9層出土。

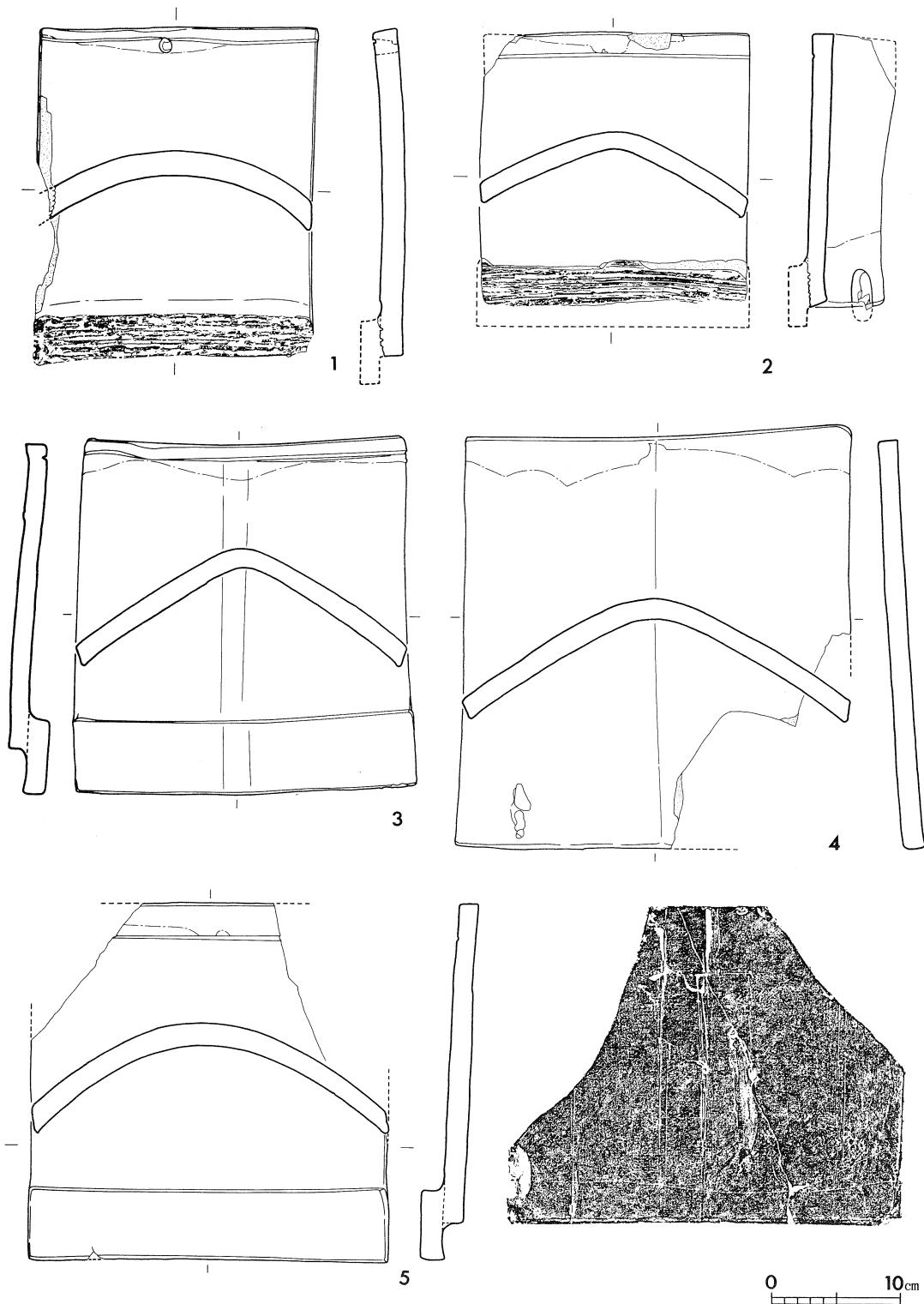


図82 雁振瓦

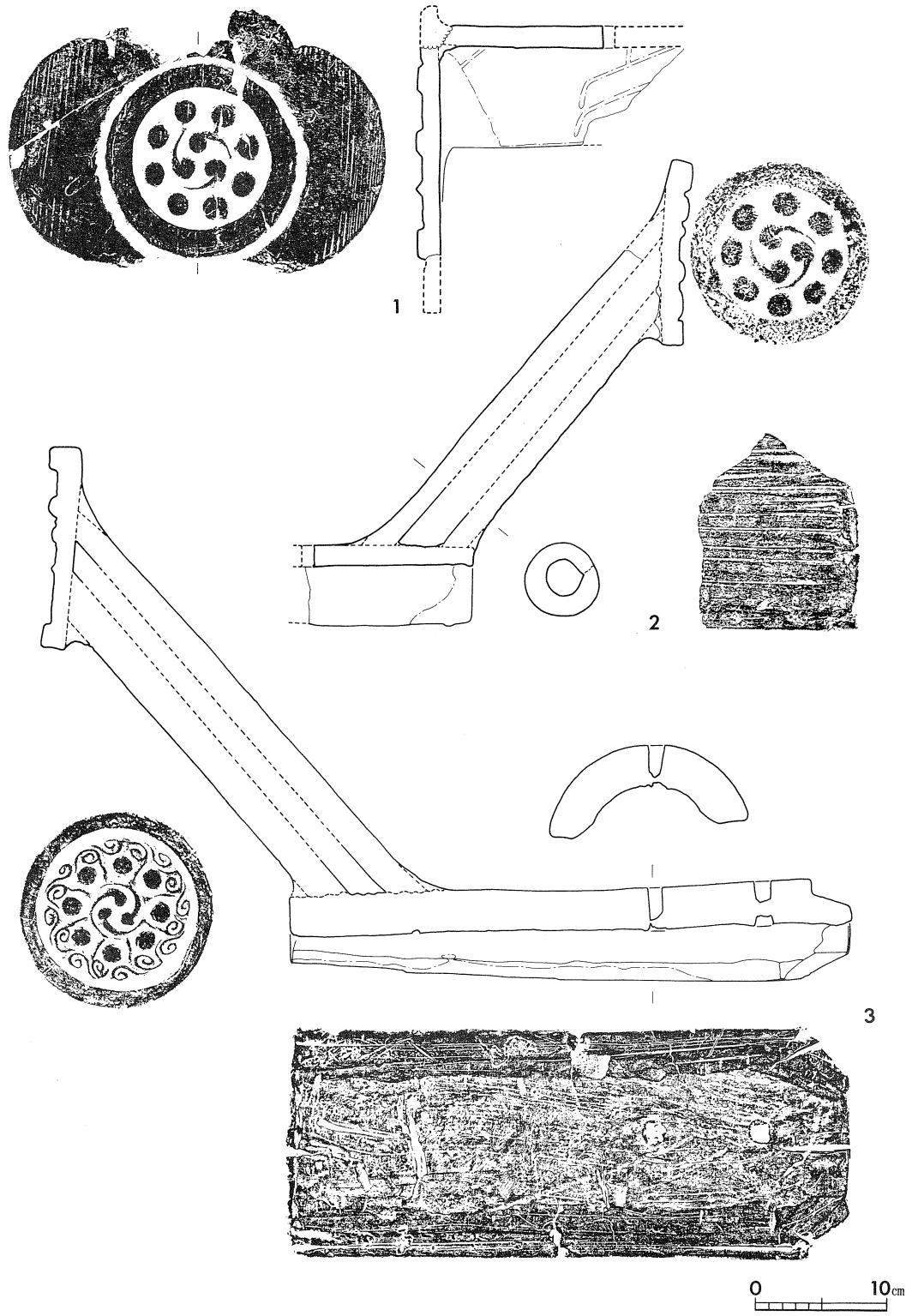


図83 棟止瓦・鳥伏間

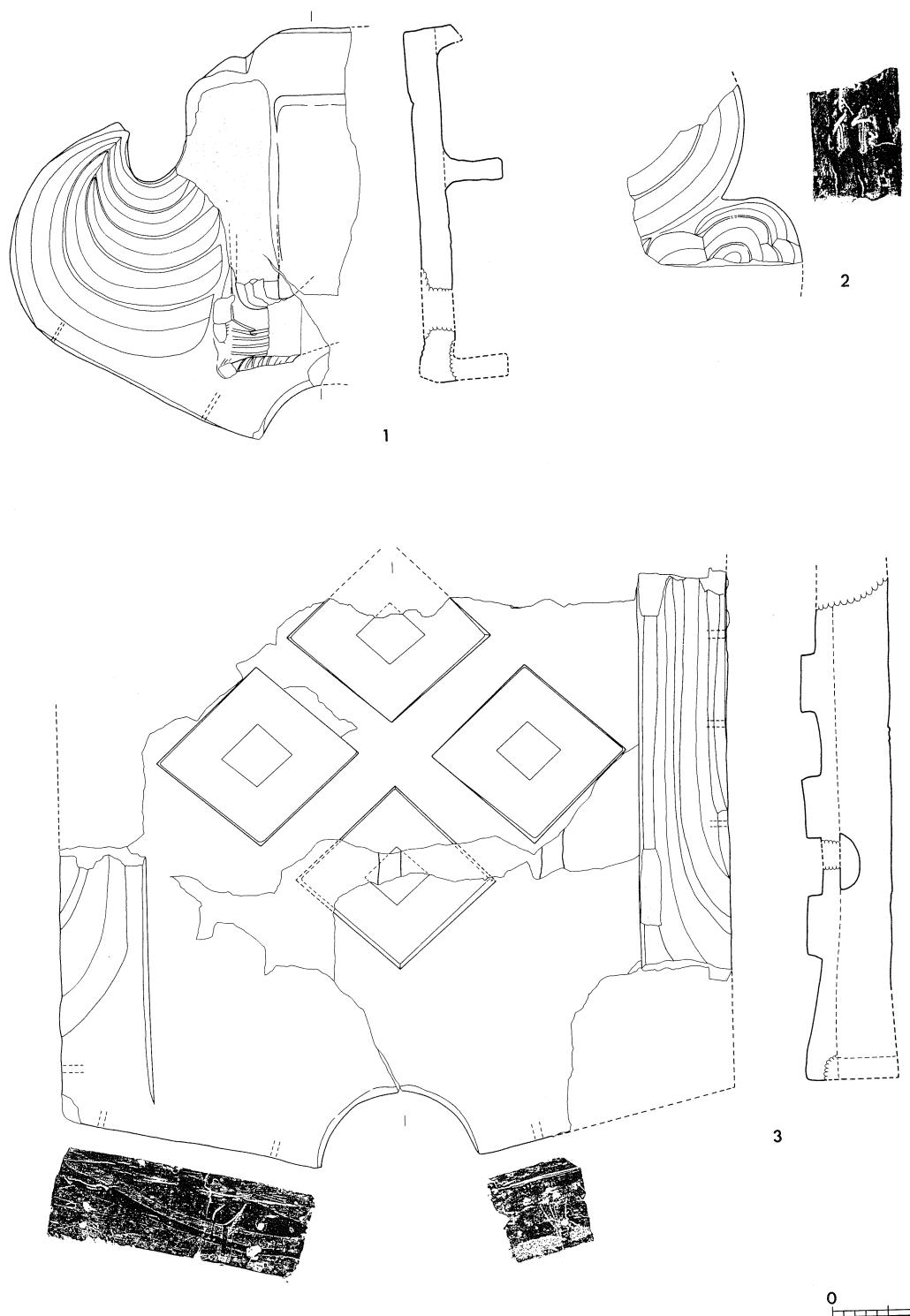


図84 鬼 瓦

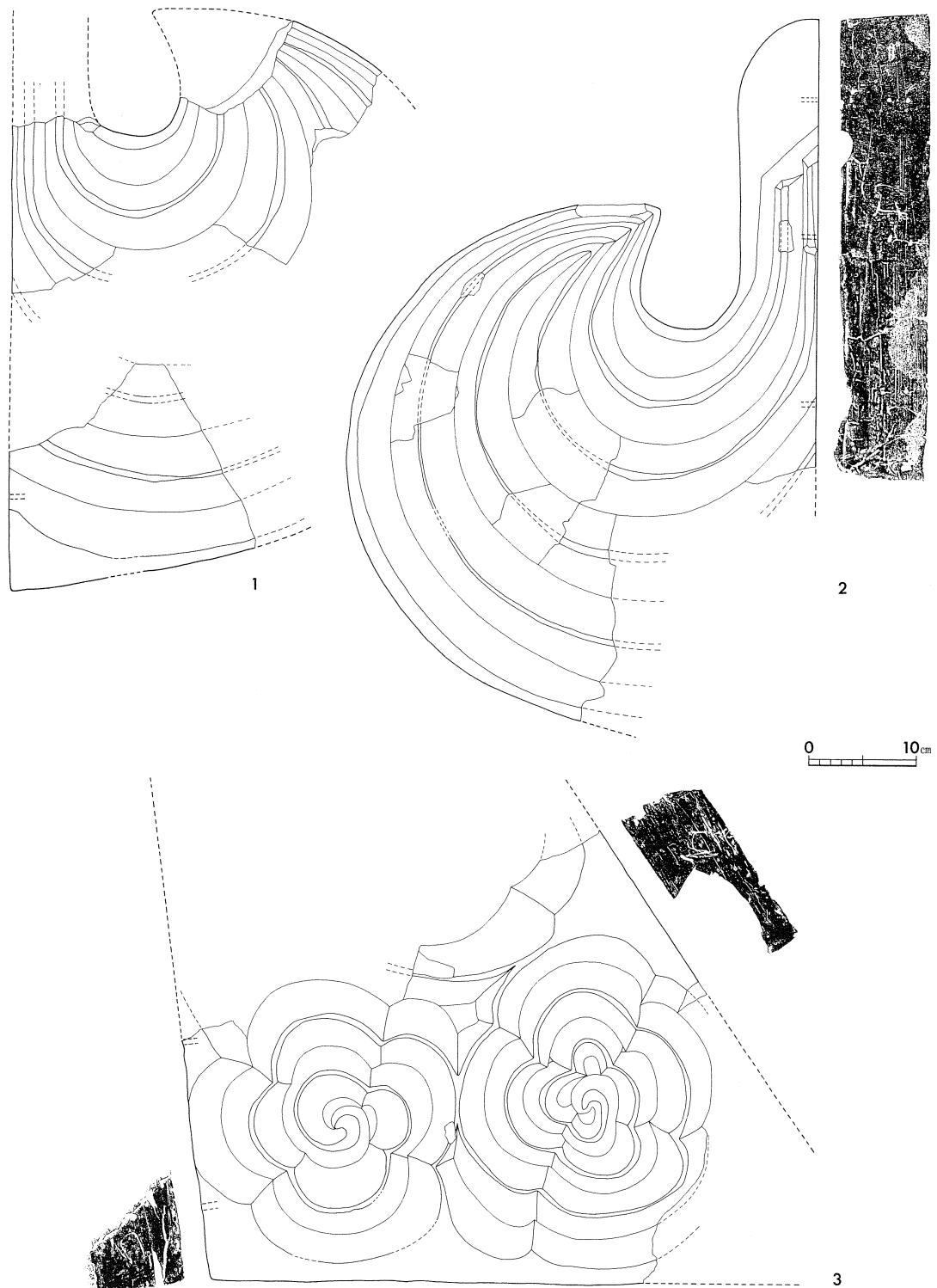


図85 鬼 瓦

### 棟止瓦・鳥伏間

棟積の両端に置く瓦である。図83-1は中央に軒丸瓦の瓦当と同じ連珠三巴文を配した花弁状の飾り板が雁振にとりつく形態である。板の外面には成形時についたと考えられる板目の痕跡がある。2層出土。2,3は鳥伏間で、鬼瓦と組み合わせて棟飾りに使われる。丸瓦の下端から斜め上方に伸びる筒の先端に円形瓦当がとりつく。3の円形瓦当文様は連珠三巴文の外周に蕨手状の文様をめぐらしている。鳥伏間としては大型の部類である。2は1層出土。

### 鬼瓦

図84~86は棟の両端に置く鬼瓦である。中、大型品は基本単位ごとに分割して作られている。図84-1は中央部に使われるもので、飾りを欠損しているが鬼面文鬼瓦と考えられる。連結用の穴が下端に穿たれている。同2は雲水を表現した部分で、側面に「作」の文字が線刻されている。欠損しているが鬼板師の名が記されていたと考えられる。同3は家紋の四つ目が陽刻された大型の鬼瓦である。連結の穴が各側辺にあけられ、鳥伏間が取りつく円形の割り抜きの左右では目印の記号「い」、「ろ」が線刻されている。図85-1,2は中心部の左右に組み合わされる部品である。2の側辺には「は」の目印が刻まれている。また熔着防止のための砂が部分的に付着している。3は花弁状の文様をあしらったもので、2側辺に「ろ」の目印がある。第86図は鬼瓦の下端に取りつく部分で、「に」の目印がある。各部品を参考に組合せを復元すると第87図のようになると思われる。

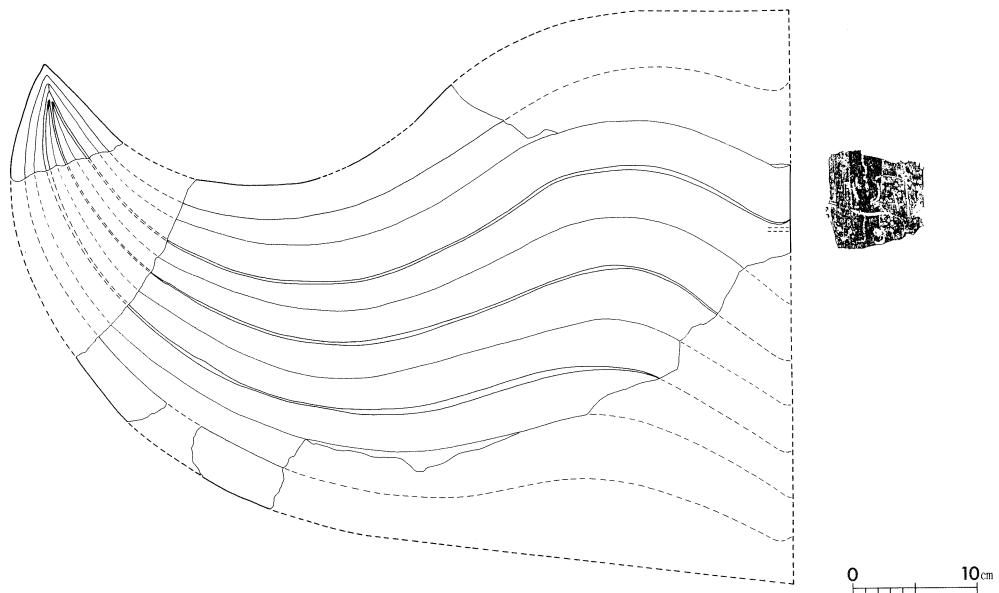
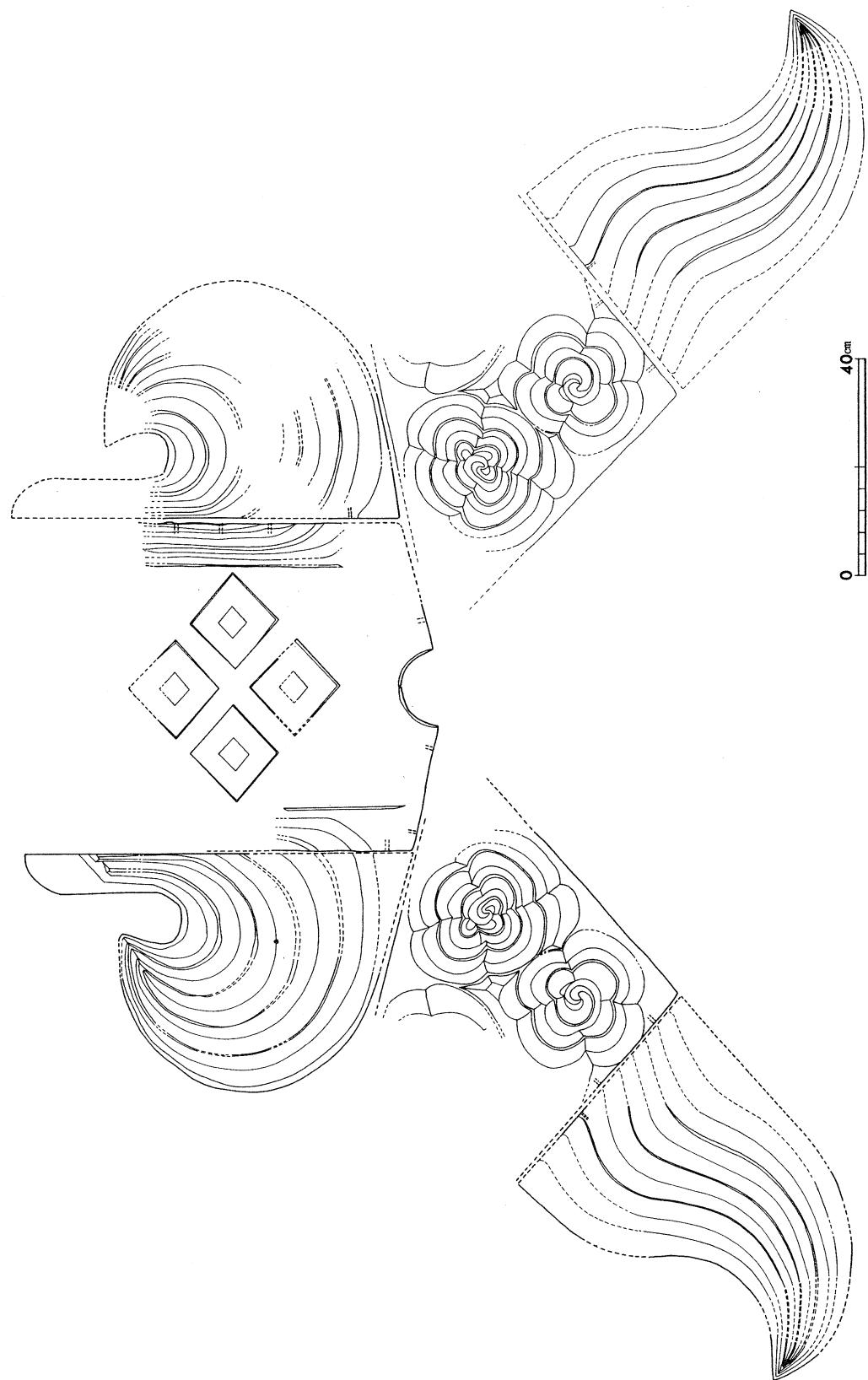


図86 鬼 瓦

圖87 鬼瓦復元圖



### 海鼠瓦ほか

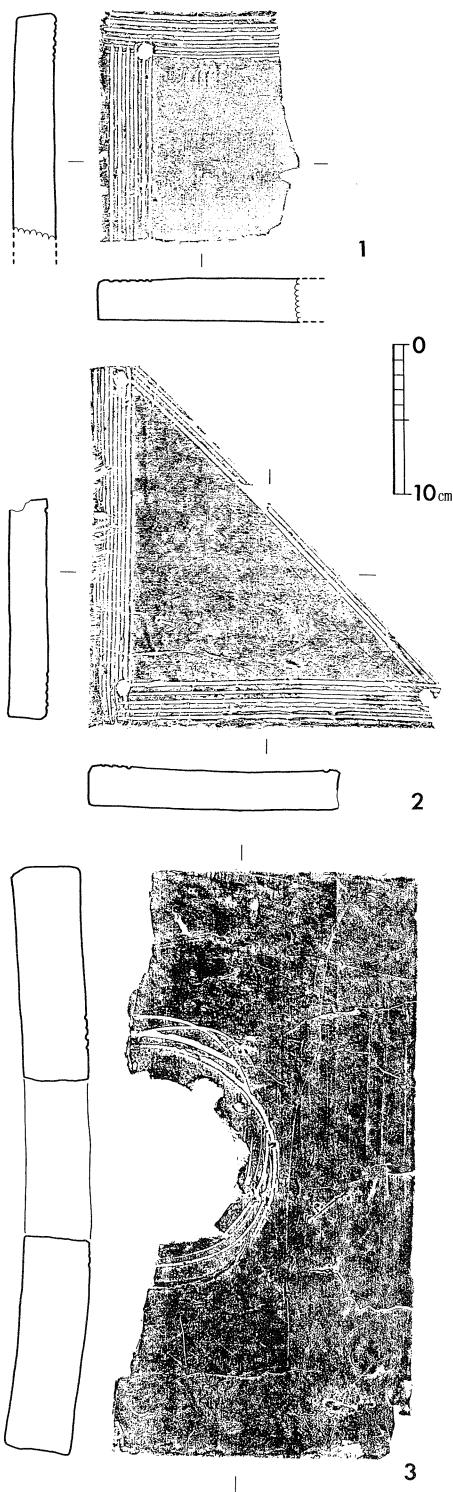


図88 海鼠瓦ほか

図88-1, 2は通称海鼠瓦と呼ばれている。屋根葺きに使われるものではなく、土蔵の海鼠壁に貼るタイルである。したがって、厳密にいえば瓦の範疇には入らないが、ここでは便宜上海鼠瓦とする。1は欠損しており、全体の形状を復元できないが、平面が正方形と考えられる。残存する側辺寄りには漆喰を盛る際に接合を強化するための条線が施され、隅には釘穴が穿たれている。釉薬は表面に薄く刷毛塗りされている。2は平面三角形であるが長辺側は分割線が残ることから割り熨斗と同様2枚に分けて使われるものと思われる。隅には釘穴があり、各側辺にそって条線が施されている。釉薬は刷毛塗りされている。

3は復元すると38~34cmの板状の物に直径10cmの円孔が中央に開く形となる。用途は不明であるが、部材の一部と考えられる。

### その他の瓦類

図89-1は三巴文を配した小型の板である。釉薬は全面にかかる。用途不明。2は軍配であるが柄の部分を欠損しているため他の器物との組合せは不明である。全面に施釉されている。1, 2とも瓦と同じ釉薬が掛けられていることから屋根飾りの一部と考えられる。

同図-3は土製の瓦範である。三巴と珠文の周りに不整形な蕨手状の文様が彫られている。焼成は良好で釉薬は掛からない。同じ文様構成の鳥伏間（図83-3）があるが、珠文間の線の有無、蕨手の形状から使用瓦範は異なる。8層出土。

### 窯道具

窯道具は大別すると陶器用、瓦用がありこれに窯火に使う道具が加わる。図90-1は陶器を焼成する際に灰の付着を防止するために使う匣鉢である。体部下

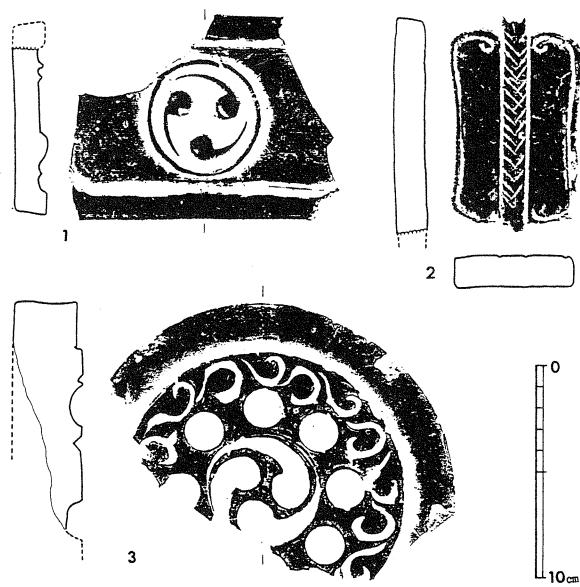


図89 その他の瓦類・瓦筒

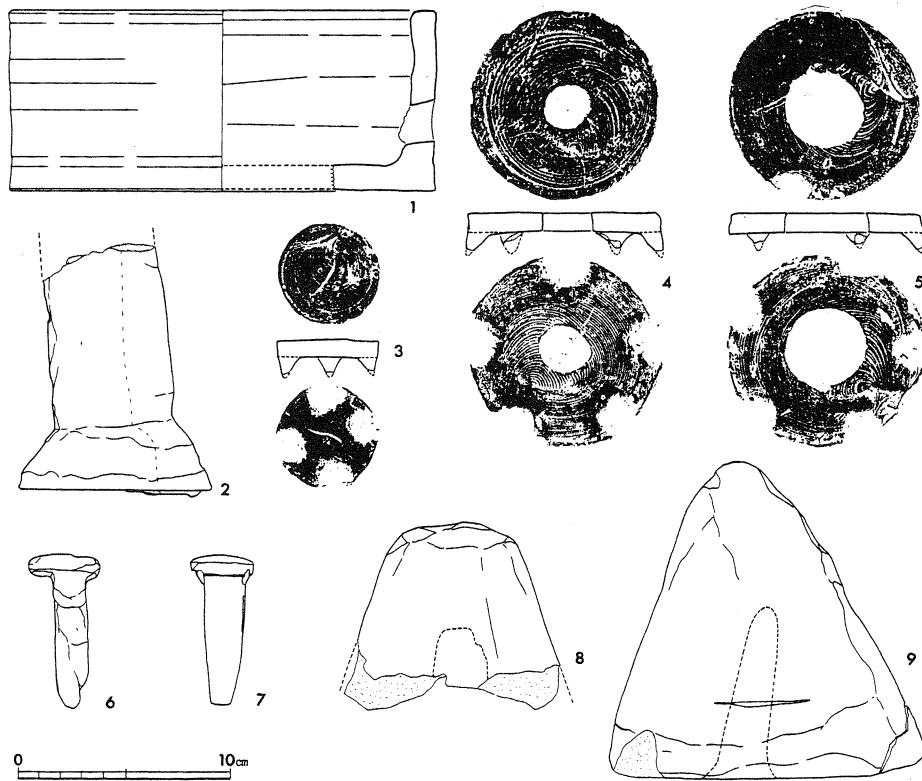


図90 窯道具

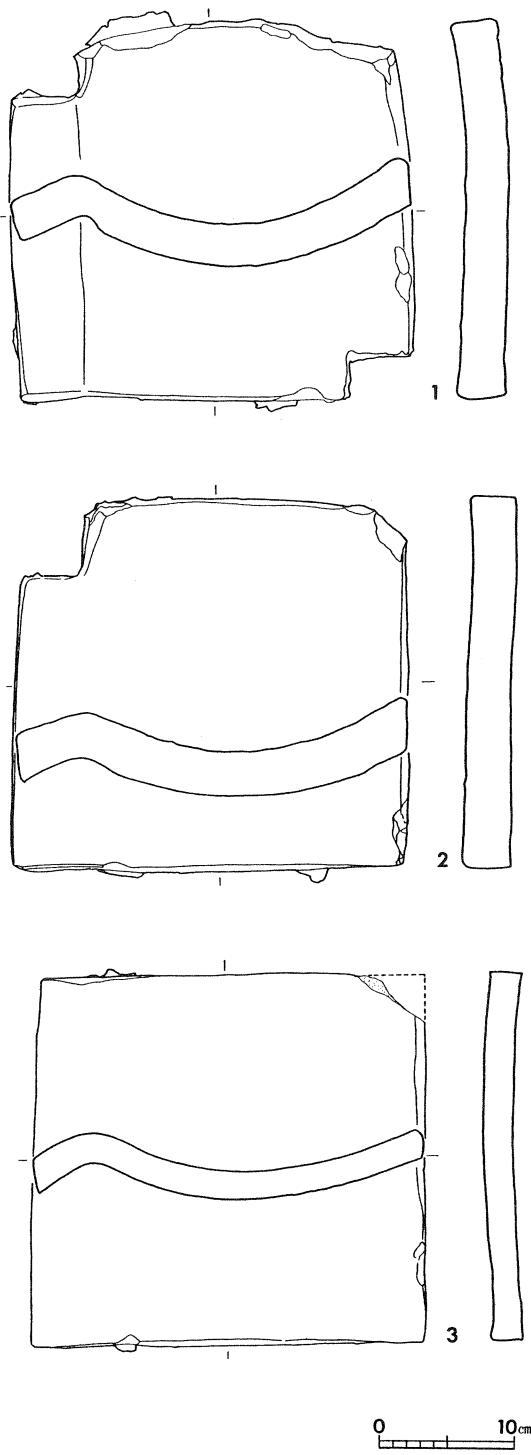


図91 火立て

方に対向して円孔が開けられている。使用にともない変形している。同図一2は円柱状の陶器の焼き台である。上部を欠損するが、脚と同様の台部をもつ。狭い焼成室で効率よく窯詰めするために使われる。これも使用により変形している。同図3～5は陶器を重ね焼きする際に使われる円盤状の窯道具である。円孔の有無、大小はあるが、円盤に短い足がつく形態の物ばかりである。上下両面には円盤を切り取る際の糸切り痕が残っている。脚端部は器体に熔着するため、取り外しの衝撃によっていずれも欠損している。

6,7はハセと呼ばれる瓦用の窯道具である。棟瓦を立て並べて窯詰めする際に熔着を防ぐため、頭の2箇所に噛ませて使われる。

8,9は窯炊きの道具で、焼成時に火の加減を見るために開けた穴を塞ぐ栓である。8は截頭円錐状、9は四角錐状であり、いずれも底面に柄を差し込む穴がある。被熱によりかなり脆くなっている。

#### 火立て

図91は瓦の窯詰めの際火床前面におかれ る物で、火炎の直撃と灰の付着を遮るために使われる。棟瓦と似た形態であるが、個体によって細部は異なる。器壁は概して厚く重量感がある。凹面は灰の付着が著しいため施釉されたような光沢をもつ。

1は切り込みを前後にもつもので棟瓦と同じ形態に作られている。頭と尻にモミ土

の熔着があり全体に歪みが大きい。灰の付着が著しいため、複数回使用されたものと考えられる。2は頭に切り込みがないもので、頭に熔着痕が若干残る。やはり複数回使用されている。1層出土。3は切り込みがされていないものである。凹面の灰の付着が少なく点が他と異なる。また器壁が1, 2に比べ薄い。2層出土。

#### その他の遺物

窯場の生産に直接かかわらない遺物がある。図92-1は菊花の文様を作り出した土製の型である。用途は明確だが、菓子、餅などの成形に使われる打ち型に類似している。同図-2は福助人形の型であろうか。土製で、焼成はあまい。同図-3は茶臼の上臼である。両側面に挽き木の差し込み穴が設けられている。下面は使用により摩滅している。石材はカクセン石安山岩で、津和野町の青野

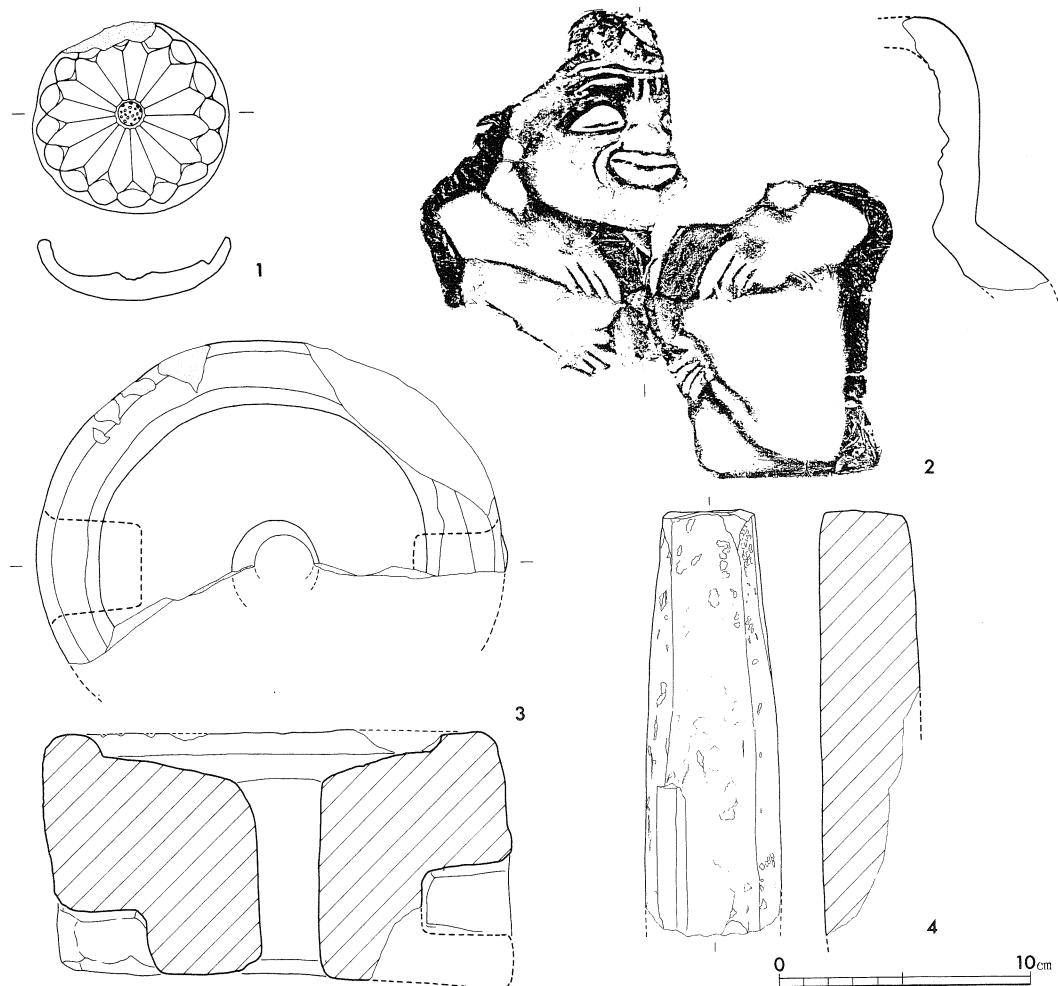


図92 その他の遺物

山付近で産出するものである。4は遺跡に隣接する丘陵上で試掘調査時に出土した磨製石斧の欠損品である。<sup>(注)</sup>石材は砂質の結晶片岩である。

(注) 石材については島根大学理学部三浦清教授からご教示いただいた。

#### 第4節 小 結

仁右門山遺跡は近世後期の施釉赤瓦を主に生産した窯場で、連房式登り窯1基と付属施設を設けた平坦面および不良品を投棄した物原が確認された。調査を行なった物原では瓦、トンバリ、窯道具が大量に堆積しており、陶磁器類も出土した。

瓦はすべて施釉瓦で、無釉還元炎焼成の燒し瓦は皆無であった。一部平瓦があるが、ほとんどは棧瓦葺きの瓦群である。大形の鬼瓦や鳥伏間、各種の屋根飾りなども生産しており、供給先には有力者層も含まれていたものと考えられる。鬼瓦につく四つ目の家紋は津和野藩主龜井家のものであり、御用向きの瓦場であった可能性も考えられる。

陶器は窯場で生産されたものと、搬入使用の後廃棄されたものがある。後者には山口県の萩焼古窯産のものが含まれる。磁器は生産された形跡がなく、すべて搬入品である。産地不明の資料もあるが、肥前産の碗もみられる。

窯の操業時期については、掛棧瓦凸面に刻まれた「文政五年（1822年）」の紀年銘から操業年代の1点を押さえることができたが、開始と終焉については不明確である。操業時期を知る方法としては瓦の型式学的編年との対比と、伴出遺物の示す時期からの推定が考えられる。

この窯で生産された瓦を使用した建物は今のところ周辺では確認されていないため、瓦それ自体から時期を限定することは現時点ではできない。一方、肥前産の磁器は近世を通じて編年が確立されており、出土資料との対比が可能である。それによると生産地年代で18C中葉から末葉の青磁染付碗が1点あるほかは18C末から19C初頭を中心とする広東形碗が主流をしめ、文政年間に出現する端反り碗を下限としている。調査面積が限られていたため今回の出土資料のみで判断はできないが、あえて推定するなら、この窯場は遅くとも19C初頭に生産を開始し、文政年間には廃絶したと考えられる。



## 第7章 相生遺跡

### 第1節 遺跡の位置と調査の概要

柿本神社のある高津町から西にのびる旧道が喜阿弥町との境にさしかかる辺りの狭い谷の最奥部に位置する。主に施釉赤瓦を生産した窯場である。遺跡は標高59mから68mの間に立地し、連房式登り窯1基、作業場跡2棟のほか付随する施設は、丘陵頂部から谷の内側にかけての約1,600m<sup>2</sup>の範囲に窯場は完結している。窯場に隣接する丘陵上には粘土の採掘によるものと思われる地形の改変が著しいが、近年まで粘土採掘が行なわれていたらしいので、遺跡との同時性は不明である。

この窯跡の存在はこれまで知られておらず、1984年度に島根県が実施した生産遺跡分布調査（窯

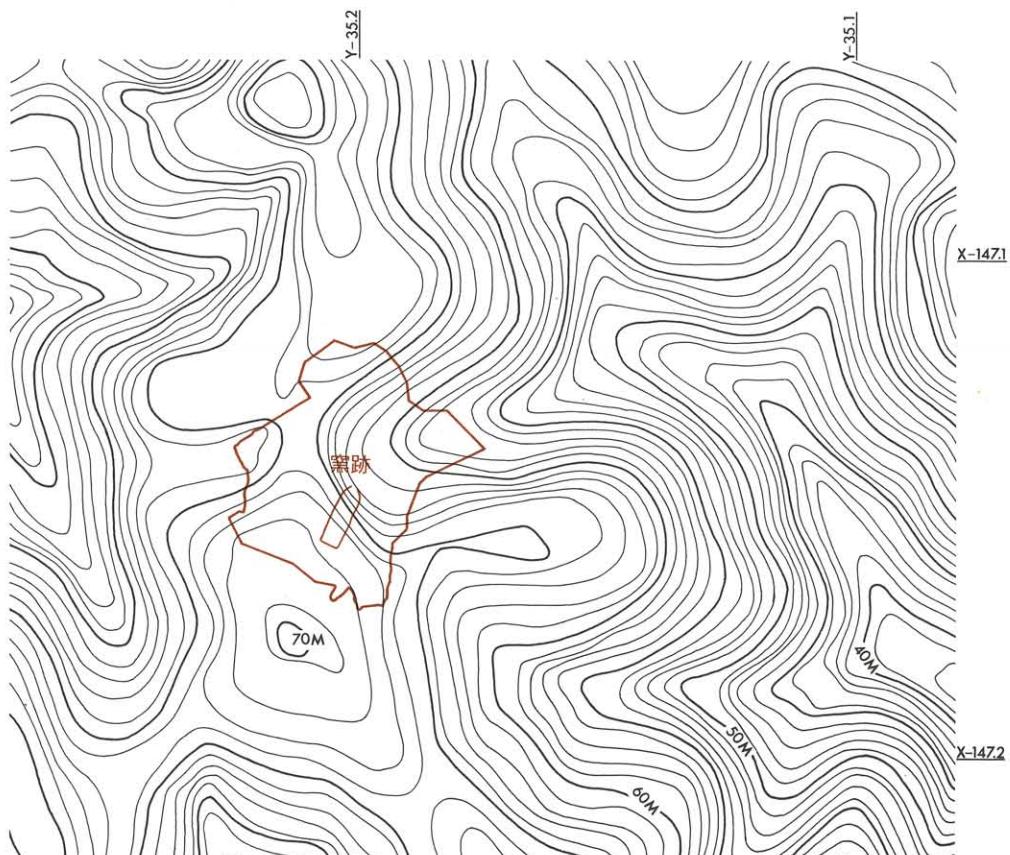


図93 相生遺跡位置図 (S=1: 1500)

業関係遺跡)でも確認されていなかった。今回の調査にあたってこの窯跡に関する所伝等調べたがこれもなかった。土地所有者の記憶にもなく先代、先々代にも瓦の生産に携わったものはいなかった。このことから先々代がこの土地を登記した明治前半以前には既に廃業していたものと考えられる。

調査は遺跡の現況を記録する目的から調査前の地形測量から実施した(図98)。比較的新しい時代の遺跡であることから遺構配置は表面観察からもおおよその想定できた。その結果、谷の最奥部の丘陵側は20m、8mにわたって平面L字状に削り込まれ平坦面が作り出されており、ここに窯場の施設の存在が予想された。平坦面東端には物原と思われる瓦の堆積が認められた。また、谷の南斜面に煉瓦堆積の細長い高まりがあり、これが登り窯の崩壊した箇所であると考えられた。窯跡の西側には谷斜面を平坦に切削した加工段がありなんらかの施設の存在が考えられた。この他平坦面の北東と谷底に方形の土壙が、また窯推定箇所の東に不整形な土壙がみられた。以上の観察をもとに各遺構ごとに基準線を設定し掘り下げを開始した。

## 第2節 遺 構

### 1. 連房式登り窯

調査前にレンガ(トンバリ)堆積の高まりがみられた場所で、推定される窯の主軸を任意の基準線とし断面観察を行ないながらトンバリの除去を行なった。その結果、谷の南西斜面の標高61.6～67mの間に構築された連房式登り窯を検出した。規模は全長が水平距離で13.4m、房の幅約3.2mを測る。勾配は平均で26°あり、主軸をS-24°-Wにとる。窯本体部で遺存していたのは基底部に近い窯壁と隔壁、焼成室床面で、天井は崩壊して残っていない。最下段は平面逆三角形を呈する燃焼室(大口)があり、これに8つの焼成室(房)が続き、第8房の後面は煙り出しとなっている。

大口は奥行1.5mを測り、床面は全面に灰が焼き固まった状態となっていた。床断面の観察では中程で傾斜が変換し、勾配をとりながら第1房との隔壁の下端にとりつく。前面に設けられた炊き口は幅0.5mで、両側壁はトンバリが数段積まれている。炊き口前面との境にもトンバリが敷かれている。内壁は規則的なトンバリ積みになっているが、外壁はトンバリ、瓦で土交じりに積まれている。

大口に続く各房の内部は基本的に同じ構造となっている。房間を隔てる隔壁の下部には狭間穴と呼ばれる火格子穴が取りつく。下方に隣接する房を隔てる隔壁から幅約0.5mの溝状の部分は火床と呼ばれる房の燃焼部分である。やはり床面は灰が焼き固まった状態であった。焼成部はこれより

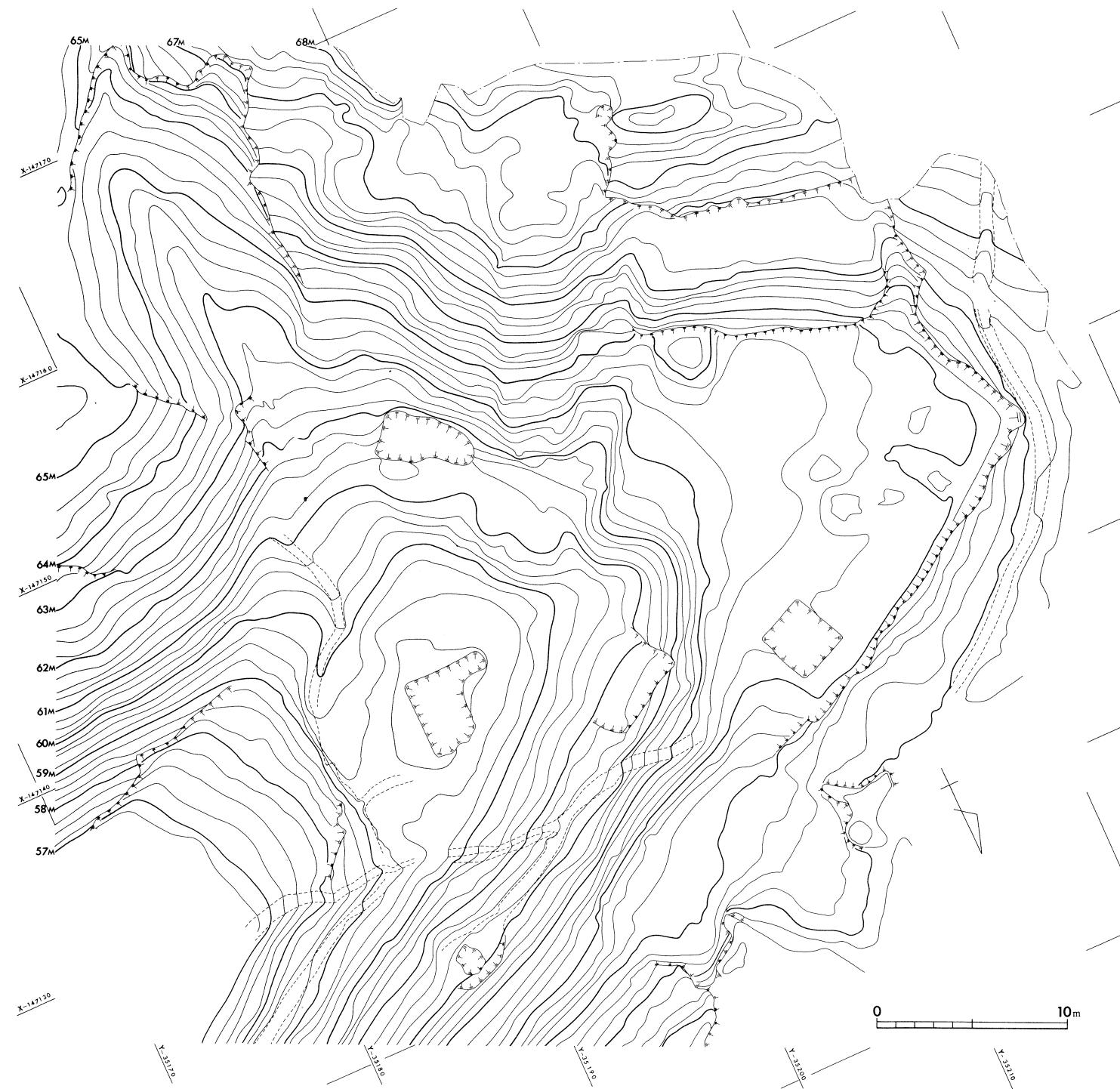


図94 相生遺跡調査前地形測量図

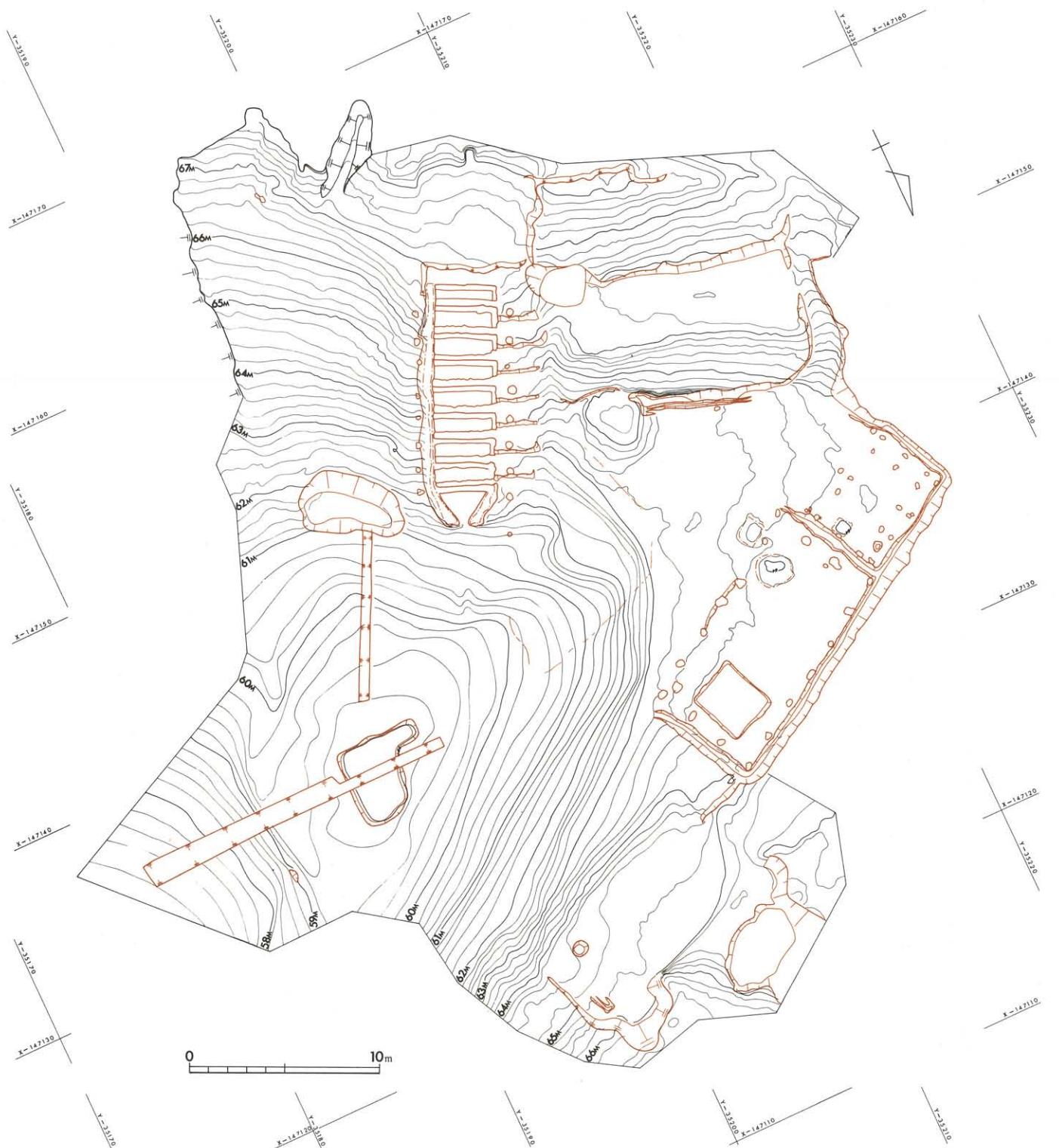


図95 相生遺跡調査後測量図



図96 連房式登り窯実測図

約0.4m高く、トンバリで3段分積み上げた位置から作り出されている。変則的であるが横狭間の一種と考えられる。焼成部は間隔をおいてトンバリを階段状に積みあげた列が9列並んでいる。第1,8房は2段積みで、他の房はすべて3段積みである。列間の溝にあたる部分は上方の隔壁の火格子穴に対応している。後述するように瓦はトンバリ列間の溝を跨ぐように立て掛ける構造になっている。

各房の幅は内法で約3mと一定であるが、奥行は0.9~1.2mを測り、房ごとに違いがある。

煙り出しあは第8房の後方壁下の狭間穴に取り付けられている。後方約0.6mまで煙道を延長させ上面を瓦で蓋をしているだけの簡単な構造である。

各房の炊き口はすべて西側につきこれに対応する階段状のテラスが布設されている。幅は2.5m前後で、高さは約1mを測る。テラスの縁はトンバリ積みになっている。このテラスでは覆屋の柱穴が1穴ずつ確認され、大口側の2穴を含め9穴並んでいる。窯の東側壁の下端にはこれに対応する柱穴列が確認できたが最下段の柱穴は検出できなかった。

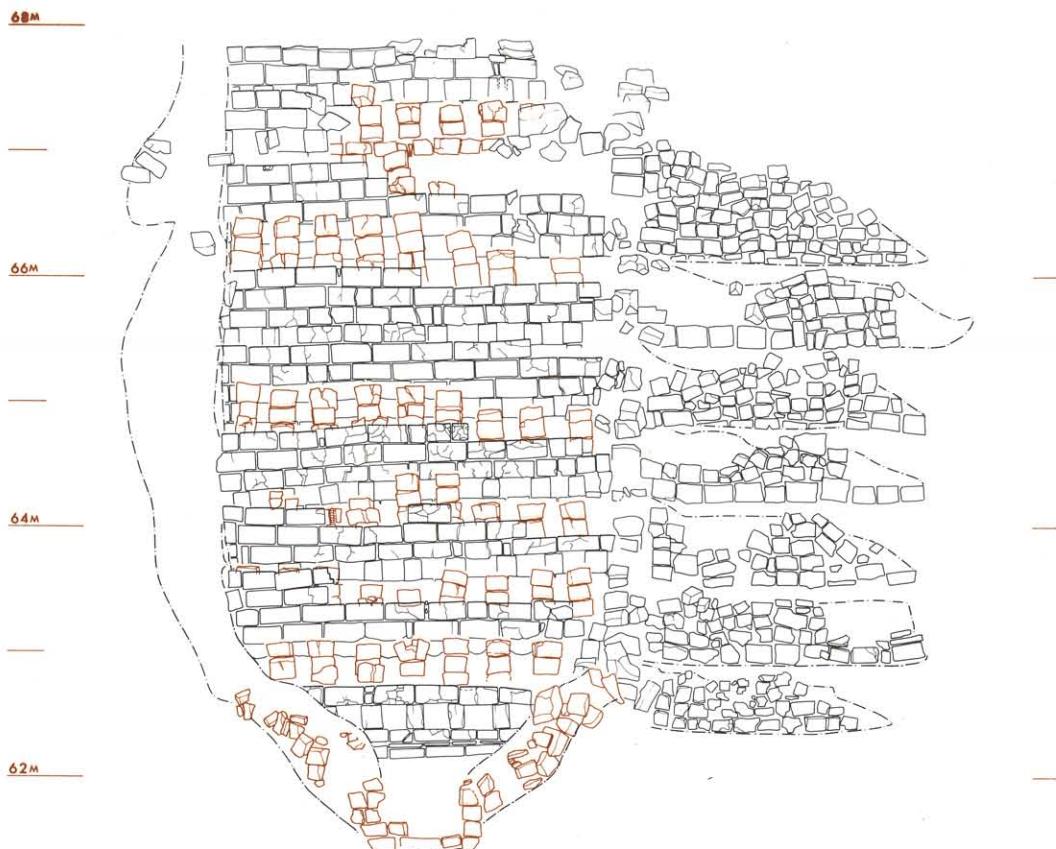


図97 連房式登り窯立面図

窯の西側の丘陵斜面の加工段との境は溝状の窪みになっているが、東側に溝はない。煙り出しの後方は後背の斜面を削り出した5m四方の平坦面が存在するが溝状の遺構は確認できなかった。ただし第8房から煙り出しの部分は築き替えが行なわれた形跡があるり、煙り出しの下部に溝状のち込みが認められるので、溝は本来窯寄りに穿たれていたものと考えられる。

窯は基本的に地山の削り出した基底面を基盤に構築されており、断面の観察からは特別な下部構造は確認できなかった。

窯内部の埋土層は2層に分かれる（図99）。上層は窯壁崩壊によるトンバリの堆積で、下層は焼成室床面を覆うように堆積した灰白色粘質土層である。当初下層は窯崩壊前の流入土と考えていたが、土層断面に縦方向の縞状の筋が確認されるなどその成因に疑問がもたれた。比較的に厚く堆積する第6房で精査した結果、一部でハセを挟んだ状態の白地（成形の終わった焼成前の瓦）を検出することができた。さらに他の房でも精査し、灰白色粘質土が白地であることが確認できた。この状況は白地を窯詰めしたのち焼成することなく操業を停止したことを示しており、突発的な事態によって窯場は終焉を迎えたものと考えられる。

炊き口前面は調査前に灰、炭の堆積がみられた場所で、窯主軸の延長線上で断面を観察しながら掘り下げた（図100）。地山は緩く下方に傾斜し、これに遺物を含む土層が最大で1m堆積していた。土層は炭化物の薄い堆積層を挟んで3層に大別できる。1, 3層が表面を覆い、4, 9層が中層、14層が下層にあたる。灰、炭化物、瓦などが堆積しており、窯焼き及び窯の改築時にこれらを廃棄したことによって堆積した灰原と考えられる。

窯東側では2箇所（図98、図100：C-C'、D-D'）で土層観察をし掘り下げを行なった。C-C'では1層が黄褐色、青灰色の粘質ブロック層で、その下に瓦、モミ土、トンバリの堆積層が確認された。1層からは甕の胴部と陶磁器（図127-1～8）とともに地下足袋、油差しの残欠が一括で出土しており、明らかに近代のものであることから1層は後世の造成土と判断した。D-D'の線までは造成土は及んではおらず、窯壁側にトンバリ、モミ土の堆積層が確認された。窯壁際は若干高まっており、地山の削り出しがなされていたことも考えられる。

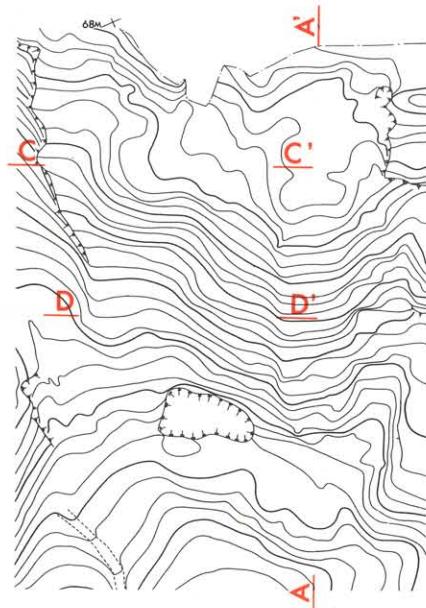


図98 窯跡断面位置

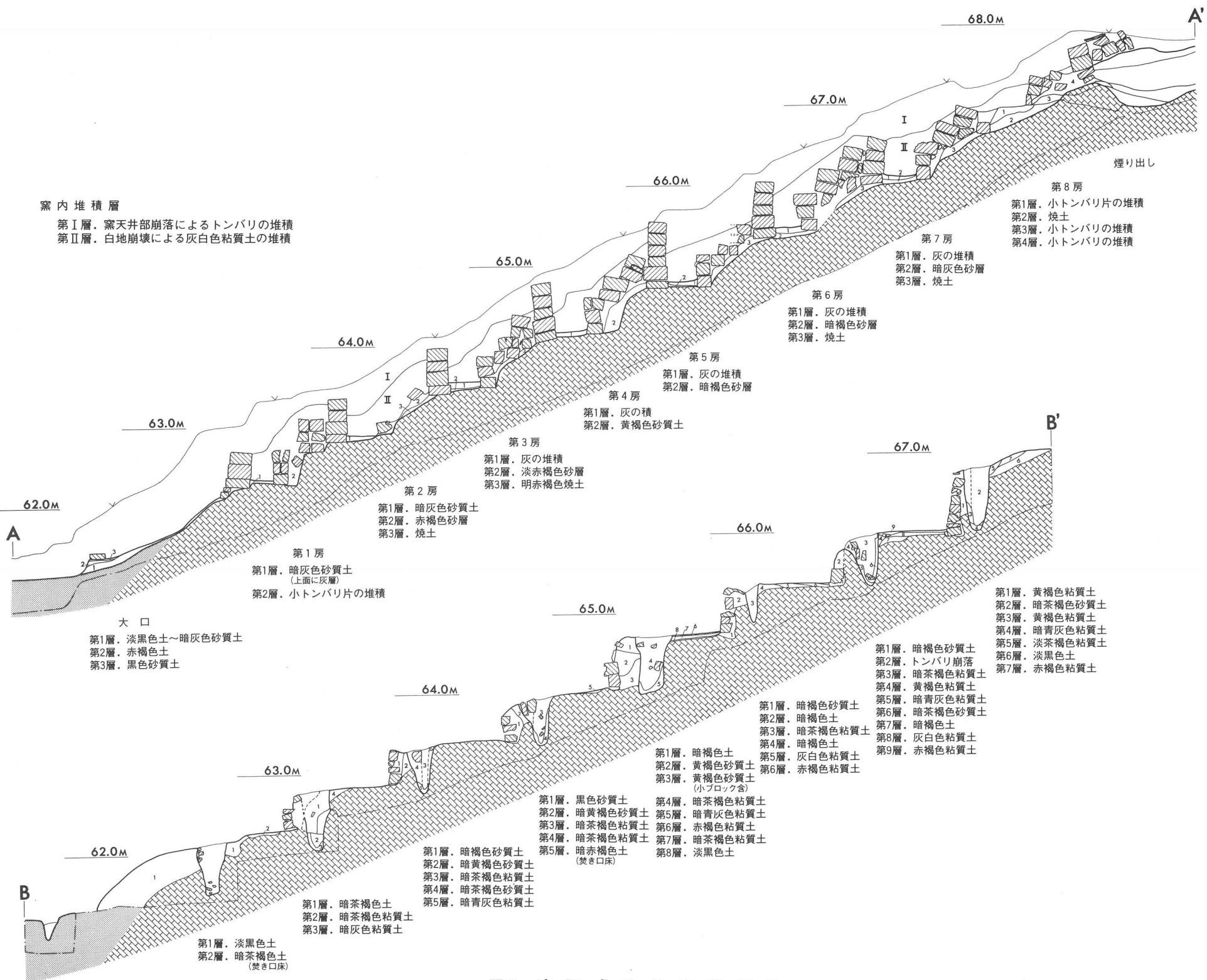


図99 連房式登り窯断面図

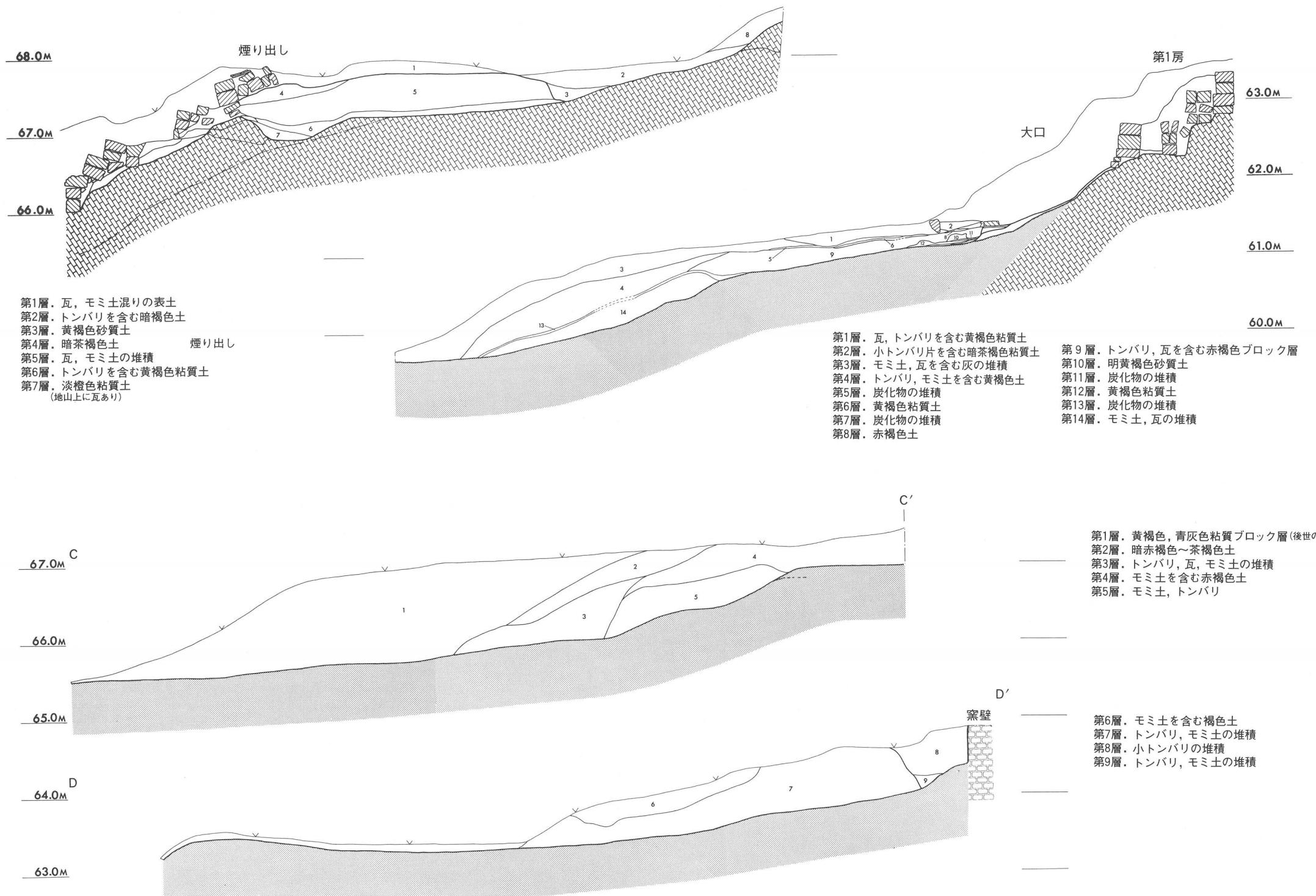
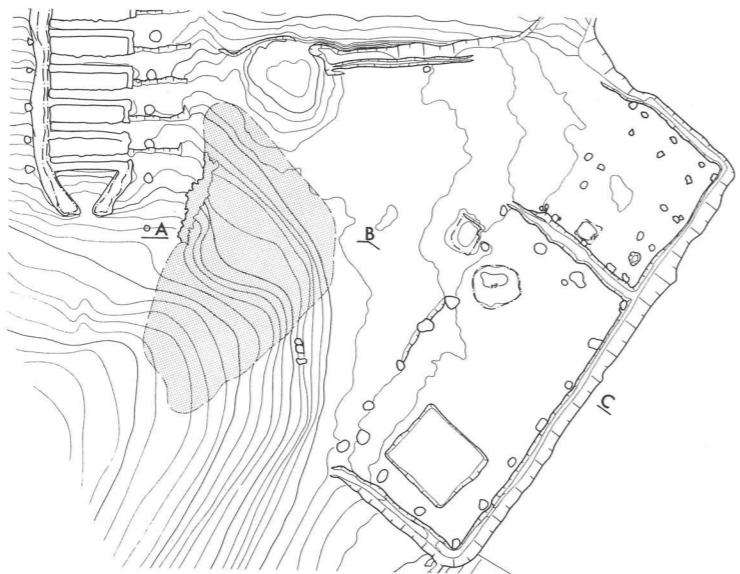


図100 連房式登り窯及び周辺断面図



第1層. 瓦, トンバリ片を含む表土  
 第2層. 瓦, トンバリ, モミ土の堆積  
 第3層. 黄褐色粘質土  
 第4層. 瓦, トンバリ, モミ土の堆積  
 第5層. 赤褐色土  
 第6層. 暗黄褐色土  
 第7層. 炭化物, 瓦を含む赤褐色土  
 第8層. 黒色土  
 第9層. 暗褐色土  
 第10層. 黄褐色ブロック  
 第11層. 淡橙色粘土  
 第12層. 暗褐色ブロック層  
 第13層. 黒色ブロックを含む明褐色粘質土  
 第14層. 淡黒色土  
 第15層. 暗黄褐色砂質土  
 第16層. 明褐色ブロック層  
 第17層. 褐色ブロックを含む黑色土  
 第18層. 褐色ブロックを含む黑色土  
 第19層. 黑色粘質土  
 第20層. 黄褐色ブロック  
 第21層. 黄褐色粘質土  
 第22層. 黒色土  
 第23層. 黒色ブロックを含む赤褐色粘質土  
 第24層. 黄褐色粘質土  
 第25層. 黄褐色ブロックを含む黑色土  
 第26層. 黒色ブロック

第27層. 黒色土  
 第28層. 黒色ブロックを含む黄褐色粘質土  
 第29層. 淡黒色土  
 第30層. 赤褐色土  
 第31層. 黄褐色土  
 第32層. 淡墨色土  
 第33層. 明褐色土  
 第34層. 明褐色, 黄褐色ブロック層  
 第35層. 明褐色, 黄褐色, 黑色ブロック層  
 第36層. 黒色ブロック  
 第37層. 明褐色, 黄褐色, 黑色ブロック層  
 第38層. 黄褐色ブロックを含む黑色土  
 第39層. 明赤褐色ブロック層  
 第40層. 黄褐色, 黑色ブロック層  
 第41層. 黑色土  
 第42層. 明褐色粘質土  
 第43層. 黑色ブロック層  
 第44層. 粘土ブロックを含む暗褐色粘質土  
 第45層. 淡赤褐色砂質土  
 第46層. 淡赤褐色砂質土  
 第47層. 淡黄褐色土  
 第48層. 淡赤褐色土  
 第49層. 淡褐色土  
 第50層. 淡褐色土  
 第51層. 淡褐色ブロック

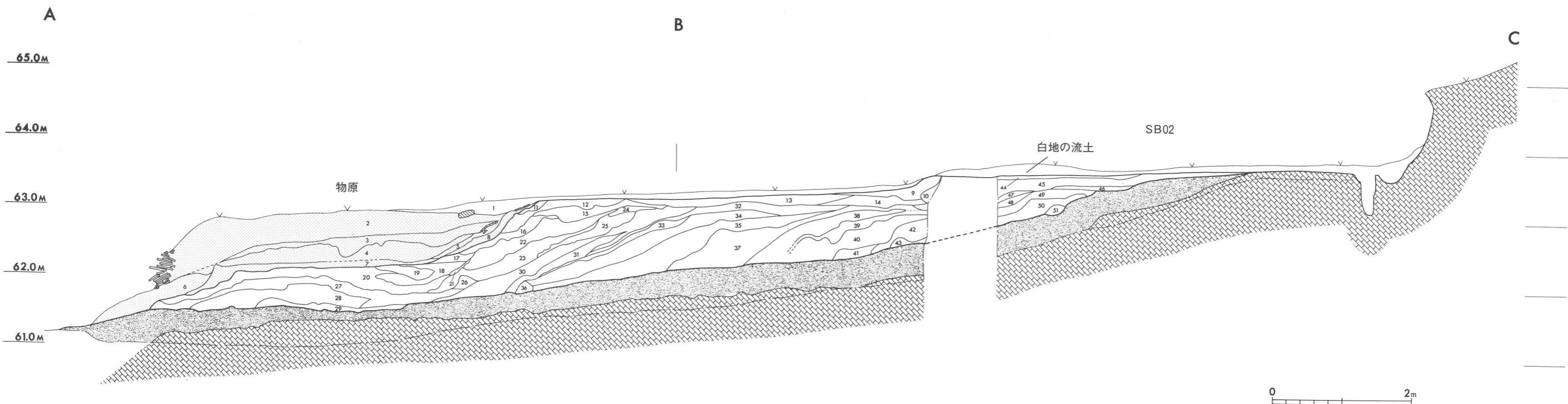


図101 物原断面図

## 2. 物 原

不良品をまとめて投棄した物原は窯大口西側に形成されている（図101）。黄褐色粘質土の間層を挟んで上下2層に大別できる。上層の第2層は瓦、トンバリ、モミ土の堆積層で、窯側は瓦積みになっている。3層を挟んで4～8が下層で、遺物を含む土層である。出土遺物は瓦、窯道具のほか陶磁器類も出土しているが、この窯場で生産されたものではなく搬入・使用の後に廃棄されたものであろう。

これより下は平坦面の造成にともなう埋土であるが物原下面は、平坦面より1段低いテラス状になっている。このことから物原の場所をあらかじめ想定した窯場の造成が行なわれた可能性がある。

## 3. 建 物 跡

建物跡は窯場西の平坦面で2棟確認された。ともに造成面を基盤として建てられており、丘陵後背部に溝がめぐる。南西からSB01、SB02と呼ぶことにする（図102）。

### SB01

SB01は2方向を丘陵法面に接して作られた礎石建物である（図103）。礎石真心間で南北4.2m、東西5.4mを測る。南を除く3辺に溝がまわり、東の溝はSB02と共に用いている。礎石列は東を除き2重にめぐる。外側は南北4間東西3間、内側は南北2間東西3間であるが、やや不規則な配列を示す。礎石建物であるが瓦葺きであったとは考えにくく、類例では窯場の二重礎石建物は白地の乾燥小屋として使われており、SB01も同様の建物であったと考えられる。

建物の北側にはトンバリで囲った簡単な炉が置かれている。その北には肩を熨斗瓦で張り合わせた土壙があり、南には白地をたて並べた状態が2、3列確認できた。遺物は建物中央で陶磁器が出土地している。

### SB02

SB02は北と東を丘陵法面に接してつくられた掘建柱建物である（図104）。南北6m、東西11.3mを測り、桁行6間、梁間3間である。床面は平滑で、東に偏った位置に2.8×3.1mの方形の掘り込みがある。内部は若干粘土が堆積していたほかは遺物もみられなかった。類例からすると土練りの施設とも考えられる。南西の建物内外には白地溜りが存在する。遺物は西側床面で鉢（図111-5）が検出されたほかは簪（図126-5）がある程度で、SB01に比べ出土量は少ない。

土練の土壙、白地溜りの存在から、SB02は瓦の成形作業を行なった建物跡と考えられる。

## 4. 水 漏 槽

谷底に穿たれた方形の土壙である。4.1×2.5mを測り、深さは約1mである。西側に長さ1.5m、幅1mの長方形の貼り出しが付く（図105）。

内部には瓦等が堆積する土層のほか粘質土が堆積しており、床面は平坦で床面下には特別な構造

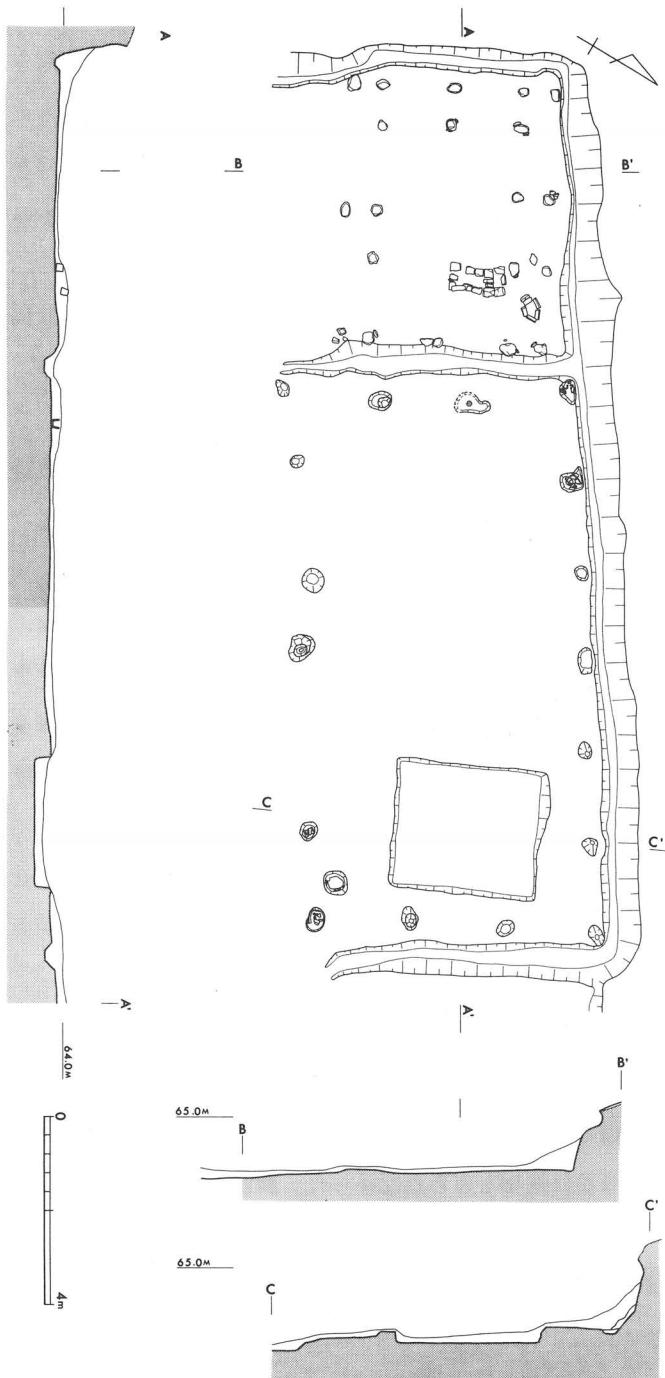


図102 SB 01, SB 02配置図

は確認できなかった。方形の貼り出しの床面は不明確ながら階段状を呈するようである。性格は明確にしえないが、隣接する土壙状遺構よりも新しいことが土層の観察から分かる。窯場に伴うものであれば土を水漉しする施設（舟）の可能性が考えられる。ただし、類例では床面には小口切りした木材が敷き詰められるとされており、これが舟の構造上の特徴であれば再検討の必要があろう。

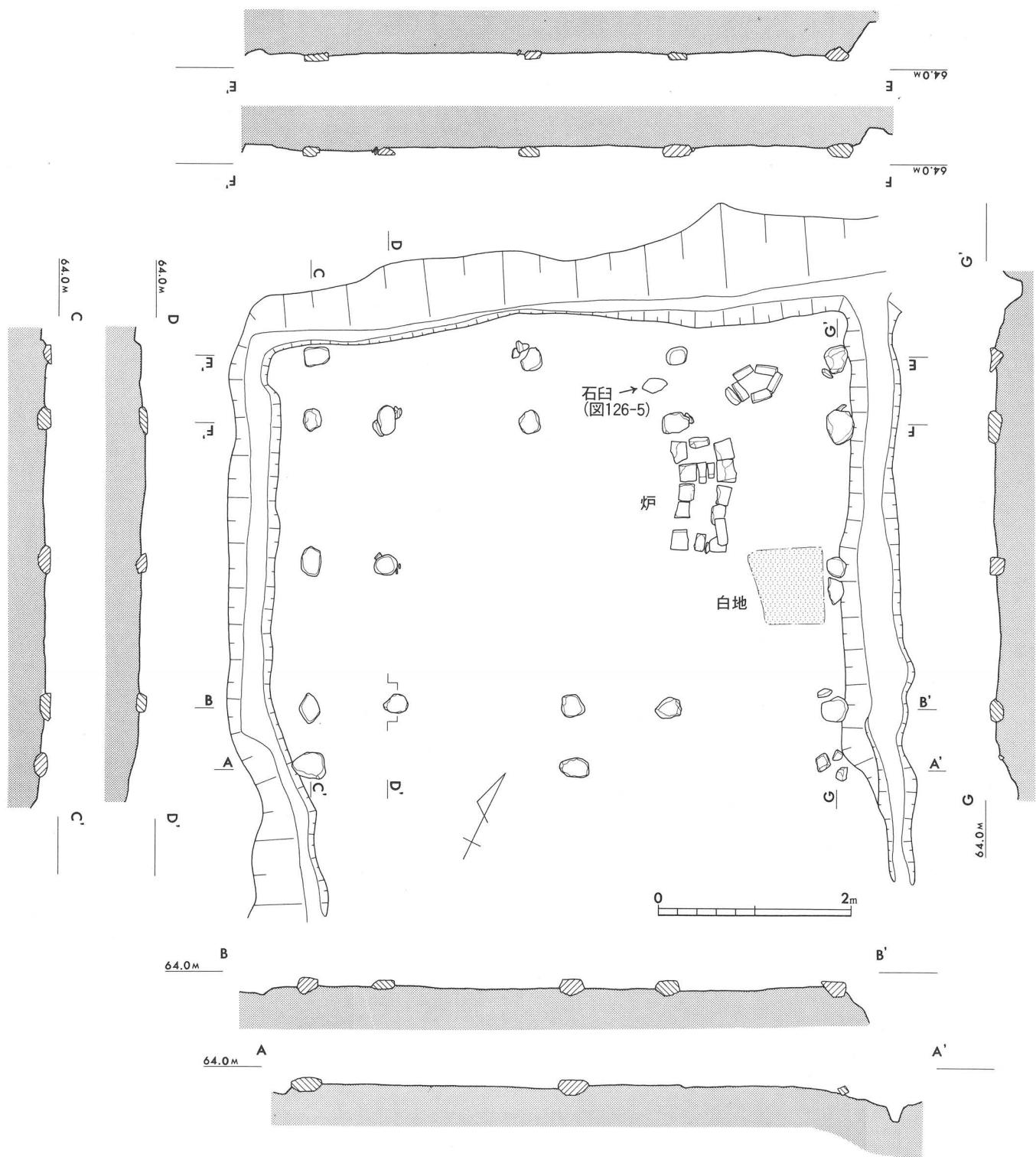


図103 SB 01 実測図

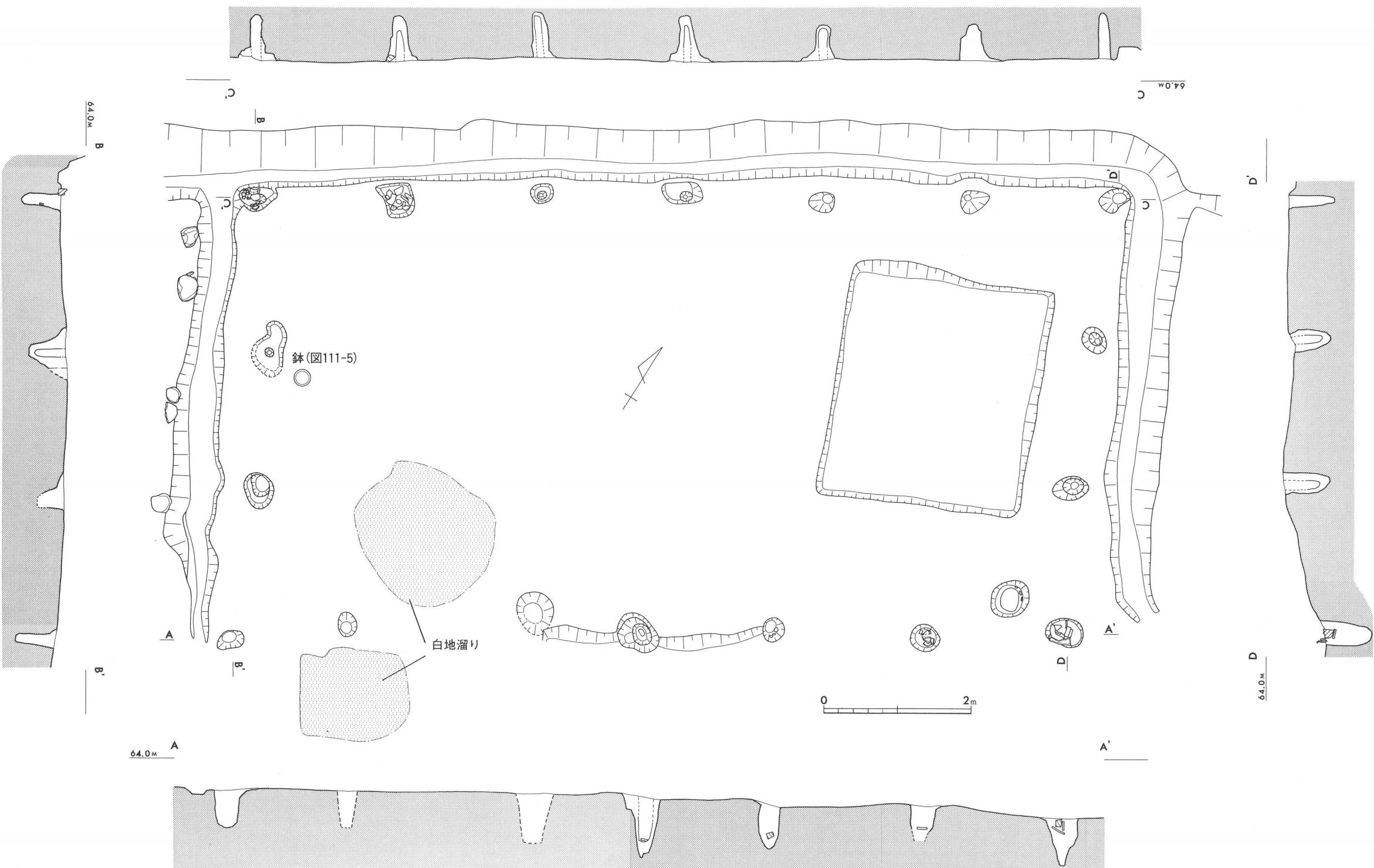


図104 SB 02 実測図

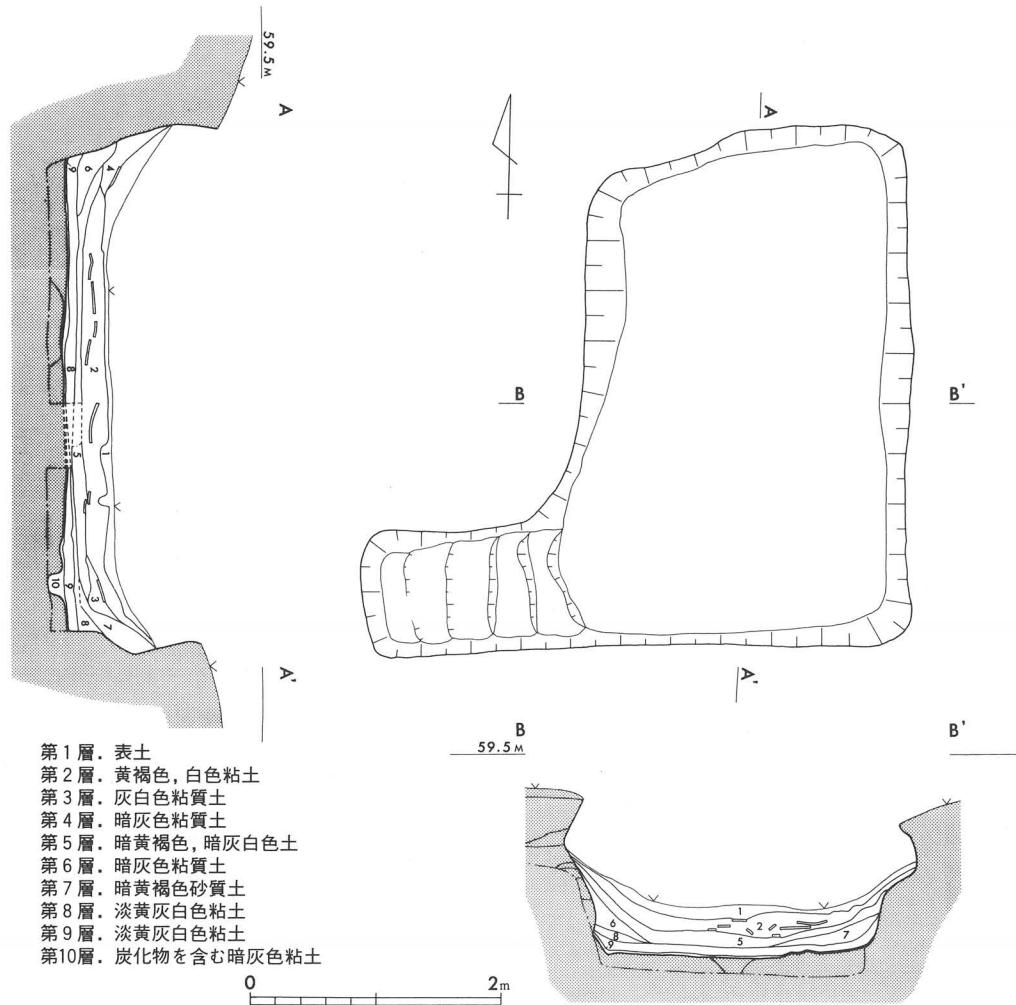


図105 水濾槽実測図

## 5. 斜面加工段

窯の西側の丘陵斜面には $12 \times 4$ mの範囲で平坦面が広がっている（図106）。丘陵斜面の切削、盛土によって造り出されている。遺構はまったく確認できなかったが、窯寄りには瓦が大量に堆積していた。凸面に墨書きのある桟瓦（図118-4）はここから出土している。窯に隣接する位置にあり、窯出しの際瓦を仕分けするための作業面の可能性も考えられるが、明言は避けたい。

## 6. 土壙、土堤状遺構

窯炊き口東側に不整形な土壙が穿たれている。長さ5m、幅2m、深さは谷側で1.5mを測る。内部は不整形ながら平坦になっている。若干瓦が出土したほかは遺物はない。性格は不明である。この土壙の谷側には土壙を掘った際の排土が堆積しており、後世に掘られたものかもしれない。

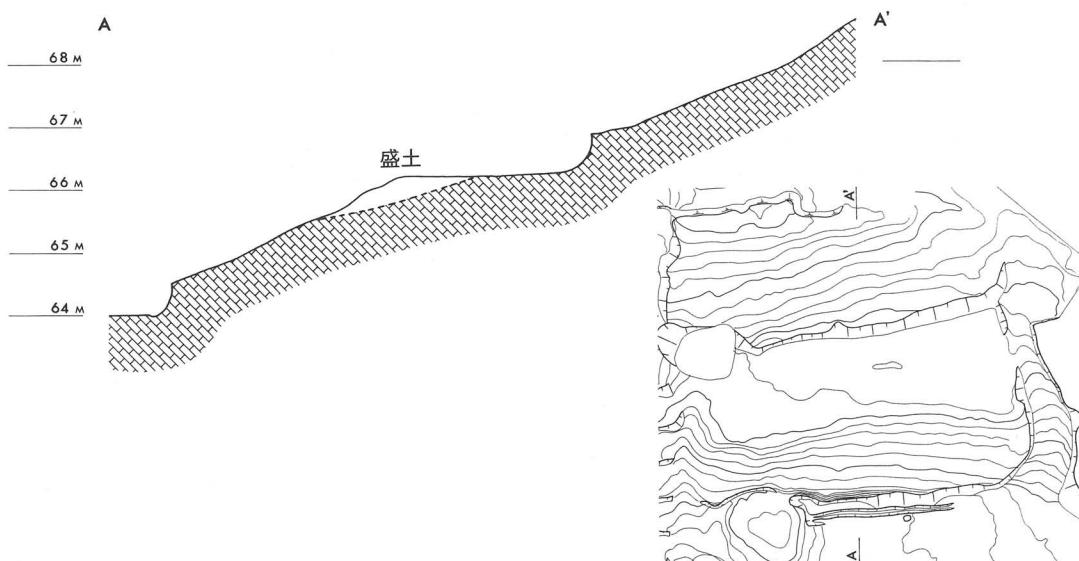


図106 加工段断面図 ( $S=1:120$ )

水漉槽の東側の谷を横断するように土堤状の高まりが存在する。窯場の東限を示す遺構とも考えられたため、截ち割りを行なった。地山は緩やかに下方に傾斜しており、そのうえに最大で2.5mの盛り土がなされていた。土壘の中心部にあたる箇所では堅く締まった土が山なりに盛り土されている。この山なりの盛り土は重複して行なわれており、これが工程差によるものか、あるいは時期差によるものかは判断できなかった。出土遺物はなく時期は不明である。

### 第3節 遺 物

出土した遺物は陶磁器類、瓦類、窯道具などがある。以下順に説明する。

#### 1. 陶 器

##### 碗

図108-1～3は小型の広口碗である。黄白色の釉が掛かる。物原出土。4～6は筒状の碗である。4は黄色白色の釉で物原3層出土。5は黄緑色の釉が掛かる。6は器表にピラ掛けと呼ばれる特異な施釉が施されている。山口県の萩焼古窯跡産の物と考えられる。物原8層出土。7は比較的に小さい脚から口縁に向か直線的に広がる形態の碗である。暗黄緑色の釉が縞状に掛かる。物原8層ほか出土。8は厚手の器体に暗緑色の釉が掛かる端反り形の碗である。外面には風景と考えられる鉄絵が描かれている。物原出土。9～14は広口の碗である。10～12の内面には鉄釉で「寿」と書かれている。9は物原1, 8層、10は5層およびSB01, 11, 12は物原5層、14は1, 7層出土。

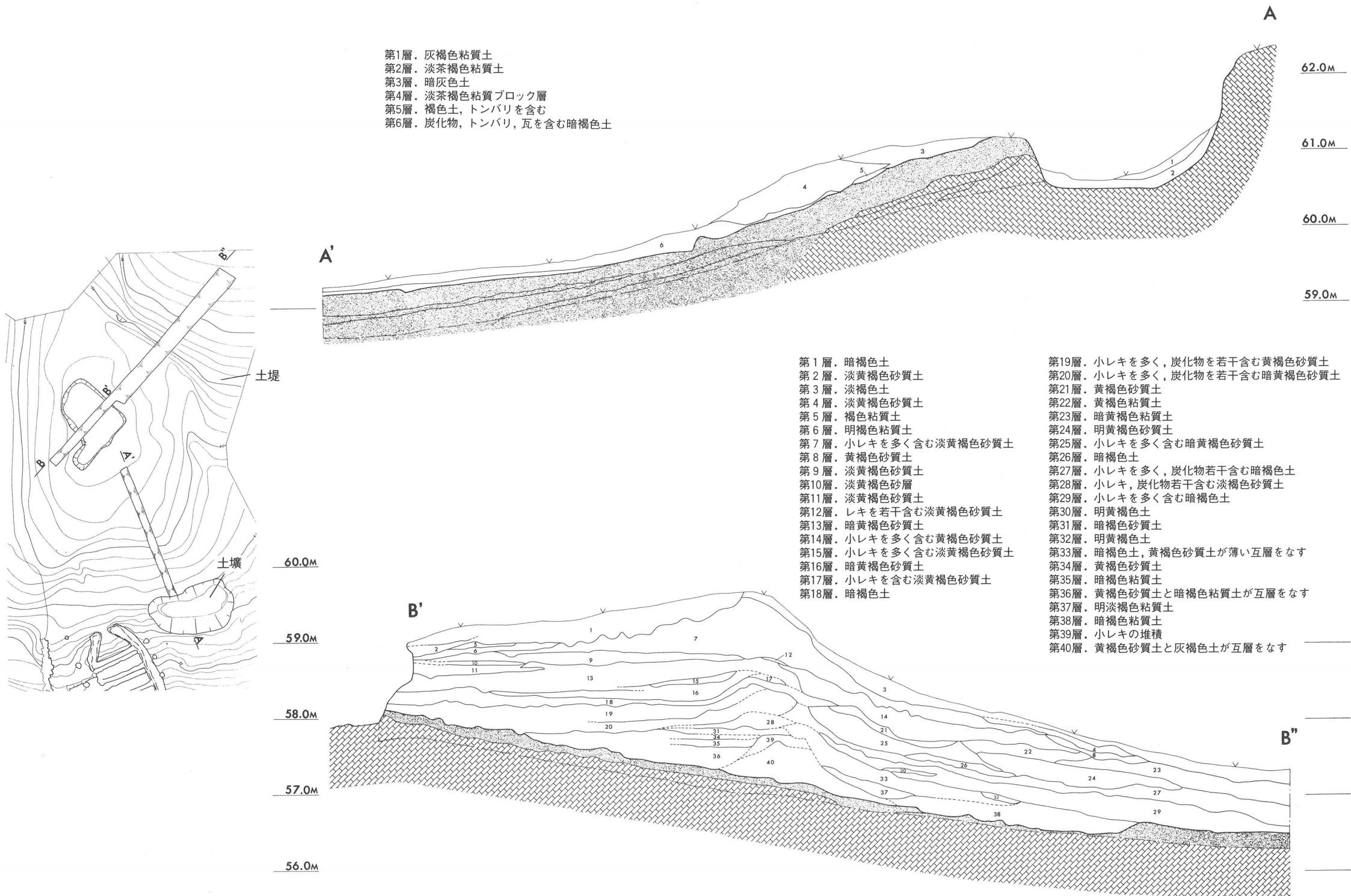


図107 土 壤 及 び 土 堤 状 遺 構 断 面 図

## 蓋

15は碗の可能性もあるが全面施釉されていることから蓋と考えた。黒色の釉が掛かる。SB01出土。16, 17は小型の壺にともなう蓋であろう。物原出土。前者は褐色釉が掛かる把手つきの物、後者は把手はないが上部に2本の矢が交差して描かれている。

## 壺、鉢、灯明具

18は黄色白色の釉が掛かる小型の短頸壺である。物原3層出土。19は黄色白色の釉が掛かる鉢で、口縁を波状に作り出している。20, 21は灯明皿で、22がその台である。いずれも使用の痕跡が認められる。21が物原2層出土。

## 土瓶

23~27は土瓶である。23, 24は茶釜形の物で胴部最大径の上に注口がつく。底部外面には煤の付着が見られる。ともにSB01出土。26, 27は小型の丸形土瓶で、25はその蓋である。外面には緑、青、黄色の釉で絵付けされている。25, 26は物原2, 3, 8層出土。27は物原2, 3層出土。

## 行平

セット関係がわかるのは図109-1, 2および4, 5で、3は蓋のみである。蓋の外面の一部と身の外面上半には飛鉢が施されており、内面は赤褐色の釉が薄く刷け塗りされている。身は片口がつき45°ずれて中空の把手が取りつく。身の外面底部は裸胎ですが付着している。3は蓋の端部が肥厚する点が他と異なる。物原から出土しており、4, 5が2層出土。

6は粗製の鉢で筒状の器体に線刻した把手が付く。物原出土。7は徳利で飴釉が掛けられている。8, 9は片口鉢で、口縁を外方に折り返して作り出す。

## 燭徳利

燭徳利はいわゆるお銚子である。壇状を呈し轆轤成形された器壁は薄い。図110-1は灰白色釉を掛けた器体の対向する位置に「戸田」、「酒場」<sup>はんじょ</sup>、と鉄釉書きされている。2は淡褐色釉に鉄釉で山水が描かれているが筆使いは稚拙である。物原出土。3は鉄釉で文字が書かれているが欠損しているため詳細は不明である。SB01出土。

## 甕

茶褐色釉を掛けたいわゆる飯銅である。図111-1は3の内面に熔着していた資料である。1の肩には波状文、流しとも認められないが、3には波状紋がある。口縁は内側に折り返し端部を平坦に作り出す。高台は削り出しによって低く作られている。1, 3は窯周辺と物原から出土している。6は大型の甕の下半部である。基底から18cmの位置に明瞭な粘土接合痕が認められる。物原3, 7層出土。

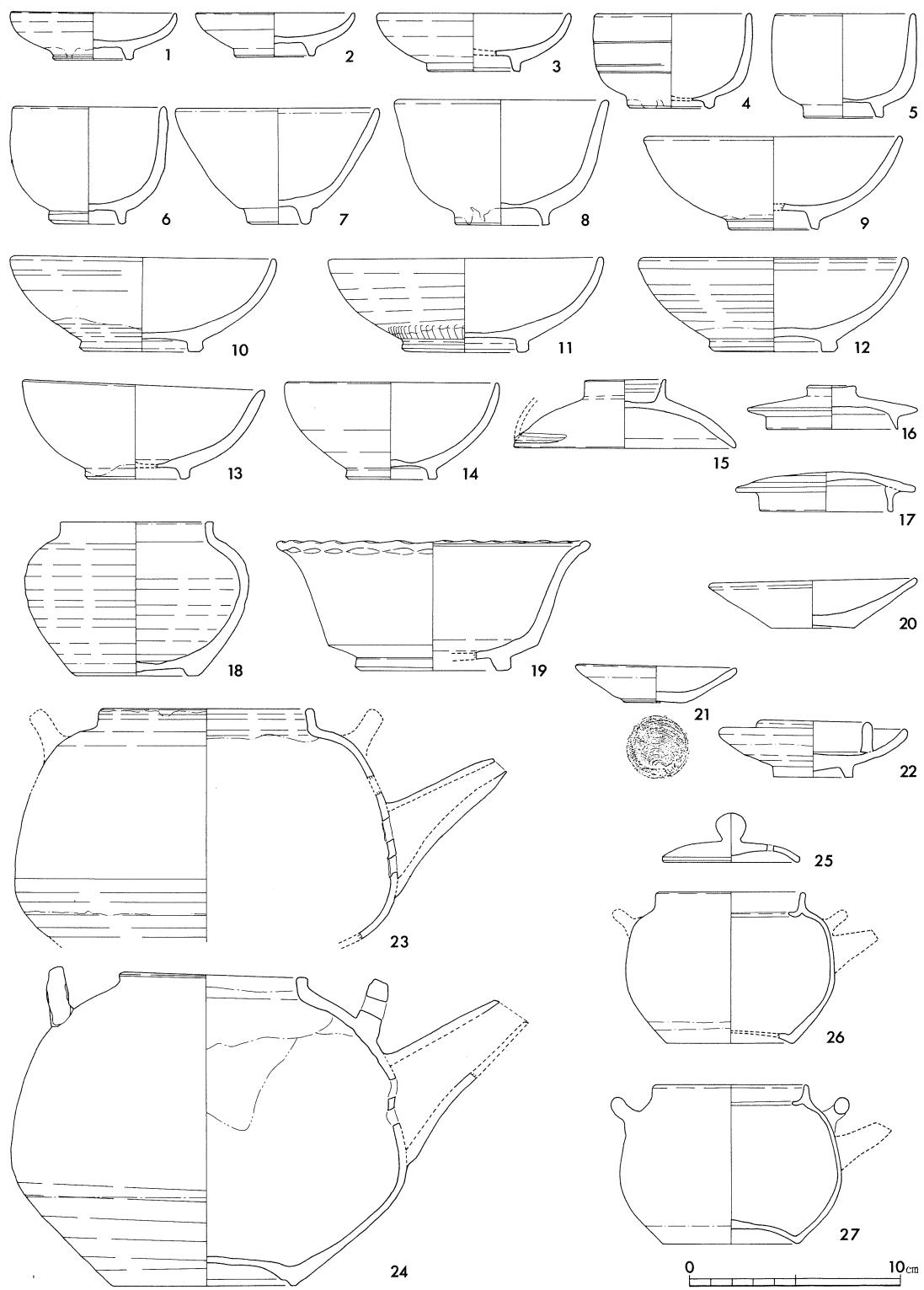


図108 陶 器

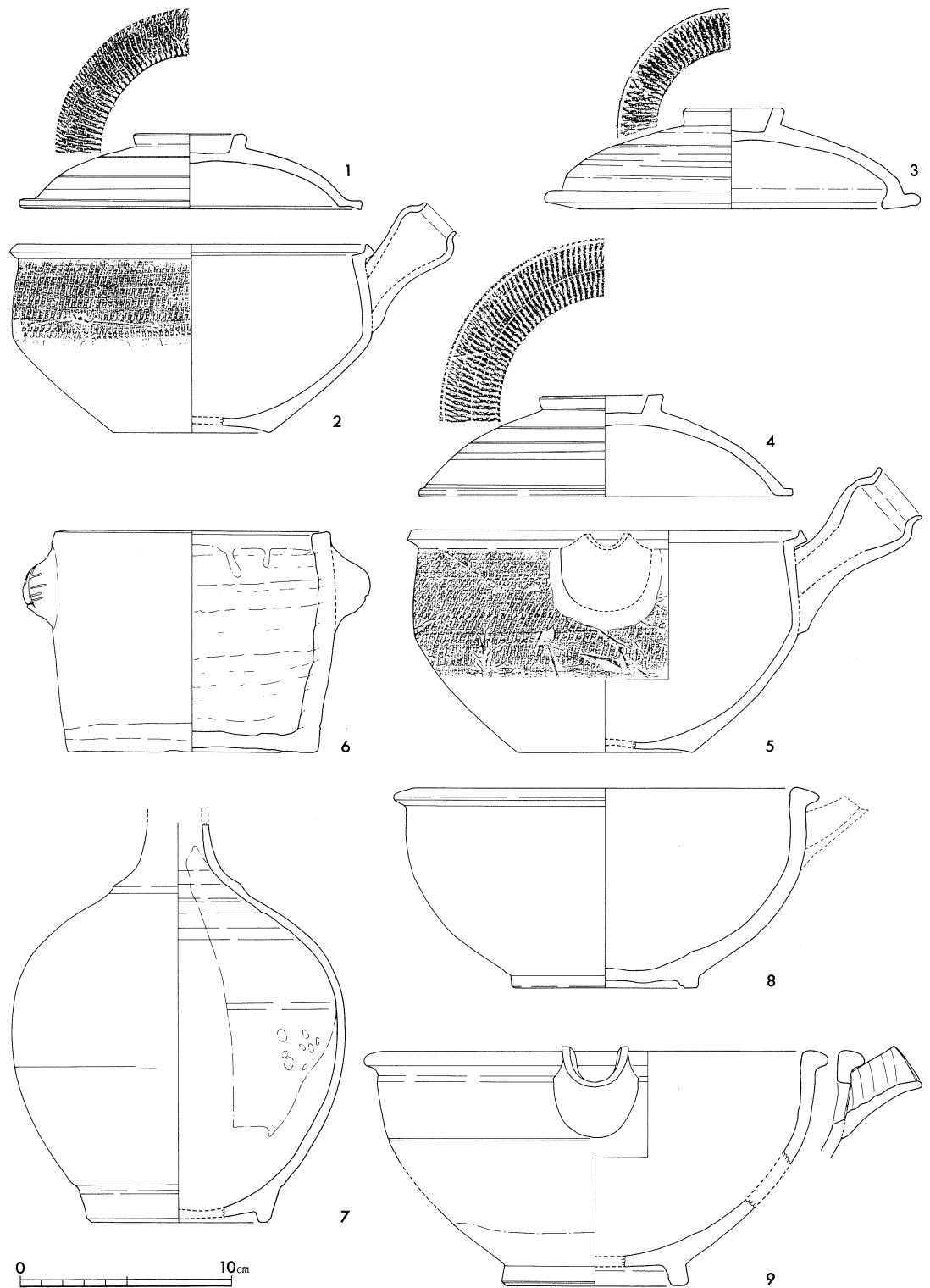


図109 陶 器

### 蓋付き鉢

図111-4, 5は蓋つきの筒状の鉢である。蓋の裏面には特別返りが設けられず、単純に鉢をおおうようになっている。黒褐色を呈する釉薬は蓋の外面と、鉢の全面に掛けられている。4はSB01の炉跡内から出土し、5はSB02の床面に据わった状態で出土した。

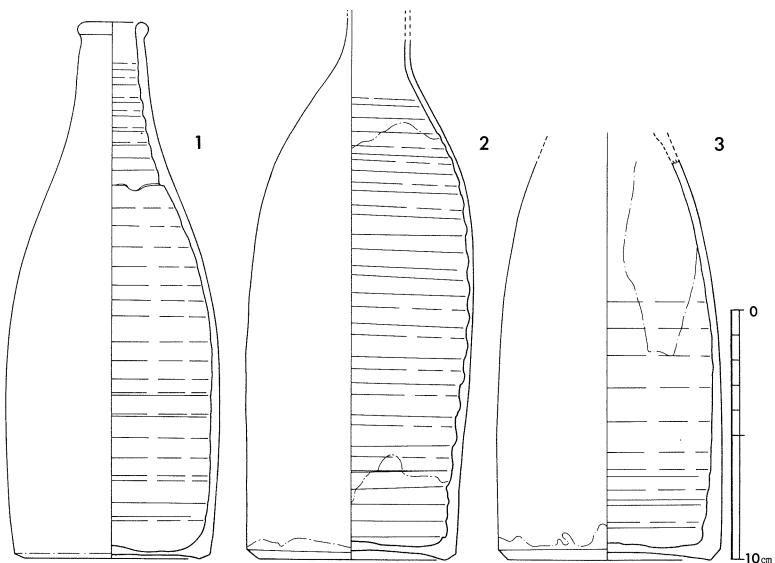


図110 陶 器

### 捏鉢

図112-1は捏鉢である。

淡青灰色の釉が掛かる。口縁は外方に折り曲げ肥厚させる。高台下端は幅広に削りだされている。2は粗製の鉢で内外面とも褐色の釉が荒く掛かる。物原5層出土。

### 擂鉢

削りだし高台から屈曲する体部は直線的に伸び口縁端部は外方に丸く肥厚する。暗茶褐色の釉薬は高台をのぞく内外面に掛けられる。擂り目は底部と体部の2段階に施され、口縁部付近は回転撫でにより消されている。内面の底部と体部の境には重ね焼きによる高台の痕跡がある。3, 4とも物原1層出土。

### その他の陶製品

図112-5は水注状の土製品で、上面の2箇所に小孔があり中空である。褐色釉が掛かるが粗製品である。物原1層出土。6は台状土製品で、対向する二辺に透し穴が開く。釉は掛からず、上面には「□拾カ四文」とも読める墨書がある。SB01, 物原出土。7は重箱状の製品で赤褐色の釉が荒く掛かる。用途は不明。物原出土。

### 瓦質土器

すべて土瓶とその蓋である。図113-1～5は蓋で、上部に摘みがつき裏には返りがつくものである。外面には型打ちによる文様がある。6～9は羽釜状の土瓶で胴部中央に鍔が着く。上半外面には型打ちによる文様がある。10, 11は算盤玉形の土瓶で鍔はつかない。やはり上半に型打ちの文様がある。10の内面は櫛目状の条線が残る。いずれの固体も胴下半に煤の付着が顕著である。2, 7は窯跡西加工段、4, 6, 9は物原5層、8は物原3, 5層、10は物原8層から出土。

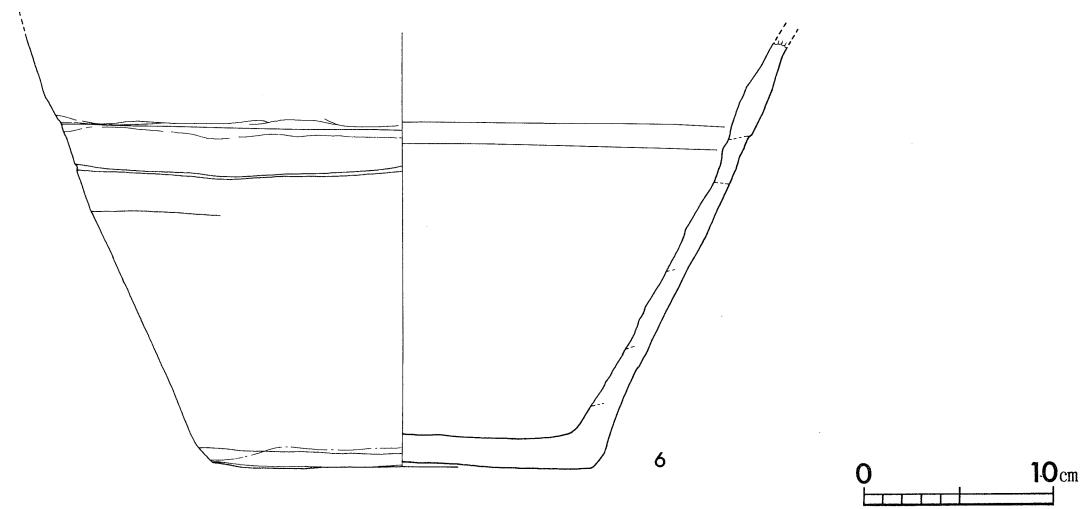
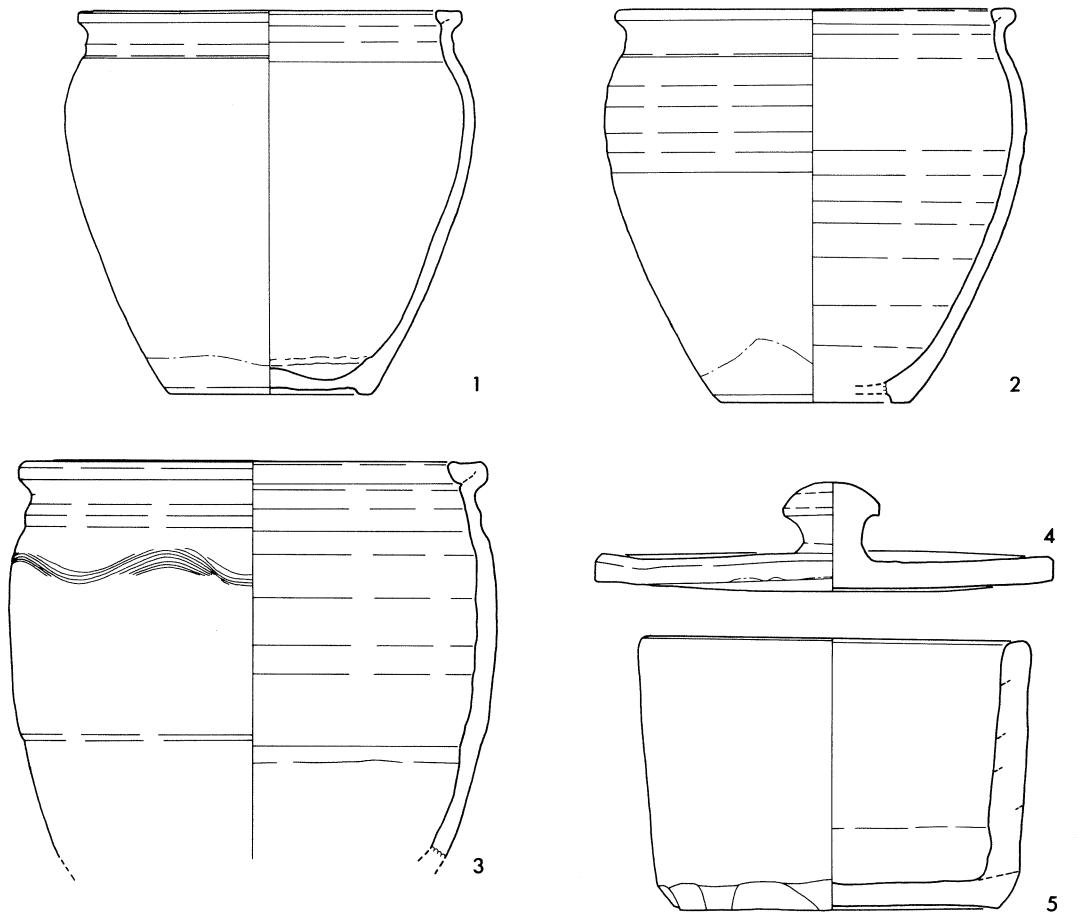


図111 陶 器

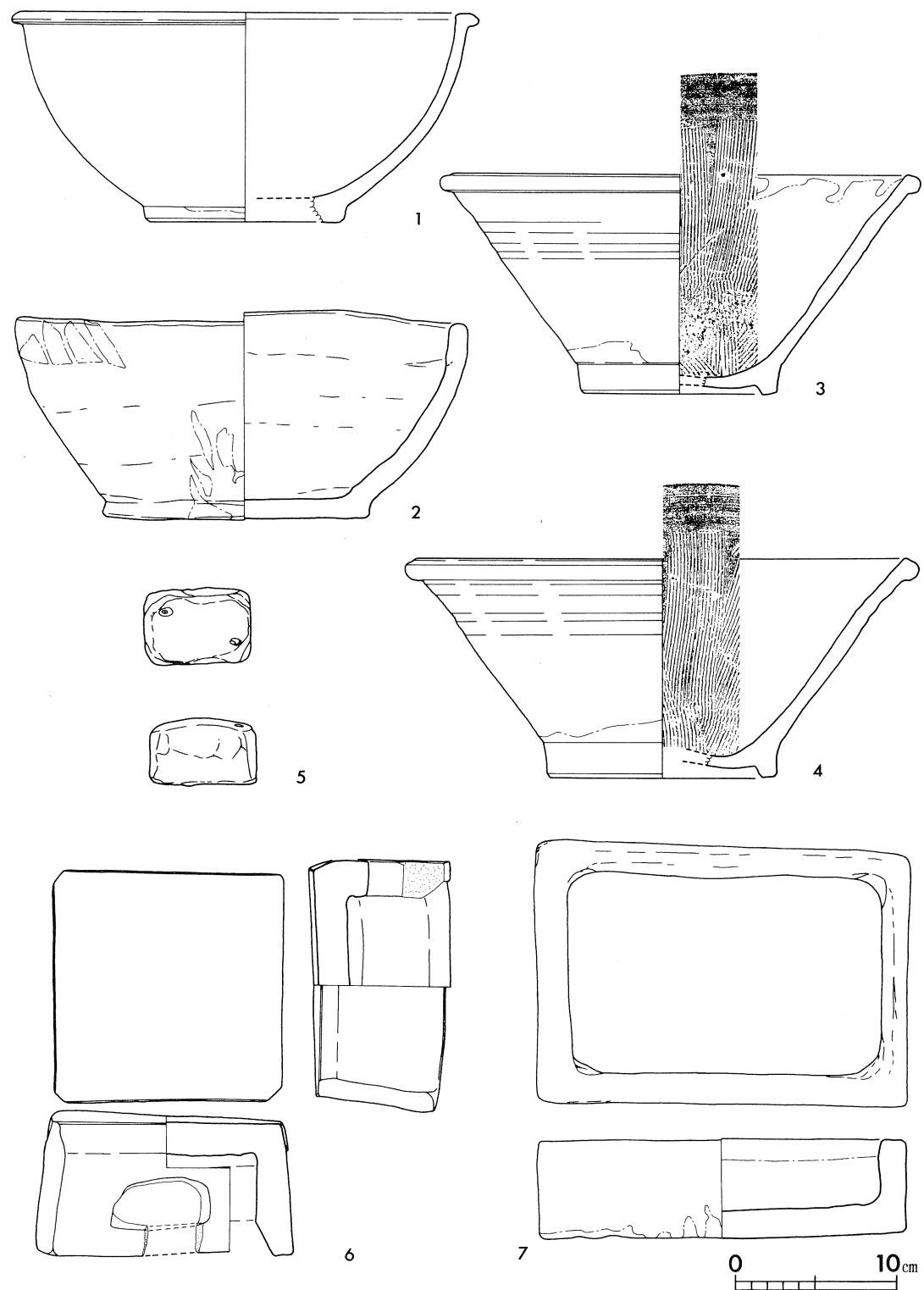


図112 陶器・その他

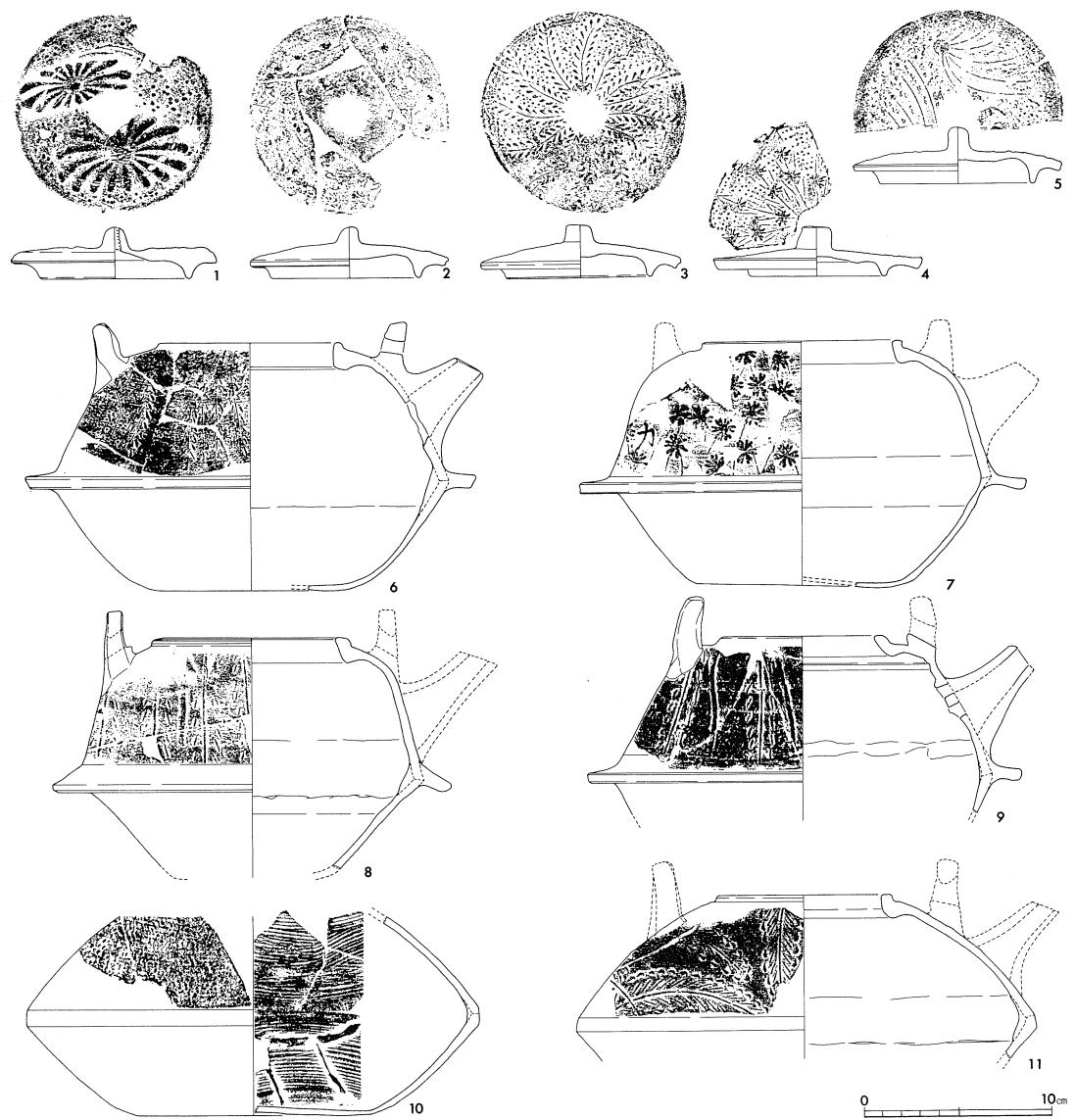


図113 瓦質土器

## 2. 磁 器

### 碗

図114-1～5, 7～14は碗である。1は白磁の小杯で器壁は薄い。物原出土。2は口縁外面に段を持つ小杯である。天保年間の物か。SB01出土。3は器壁のやや厚い白磁の小杯である。高台は太く削りだされている。物原1, 5, 8層出土。4は肥前系の小型の端反り碗である。SB01出土。5は丸形の湯呑み碗で、肥前系。時期は18C末～1810年代があてられる。窯東斜面出土。7～14は端反り碗である。外面には鈍い発色を呈する染め付けが施されている。7は物原1, 2, 5, 8層,

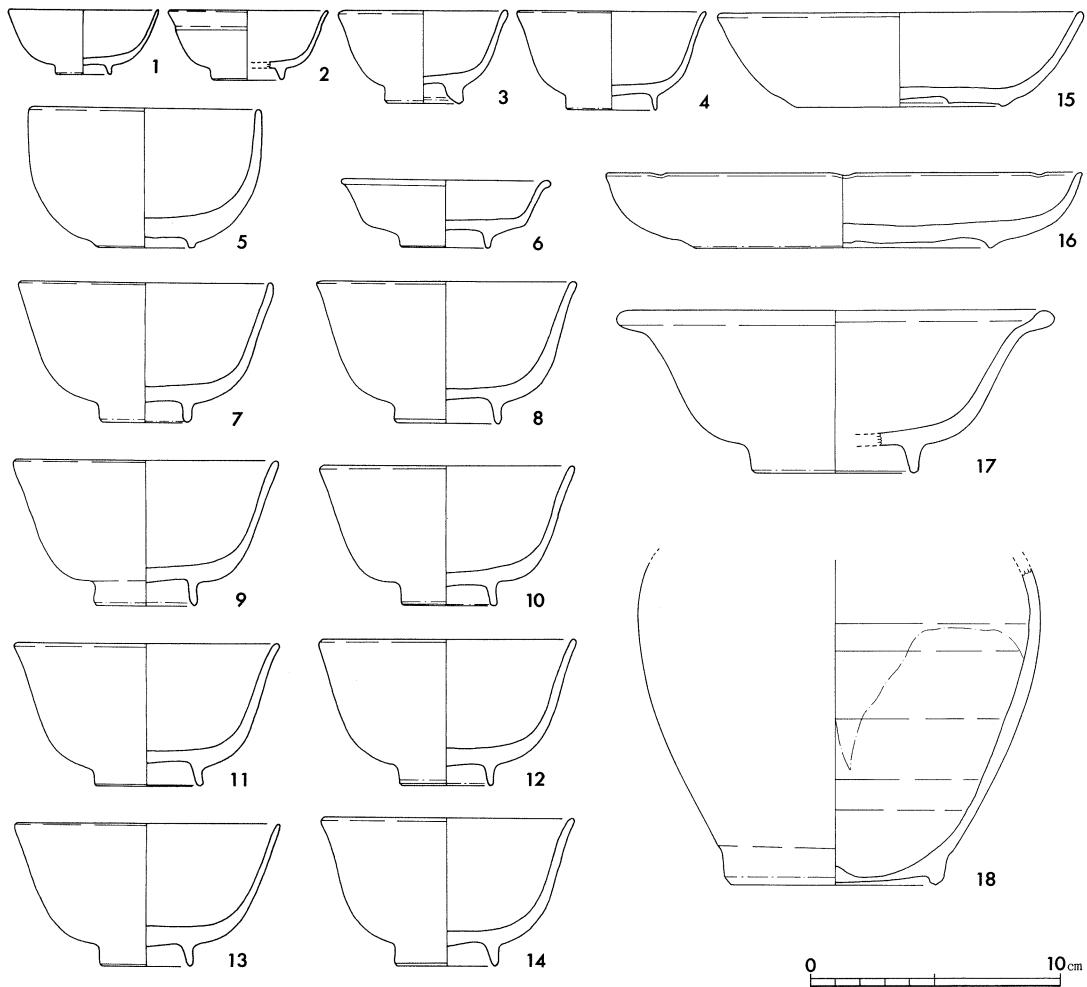


図114 磁 器

8は1, 2, 5層, 9は5, 8層, 10は2, 5層, 11はSB01, 12は物原2層, 13は2, 8層, 14は3, 5層から出土している。

### 皿

6, 15, 16は皿である。6は高台つきの小型の皿。口縁端部が若干外反する。内面には淡い発色の呉須で山水文が描かれている。物原第2層出土。15は蛇目凹型高台の皿で、外面は唐草、内面は蛇籠、牡丹等が鮮明な呉須で描かれている。産地は肥前系で18C末～19C初の年代があてられる。物原出土。16は浅い皿で脚端部は断面三角で、口縁部は断続して小さくひねり出してある。外面は唐草、内面は竹に雀の文様が描かれている。この個体の破断面には褐色釉が熔着し、さらに器体の亀裂、歪みや灰の付着があり、焼き継ぎを試みたものと考えられる。18C末～19C初の肥前系の物である。物原1, 3層出土。

17は高台つきの鉢で、口縁部を外反させ先端は丸く肥厚させる形態である。内外面ともに淡い呉須で描かれているが破片のため文様は不明。物原8層、窯周辺出土。18は徳利の胴部である。外面に鈍い発色の呉須で草葉が描かれている。物原1, 2, 8層、窯周辺、SB01から出土。

(注) 磁器については佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏から御教示を受け、これを参考に記述を行なった。したがって文責の一切は調査担当者にある。

### 3. 瓦

出土資料中最も量が多い。調査区全域から出土しているが、大半は物原と窯跡の東西両斜面に集中してた。すべて施釉赤瓦で、焼し瓦は含まれていない。釉薬の色調は個体差が著しいが概ね暗茶褐色を呈する。施釉範囲は棟瓦の場合、尻部を除く凹面を基本とし、両側辺および頭をのぞく凸面には掛けられない。

相生遺跡で生産された瓦は棟瓦葺きを構成する瓦群に限られ、その種類もあまり多くない。以下順を追って説明を加える。

#### 軒桟瓦類

瓦当文様は小型の中心飾りから2対の外反する唐草が伸びその外側に上下交互に反転する小型の子葉で構成される均整唐草文である。文様の突出度は低く立体感に欠ける。軒の瓦当のつくものでは、この他に軒袖瓦、軒隅瓦がある。釘穴は概して2穴の物が多い。

図115-1は27.3cm、幅29cmをはかる。焼き歪み、灰の付着がある。釘穴は中心から棟に偏って2穴開く。瓦当文様区の左脇に径1cmの小孔が開く。

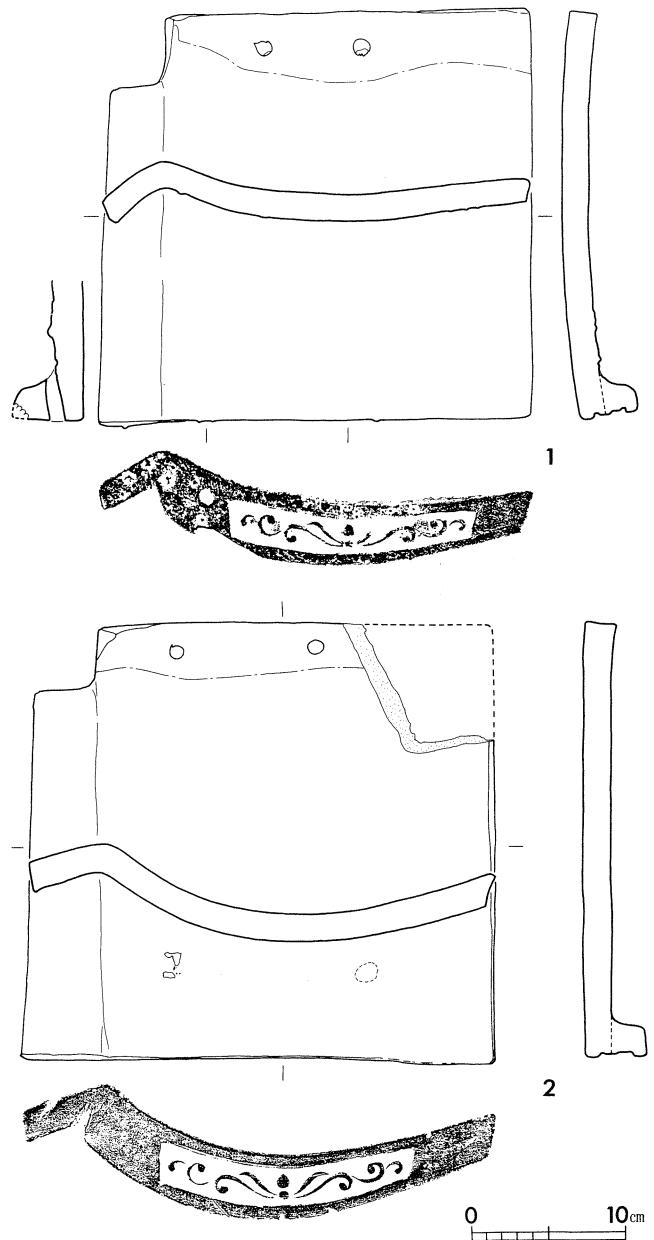


図115 軒桟瓦

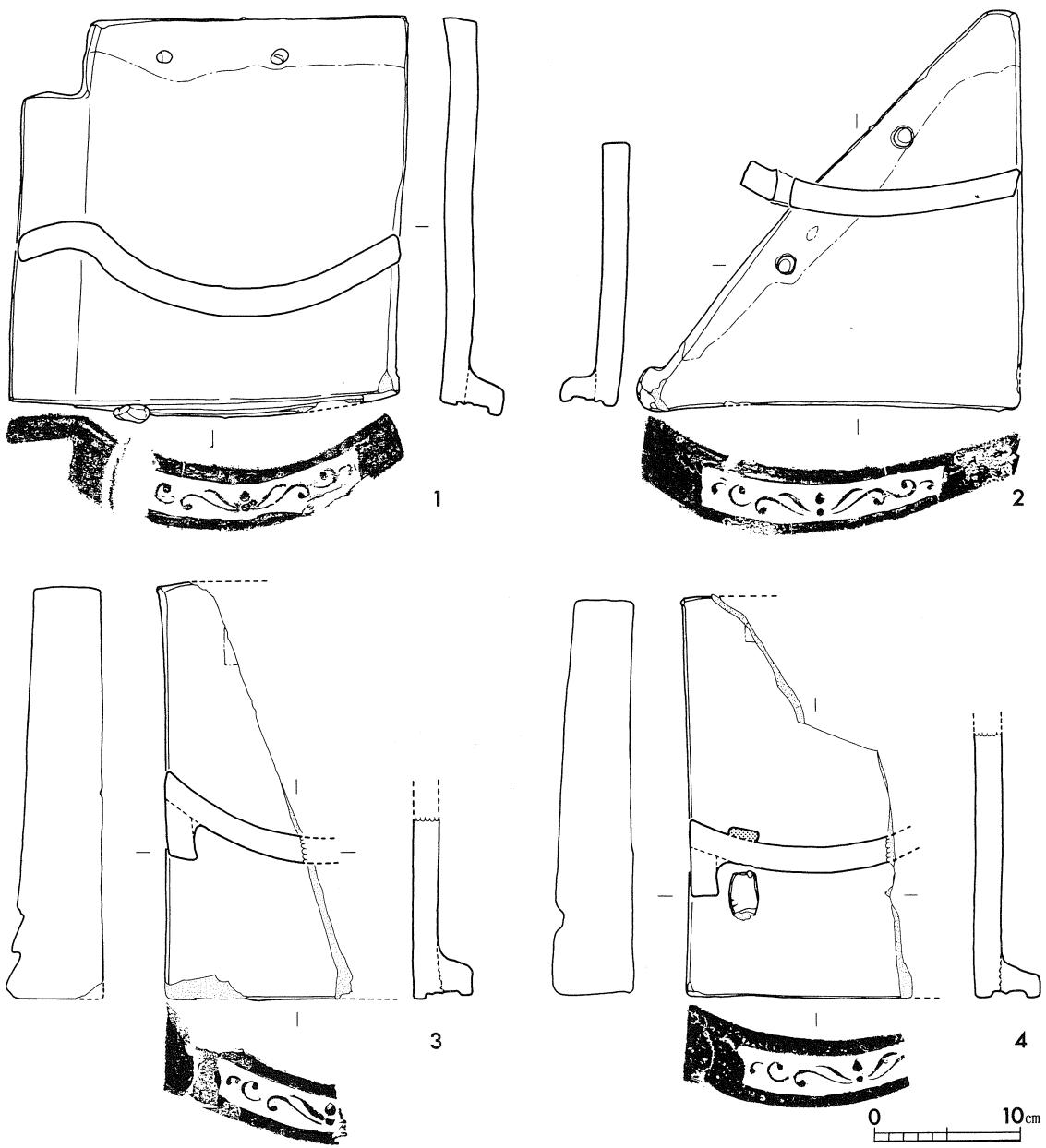


図116 軒棧瓦

同一 2 は縦29cm横31cmを測るやや大形の個体である。大きさに比べ尻の切り込みがやや小さい。尻の2箇所の釘穴は完全に穿孔されていない。凹面瓦当寄りの2箇所に窯道具の熔着痕がある。物原3層出土。

116-1 は縦横28cmを測る。瓦当文様区左側に楕円形の窯道具が熔着し、右側は熔着痕が残る。

同一 2 は隅切りした軒平瓦で、下り棟の両端に使われる。軒棧瓦を斜めに切り落としこの切断面に沿って2つの釘穴が穿孔されている。切除は焼成前に行なわれ、切断面は平滑に、瓦当部は丸く

面取りされている。釉薬は切断面付近を残して掛けられる。物原1層出土。

#### 軒袖瓦

図116-3～117-2は軒袖瓦で軒の両端にもちいられる。棟瓦の側辺の下面に雨仕舞の板を取り付けたものである。3,4は左に袖板を付設する。この場合棟はないので、普通の棟瓦よりもひとまわり小型になる。

袖板の形態は個体によって異なり、3は瓦当寄りに2段の屈曲が、4は1箇所で屈曲するものである。両方とも破片であるが4には凹面に小判状の窯道具が熔着している。

図117-1は右に袖板が取りつく。1段大きく抉れる形状の袖板である。袖板と瓦の接合面にはに櫛目状の条線が施されている。棟には窯詰めの際に隣接していた瓦の熔着痕が見られる。物原1層出土。

同一2は左に袖がつくが、袖板外面には5本の条線で飾られている。

#### 棟瓦類

瓦を葺く際に最も量が多いもので、遺跡からの出土量も最も多い。石見地方では「なかぶき」ともゆう。

平面四角形の左に棟を作り、前面（頭）と平部側面、後面（尻）と棟部側面に矩形の切り込みに入る。尻側に釘穴がつくものとつかないものがある。釉薬は尻を除く凹面に掛けられ、頭と側辺を除き凸面は裸胎である。棟瓦の凸面は側辺部にナデがあるほかは概して平滑で調整の痕跡を確認し

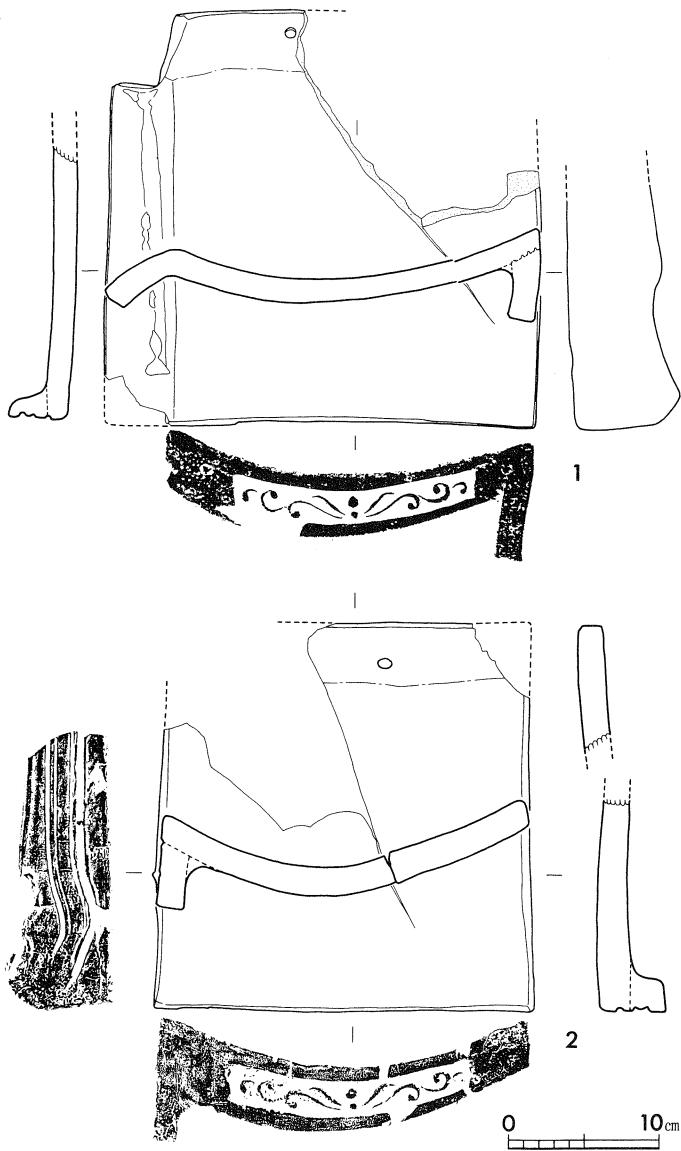


図117 軒桟瓦

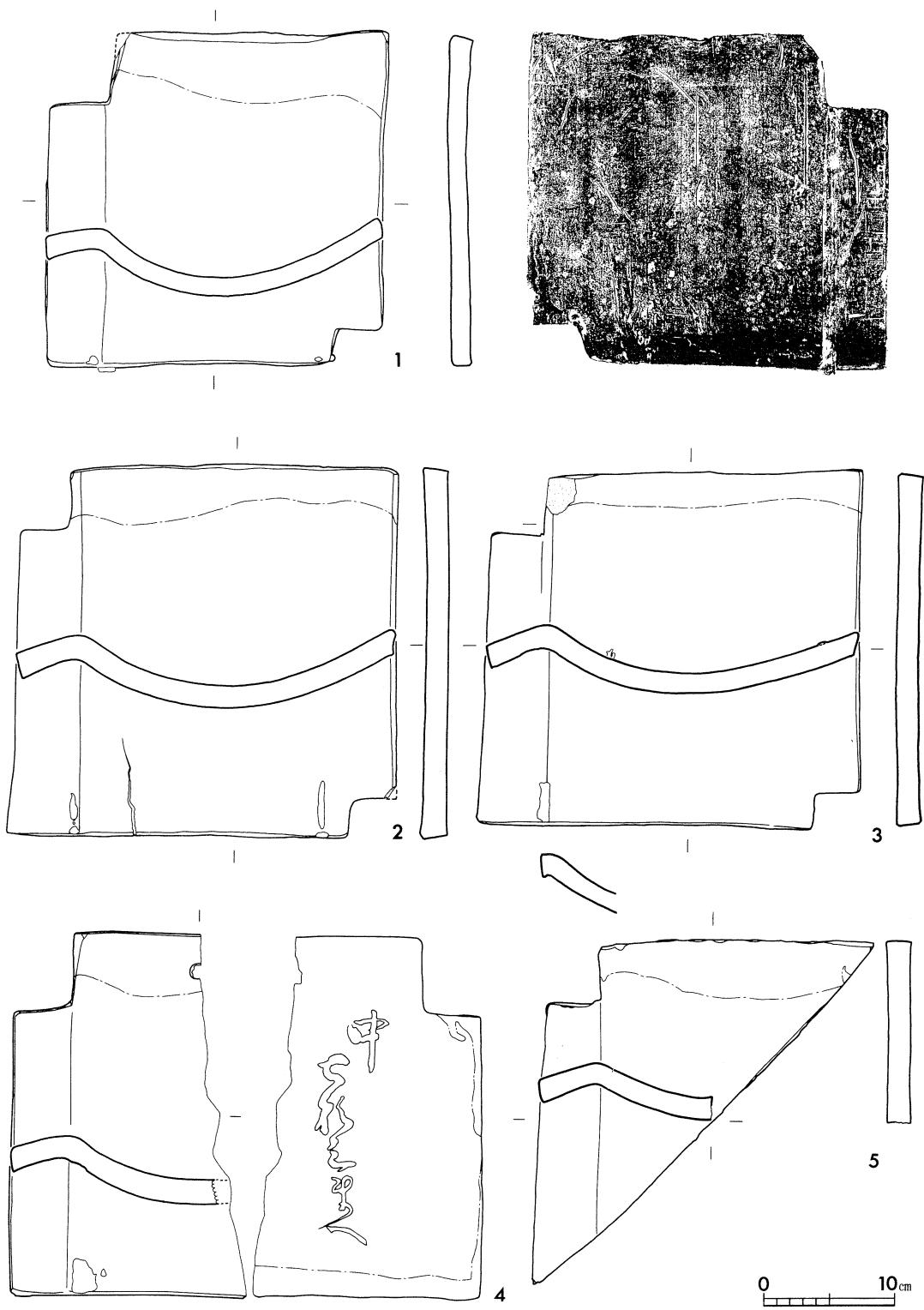


図118 棹 瓦

にくい。

棟瓦も葺く場所によっていくつかの形態に別れる。図118-1～4は一般的な棟瓦である。1はやや小型で縦横26cmを測る。棟部の切り込みの長さは他と比較してやや長い。焼成は良好で、釉薬は光沢のある褐色を呈する。凸面には1cm前後の間隔で縦方向の線状の隆起がかすかに認められる。凹型台の板の綴じ合わせの痕跡としては間隔が狭いし、叩きの痕跡としては不自然である。2は縦29cm横30cmを測る個体である。釘穴はなく、凹面頭にハセの熔着痕が残る。3は縦27.6cm、横29cmを測る個体で、釘穴はない。棟部切り込みの断面に凹型台の圧痕が観察できる。4は釘穴を持つ棟瓦の破片である。凸面に「中 七□類カ之まへ」の墨書きがある。焼成はやや不良である。窯跡西加工段から出土しており、ここは窯出し後の製品の仕分け場所であった可能性があり、あるいは「中」は製品の等級を意味しているかもしれない。

